愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第40集

山中遺跡
（やまなか）

1992

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

山中遺跡が所在する一宮市の周辺は、犬山扇状地の扇端部でもあることから、伏流水が沸き出す水の町として、古くから多くの産業と文化を育んできました。そして市域西方に位置する萩原町周辺では、山中遺跡をはじめとして、南木戸遺跡、苗代遺跡、二タ子遺跡、河田遺跡などの、県下でも注目すべき数多くの遺跡が所在しており、私たちの祖先の足跡を垣間見ることができます。なかでも、山中遺跡は、弥生時代後期の標式遺跡として著名であり、その発見は昭和34年に遡ります。

今回の山中遺跡の発掘調査は、県立尾張病院の改築に伴い、その事前調査として行われました。調査の結果、竪穴住居、方形周溝墓、水田などをはじめとする弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての遺構・遺物を良好な状態で検出することができました。本書に掲載しておりますこれらの調査結果は、学術的にも重要なものとして、地域の歴史研究に利用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々を始め、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 4 年 3 月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

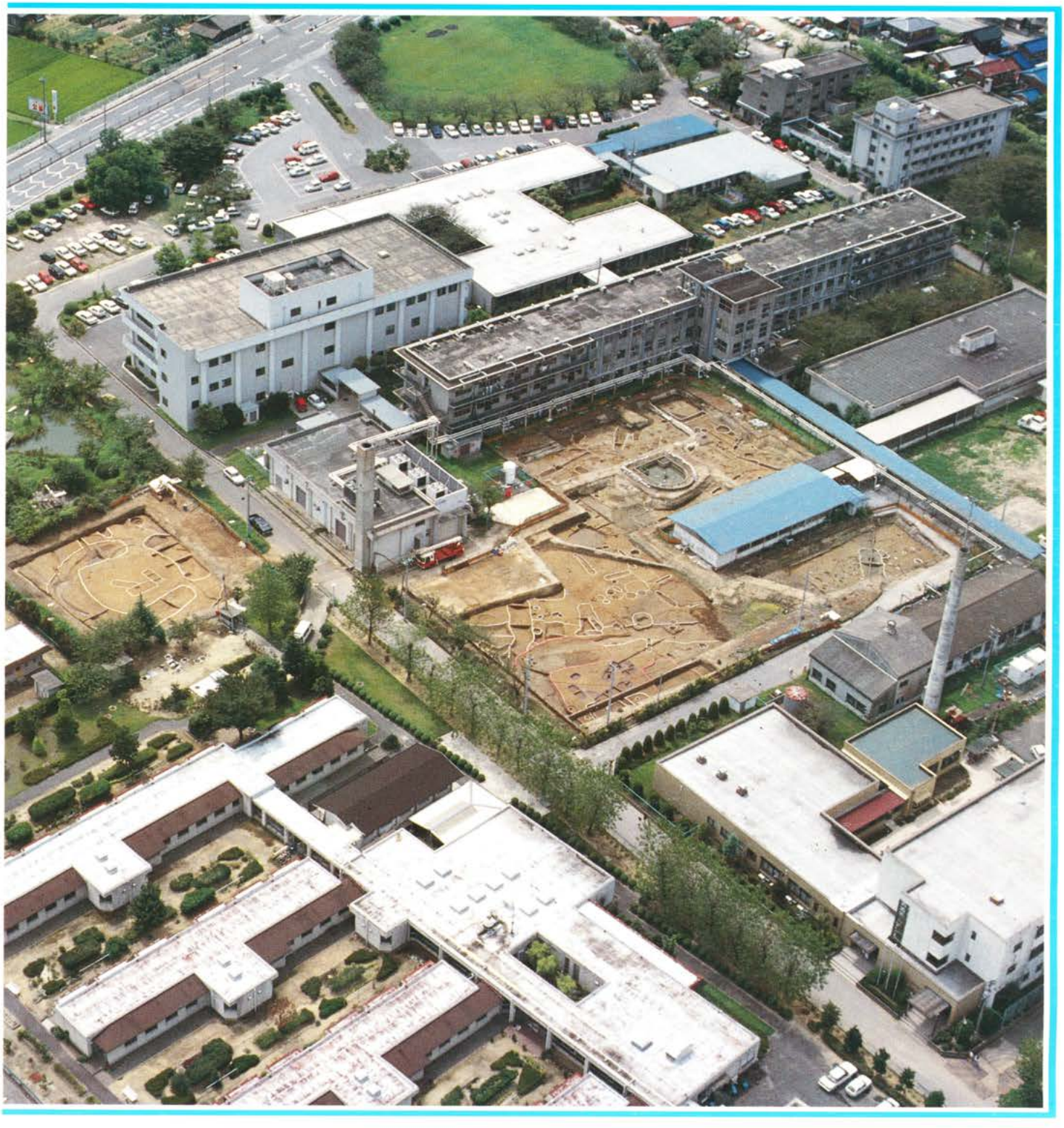
理事長　高　木　鐘　三

巻頭図版

1　遺跡を北東上空から望む

2　遺跡との出会い

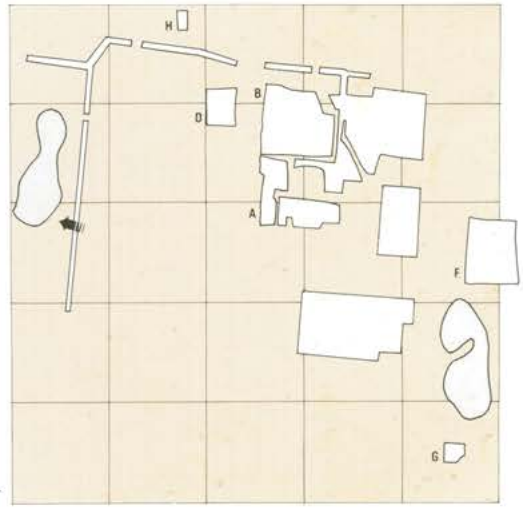
3　第１次調査出土土器



1 遺跡を北東上空から望む

◀第１次調査地点の現況
（南東から）

3 第1次調査出土土器



第1次調査調査地点▶

例　言

1　本書は、愛知県一宮市萩原町富田方字山中・大和町苅安賀に所在する、山中遺跡（県遺跡番号：2078）の調査報告書である。

2　調査は愛知県立尾張病院の改築工事に伴う事前調査として実施し、愛知県衛生部からの愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成２年４月から９月、平成３年２月より３月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。

3　調査は、日比　宰（本センター主査、現稲沢市立稲沢東小学校）、鷲見　豊（同主査）、小塚俊夫（同主査）、赤塚次郎（同調査研究員）、服部信博（同調査研究員）、金子健一（同嘱託員）、伊藤隆彦（同嘱託員、現弥富町歴史民俗資料館）があたり、寺沢なつ江氏の協力を得た。

4　調査にあたっては次の各関係機関の御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県衛生部、愛知県立尾張病院、一宮市教育委員会、一宮市博物館

5　調査・報告書作成にあたっては次の方々の御協力があった。（順不同・敬称略）

設楽博己、久田正弘、岩野見司、土本典生、田中禎子、寒川　旭、木村有作、前田清彦、贄　元洋、秋山浩三、杉谷政樹、小林　秀、春日井　恒、中野敦夫、岡本　聡、江崎　武、西田尚史、浅野清春、

6　古墳時代の水田跡土層観察所見に関しては、静岡大学名誉教授加藤芳朗氏から玉稿を賜った。

7　土器の重鉱物分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社が実施した。また、分析試料として、次の各関係機関より提供をうけた。

愛知県清洲貝殻山貝塚資料館（朝日遺跡貝殻山貝塚地点）、一宮市博物館（元屋敷遺跡）、三重県埋蔵文化財センター（納所遺跡）、四日市市教育委員会（永井遺跡）、明和町教育委員会（金剛坂遺跡・神前山古墳下層・大道遺跡）

8　報告書作成に関わる整理作業はもっぱら服部信博があたり、河合明美、牛田長子、山川和子諸氏の協力を得た。

9　本書の執筆は、小塚俊夫、赤塚次郎、石黒立人（同調査研究員）、伊藤隆彦、服部信博が分担し、第Ⅴ章第２節は野口哲也氏（愛知県清洲貝殻山貝塚資料館）にも執筆して頂いた。全体の編集は服部が担当し、各執筆分担箇所は、文末に記した。

10　調査記録の座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠する。

11　調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第1節　調査の経緯 …… 1
　第2節　調査の概要 …… 2
　第3節　環境 …… 4
　　（1）　地理的環境 …… 4
　　（2）　歴史的環境 …… 6
第Ⅱ章　調査の成果 …… 10
　第1節　基本層序 …… 10
　第2節　遺構 …… 12
　　（1）　概観 …… 12
　　（2）　A期の遺構 …… 14
　　（3）　B期の遺構 …… 24
　　（4）　C期の遺構 …… 34
　第3節　遺物 …… 36
　　（1）　A期の土器 …… 36
　　（2）　石器 …… 44
　　（3）　B期の土器 …… 50
　　（4）　C期の土器 …… 51
第Ⅲ章　自然科学分析 …… 54
　第1節　土器胎土重鉱物分析 …… 54
　第2節　山中遺跡から発見された地震痕 …… 64
第Ⅳ章　山中遺跡一次調査出土土器再実測報告 …… 70
第Ⅴ章　考察 …… 72
　第1節　A期の遺構と遺物の変遷 …… 72
　第2節　尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相 …… 90
　第3節　山中式土器について …… 114
　第4節　山中遺跡の墳丘墓について …… 128
第Ⅵ章　まとめ …… 130

図 版 目 次

図版　1　遺構図版割付図
図版　2　D・H区遺構実測図
図版　3　A・B区遺構実測図
図版　4　A・B区遺構実測図
図版　5　F・G区遺構実測図
図版　6　A_1期土器実測図
図版　7　A_1期土器実測図
図版　8　A_1期土器実測図
図版　9　A_1期土器実測図
図版１０　A_1期土器実測図
図版１１　A_1期土器実測図
図版１２　A_1期土器実測図
図版１３　A_1期土器実測図
図版１４　A_1期土器実測図
図版１５　A_2期土器実測図
図版１６　A_2期土器実測図
図版１７　A_2期土器実測図
図版１８　A_2期土器実測図
図版１９　A_2期土器実測図
図版２０　A_2期土器実測図
図版２１　A_2期土器実測図
図版２２　A_2期土器実測図
図版２３　A_2期土器実測図
図版２４　A_2期土器実測図
図版２５　A_2期土器実測図
図版２６　A_2期土器実測図
図版２７　A_2期土器実測図
図版２８　A_2期土器実測図
図版２９　A_2期土器実測図
図版３０　A_2期土器実測図
図版３１　A_2期土器実測図
図版３２　A_2期土器実測図
図版３３　A_2期土器実測図
図版３４　A_2期土器実測図
図版３５　B期土器実測図
図版３６　B期土器実測図
図版３７　B期土器実測図
図版３８　A期石器実測図
図版３９　A期石器実測図
図版４０　A期石器実測図
図版４１　A期石器実測図
図版４２　A期石器実測図
図版４３　下り松遺跡土器実測図
図版４４　元屋敷遺跡土器実測図
図版４５　元屋敷遺跡土器実測図
図版４６　河田・弥勒遺跡土器実測図
図版４７　山中遺跡１次調査出土土器実測図
図版４８　山中遺跡１次調査出土土器実測図
図版４９　山中遺跡１次調査出土土器実測図
図版５０　山中遺跡１次調査出土土器実測図

写 真 図 版

写真図版　1　遺跡全景
写真図版　2　A_1期の遺構　土器棺墓、土坑、他
写真図版　3　A_2期の遺構　環濠、竪穴住居、他
写真図版　4　A_2期の遺構　方形周溝墓
写真図版　5　B期の遺構　SZ10全景、主体部、他
写真図版　6　B期の遺構　SZ11全景、主体部、他
写真図版　7　B期の遺構　SZ13全景、主体部、他
写真図版　8　B期の遺構　D·G·H区全景
写真図版　9　地震痕　断層、地割れ、噴砂、他
写真図版１０　A_1期出土土器
写真図版１１　A_1期出土土器
写真図版１２　A_2期出土土器
写真図版１３　A_2期出土土器
写真図版１４　A_2期出土土器
写真図版１５　A期出土石器
写真図版１６　A期出土石器
写真図版１７　A期出土石器
写真図版１８　B期出土土器
写真図版１９　山中遺跡第１次調査出土土器
写真図版２０　山中遺跡第１次調査出土土器

挿　図　目　次

第１図　調査の流れ　2
第２図　調査区位置図　3
第３図　山中遺跡周辺の地形分類図　5
第４図　遺跡周辺の地形　7
第５図　山中遺跡と周辺の遺跡　8
第６図　Ａ・Ｂ・Ｄ区基本層序　9
第７図　平成３年度調査区の墳丘墓群　13
第８図　山中遺跡主要遺構配置図　13
第９図　Ａ期主要遺構配置図　14
第10図　ＳＫ０１出土状態図　15
第11図　ＳＢ１９－ＳＫ３７実測図　17
第12図　ＳＫ２６石器出土地点　18
第13図　環濠・竪穴住居実測図　20
第14図　方形周溝墓実測図　22
第15図　Ｂ期主要遺構配置図　24
第16図　ＳＺ１０実測図　27
第17図　ＳＺ１１実測図　28
第18図　ＳＺ１３主体部ＳＫ５４実測図　28
第19図　ＳＺ１３・１４・１５実測図　29
第20図　水田実測図　31
第21図　Ｇ区北壁断面図　31
第22図　水田模式図　33
第23図　Ｃ期の遺構　35
第24図　Ａ・Ｄ区Ｃ期主要遺構配置図　35
第25図　ＳＫ０３出土状態図　37
第26図　ＳＫ２２遺物出土状況　42
第27図　主要石器出土地点　46
第28図　剝片グリッド別重量分布図　47
第29図　石核グリッド別出土数分布図　47
第30図　原石出土地点　47
第31図　原石・石核長軸長分布図　49
第32図　原石重量分布図　49
第33図　原石・石核長軸・短軸長比　49
第34図　Ｃ期出土土器１　52
第35図　Ｃ期出土土器２　53
第36図　土器胎土重鉱物組成ダイアグラム　61
第37図　遠賀川系土器胎土分析写真（１）　62
第38図　遠賀川系土器胎土分析写真（２）　63
第39図　胎土分析資料実測図１　62
第40図　胎土分析資料実測図２　63
第41図　９０Ａ区噴砂平面図　64
第42図　Ａ区東壁噴砂スケッチ　65
第43図　Ａ区北壁断層スケッチ　66
第44図　累積頻度曲線　67
第45図　Ａ期の遺構変遷図　87
第46図　遠賀川系土器土器の変遷（１）　94
第47図　遠賀川系土器土器の変遷（２）　95
第48図　「亜流」土器の分布　98
第49図　「亜流」成立のシステム　99
第50図　「亜流」甕の変遷　99
第51図　条痕紋系土器の変遷　103
第52図　沈線紋系土器文様部位置図　105
第53図　山中・麻生田大橋遺跡石鏃相関図　106
第54図　弥生前期方形周溝墓の分布　110
第55図　山中式土器編年表（１）　120
第56図　山中式土器編年表（２）　122
第57図　形式の消長　126
第58図　墳丘墓　128

表 目 次

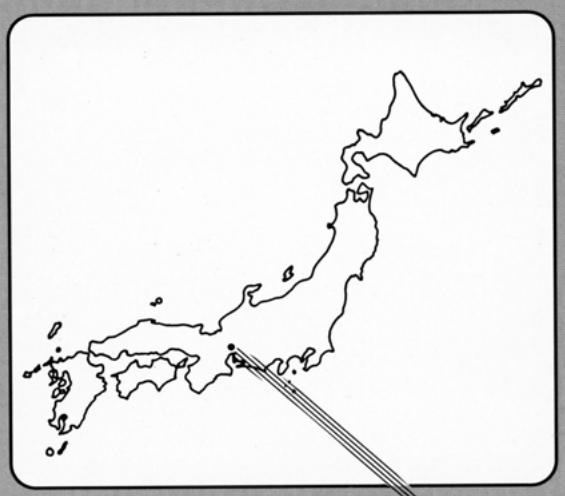
第１表　調査進行表 …… 3
第２表　主要遺構時期区分 …… 12
第３表　土器胎土分析試料表 …… 59
第４表　土器胎土分析試料重鉱物組成 …… 60
第５表　粒度分析結果 …… 67
第６表　山中遺跡１次調査土器一覧表 …… 71
第７表　A_1期土器分析一覧 …… 75
第８表　遠賀川系土器分析一覧 …… 82
第９表　条痕紋系土器分析一覧 …… 83
第10表　その他の系統分析一覧 …… 84
第11表　主要遺構編年的位置付け …… 85
第12表　一宮市内遺跡出土土器再実測一覧 … 88

《調査に協力して頂いた方々》

青山裕美子　浅野ハルエ　石黒和子　伊藤美枝子　今井邦子　岩田雅子　鵜飼和美
鵜飼洋子　小川弘子　小川やゑ子　織田まさゑ　各務圭美　垣見和昭　片岡健二
加藤年行　加藤まつ子　鎌倉たつ子　河合弓代　川上辰男　木全信子　久保田幸子
後藤　功　酒井はるえ　沢田綾子　沢田トシエ　鈴木冨士子　祖父江美代子
滝藤伸恵　竹田幸一　田中マサ子　土本節子　角田晴美　外山松子　内藤富士子
中野常雄　西川美代子　西村浩二　西村澄子　野々部鋼達　橋本泰郎　服部美代子
林　三枝　原田晴代　春田典子　広瀬喜巳　前田四季枝　前田利昇　牧田君子
牧田文子　松岡幸治　宮田千鶴子　森　治美　森　律子　森野スズ子　森本和代
山口雅子　山田昌二　横井太一　米満照子　渡辺　仁
国立智美（愛知大２年）　伊藤香代（椙山女大２年）　高田恵理子（皇学館大１年）
日栄智子（南山大１年）

平成元年度　山中遺跡

発掘調査の成果



Yamanaka.Site

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
第Ⅱ章　調査の成果 …… 10
第Ⅲ章　自然科学分析 …… 54
第Ⅳ章　山中遺跡一次調査出土土器再実測報告…… 70
第Ⅴ章　考察 …… 72
第Ⅵ章　まとめ …… 130

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の経緯

現況　山中遺跡は、愛知県の西方に位置する一宮市萩原町から大和町にかけて広がりを持つ弥生時代を中心とした遺跡である。萩原町は一宮市の南西部に位置し、現在は水田の点在する閑静な住宅地域となっている。遺跡は木曽川水系日光川上流域の左岸に位置し、遺跡付近では標高５ｍ前後を測り、ほぼ平坦である。

遺跡の発見　遺跡が発見されたのは昭和34年の県立尾張病院建設工事に伴うものであり、その際パレス・スタイル土器をはじめとして多量の弥生時代後期の土器が出土した。その経緯については、翌年、愛知県教育委員会が発行した「愛知県一宮市萩原町の弥生遺跡」で述べられている。それによると遺物は３回にわたって出土したが、第１回では「34年10月より病棟の西側に池を掘ることになり工事をはじめた所、11月になって略々完全な土器が発見」され、第２回は同月下旬に実施。ともに萩原中学校の横超大雄教諭らが調査された。第３回は既出土地点の北西約20ｍから発見。この間に出土した遺物は前記報告書及び「新編一宮市史資料編二ー弥生時代ー」（昭和42年）に一括収録されている。昭和43年、大参義一氏は、山中遺跡出土土器を東海地方の弥生時代後期土器編年上の基準資料に位置付け、「山中式」を提唱された。[(1)] それ以降、山中遺跡は「山中式」土器の標式遺跡として世に広くその存在を知られることとなった。その後、昭和55年の救急病棟建設に伴う第２次調査、昭和56年の浄化槽建設に関わる埋管敷設に先立つ第３次調査が実施され、弥生時代前期の遺構・遺物が確認されて、弥生時代後期のみならず弥生時代前期の遺跡でもあることが判明し、その調査結果は昭和57年一宮市教育委員会より報告書として刊行されている。

契機　愛知県衛生部医務課は、平成元年度に入り県立尾張病院の改築工事を計画し、県教育委員会を通じ、山中遺跡の発掘調査及び報告書の作成を（財）愛知県埋蔵文化財センターに依頼してきた。当センターではこれを受け、平成２年４月から９月、平成３年２月より３月まで発掘調査を実施した。ひき続き平成３年度には、出土遺物の整理作業及び報告書作成を実施した。今回の発掘調査は、第４次調査にあたり、調査面積は3500㎡である。

さらに、平成３年９月から11月にかけて第５次調査として1300㎡の発掘調査を当センターが実施した。これは当遺跡内に所在する県立尾張看護専門学校の増築工事に伴う事前調査であり、平成５年に報告書刊行を予定している。

註

（１）大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ＸＬＶ１１

第2節　調査の概要

調　査　前

検　出　作　業

遺　構　掘　削

現　地　説　明　会

山中遺跡の調査は平成2年4月から9月に「A・D・F・G」の4調査区を、平成3年2月から3月に「B・H」の2調査区を設定し、発掘調査を実施した。「C・E」の2調査区は調査不能であった。今回の調査で確認された遺構・遺物は、弥生時代前期（A期）と弥生時代後期から古墳時代前期（B期）、奈良時代から中世末（C期）の三時期に大別することができる。以下、各調査区ごとに、その概要を述べる。

A・B区　今回の調査の中心となった発掘区で、A期・B期の遺構・遺物を良好な状態で検出することができた。弥生時代前期の遺構は、出土土器の様相から2時期に分けることができる。それは、遠賀川系土器を伴わず粗製土器のみを出土する段階（A_1期）と確実に遠賀川系土器が伴ってくる段階（A_2期）である。殊に注目されるのはA_2期の遺構であり、環濠の可能性が考えられる大溝によって、竪穴住居が集中する住居域と方形周溝墓が築造された墓域とに明確に区分される。また、石器製作関連遺構等も検出され、県下ではじめて稲作農耕定着期のムラの一端が明らかとなった。B期の遺構としては、主体部と祭事跡を伴う方形周溝墓があり、当時の埋葬状況を知る上で貴重な資料を提供した。

D区　B期の方形周溝墓を検出したが、C期の遺構・遺物も散在的にみられた。

F区　B期の方形周溝墓等を検出した。なかでも、「前方後方型」の墳丘を持つ周溝墓は注目される。

G区　B期の水田跡を検出した。

H区　B期の方形周溝墓を検出した。

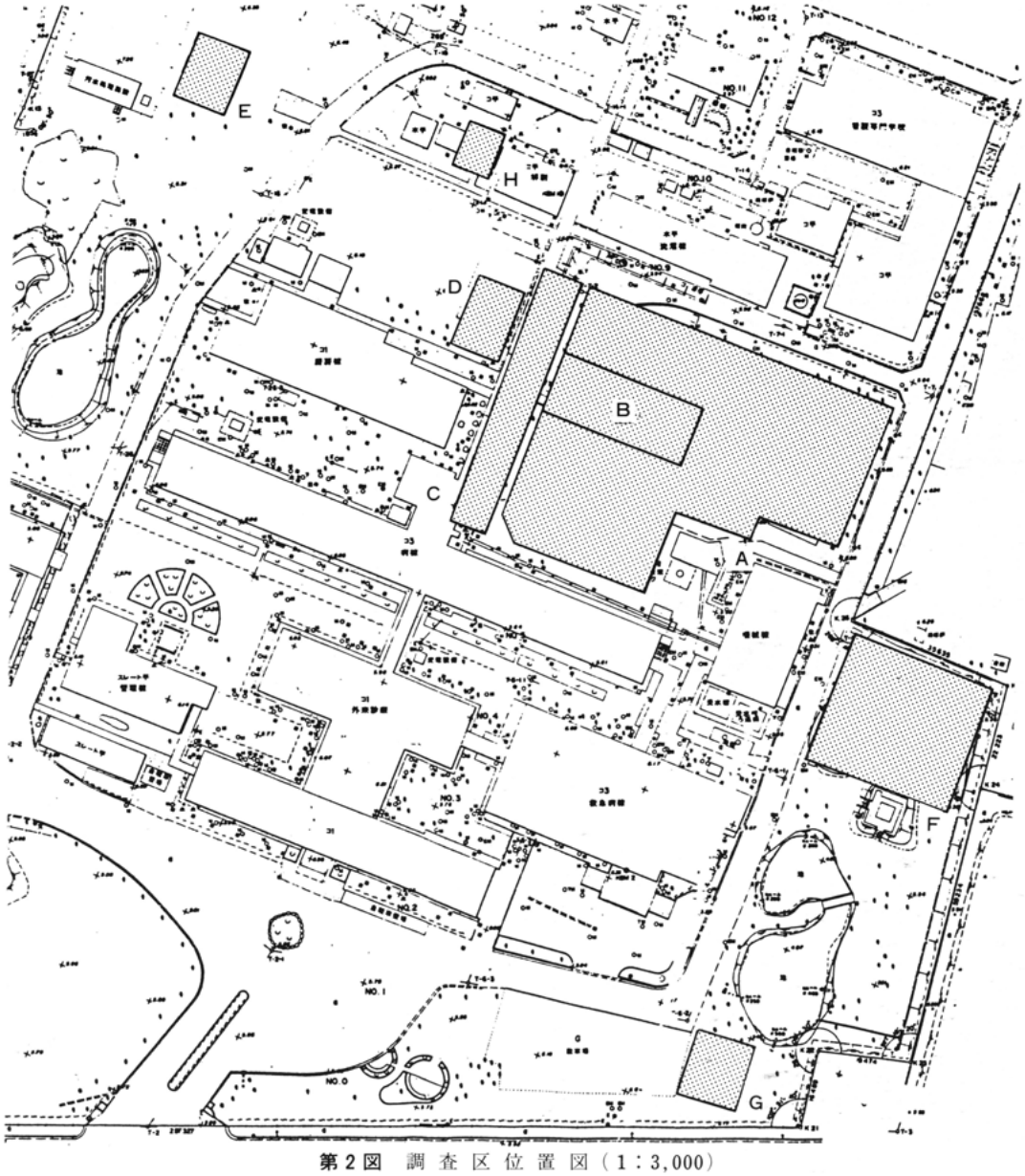
（小塚俊夫）

第1図　調査の流れ

工程	時期	90	91	92	担当調査員
		4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3	
調査	A D F G	現地説明会 （8月25日・参加者500名）			日比　服部 赤塚　金子 鷲見　伊藤 小塚
調査	B H				日比　服部
整理	基礎整理	一次整理	二次整理		赤塚　石黒
整理	報告書作成	年報刊行	報告書刊行		小塚　服部

※C・E区は調査不能であった。

第1表　調査進行表



第2図　調査区位置図（1：3,000）

第３節　環境

（１）　地理的環境

濃尾平野　濃尾平野はその大部分が木曽川によって形成された沖積平野であり、そこに生活する人々は常に水と深い関わりを持ってきた。その濃尾平野のほぼ中央に位置する一宮市では、豊かな水は古くからこの地に伝統産業を育んできた。先史時代においても、遺跡の立地が低地を流れ下る河川に支配されていたことは想像に難くない。

犬山扇状地　今から約２万年前の後期更新世のころ、山間部を南下してきた木曽川は、平野部に入ると大量の土砂を堆積させ、犬山扇状地を形成した。犬山扇状地はおもに礫層から構成され、本層は、低地では沖積層の基盤をなしている。その後、完新世になると濃尾平野に海が侵進入し（縄文海進）、沖積泥層と呼ばれる海成層を広範囲に堆積させた。沖積泥層の分布などから、当時の海岸線は稲沢市から尾西市、一宮市南西部を経て大垣市付近まで延びていたと考えられている。そして約6000年前の縄文海進最盛期の後、海の後退とともに、河川によって運ばれてきた大量の砂が三角州前置層（沖積上部砂層）として厚く堆積した。こうして陸域はしだいに南へ拡大し、一宮市以南の沖積低地でも遺跡が営まれるようになってきた。

縄文海進

自然堤防帯　一方、現在の地形に目を向けてみると、日光川、三宅川、五条川などの旧河道に沿って洪水氾濫性の微高地、いわゆる自然堤防が発達していることがわかる。これらの河道を上流に遡っていくと犬山扇状地に浅い谷地形が残っていることから、自然堤防の形成は、おそらく「御囲堤」の築堤により木曽川が現在の位置になる以前のことであろう。しかも、これらの自然堤防上には先史時代の遺跡が分布していないことから、歴史時代に形成されたものであると推定できる。

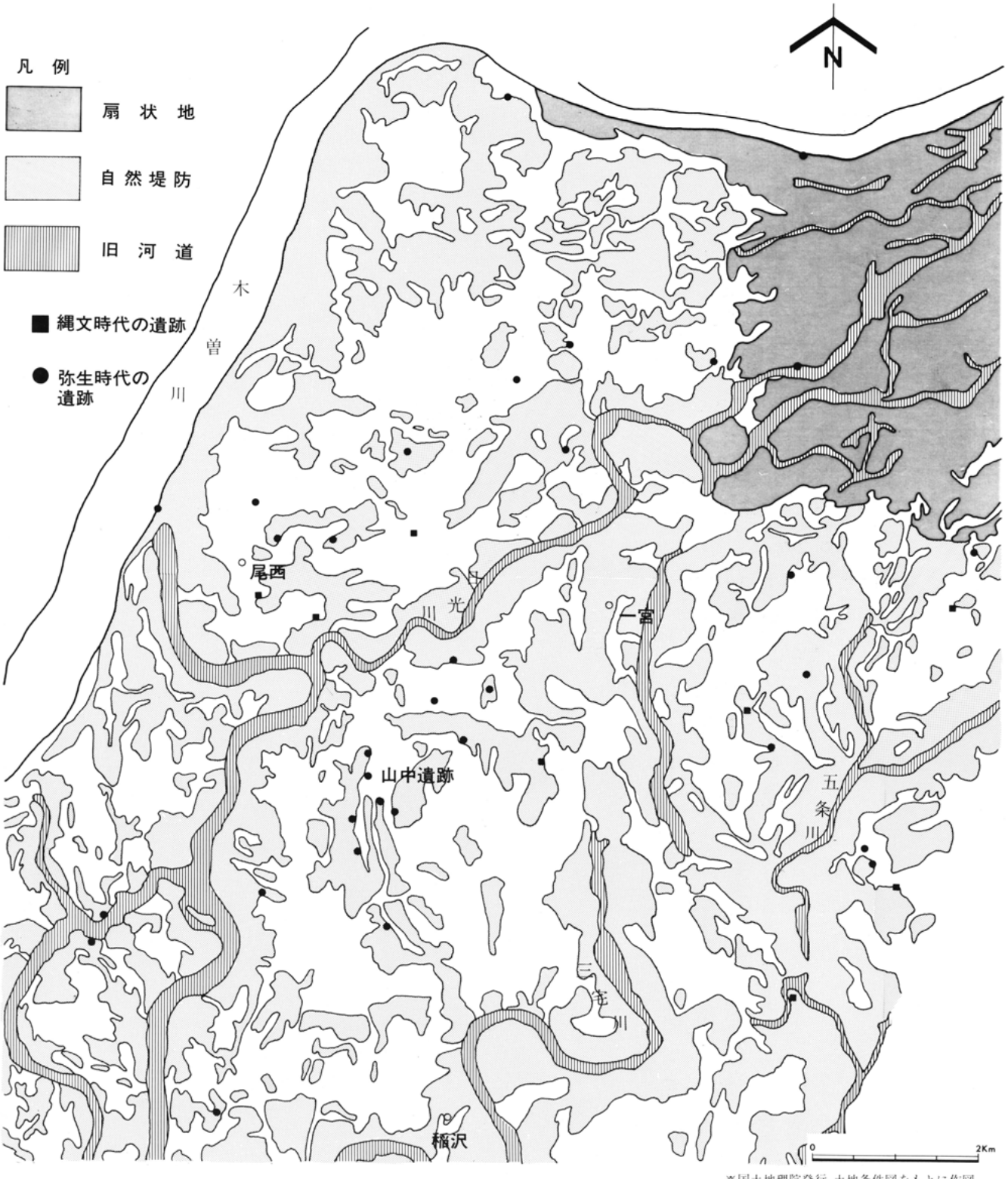
山中遺跡の周辺には南木戸遺跡、苗代遺跡、二タ子遺跡など弥生時代を中心とした遺跡が集まっており萩原遺跡群として知られている。これらの遺跡の立地する自然堤防は、少なくとも弥生時代以前に形成されたことは明らかで、旧河道に沿ってみられるそれとは形成時期を異にしている。

遺跡基盤層　山中遺跡の調査では９０Ａ区北壁断面において、標高4.8m（現地表下－1.1m）に弥生時代前期の遺構の基盤層をなす黒褐色腐植質シルト層（層厚約20cm）の堆積がみられ、弥生時代前期以前に比較的静穏な環境が長時間にわたって続いたことを示している。また、本層の下位の標高4.5m（現地表下－1.4m）以深にみられる細粒から粗粒へと漸移する厚い砂層（下部は未確認）は、その上部は自然堤防を構成する砂層であると推定されるが、沖積上部砂層と区別することは困難であった。

遺跡立地　以上のことから、山中遺跡の立地する自然堤防は濃尾平野の拡大とともに沖積上部砂層の上に連続するように形成され、弥生時代前期以前の静穏な時期を経て遺跡が営まれるよ

うになったとと考えられる。その後の山中遺跡をはじめとする遺跡群の大きな繁栄は、周辺の後背湿地を利用した稲作によって支えられていたのではと推測される。

（伊藤隆彦）



※国土地理院発行 土地条件図をもとに作図

第3図　山中遺跡周辺の地形分類図

（2） 歴史的環境

木曽川によってできた沖積層からなる尾張平野が次第に形成されてくると、一宮市周辺にも人類が住み始め、多くの遺跡を現在に残している。本項ではこうした歴史的環境を山中遺跡周辺を中心に時代順に概観する。

縄文時代 一宮市内で最も古い遺跡は、佐野遺跡で縄文時代の中期にあたる。[1] この遺跡からの出土土器は、瀬戸内海地方に多い土器の流れを汲むものと、中部山岳地方に多い土器の流れを汲むものとの二つに大別される。したがって佐野遺跡の土器は、東西両地域の影響の基に作製されたことが知られよう。すでにこの時代から尾張平野は、東西両文化の接点たる地位となっていたのである。縄文時代も後期から晩期になると、一宮市内に大規模な縄文人の集落が現れてくる。馬見塚遺跡がそれである。[2] 馬見塚遺跡からの出土遺物は、地点を異にして縄文後期から晩期を中心にして弥生・古墳時代のものにまで及んでいる。馬見塚における縄文文化をもつ集団が弥生時代まで連綿として続いていたかどうかは定かではないが、いずれにせよ馬見塚遺跡はかなりの大集団が長期にわたって生活を営んでいた遺跡であることは明らかである。また、下り松遺跡からは、縄文時代晩期終末の土器が出土している。[3]

弥生時代 弥生時代になると前期・中期・後期の各期にわたる遺跡がほとんど市内全域に広がっている。縄文時代の遺跡数と比べて、その発展性の違いを窺い知ることができる。特に遺跡分布が密な地域は、西部では日光川水系、東部では五条川水系に沿った地域にである。[4] 前期の遺跡としては遠賀川系土器が出土した前出の馬見塚遺跡D地点のほか、弥勒遺跡、元屋敷遺跡等がある。今次調査の結果、山中遺跡もそうしたなかの一つとして確固たる位置をしめることとなった。中期の遺跡としては、河田遺跡、二タ子遺跡、大地遺跡（岩倉市）等がある。特に大地遺跡は特異な壺形土器（大地型土器）を出土したことで著名である。この大地型土器は河田遺跡でも出土している。また、西上免遺跡北辺では中期の土器片・石鏃等が出土しており、近接して集落の存在が想定されよう。[5] 後期の遺跡の中で、北川田遺跡、山中遺跡、南木戸遺跡、元屋敷遺跡等からは、ツートンカラーの美しい土器が出土した。いわゆるパレス・スタイル土器である。このパレス・スタイル土器に象徴される文化は、尾張平野を中心に広く伊勢湾一帯に展開し、さらにこの形式ははるか東方の南関東にまで大きな影響を与えている。蕪池遺跡からは、底部穿孔土器を伴う方形周溝墓が検出されている。[7] 苗代遺跡からは、これまた尾張地方に特有な円窓付土器が出土している。[8] この土器は一宮付近には少なく、朝日遺跡（西春日井郡清洲町他）、高蔵遺跡（名古屋市）に多くみられるが、使途には論議がある。これら弥生時代の遺跡の分布で注目されるのは山中遺跡を含む萩原町周辺である。個別の遺跡を群としてみたとき、巨大な遺跡が浮かび上がってくる。

古墳時代 S字状口縁台付甕が元屋敷遺跡、下渡遺跡、南木戸遺跡、山中遺跡等から出土している。

このうち元屋敷遺跡は、古墳時代初頭の東海地方における土器編年上の標式遺跡となっている。[9] S字状口縁台付甕の分布は、「大和政権による国家統一への胎動の前史として考察」する必要性が説かれて、現在もその研究が進められている。[10] 4世紀末に造営されたとされる車塚古墳は一宮市内では最大で、鏡・玉類・鉄製品類等を出土している。畿内においては古墳の築造がされなくなった7世紀中頃、浅井古墳群においては小規模な古墳が造営され追葬が行われていた。一方、集落遺跡については総じて情報が少ない。

歴史時代　大化の頃から奈良時代の終末までに一宮市内で七つの寺院が建立されたが、各寺院は消長を異にしていた。長福寺廃寺は、遺構の確認はできなかったが出土瓦から大化の頃、すなわち7世紀中頃に建立され奈良時代後期まで建造物のあったことが知られている。これは尾張の古代寺院の最古に編年される。さらに、伝法寺廃寺、薬師堂廃寺等からは7世紀後半の瓦が出土している。また、妙興寺は1365年に落成した古刹であるが、境内からは奈良時代の瓦が出土している。中世の遺跡としては下津城（稲沢市）、苅安賀城等が知られている。

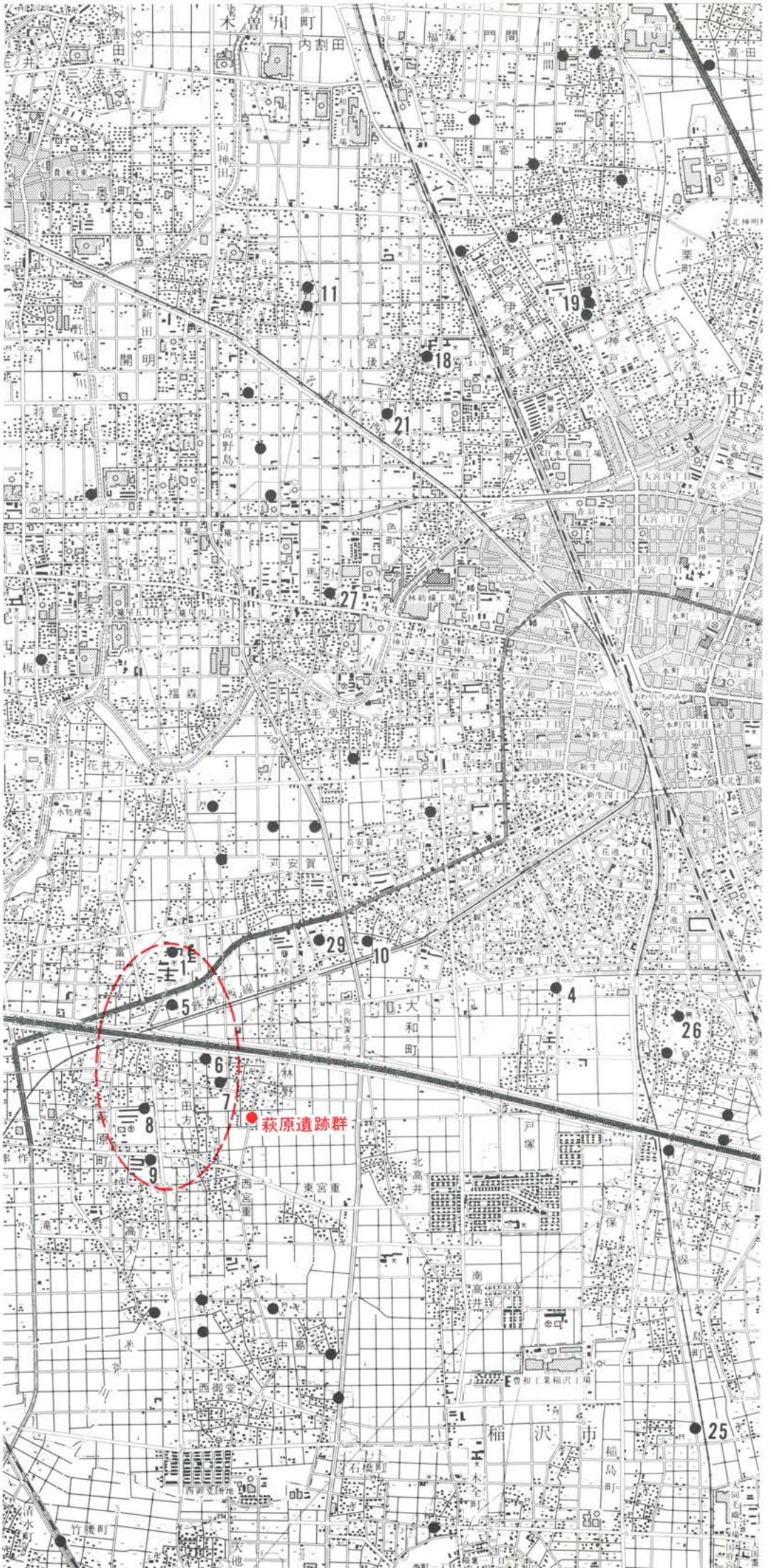
（小塚俊夫）

註

（1）澄田正一、大参義一、岩野見司、1967『新編一宮市史』（資料編1）一宮市
（2）前掲註1に同じ
（3）前掲註1に同じ
（4）澄田正一、大参義一、岩野見司、1967『新編一宮市史』（資料編2）一宮市
（5）赤塚次郎、1991「西上免遺跡」『年報　平成2年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
（6）前掲註4に同じ
（7）前掲註4に同じ
（8）前掲註4に同じ
（9）大参義一、1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』XLV11
（10）赤塚次郎、1990「廻間式土器」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

第4図　遺跡周辺の地形

第5図　山中遺跡と周辺の遺跡



1　山中遺跡

〈縄文時代〉
2　佐野遺跡
3　馬見塚遺跡
4　下り松遺跡

〈弥生時代〉
5　雀戸遺跡
6　南木戸遺跡
7　苗代遺跡
8　二夕子遺跡
9　河田遺跡
10　北川田遺跡
11　西上免遺跡
12　弥勒遺跡
13　元屋敷遺跡
14　白山遺跡
15　大地遺跡
16　無池遺跡
17　平松遺跡

〈古墳時代〉
18　でんやま古墳
19　車塚古墳
20　富塚古墳
21　野見神社古墳
22　浅井神社古墳

〈古代・中世〉
23　伝法寺廃寺
24　薬師堂廃寺
25　東畑廃寺
26　妙興寺境内地
27　法円寺遺跡
28　下津城
29　苅安賀城

N
名古屋
1:30,000
1000m

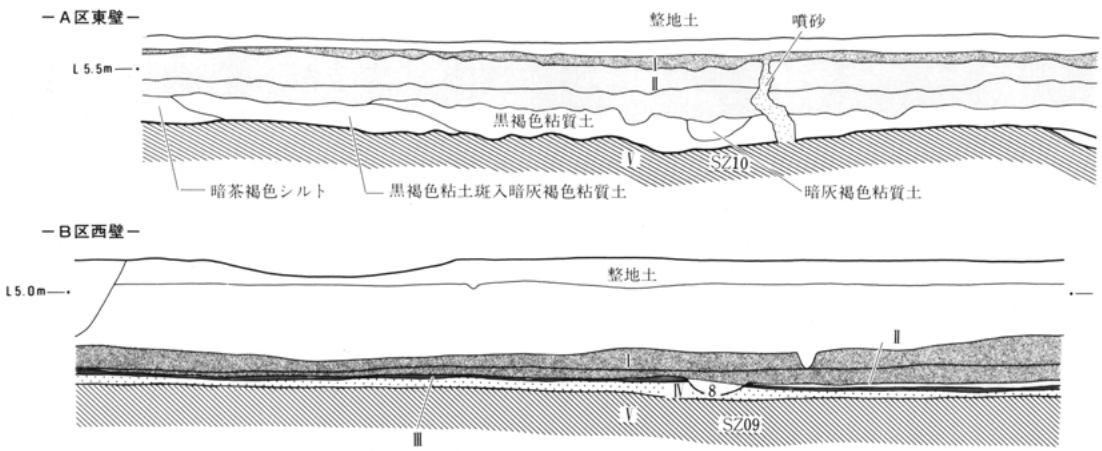
第Ⅱ章　発掘調査の成果

第１節　基本層序

位置　山中遺跡は、広大な濃尾平野の西部を潤す木曽川水系日光川の左岸に位置する。この山中遺跡が所在する一宮市萩原町・大和町を中心とする地域は、上部砂層の堆積面に形成された高燥な自然堤防が発達しており、その微高地の周辺には、水田化される可能性の高い低湿地が微妙に入り組んだ地形的な特徴を有している。[(1)] そのため弥生遺跡の立地に関しては絶好の環境にあると言え、前章でも触れられているように県下でも有数の弥生遺跡が集中する地域（萩原遺跡群）として著名である。この萩原遺跡群の最も北方に位置する山中遺跡は、現在の地表面で標高４～５ｍ前後を測る。

基本層序　発掘調査区の基本的な層序は、現表土の大部分が病院建設時に埋め立てされた整地土層であり、砂・コークスなどから形成されている。旧地層の堆積はそれ以下であり、大きく５層に分けられる。第Ⅰ層は、旧水田・畑地の耕作土で、10～20cm程度の厚さを持つ暗青灰色粘質土層及び茶灰褐色シルト層、第Ⅱ層は、厚さ10～30cmほどの暗褐色シルト層であり、遺物を包含する。以下、第Ⅲ層黄褐色砂質シルト層、第Ⅳ層黒褐色腐植質シルト層が

地山面　みられ、第Ⅴ層黄褐色砂層の地山面に至る。第Ⅴ層は平坦ではなく自然の微妙な起伏を有しており、地山面が低下した調査区においては、第Ⅲ層及び第Ⅳ層の堆積が確認できた。



第６図　Ａ・Ｂ・Ｄ区基本層序（１：100）

弥生時代の遺構は、第Ⅲ・Ⅴ層を掘削して営まれる。

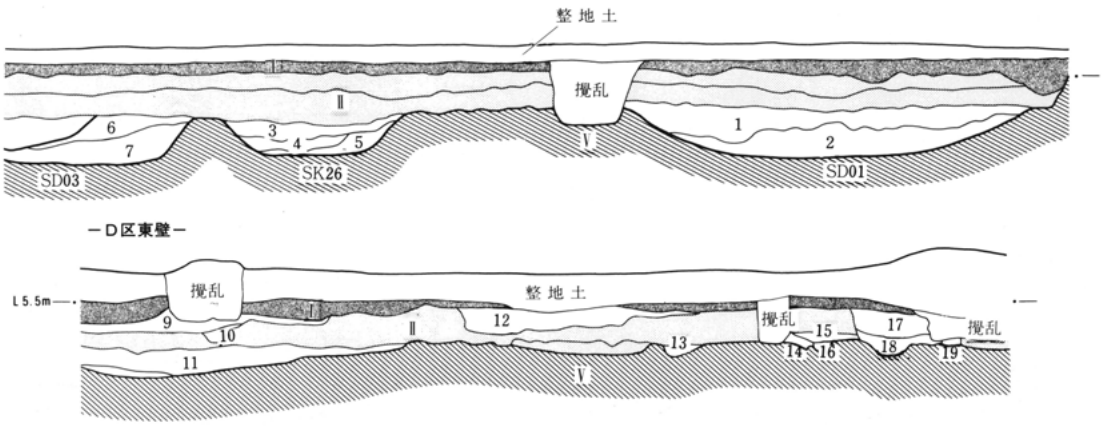
以上が基本層序であるが、今回の発掘調査では、病院構内に複数の調査区を設定したため、各調査区における堆積状況に若干の違いがみられる。以下、各調査区の層序を概観していくことにする。D・H区おいては病院建設時の整地土層がほとんど見られず、表土を剝ぐと第Ⅰ層の耕作土があらわれ、第Ⅱ層が厚く堆積する。この層の上位で中世期の遺構・遺物を良好な状態で検出することができた。A・B・F区では旧水田により第Ⅱ層が大きく削り取られており、また、A・B区西方では、地山面の低下が認められ、第Ⅲ・Ⅳ層の堆積が確認された。そのため弥生時代から中世期の遺構を第Ⅲ層及び第Ⅴ層の同一面上でつかまざるをえなかった。弥生時代前期の遺構はA区のほぼ全域で検出できたが、大半の遺構の埋土は、褐色中粒砂の単一土層であり、洪水等の影響により一気に廃絶した様相を呈していた。弥生時代後期から古墳時代初頭の墳丘墓の周溝には茶褐色シルト層が堆積していたが、最上層には黒褐色シルト層がみられ、古墳時代後期の須恵器を包含していた。今回の調査では明確な遺構は検出できなかったが、周辺に該期の遺構が、展開している可能性が高い。[2] G区では、第Ⅰ層の下部に、マンガン斑紋に富む淡黄褐色シルト層が広がり、古墳時代初頭の水田を確認することができた。第Ⅴ層の地山面は他調査区に比べ大きく落込み、先述した水田化される可能性の高い低湿地に相当すると考えられる。

洪水の影響

註

（1）　井関弘太郎1977「一宮の地形と地質」『新編一宮市史本文編』一宮市

（2）　石黒立人・服部俊之1992「山中遺跡」『年報－平成３年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
平成３年度に実施された第５次調査において、６世紀代の円墳の周溝が調査されている。



Ⅰ暗青灰色粘質土・茶灰褐色シルト
Ⅱ暗褐色シルト
Ⅲ黄褐色砂質シルト
Ⅳ黒褐色腐食質シルト
Ⅴ黄褐色砂

1淡黒褐色シルト
2黄褐色細砂
3暗茶褐色細粒砂
4黒褐色細粒砂
5黄褐色混茶褐色細粒砂
6灰褐色シルト
7暗黄褐色シルト
8褐色中粒砂
9暗褐色シルト
10茶灰褐色シルト
11茶褐色シルト
12淡褐色シルト
13暗茶褐色シルト
14茶灰褐色シルト
15褐色シルト
16茶灰褐色シルト
17暗褐色シルト
18茶褐色シルト
19淡茶褐色シルト

第2節　遺構

（1）　概観

山中遺跡では、平成3年度に実施された調査を含め、5次に及ぶ発掘調査が行われている。これらの調査で検出された遺構・遺物は、弥生時代から中世期に至るまで多岐にわたるが、概ね以下の3期に区分することができる。

時期区分

A期　突帯紋終末期から弥生時代前期

B期　弥生時代後期から古墳時代初頭

C期　古代から中世

A期は、A区を中心とした地点に遺構が分布している。これらは出土土器の様相から突帯紋終末期段階（A_1期）と遠賀川系土器を伴う段階（A_2期）の2時期に細分することができ、前者では土坑、土器棺墓を検出し、後者では、環濠によって居住域と墓域とを明確に区分された集落の一端を明らかにすることができた。

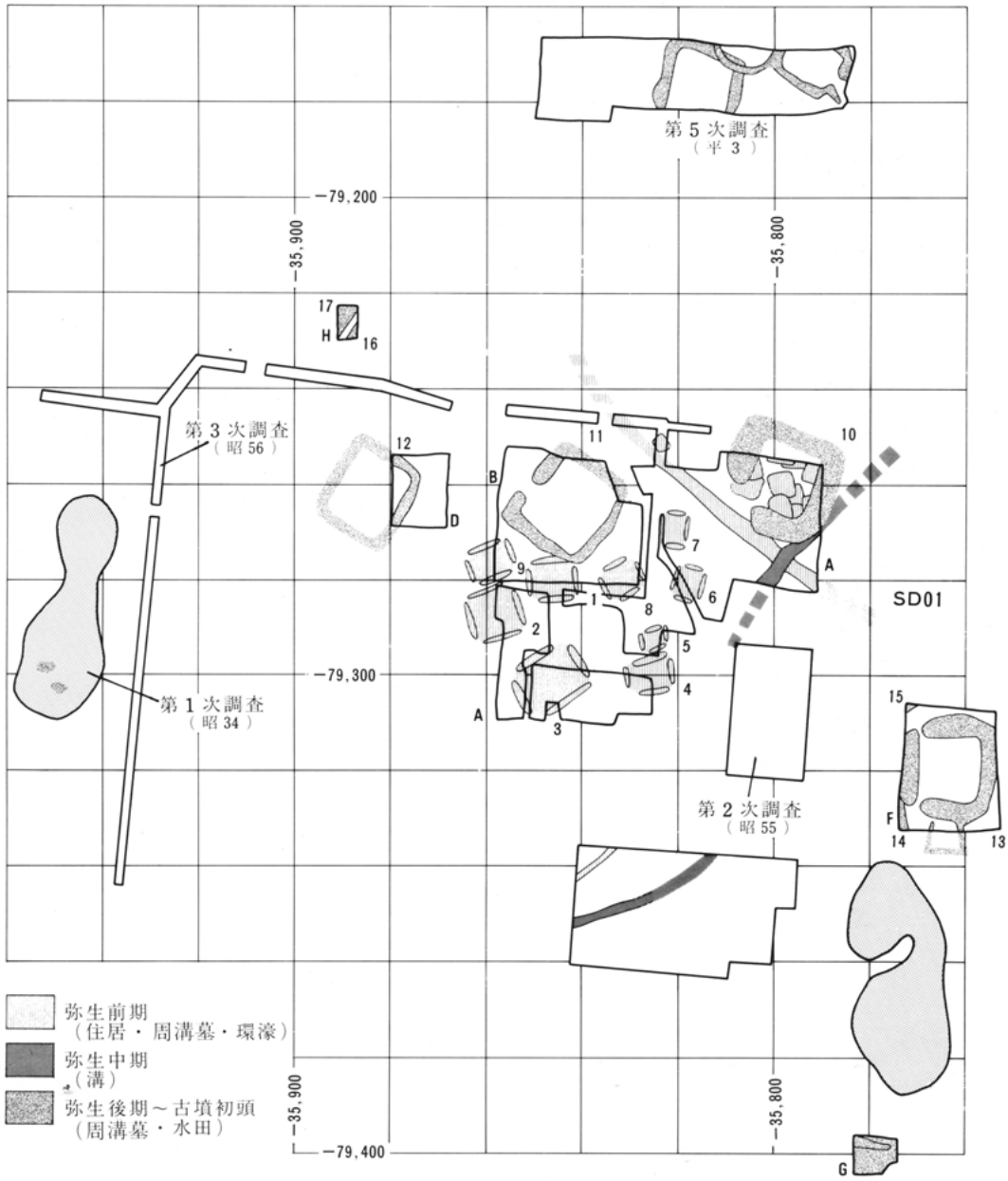
B期は、方形周溝墓7基、水田跡を検出している。方形周溝墓はF区以西に広く分布しており、従来から指摘されてきたように墓域としての性格が強く感じられる。

C期では、遺跡のほぼ全域に遺構の広がりが認められるが、A区以東は、旧水田の掘削により削平されており、残存状況は頗る悪い。僅かにD区の周辺で、溝・井戸・柵等を検出できたにすぎない。

時期		遺構
A期	A_1	SK01
	A_2	SK02・03
		SB10～19　SZ01～09 SD01 SK11・13・15・17・22～31 ※弥生中期 SD03、SK36
B期		SZ10 …… SK40～50　（主体部及び関連施設） SZ11 …… SK51～52　（主体部） SZ13 …… SK53～57　（主体部） SZ12・14 SD04
C期		SA101、SB101～103、SD101～103、110 SE101、102 SK103、102～109

第2表　主要遺構時期区分

第7図　平成3年度調査区の墳丘墓群



第8図　山中遺跡主要遺構配置図（1：1,500）

（2）　A期の遺構

A_1期

概要　A_1期の遺物を出土した遺構は、B区東端からA区中央部付近に集中し、他地点には、現在の所その広がりは見られない。粗製土器の組み合わせからなる土器棺墓がある。また、SD01下層および土坑より多量の該期の遺物が、整地に伴う廃棄により出土している。

土器棺墓　SK01（第１０図）

B区東端、SK03の６m程西方で検出した土器棺墓である（第10図）。葬法は在地の条痕系深鉢と細密条痕の施された氷系の深鉢形土器２個体を組み合わせた合口棺であり、棺身は横位状態に置かれ、主軸方位はほぼ真南を向く。墓壙は黄褐色砂質シルト面を掘り込ん

第９図　A期主要遺構配置図（１：500）

で築かれる。遺構の一部は調査区外に続くが、掘形は径74cmを測る円形であり、棺身より一回り大きく掘り込み、中央部に土器を埋納している。墓壙埋土は褐色シルトが堆積する。

ＳＫ02

土坑　Ａ区中央で検出。長軸3.2m・短軸2.5mを測る楕円状の土坑である。上部は旧水田により削平されており、５cm程度の深さしか持たない。掘形は逆台形状を呈しており、底面は広く平坦である。内部は褐色シルトが堆積しており、粗製土器が２個体出土している。

ＳＫ03

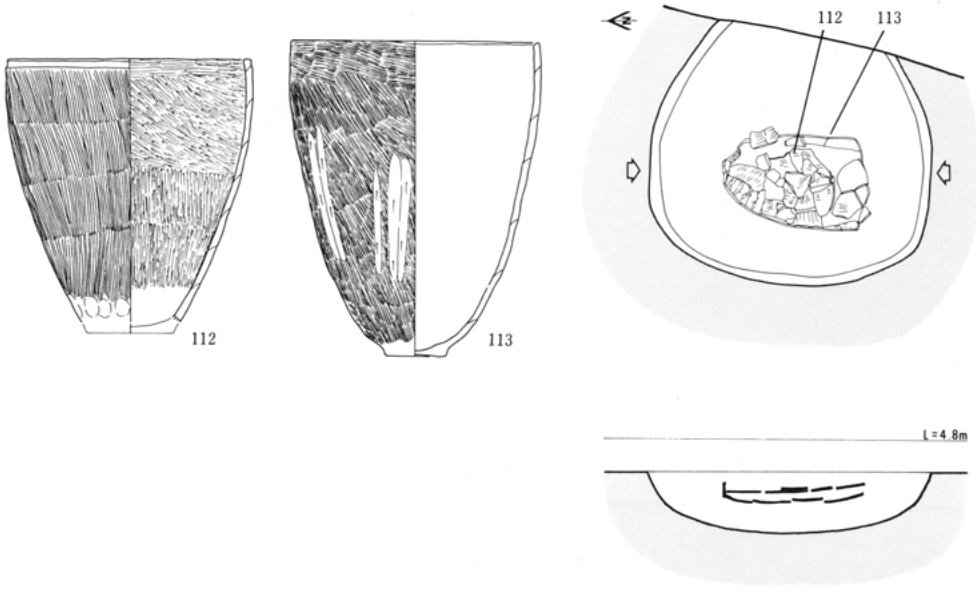
ＳＫ02に近接して築造される。長軸4.5 m・短軸2.2 mを測る楕円状の土坑であり、北縁はＳＺ07、南縁はＳＺ06周溝と重複する。ＳＫ02と同様に遺構の上部は削平され、５cm程度の深さしか持たない。掘形はほぼ逆台形状に掘削され、褐色シルトが堆積する。出土遺物は、遺構の中央より北側に、土器棺に利用されたと考えられる大形の粗製土器等が多量に廃棄された状態で検出された（第25図）。

〔ＳＫ02・ＳＫ03は、弥生集落形成にともなう土器廃棄土坑であり、本来ならばＡ$_2$期で説明を加えるべきかと考えたが、出土遺物がＡ$_1$期段階のみであるためここで述べておいた。〕

Ａ$_2$期

概要　Ａ$_2$期の遺構は、Ａ区およびＢ区のほぼ全域で検出された。環濠を境として北東方向に展開する住居跡群と、南西方向に広がる方形周溝墓群によって構成される集落遺構の一端を明らかにすることができた。

溝２条、竪穴住居10棟、方形周溝墓９基、土坑25基



第10図　SK01 出土状態図（１：20）

環濠 ＳＤ01（第13図）

Ａ区中央以東で確認。幅4.5m程の規模を有するが、西端部分は旧水田により削平され痕跡程度の残存状況である。遺構は、ほぼＮ―45°―Ｗの傾きをもって直線的に延び、竪穴住居が集中する居住域と方形周溝墓が築造される墓域とを明確に区分し、環濠としての機能を有していたものと考えられる。断面は緩やかなＵ字形状を呈し、埋土の堆積状況は上下２層に分層できる（第６図）。下層には黄褐色細粒砂が30cm程度の厚さで堆積する。上層は、淡黒褐色シルト層であり、部分的ではあるが最上位を洪水性の堆積層である褐色中粒砂が覆う。

出土遺物としては、下層よりA_1期段階の粗製土器が環濠掘削に伴う整地により廃棄された状態で、上層より遠賀川系・条痕紋系（水神平式）土器および石器が多量に出土した。

竪穴住居 ＳＢ10（第13図）

北半分以上を調査区外に残すため全体像は不明であるが、一辺5.4m、深さ８cm程度の方形住居である。東辺および西辺部には壁溝が走る。主柱穴と認められる遺構は検出できなかったが、ピット状の落込みを２ヶ所確認しており、Ｐ－01より体部上半部を欠損する条痕紋系壷（図版19-198）が押し潰れた状態で出土した。

ＳＢ11（第13図）

遺構の大半を調査区外に置き全体像は不明である。東西幅6.1 mを測る大形の方形住居であり、ＳＢ10を切って築造される。壁溝は認められないが、主柱穴は２ヶ所（Ｐ―03・04）検出している。内部には褐色シルトが堆積する。完形の遠賀川系壷（図版19-185）がＰ－06東側より出土した。

ＳＢ12（第13図）

ＳＢ10・13・19 と切り合い関係を持つ（ＳＢ10・19 →12→13）。主軸はＮ―15°―Ｗの方向に傾く。壁溝・柱穴等はみられなかったが、東南隅において土坑状の落込みおよび焼土が認められた。住居面積は、5.3m×5.2m（27.6㎡）であり、ほぼ正方形に近いプランを有する。

ＳＢ13（第13図）

遺構の南西隅の一部をＳＺ10周溝によって切られる。ＳＢ12・15・19と重複関係を持つ。（ＳＢ19→12・15→13）。主軸方向はＳＢ12と同様同様にＮ－15°－Ｗに傾く。壁溝・柱穴等内部の状況を知る要素は確認できなかった。住居面積は、4.1m×4.0m（16.4㎡）であり、正方形に近いプランを有する。

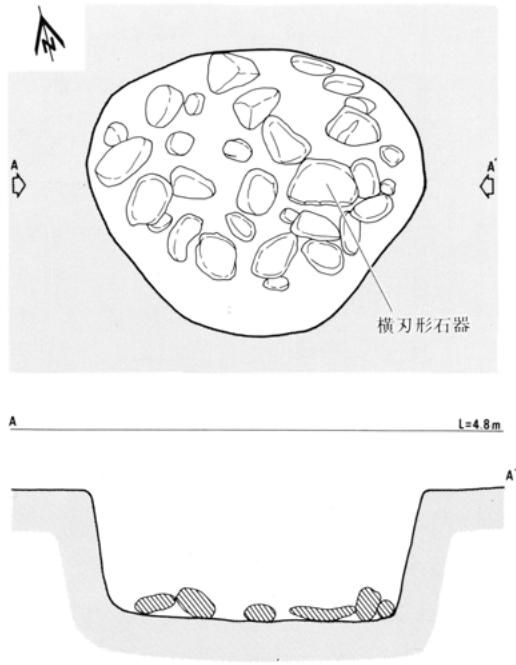
ＳＢ17（第13図）

遺構の東半部をＳＺ10周溝によって切られ、その全体像は不明であるが、方形状のプランを呈する竪穴住居である。南辺部には壁溝が認められる。ガラス質石英安山岩の原石・石核・剥片等が多量に出土しており、住居内で石器製作が行われていたものと考えられる。

西辺部でＳＢ10と重複する。

ＳＢ19（第13図）

複数の住居と重複関係を持ち、遺構は痕跡程度の残存状況であるが、今次の調査で唯一全形を窺うことができる住居である。住居面積は、4.2m×4.0m（16.8㎡）であり、正方形状のプランを呈する。壁溝は認められなかったが、遺構の中央部で焼土の痕跡を確認した。注目すべきは中央北側で検出した土坑である（第11図）。90cm×70cmの楕円状の形態を呈し、底部には円礫が敷き詰められていた。礫中より横刃形石器（図版41-76 ）が出土した。機能等不明な部分が多いが、貯蔵穴的なものであろうか。



第11図　SB19—SK37 実測図（１：20）

方形周溝墓　ＳＺ01（第14図）

Ａ区西からＢ区南にかけて検出。遺構の中央部分は調査区外となり未検出であるが、すべての周溝を確認できた。主軸方向はほぼ真北を向き、9.8m×8.0mの規模を有する。周溝はＵ字形に掘削され、溝幅は、0.8m×1.2mと狭い。溝内の埋土としては褐色中粒砂が堆積する。出土遺物には若干の遠賀川系、条痕紋系土器がみられたにすぎない。

ＳＺ03（第14図）

Ａ区西端で検出。遺構の大半は、後世の溝跡および攪乱により破壊されているが、10.8m×10.5m、溝幅1.2m～1.9mの規模を有しており、今次の調査中最大の方形周溝墓である。主軸はＮ－30°－Ｗの方向に傾く。溝内の埋土は、大きく３層に分層することができる（第14図）。Ⅰ・Ⅱ層は墳丘側からの流れ込みの状況を呈し、Ⅱ層下部より遠賀川系の甕（図版21-240）が出土している。最上層は、洪水性の堆積層である褐色中粒砂に覆われる。また、北溝はＳＫ17と重複関係を有する（ＳＺ03→ＳＫ17）。

ＳＺ04（第14図）

Ａ区中央南で検出。遺構の大半が調査区外で、僅かに北・西・南周溝の一部を検出したにすぎない。北溝はＳＺ05と近接する。主軸はほぼ真北を示し、溝幅は1.2m～1.7mを測る。遠賀川系・条痕紋系土器に混じってガラス質石英安山岩の石鏃をはじめ、石核・剝片がまとまって出土しており、注目される。

ＳＺ06（第14図）

Ａ区中央で検出。すべての周溝を確認し全体像を明確に把握することができた。主軸はやや東に振っており、Ｎ－20°－Ｅを示す。5.6m×4.2mと小規模であり、溝幅も0.6m～1.0mと狭く浅い。溝内の埋土としては褐色中粒砂が堆積しており、埋土中より、遠賀川

系、条痕紋系、変形工字紋を施した精製土器等が出土した。

ＳＺ07（第14図）

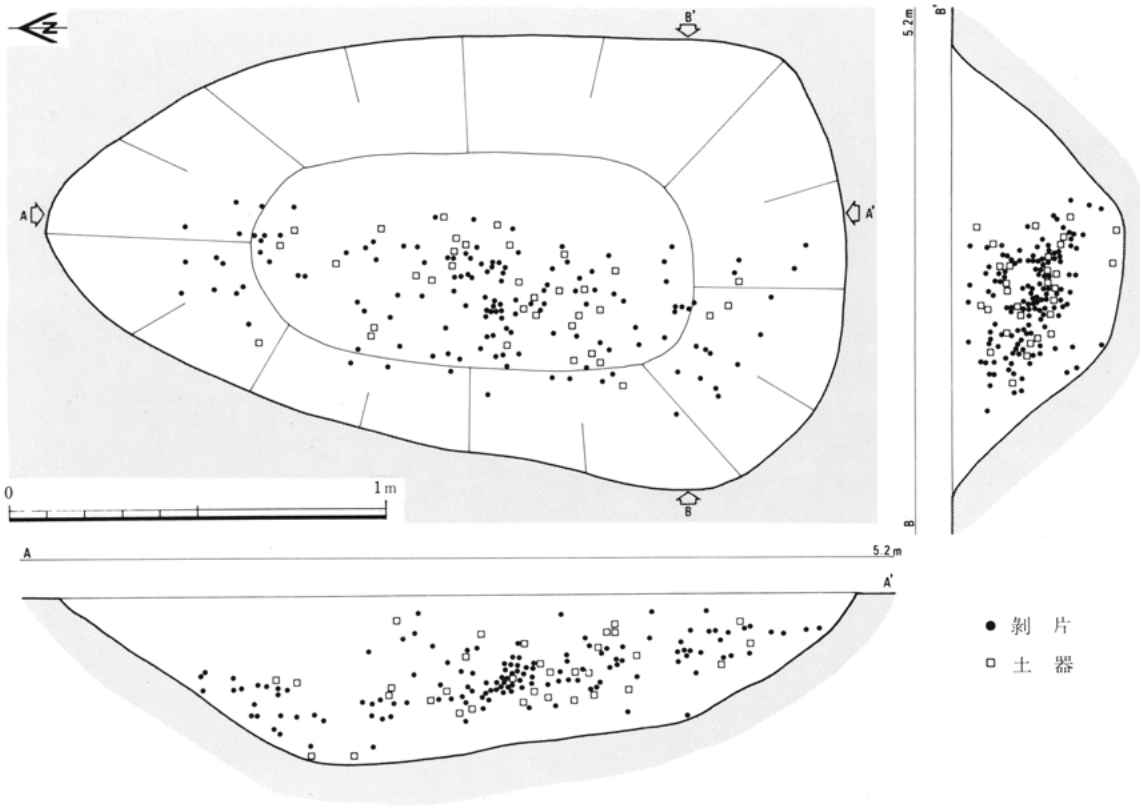
Ａ区中央で検出。西周溝は調査区外に残す。A_1期古相段階の土器を多量に出土したＳＫ03を切って築造されており、主軸はほぼ真北を示す。東西方向の規模は不明であるが、南北方向は6.5mと小規模であり、溝幅も0.4m～1.1mと狭く浅い。溝内には褐色中粒砂が堆積しており、図版23-272の遠賀川系土器が東周溝の肩部から溝内に流れ込む形で出土している。

土坑　ＳＫ17

Ａ区西で検出。1.2m×1.0m、深さ0.15mの規模を有し、ほぼ円形の掘形を持つ。ＳＺ03と重複関係があり、ＳＺ03東周溝を切って掘削されている。内部には淡褐色粗粒砂が堆積しており、図版24-285の遠賀川系土器最末段階と考えられる壷形土器が押し潰れた状態で出土した。

ＳＫ22

Ａ区中央で検出。ＳＤ01を切って掘削される。3.0m×3.0mの円形状の掘形を呈する。遺構は中央部を一段深く掘り込んでおり、断面は二段掘りの形状を示す。内部は暗褐色シルトに覆われる。土坑西の掘形から中央に流れ込む形で良好な遠賀川系、条痕紋系土器が出土した。



第12図　SK26 石器出土地点（1：20）

ＳＫ23

Ａ区東で検出。ＳＤ01に近接（環濠の外側）して掘削されており、0.8m×0.6m、深さ0.15mの規模を有する。やや楕円状の掘形、Ｕ字形に近い断面を呈する。内部には褐色中粒砂が堆積しており、図版26-300の沈線文系精製壷型土器が潰れた状態で出土した。

ＳＫ24

Ａ区中央で検出。ＳＤ01を切って掘削されており、1.1m×0.9m、深さ0.15mの規模を有する。掘形はやや楕円状の形状であり、Ｕ字形の断面を呈する。内部には、暗褐色シルトが堆積し、遠賀川系土器に混じって、浮線文系土器（図版28-304）が出土している。

ＳＫ26（第12図）

Ａ区東端で検出。2.3m×1.0mを測り、やや南側が下膨れ状に広がる楕円形の掘形を有する。深さは0.42mである。埋土は、下層より茶褐色細粒砂・黒褐色細粒砂・暗褐色細粒砂の堆積が確認できた。注目すべきはガラス質石英安山岩の石核・剥片等石器製作にかかわる大量の遺物が、廃棄された状態で出土したことであり、第12図にみられるように、少なくとも２回以上の廃棄が認められる。

ＳＫ27

Ａ区東で検出。遺構の南半分が調査区外であり、全体像は不明であるが、東西幅5.2mを測り、やや大形の楕円状のプランを呈するものと考えられる。内部は褐色中粒砂で覆われる。遠賀川系土器、条痕紋系土器等に混じってガラス質石英安山岩の石核、剥片がまとまって出土した。

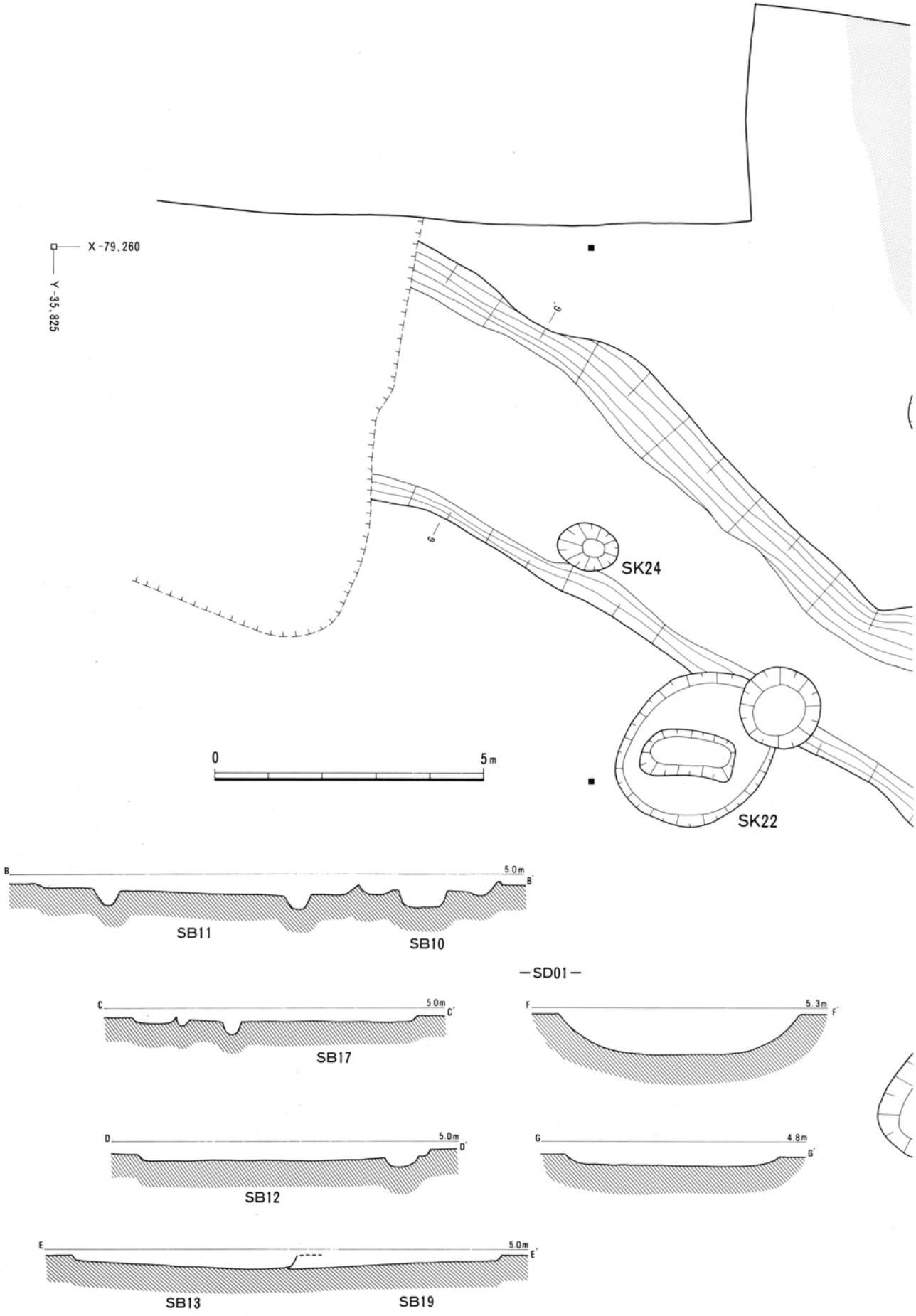
ＳＫ29

Ａ区東で検出。ＳＤ01を切って掘削される。6.7m×1.9mを測る大形の土坑であり、北側が下膨れ状に広がる楕円形のプランを有する。深さは0.3m程度であり、断面は緩やかな逆台形に近い形状を呈する。埋土は褐色シルトで覆われており、遠賀川系、条痕紋系土器、石核、剥片等が多量に出土した。

ＳＫ30

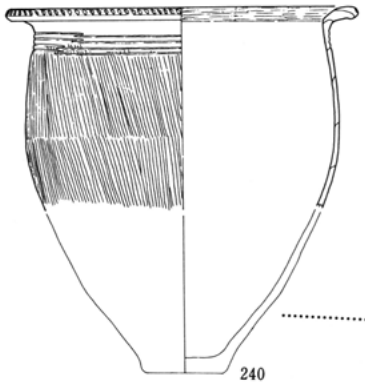
Ａ区東で検出。遺構の上部はＳＺ10周溝により削平されているが、1.0m×1.0mの円形プランを呈する土坑である。断面は逆台形状となる。内部より、ガラス質石英安山岩の石鏃、剥片等が廃棄された状態で多量に出土した。

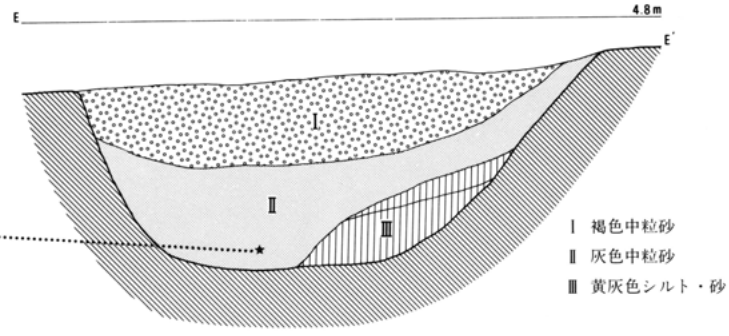
弥生中期　溝１条と土坑１基を検出した。ＳＤ03は、Ａ区の東で検出した遺構である。幅3.0m深さ0.15 mを測る。断面は逆台形状を呈し、ＳＤ01と直交する。埋土は下層より暗黄褐色シルト、灰褐色シルトの大きく２層に分層することができる。出土遺物の大半は、A_1期段階の粗製土器、遠賀川系土器、条痕紋系土器よりなるが、上層より僅か１点ではあるが貝田町末～凹線文出現期の細頸壷（図版32-355）が出土した。出土遺物の絶対量よりみるならば前期の所産とも考えられるが、ここでは、中期土器が出土している点を尊重して貝田町末～凹線文出現期の遺構と考えておく。ＳＫ36もほぼ同時期の土坑である。（服部信博）



第13図　環濠・竪穴住居実測図（1：100）

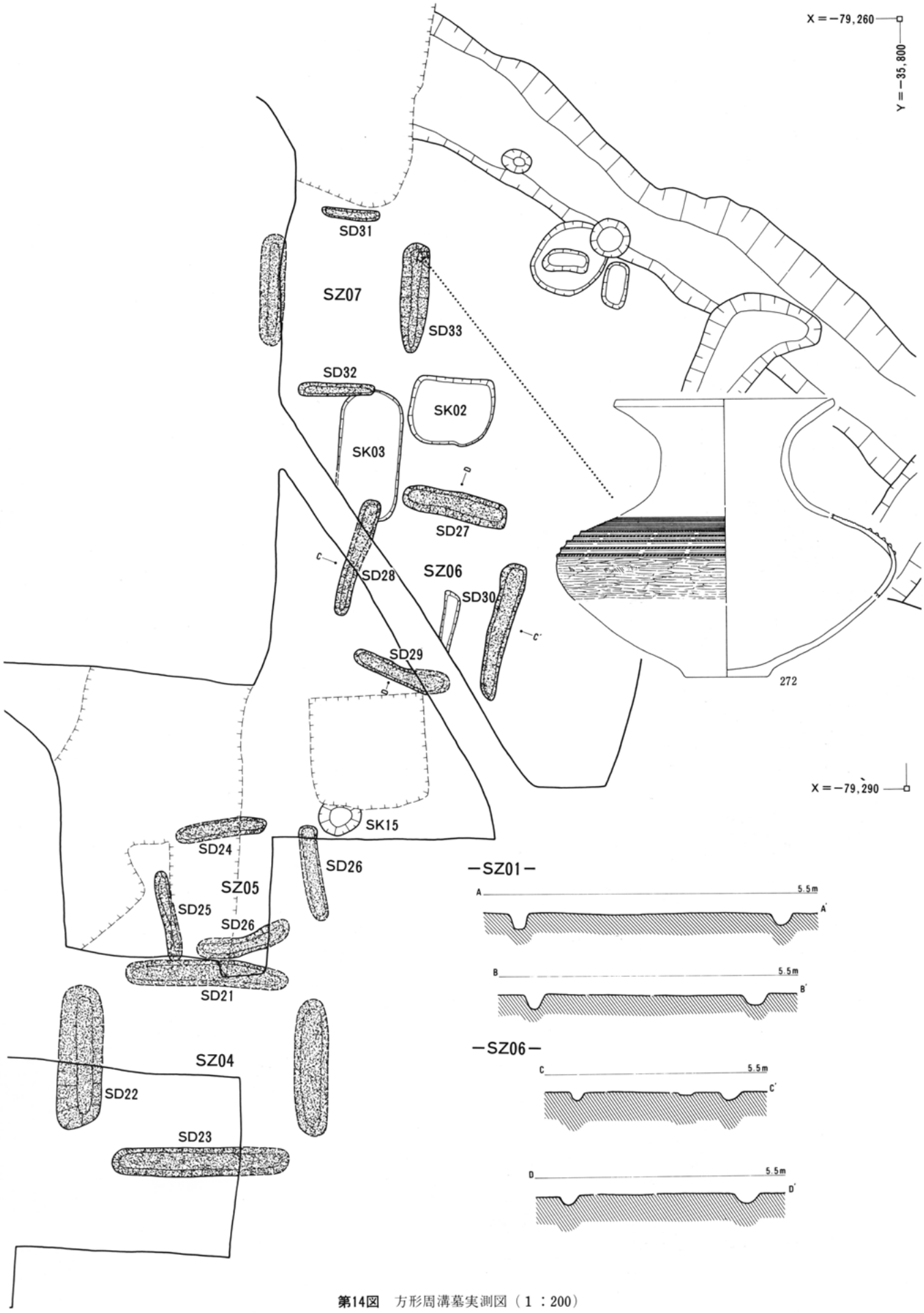
SB11
P-06
P-05
P-04
P-03
P-02
P-01
SB10
SB16
SB17
P-09
SB12
SB12焼土
P-07
SK36
SK37
SB18
P-11
P-10
SB19
SB19
焼土
SB13
SB14
SB15
P-08
SK31
SK29
SD01
SK26
SD03
SK23
SK27
4.7
4.8
5.0
5.0





SZ03～SD19セクション（1:20）

X＝−79,275
SD37
SD39
SD09
SD10
SK01
SD34
SD36
SD38
SD11
SZ01
SD13
SZ08
SD35
SD12
SD16
SZ02
SD15
池
SD17
SK19
SD20
SK20
SK17
SZ03
SK21
SD18
SD19
SK12
SK13
Y＝−35,865
X＝−79,310
Y＝−35,830



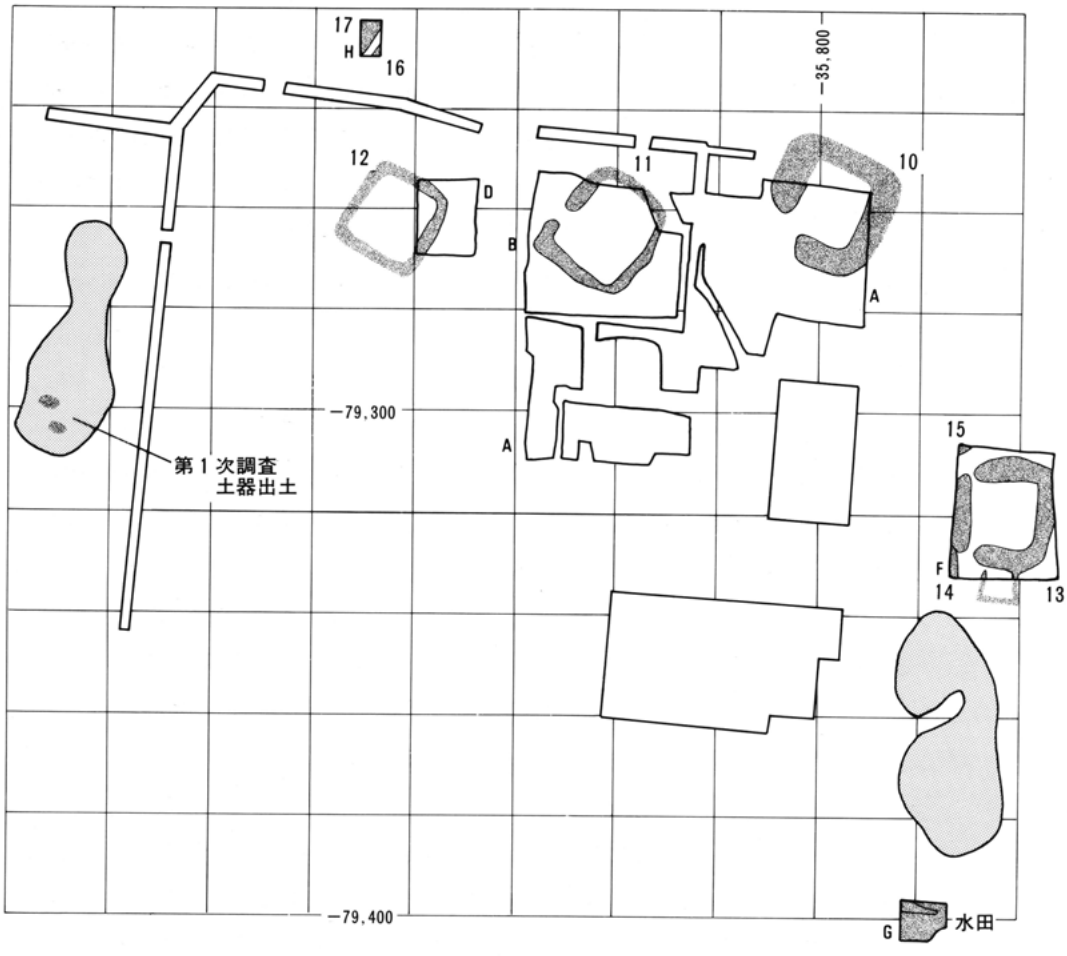
第14図　方形周溝墓実測図（1：200）

（3）　B期の遺構

概要　山中遺跡B期に所属する主要遺構には、墳丘墓８基、土坑１基がある。これらは大きく２分でき、ＳＺ10・11・13・15を中心とする山中式後期に所属する遺構群と、ＳＺ13内土器廃棄とＳＤ04を中心とする廻間Ｉ式期の遺構群である。山中遺跡においては、Ｂ期に所属する遺構のほとんどが墳丘墓関係であることから、当地点は「墓域」として位置づけられていたと考えてよいであろう。

墳丘墓　ＳＺ10　（第16図）

Ａ区東端に位置し、北溝は調査区外に残す。形状は南西部に開口部を持つもので、溝は幅広く、墳丘側での立ち上がりはやや強いが、対する外側は緩斜面となる。墳丘の規模は東西で13mを測る。溝幅は6.0m～7.0mと広く、深さ0.4m。主体部は７基検出でき、おおむね東西方向に主軸を置くものと、南北方向に置くものとが見られる。ＳＫ40は墳丘の中央部に位置し、かつ最も規模の大きな墓壙を掘削しており、中心主体部と考えてまちがいなかろう。この中心主体部を中心に南西開口部にかけて主体部が展開する。規模的には長



第15図　Ｂ期主要遺構配置図（１：1,500）

軸が３ｍのＳＫ43・44と２ｍのＳＫ42・46そして1.3ｍのＳＫ41・45の３種が確認できる。また土器を伴なう土坑としてＳＫ47及び48が認められ、長軸1.7ｍ・短軸0.8ｍのほぼ同様な規模を示す。その他円形で皿状の断面をもつ土坑ＳＫ49・50が見られる。こうした小規模な土坑と主体部の組み合わせを復原すると、まずＳＫ47はその配置から中心主体部であるＳＫ40に伴なう可能性が考えられ、また同様にＳＫ48もやはりＳＫ40を意識した施設と考えられるのであるが、ＳＫ43との重複関係を考慮する必要もある。ただしＳＫ47はむしろＳＫ44に伴なうものと考えれば、ＳＫ40はＳＫ48との関係で捉えることも可能となる。こう考えれば、主体部には小規模な土坑がおおむね伴なうというように一般化できることになる。ここでは後者の考えをとることにしたい。ＳＫ49・50はやはり同様の形状をもつもので、その配置からＳＫ49は主体部ＳＫ43に伴なう施設であり、ＳＫ50はＳＫ46に伴なうものと推定したい。以上を総合すると、第１に、主体部には小規模な土坑が伴ない、その土坑には土器を含めた供献物が整理されていた可能性が高いといえる。第２に、主体部と土坑の組み合わせによる遺構の前後関係から、土壙墓の掘削順序が推定できる。ＳＫ41・42及びＳＫ44が古く、その後ＳＫ43が、そして最後にＳＫ46と中心主体部であるＳＫ40が営まれたと想定したい。したがって南北方向の土壙がまず掘削され、最後に中心主体部ＳＫ40が営まれたことになる。

墓壙について見てみると、平面形態はおおむね長方形であり、断面は斜面をもつ箱状の形態である。最も掘削状況が明確に把握できたＳＫ43を見てみると、断面及び平面形がやや船状の形態を見せ、小口部に向かって徐々に傾斜をもち、その位置に河原石を配置していた。こうした石の配置はＳＫ41にも認められる。棺の状況はほとんど把握できていない。なお副葬品は認められず、ＳＫ42には底部に朱の痕跡が認められた。

ＳＺ10の造営時期はＳＫ47及び東溝部の出土遺物により山中式後期に所属すると考えてよい。

ＳＺ11　（第17図）

Ａ区北西部からＢ区にかけて検出したが、北溝は攪乱により把握できていない。形態は西溝ほぼ中央部に陸橋部を置く「Ｂ型墳」で、南東部にも開口部状の掘り残し部が確認される。平面形は方形を呈し、方16.5ｍと想定できる。Ａ区側は上部が大きく削平されていたが、Ｂ区ではＳＫ51・52の主体部を検出できた。その内ＳＫ５１は墳丘中央部に位置し、中心主体部と考えてよいであろう。主軸を東西に置き、長軸４ｍの規模をもつ点で、他の墳丘墓と類似点が認められる。ＳＫ51・52の両者で棺の痕跡が確認された。所属時期は、西陸橋部および南溝より出土した小型土器等（図版35-419～422）から山中式５段階に比定できる。

ＳＺ12

Ｄ区西側において東コーナー部が検出されたのみであり、規模・平面形態等は不明瞭となる。墳丘墓に伴なう遺物としては、東溝中央で出土した有段鉢（図版37-455）が認められる。この種の資料は廻間Ⅲ式期に所属するものであり、造営の下限を知ることができる。

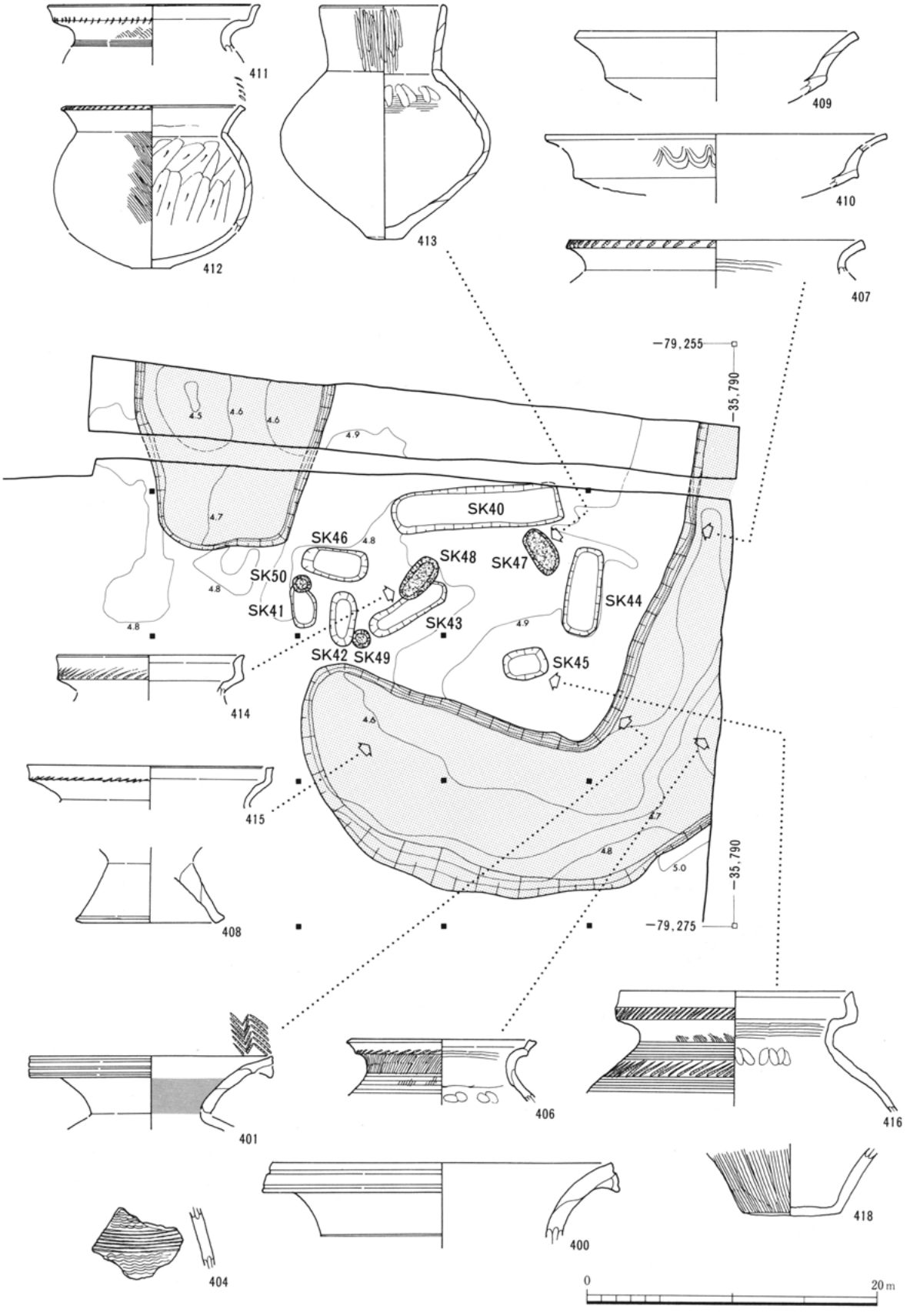
ただし、溝に基づく墳丘主軸線の方向がＳＺ10・11と近似するため、造営時期を山中式段階まで遡らせて考えることも可能である。

ＳＺ13　（第18・19図）

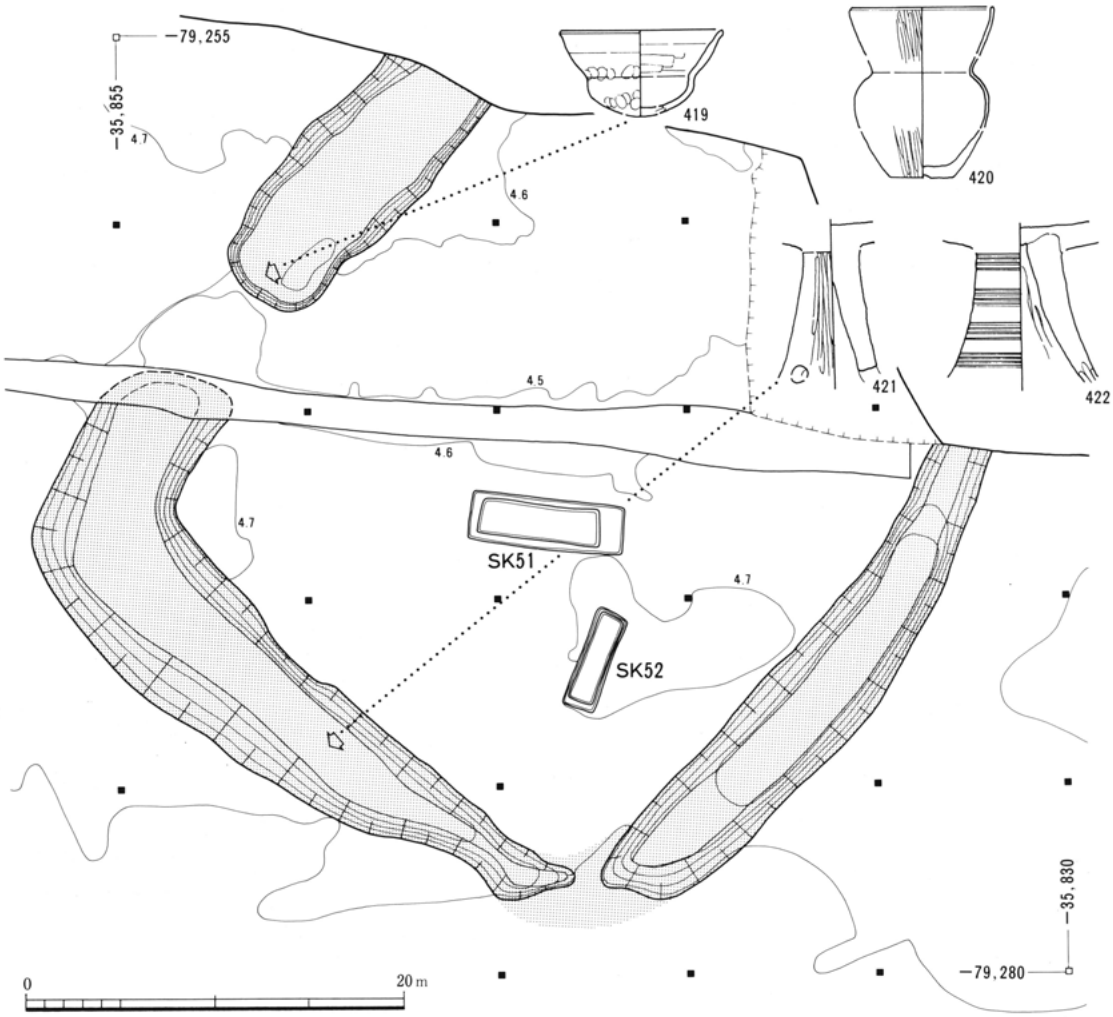
Ｆ区において墳丘のほぼ全体を検出することができた。形態は基本的には北西及び南西隅部に陸橋部を置く、コ字型タイプのものである。ただし東・南溝内には主軸をやや西に傾斜させた溝及び土坑状の掘込みが認められ、また南溝がさらに南方向に拡張する傾向が窺える。またＳＤ06・07を考慮すると南側に直交する溝を設ける形で前方部状の突出部が存在した可能性が高い。つまり主軸を違えた溝の再掘削・再整備を想定できる。墳丘規模は方15ｍで、溝幅約４ｍ、深さ0.5ｍを測る。主体部は５基確認でき、東西方向に主軸を置くＳＫ53・54を中心主体部と考えてよいであろう。ＳＫ56・57は主軸を同じくする墓壙で、ＳＫ55をも含めて、おおむねコ字状に南を意識した配置を整えている。主体部はその重複関係からまずＳＫ53が営まれ、続いてＳＫ55、そしてＳＫ56・57となり、最後にＳＫ54が築かれたと推定できる。それは墓壙から出土した土器から見ても矛盾するものではない。問題はＳＫ53とＳＫ54の関係である。つまり主体部そのものの重複関係は他の墳丘墓ではまったく認められない現象であり、この点に一つの画期を見出だすことが可能と考える。

このようにＳＺ１３においては墳形と墓壙の両者で大きく２分できる状況が確認できた。すなわち墳形では主軸を違えた溝の掘り直しであり、墓壙では他の墳丘墓では認められなかった中心主体部ＳＫ53とＳＫ54の重複関係である。こうした関係を出土土器を基にしてまとめてみると、次のようになる。主軸を西側に傾斜させる溝内細溝と土坑については南溝に存在する土坑最下層より山中式に所属する高杯（図版37-445）が出土している。しかし主軸をほぼ東西・南北に置く幅広い溝下層内からは山中式土器は認められず、むしろ北溝では廻間Ｉ式後半期（図版36）のまとまりが見られる。こうしたことから、もともと溝内細溝にそうかたちの墳丘が造営され、その後、廻間Ｉ式後半期になり墳形を現状のような形態に改変した可能性を想定しておきたい。また溝の深さが改変後の溝に一致するＳＤ06・07の掘削も同時に行われたと考えておいてよいであろう。すると主体部ＳＫ54が営まれた段階をこの再掘削期に合わせて想定しておくことが可能となる。このことはＳＫ53の主軸方向が前段階の細溝と一致し、ＳＫ54の主軸線がＳＺ13北・南溝の方向と同じであるという点をもってして傍証できる。ＳＺ13は山中式後期にコ字状形態の墳丘墓として造営され、その後の廻間Ｉ式後半期（４段階）になって前方後方型墳丘墓に改変され、主体部ＳＫ54が営まれたことになる。

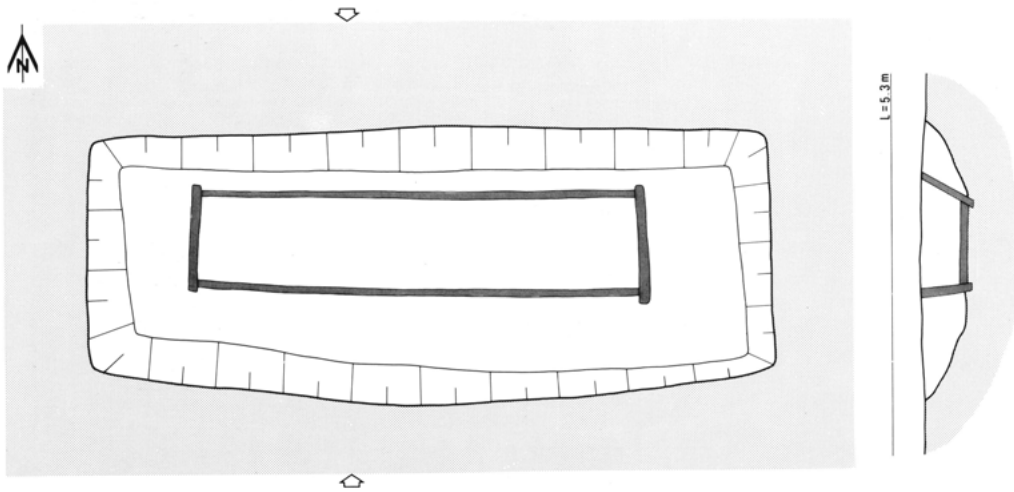
次に墓壙についてであるが、ＳＫ54・55・56で棺の痕跡を確認することができた。特にＳＫ54では比較的明確にその状況が把握でき、それによると棺は墓壙の中央部に設定され、小口を側板の外側にあてる形態をとる。側板は外方に傾斜し底板はその内部に置かれる。つまり外方に傾斜した側板を中心に墓壙内で組立てられたものと推定できる。組立式木棺の規模は側板長291cm・小口長72cm・板厚６cm・残存高30cmを測る。なお明確な副葬品は認められない。



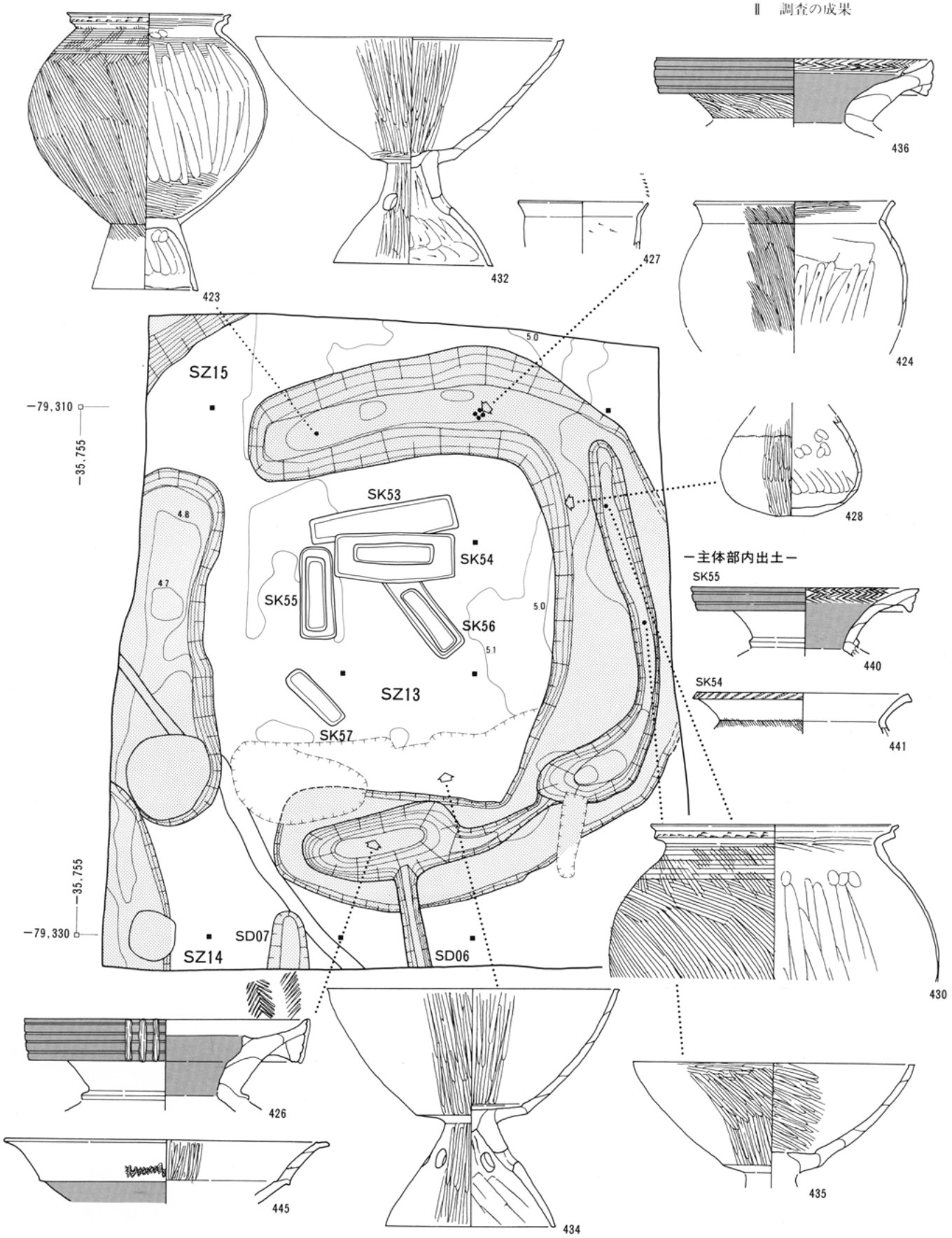
第16図　SZ10実測図（1：200）



第17図　SZ11実測図（1：200）



第18図　SZ13主体部SK54実測図（1：20）



第19図　SZ13・14・15実測図（1：200）

その他Ｆ区西隅でＳＺ14・15を確認でき、15からは図版37-452の高杯が、14からは図版36-438のパレス壺が出土している。Ｈ区ではＳＺ16・17の溝を検出したが、出土遺物は見られなかった。Ａ区南隅に位置するＳＤ04は、長さ360cm.幅140cm.深さ28cmで、図版37-456.457の壺が出土し、廻間Ｉ式前半期に所属するものである。

水田　県立尾張病院南東隅に位置するＧ区において耕地遺構を確認できた(第20図)。検出面での標高は4.7mを測る。調査区は約70㎡と小規模なものであり、さらに南西部が後世の沼沢地であったため土壌が質的な変化を受け遺構の確認が困難であった。基本層位は約１mほどの客土がまず存在し、その下部には現代水田耕作土が15cm堆積する。この土層を除去するとただちに鉄・マンガン斑紋の広がりが認められた。この鉄・マンガン斑紋層は水田下位に発達したものであり、この層でら古墳時代初頭の土器の出土が確認でき、また須恵器が出土した溝ＳＤ05との重複関係から、この斑紋層の形成が古墳時代初頭にまで遡るものであると推定できた。但し、この斑紋層の形成に繋がる水田耕作土は存在せず、おそらく後世の耕作等により削平されたものと思われる。したがって、鉄･マンガン斑紋の分布から小区画に区切られたやや不定形な水田の存在を類推できるにすぎない。それによると東西４m～５mで南北に長い形状の区画が考えられよう。また畦畔幅は約0.8m～0.9mほどと推定される。斑紋層の形成時期は、検出面からＳ字甕Ｂ類中段階（図版37-454）が、下位からＳ字甕Ａ類新段階（図版37-453）が出土していることから、少なくとも廻間Ｉ式期には水田が形成されており、その後遅くともⅡ式期には水田が廃絶していたことが窺い知れる。

（赤塚次郎）

山中遺跡90Ｇ区の土層観察所見

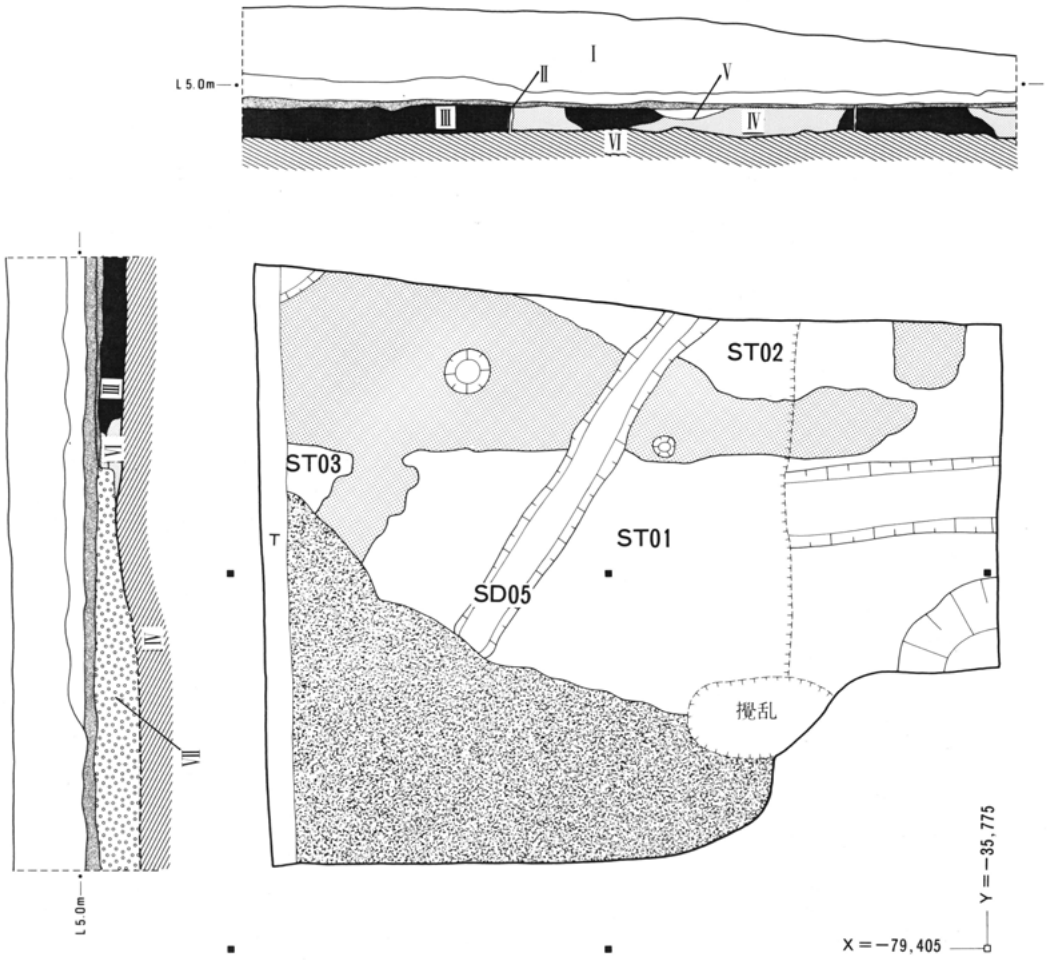
静岡大学名誉教授　加藤芳朗

1　鉄・マンガン斑紋層の出現状況

Ｇ区西壁で第22図―図１の土層が観察された。土層番号は以下の説明のため仮につけたものである。なお、北壁にも同様な土層が存在する（３層を除いて）。

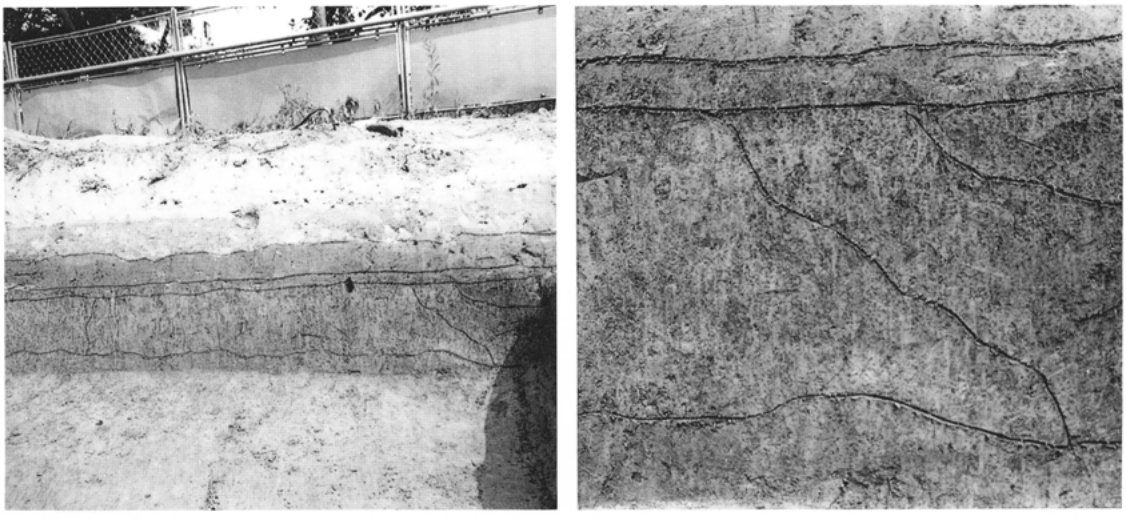
イ　盛り土の下に現世水田の作土層（１層）、これに対応する鉄・マンガン斑紋の分化層（２層、それぞれ、図の×、・印、厚さ５cm程度）がつづく。３層以下はこの水田の造成工事のため削平された残りの土層である。その上部にどのような土層があったかはわからない。

ロ　３層は４層以下を削りこんで発掘区の南側を占める。青緑色のグライ層（還元状態にある土層、図の－－印）である。全体に攪乱を受けている。４層以下と接する部分は酸化されて褐色化している。



Ⅰ　整地層
Ⅱ　暗青灰色粘質土
Ⅲ　淡青灰色シルト（管状斑紋がみられる）
Ⅳ　淡黄褐色シルト（マンガン斑紋に富む）
Ⅴ　暗茶褐色シルト（SD05）
Ⅵ　黄褐色砂
Ⅶ　青灰色シルト

第20図　水田実測図（1：100）



第21図　北壁断面図（右は畦畔アップ）

ハ　4層は灰色でオレンジ褐色の管状斑（上下に伸びる、太さ1cm内外、図の〃印）に富む。

ニ　5層は暗褐色の粒状のマンガン斑（図の・印）に富む。図のように上方に盛り上がって4層と並ぶことがある。4、5層の土性（粒土組成）はともに壌土～埴壌土で、両者は同一の堆積土層と考えられる。

ホ　6層は砂壌土で、まだら状の鉄・マンガン斑紋を含む。

ヘ　7層は上より砂質である。…4～7層は斑紋を含むことから酸化状態にあると判断される…

ト　5、6層の境界付近から古墳時代初頭のS字甕（図の☆印）が産出した。

2　鉄・マンガン斑紋層と水田との関係

（1）　乾田型水田

鉄・マンガン斑紋層は作土層下に酸化的下層土を有する水田（乾田）に特有な土層である。この水田土壌は表面水型と呼ばれる。この土層は、通常、上位に鉄の斑紋、下位にマンガンの斑紋と分かれる（分化する）傾向がある。このペアを含む土層があれば、その上方にそれと呼応する作土層、田面が存在するはずである。G区では、2層と4＋5層が、それぞれ、このペアに該当する。2層には1層（現世水田の作土層）が対応する。4＋5層に対応すべき作土層は、前述のごとく、削り取られて見ることができないが、かって、乾田があったことは確実といってよい。

（2）　5層マンガン斑の盛り上がり

これと水田畦畔との関係は筆者の経験例とまったく相反し、説明に窮したが、一応下記（b）の見解に達した。まず、筆者の例から述べることとする。

（a）　発掘面でマンガン斑の盛り上がりが、互いに直角に枝分かれする直線状の帯として現れ、あたかも畦畔のように見える。帯の幅は狭い（50cm以下）。盛り上がりが現在あるいは埋没した（過去の）乾田型水田の畦畔下に認められたので、発掘面に見られるマンガン斑の帯はそれより上位数10cmに位置する畦畔を示すものと解釈された［静岡県掛川市原川遺跡、加藤（1988）…静岡県埋蔵文化財調査研究所（1988）「原川遺跡Ⅰ」］。仮にこれに従えば、G区の4、5層（鉄・マンガン斑紋のペア）は上位に乾田型水田を、5層マンガン斑の盛り上がりはその水田の畦畔をそれぞれ示すことになろう（削られて今はないが）。上述の土器の産出（4、5層の境界付近）からこの水田の時代は古墳前期またはより新期にずれこむ。

（b）　しかし、G区では、5層マンガン斑の盛り上がりが田面、4層部分が畦畔という

のが発掘調査担当者の見解である。その理由は、後者の方が幅が狭く、不規則ながら帯状配列、直角分岐を示すことにある（前者は幅広く出現する）。これももっともな解釈である。ただし、後者の幅は狭いといっても、（ぁ）よりずっと広い。そこで、これに着目した説明を述べてみる（第22図―図２）。

イ　５層マンガン斑を生成した水田Ⅰ（乾田型）があった。今は見られないが、それとペアをなす斑鉄層も上位にあったはずである。このとき、隣接の畦畔の下ではそれらができなかった。おそらく畦畔のはばが広すぎてこれらの材料を運ぶ浸透水が中までとどかなかったためであろう（図２―イ）。

ロ　この畦畔と水田Ⅰが削られて水田Ⅱ（乾田型）が造成された。もとの畦畔部分に鉄・マンガン斑紋のペアができた。これがそれぞれ４層、５層（の一部）である。水田Ⅰの下部にはすでに鉄・マンガン斑紋層が存在したので、それと重複して新たな鉄・マンガン斑紋のペアになりにくかった（図２―ロ）。

ハ　水田Ⅱをさらに大きく削平して現世水田が造成された（図２―ハ）。水田Ⅰの時代は（ａ）と同じく、古墳前期またはそれ以降としてよい。水田Ⅱはこれより新しいわけだが、その時期を特定する資料はないようである。

（３）　今後の課題

狭いＧ区の中で上記（ｂ）の判定がなされたことにかんがみ、隣接のより広い発掘区において同様のことが確認され、さらに、水田Ⅰ・Ⅱの存否が検討されることが望ましい。

図1

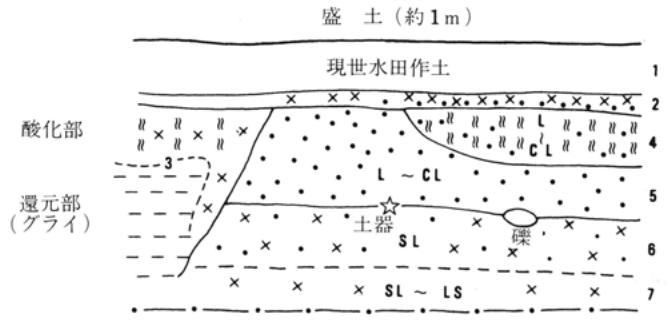
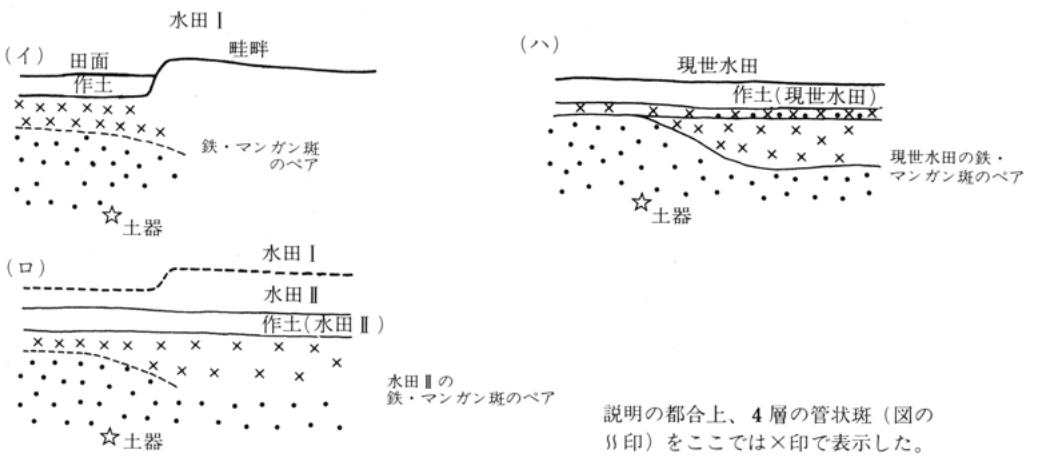


図2



第22図　水田模式図

3　噴砂跡と鉄・マンガン斑紋層、グライ層

A区もそうであるが、G区の噴砂跡は鉄・マンガン斑紋層（4、5層）を切るが、灰白色の新鮮な砂よりなり、その中に鉄・マンガン斑ができていない。これから、噴砂の起きた時期は4、5層の形成終了後だったことがわかる。静岡県の遺跡ではまわりの土層と同様な鉄・マンガン斑を含むものが発見されている（古墳～奈良時代の噴砂跡、袋井市坂尻遺跡など）。

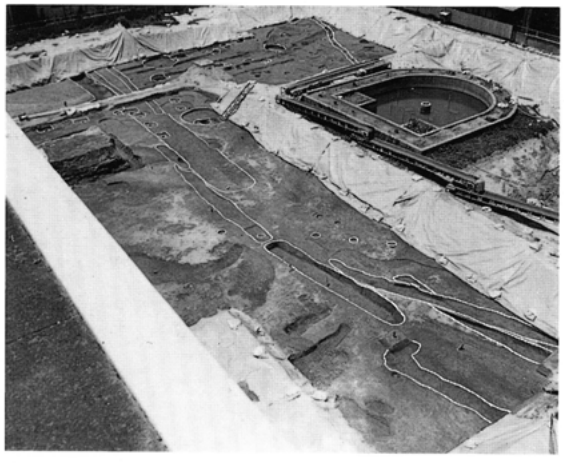
G区南のグライ土層（3層）とその北縁の酸化部分を横切る噴砂跡は、グライの部分では青く、その酸化部分では褐色化（酸化）している。従って、噴砂は3層の酸化が始まる前に貫入したことになる。

（3）　C期の遺構

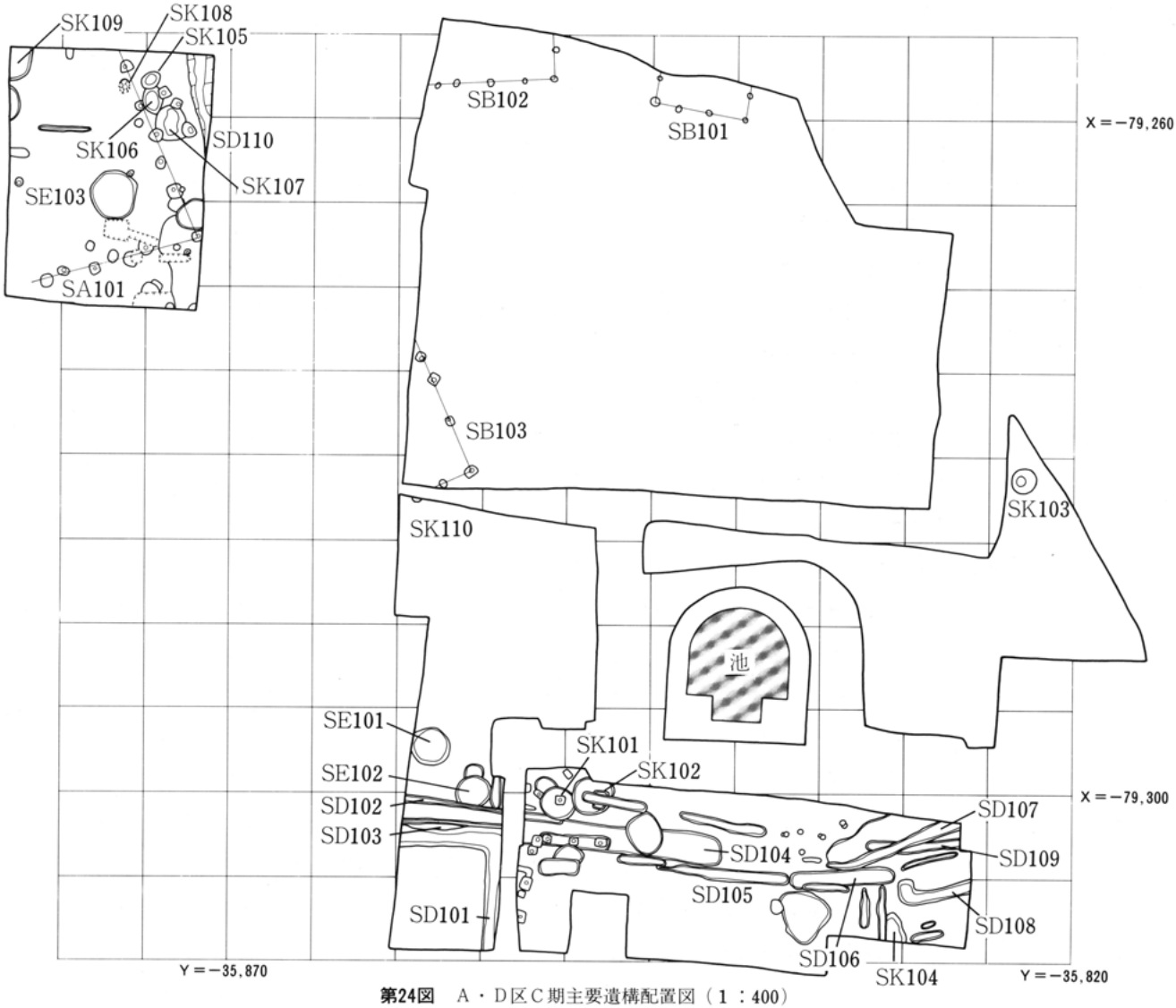
古代　古代に関する遺構については極めて希薄であるが、ややまとまりの認められる地点が2ヶ所存在する。まずA区南西に所在するＳＥ102とその周辺部（主に江戸時代の井戸とその整地面）において須恵器等の遺物の出土が見られた（第35図）。おそらく調査区外の西側に遺構が展開していくものと推定できる。時期は出土遺物から7・8世紀に中心を置くものであろう。次にD区のＳＥ103とそれを囲むように存在する一本柱列ＳＡ101、そして同様な方向性をもつB区西隅に位置するＳＢ103がある。これらは周辺部に屋敷地群が存在することを推定させる資料である。時期はＳＥ103から灰釉陶器が出土していることから、１１世紀を中心とするものと推測できる。方位はN-22°- W。ＳＥ103 は径2.8mの井戸で、構造物は確認できないが、方形の枠痕跡を検出することができた。ＳＡ101は一辺0.7m～0.8mの方形掘形をもつ柱穴列で、深さ0.3mを測る。柱間は東西列ではほぼ3m等間であるが、南北列は約2.0m～3.5mと不揃いとなる。

中世　中世の遺構・遺物はほぼ全調査区において認められるのであるが、ややまとまりをもつ地点はA区南部に限られる。軸線が少し東に傾斜する溝を中心にして、東西方向に遺構の分布が見られる。まずA区南西隅に所在するL字状の溝ＳＤ101が存在し、そしてそれを中心にして東西方向に数条の小溝が掘削される。また円形の土坑群が連続する。おそらくこうした小溝は「路」に伴なう側溝の可能性が高く、ＳＤ101の屈曲地点を境に南北・東西の路が交差していたものと類推できる。ＳＤ101出土遺物から12・13世紀に中心を置く遺構と考えられる。ＳＤ101 は幅0.8～1m・深さ0.3mを測り、U字形に掘削され南に向かって徐々に深さを増す。その他D区北東隅のＳＤ110 はU字状に掘削された幅約2m、深さ0.3mの溝であり、12世紀後半の遺物が出土している。またF区においては南西隅にて井戸ＳＥ104・105が見られたが、枠内の構造物は認められなかった。

（赤塚次郎）



第23図　C 期 の 遺 構



第24図　A・D区C期主要遺構配置図（1：400）

第3節　遺物

（1）　A期の土器

今回の山中遺跡の発掘調査では、突帯紋終末期から弥生時代前期に至る多量の土器が遺構に伴い出土した。遺物の詳細な分析は第Ⅴ章で行うこととし、ここでは主要な遺構の出土遺物を中心に説明していくことにする。

A$_1$期

土器棺墓（図版13―112・113）

ＳＫ01　粗製土器（器形Ⅰ）２個体からなる土器棺である。112は、中部高地系・氷Ⅰ式に類似する。外面の調整は下から上へ、４～５回に分割してハケ状の細い条痕調整（細密条痕）が行われ、口縁下部に１条の幅広の沈線が施される。内面はミガキ調整。113は、体部外面に貝殻条痕を施した粗製土器であり、部分的にケズリ調整が認められる。内面はナデ調整。

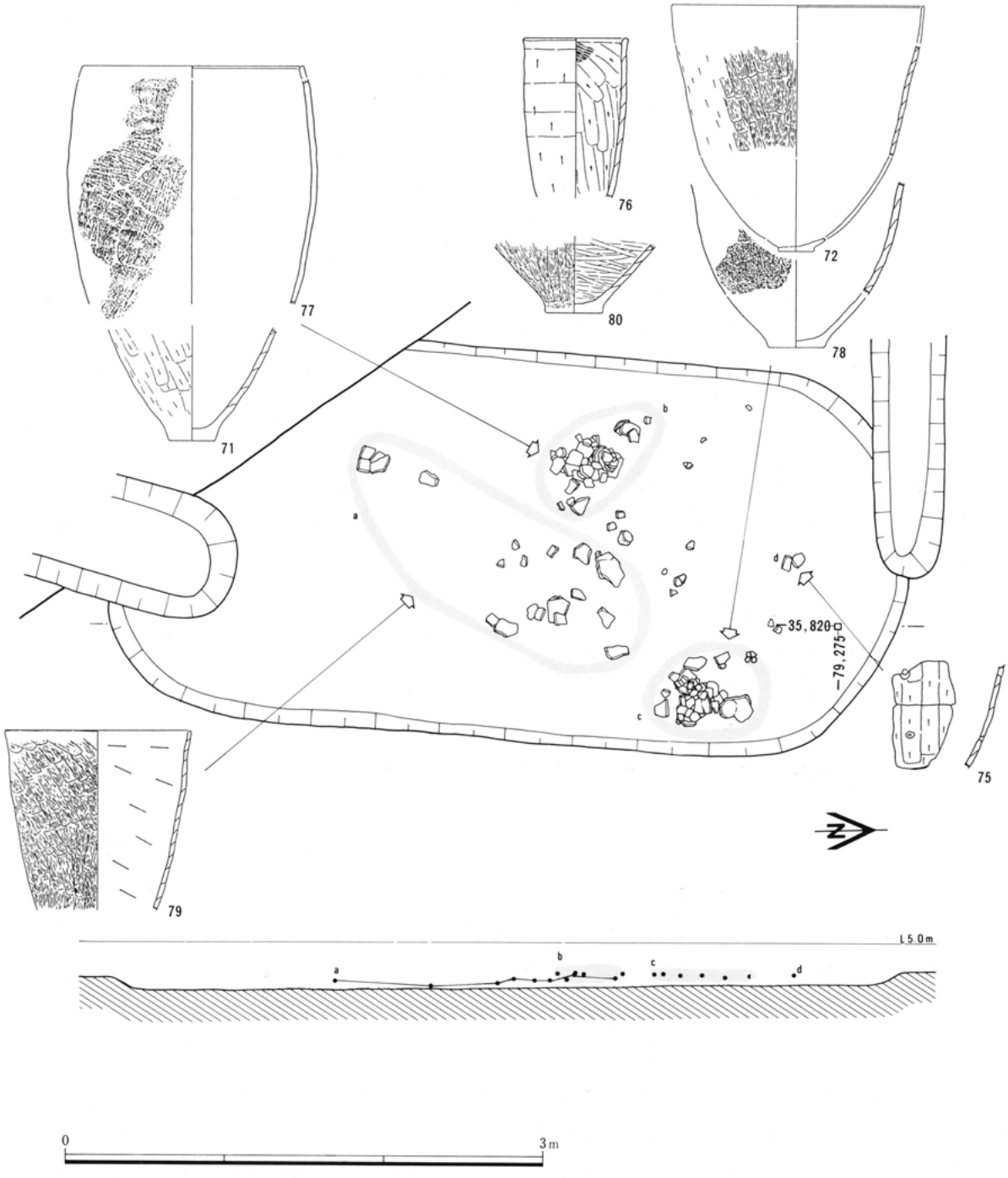
土坑・ＳＤ01出土他　（図版７～９―69～80）

ＳＫ02　粗製土器（器形Ⅰ）が２個体出土している。69の遺存状況は悪く、口縁から体部上半部の一部のみ残存する。体部外面には下から上へ、口縁下部には横方向の粗いケズリ調整が施される。内面はナデ調整。70は、ＳＤ01下層より出土した資料との接合が認められた。やや大形の粗製土器であり、体部は下から上へケズリが施され、上半部はケズリの後ナデ調整が行われている。内面はナデ調整。

ＳＫ03　土器の出土状況は第20図に示したように、大雑把なまとまりが認められるものの、据え置かれたというよりはまとめて廃棄された状況を呈していた。出土資料は、すべて粗製土器（器形Ⅰ）であり、体部外面の調整によりケズリ調整が認められるもの（71･72･73･75･76･78･79･80）と条痕が施されたもの（74・77）とに分類できる。72・77は大形品であり、体部下方から上方へのケズリが施されており、線条痕が認められる。内面はナデ調整。76は筒状に細長く延びる器形であり、口縁部は僅かに外反する。内外面ともにナデにより調整されるが、口縁内面の一部には条痕が残る。71・80は底部片であり、80は線条痕が明瞭に認められる。73・75は細片であり、全形は不明であるが75には補修孔が２ヶ所残る。74・77の外面には条痕が施されるが、いずれも器面の砂粒の動きが顕著であり、ケズリ状である。

ＳＤ01下層　溝の最下層より、多量の粗製土器が廃棄された状態で出土した。器形Ⅰ・Ⅱ・Ⅲがある。器形Ⅰ（85～93・95～111）　外面の調整により、ケズリ調整が認められるもの（85～88・95～98）と条痕が施されているもの（89～93・99～111）とに分類できる。87は体部下半部

を欠くが、口径38.0cmを測る大形品であり、内外面共にケズリ調整が施されている。86・88は底部片であり、外面はケズリ、内面はナデにより仕上げられている。85・95はケズリの後ナデ調整が行われている。89・90・92は口縁から緩やかに内湾しながら下方に移行する粗製土器であり、体部外面は貝殻条痕、内面はナデ調整が行われる。口縁端部はいずれも面取りされ平坦であるが、89は条痕原体による押し引きが施されている。91は、口縁から内湾しながら外方へ強く張り出す独特な形態を有する。外面は貝殻条痕、内面はナデ調



第25図　SK03出土状態図（1：40）

整。口縁端部は丸く収めている。100・101は細片であり全形は不明であるが、口縁下部をナデ上げ、条痕を打ち消している。109・110の口縁端部は面取りした後押し引きが施されている。111は、ＳＫ01出土の112と同様に中部高地系、氷Ｉ式に類似するものであり、体部外面にはハケメ状の細い条痕を下から上へ施し、口縁直下に幅広の沈線を１条巡らす。内面はミガキ調整。

器形Ⅱ（83・84）84は、体部外面をケズリによって調整し、口縁下部に２条の沈線を施し、赤彩の痕跡を残す。内面は横方向のナデ調整。83は、内外面ナデ調整の小形品。

器形Ⅲ（94）　口頸部および体部下半を欠損するが、口径38.0cmを測る大形品である。外面の調整は横方向の貝殻条痕によって仕上げられ、口縁端部は面取りの後、指頭による押し引きを連続して加えている。内面はナデ調整。

その他　63～68は、突帯紋土器であり、63～66は口縁下部に突帯を施すものであり、二枚貝および指頭により押圧を加えている。67・68は、肩部に突帯を施すもので、おそらく伊勢地方等に広く分布する二条突帯をもつものと考えられる。

114は、包含層中より出土した器形Ⅱbであり、口頸部までは、緩やかに外反気味に移行し体部に至る。口縁部は肥厚し、内側が一段低くなった段状の断面形態となる。口縁下部には４条の突帯を巡らす。外面は貝殻条痕、内面はナデ調整。115～127は、ＳＤ03より出土したものであり、すべて器形Ｉである。115・117は内外面ナデ調整によって仕上げられる。116は、外面を下方からのケズリ、内面をナデによって調整され、口縁端部は面取りされ中央がややくぼむ。118・119は底部片であり、118には木葉痕が残る。122～127は、いずれも外面に貝殻条痕を施した口縁部片である。口縁断面の形状は、122は丸く収めるが、123～127は、いずれも面取りされ平坦である。124の口縁端部には条痕原体による押し引きが認められる。128の体部外面に施された条痕は、砂粒の動きが顕著であり、器面を整えるためのケズリ状である。

Ａ$_2$期

環濠（図版15～18－129～184）

ＳＤ01上層　遠賀川系土器

壺（129～140、148～163）　130は口縁部および底部を欠損するが、概ね全形を窺うことができる。頸部および体部上位に文様帯があり、頸部の文様は４条以上のヘラ描き沈線。体部の文様帯は２条単位のヘラ描き沈線を４列配し、沈線間に竹管刺突を施した独特な文様構成となっている。131も130と同様に口縁部および底部を欠損するが、体部最大径が38cmを超える大形の広口壺である。文様構成は多条化したヘラ描き沈線文のみからなり、頸部には４条以上、体部には15条施す。体部中位に穿孔を穿つ。129・132～136は頸部が長く、口縁が大きく外方に広がるタイプの広口壺であり、129・134～136にはヘラ描き沈線が

施される。139および140は口縁内面に凹線状のミガキ沈線を施すものであり、口縁端部上位に刻みが認められる。いずれも暗赤褐色の色調を示す。148～163は細片であり全形を窺うことはできない。148～154の文様は多条のヘラ描き沈線を施すものであり、148・149は幅広の削り出し突帯上に描く。155～163は貼り付け突帯を有するものであり、159は突帯上に押圧を加えたもの、163は頸部に多条の突帯を貼り付けヘラ刻みを加えたものであり、さらに縦位にも突帯を配置し区画している。

甕（141～147、164～165）　143は体部中位を欠損するが、概ね全形を知ることができる。口縁部は、逆L字状に強く外反し、体部は上半で若干の張りをもち以下緩やかに内傾しながら底部に続く。口縁部は肥厚気味で、口縁端部上位にはハケ状工具を利用した斜位の刻みが連続して施文される。体部上位には半截竹管による沈線が4条施される。体部の調整は粗い斜位のハケメからなり、口縁内面および体部下半にはヘラミガキが認められる。144は、体部下半を欠損するが、口径34.8cmを測る大形の甕形土器である。口縁部は肥厚気味で、強く外反し、口縁端部上位に刻みが連続施文される。体部上位には半截竹管による沈線が4条施される。体部器面は粗いハケメにより調整され、口縁内面には横位のヘラミガキが施される。141～142、145～147は口縁部を肥厚させ、端部には刻みを施す。これらは、いずれも暗赤褐色の色調を示す。

条痕紋系土器

壷（166～175）　166・167は、大きく外方に張り出す厚い口縁部をもち、口縁直下に太い押圧突帯を貼り付けたものであり、口縁端部には、条痕原体を利用した押し引きが施される。168～175は体部片である。櫛描きにより連続して施文される波文はバラエティーに富み、波長が長いもの（170）、短いもの（173）、コンパス状のもの（174）等様々である。

甕（176～178）　176～178は口縁部片であり、176の口縁端部には押し引きが、内面には櫛状工具による刺突が施される。178の口縁端部には、貝殻による刺突および直線文が施される。

内傾口縁土器（180～181）　180・181は内傾口縁土器の口縁部片であり、外面はケズリ調整。

その他の系統の土器（182～184）

182 は波状口縁土器の口縁部片。183・184は沈線文により区画された文様構成をもつ精製土器の体部片である。

竪穴住居（図版19・20―185～224）

ＳＢ10　192～194は遠賀川系の壷形土器であり、192は口縁部片、193～194は体部中位に1条の張り付け突帯を施す。198は、条痕紋系の壷形土器であり体部上半部以上をを欠損する。外面の調整は横位の貝殻条痕からなり、底部はやや上げ底である。

ＳＢ11　185は、口縁部の一部を除きほぼ完形に復元できた遠賀川系の壷形土器である。頸部および体部の文様は痕跡程度であるが、幅広の削り出し突帯上にヘラ描き沈線を4～5条施

したものであり、口縁部には穿孔が残る。内外面の調整はヘラミガキよりなるが、外面では文様帯部分および底部にハケメが残る。186・187は体部片であり、いずれも貼り付け突帯＋沈線からなり、186の突帯は押圧突帯である。189は、口縁部を肥厚させた甕である。

ＳＢ13　ＳＢ13遠賀川系土器には、209～216がある。209は口縁部片、210は底部片であり、いずれもヘラミガキ調整。211・212は貼り付け突帯を施したものであり、211は渦巻状に配されると考えられる。213・214の文様はヘラ描き沈線よりなる。215・216は半截竹管による沈線を体部に施した甕である。条痕紋系土器としては、217・218がある。217は壷形土器の体部片であり波文が施される。

ＳＢ19　201は、山中遺跡では数少ないいわゆる「正統遠賀川」タイプの甕であり、口縁部は緩やかに外反し、体部にはヘラ描き沈線が４条施される。202・203は条痕文系土器であり、202は体部に波文を施した壷形土器である。

その他　ＳＢ12出土の204・205は同一個体の可能性があり、体部の文様は幅広の沈線および刻みを施す貼り付け突帯からなる。ＳＢ17の223も同様の文様構成である。ＳＢ16出土の221は条痕紋系の壷の口縁部片であり、口縁直下に幅広の押圧突帯を施す。222は条痕紋系の甕の口縁部片であり、口縁端部に条痕原体を利用した押し引きが認められる。

方形周溝墓（図版21～23－225～272）

ＳＺ03　231～237は遠賀川系の壷であり、231は口縁内面に、233は体部に幅広のミガキ沈線を施したものであり、234・235は押圧突帯を巡らす。236は体部にヘラ描きによる沈線を羽状に施したものであり、237は幅広で低い削り出し突帯状にヘラによる沈線を４条以上描く。238・239は口縁直下に沈線を巡らした鉢か。240～242は遠賀川系の甕である。240 は体部下半を欠損するが、口縁部が肥厚し、大きく逆Ｌ字状に屈曲するいわゆる「亜流遠賀川」タイプであり、体部の調整は粗いハケメからなり、上位に半截竹管による沈線を４条施す。また、口縁内面にはミガキ調整を加えている。241・242は、240と同様の口縁部および体部片である。243～246は条痕紋系土器であり、243は口縁直下に押圧の突帯を巡らした壷、244は口縁付近に横位の、体部に縦羽状の貝殻条痕を施した甕である。

ＳＺ04　249～254は、いわゆる「亜流遠賀川」タイプの土器片であり、249は口縁内面にミガキ状の沈線を施した壷。250～254は口縁を肥厚させ、体部に半截竹管の沈線を巡らした甕の口縁部および体部片である。255～259は条痕紋系土器であり、255・258は壷、256・257は甕である。255は頸部片である。横位の条痕の後、粗い波文を２段巡らし、波文間には斜位の貝殻条痕を施す。256は櫛状工具を用いた縦位の条痕を外面に施し、口縁端部には刺突を加えている。258の口縁端部は条痕原体による押し引きが施される。

ＳＺ06　263・264は遠賀川系壷の体部片であり、263は押圧突帯を施す。265～267は条痕紋系土器。268は変形工字文が施された精製土器の体部片である。

ＳＺ07　269・270・272は遠賀川系土器である。272は、体部の一部を残すのみで、その全形は不明であるが、体部最大径が、約40cmを測る大形の壷である。体部の文様は、沈線＋貼り付

け突帯からなる。沈線は確認できるだけでも13条と極めて多く、下２条に関しては、柾目の板の小口を押圧し沈線状にくぼませた木目沈線からなる。また、貼り付け突帯は５条施され、斜位のヘラ刻みが羽状に施され注目される。271は、口縁部が直立気味に立ち上がり、体部が外方に大きく張り出す外面ケズリ調整の鉢である。

その他　ＳＺ01からは、貼り付け突帯を巡らした235、多条化した沈線を施した226等の遠賀川系土器が、ＳＺ02・05からは条痕紋系土器の破片が出土している。261は体部外面を縦羽状の貝殻条痕、口縁端部を条痕原体を利用した押し引きが施された甕の口縁部片である。

土坑（図版24～32－273～353）

ＳＫ17　ＳＺ03周溝（ＳＤ20）を切る土坑であり、285の遠賀川系土器最末段階に位置づけられると考えられる広口壷が単体で押し潰れた状態で出土した。口径18.0cm・器高31.4cmを測る。口縁下部から体部中位に施文された文様には独特なものであり特色的である。頸部および体部中位の文様は植物茎状の工具による２条単位の多条横線文で、口縁下部および横線文間には、同様の工具を用いて鋸歯状の文様を配し、複雑なモチーフをつくりだしている。ただし、口縁下部の鋸歯状の文様体は全周せず、横線文間のそれは４～８条の縦位の沈線で区画し、一部に斜位の短い沈線を連続的に施文している。

ＳＫ22　ＳＤ01を切って掘削された土坑であり、弥生前期最末段階に位置づけられる土器が一括して出土した（第26図）。286～289は、遠賀川系の壷であり、286を除きいずれも頸部および体部の文様体は幅広で低い削り出し突帯上に多数のヘラ描き沈線が描かれる。286の頸部の文様はヘラによる沈線文である。290 は、体部に半截竹管の沈線を施した甕であり、暗赤褐色の色調を示す。292は、口径32.4cmを測る大形の鉢であり、口縁端部の上、下位に指頭による押圧を加えている。体部の調整は横・縦位のハケよりなり、口縁下部には、横位の条痕が施される。293～298は、条痕紋系土器である。293は、「朝日式」の甕の祖形と考えられる資料である。底部は欠損するが、口縁部は緩やかに外反し、体部はハケを施した後、斜位の条痕で器面を整える。294～296は口縁部片、298は縦羽状の条痕が施された体部片である。297は壷の体部にハケを施した「水神平式」土器である。299は沈線文系精製土器の体部片である。

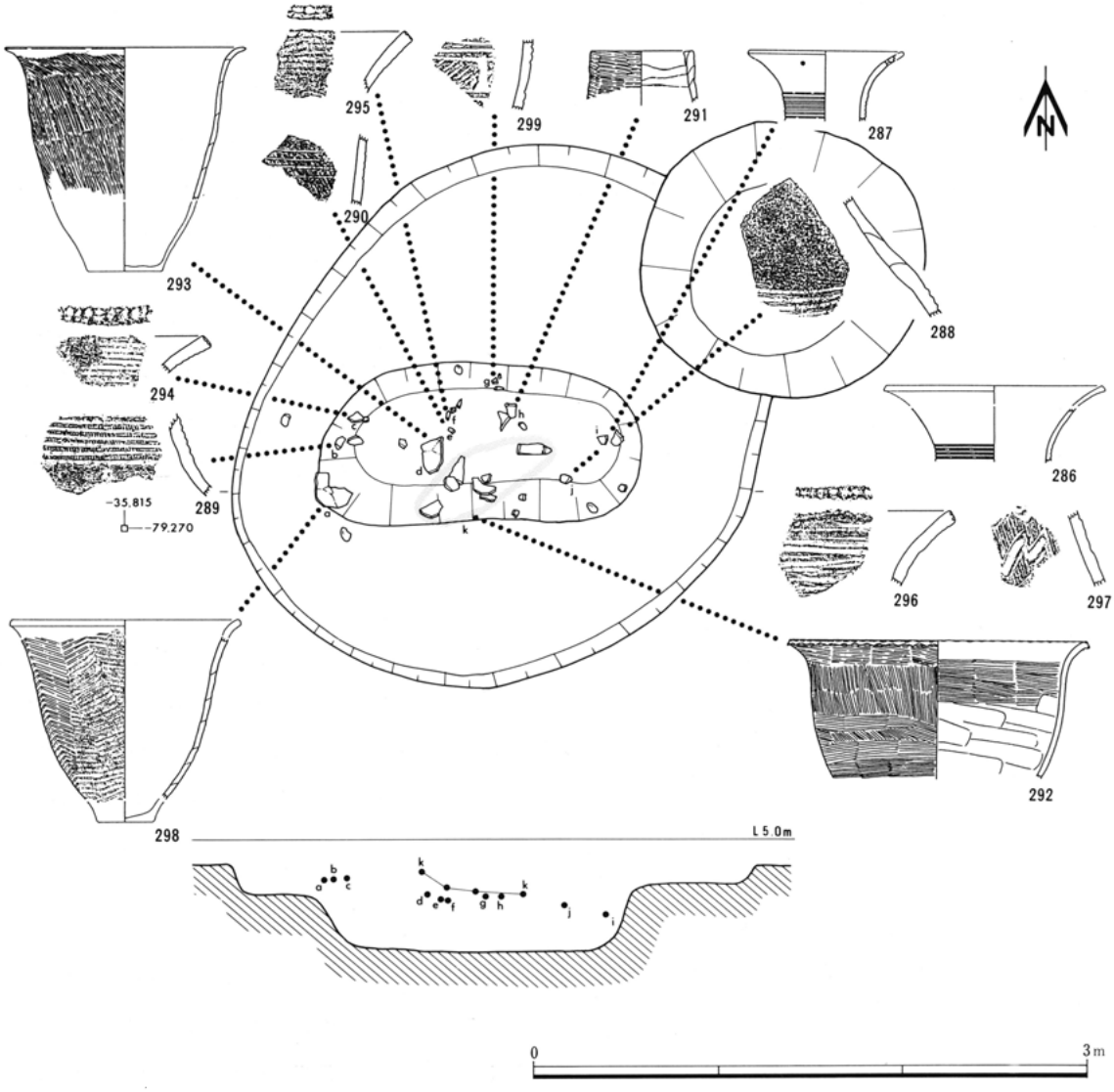
ＳＫ23　ＳＤ01に近接して掘削された土坑であり、沈線文を中心とする精製土器が１個体押し潰れた状態で出土した。他に図示はしなかったが、横位の貝殻条痕が施された土器片もみられた。300は、体部の一部を欠損するがほぼ完形に復元できる壷形土器である。口縁部は緩やかに外反し、肩部が大きく張った器形であり、体部はやや内湾気味に底部に至る形状を呈する。口縁部上には５ヶ所の突起をもち、１ヶ所は吸盤状の、残り４ヶ所は２個一対の山形の突起からなる。文様帯は口縁下部、口縁内面、体部上位にあり、独特な文様構成をみせる。口縁下部の文様は横線と５条単位の縦位の沈線を突起に対応させることによって全体を５分割する形態をとり、その内部には棒状の工具により３列２段の刺突を加え、刺突列中位の上下部には、えぐりを入れる。口縁内面に、沈線文を３条施し、突起部は三角

状にえぐりを入れ収束させる。体部外面の文様は、横線文帯を３列、めがね状の区画に斜位の沈線を施した文様帯を４分割おき、２列横線文帯と交互に配している。横線文帯は、上段および中段にえぐりを入れ込む。しかし、上段は結束させるのに対し、中段は結束させない。

ＳＫ29　ＳＤ01を切って掘削された遺構であり、遠賀川系、条痕紋系ともにまとまった資料を出土した。

遠賀川系土器（315～325）　315は、口縁内面にミガキ沈線状の凹線を施した壷の口縁部片であり、口縁端部の１条の沈線を介し刻みを上下に施している。316・317・320は頸部および体部に沈線文、319は削り出し突帯をもつもの。318・322は貼り付け突帯をもつものであり、322は渦巻状に配される。324・325は甕であり、325は体部にヘラ描き沈線を施すものである。323は、小形の鉢であり、外面はハケ、内面はナデによって調整される。

条痕紋系土器（326～333）　326・327・329・330～332は壷である。326・327は口縁下に幅



第26図　SK22遺物出土状況（１：40）

広の突帯を貼り付けた口縁部片、330～332は波文を施した体部片、329は外面に斜位の条痕を施した底部片である。328・333は甕の口縁部片であり、端部には条痕原体による押し引きが施されている。

その他の系統の土器（334～341）　334は、ＳＫ23出土の精製壷の小形版とでも言うべき資料であり、底部は欠損するが、概ね全形を知ることができる。口縁部の一部を欠損するが、335のあり方等から判断すると、横位の沈線を配した後、４ヶ所に三角状のえぐりを入れ込んだ緩やかな波状口縁になると考えられる。体部の文様は、横位の沈線文帯を３段およびめがね状の区画に斜位の沈線を施した文様帯の組合せからなり、沈線文帯の上段には、沈線が全周せず結束する部分と、えぐりが入る部分が確認できる。341は、北陸地方の柴山出村式とよばれる一群の資料中に類似する資料が認められるものである。頸部の文様は幅広の沈線と刻みを施した突帯からなり、体部は、単位は不鮮明であるが、縦位の沈線を施した後、大小の綾杉状の施文によって区画している。338から340は渦文の入る体部片である。

ＳＫ31　居住域に設置された石器製作に関連する土坑であり、ガラス質石英安山岩製の剝片等に混じって多くの土器が出土した。345～348は遠賀川系のいわゆる「亜流」タイプの土器片であり、暗赤褐色の色調を呈する。352・353は遠賀川系の壷・甕の底部である。350・351は条痕文系土器の壷であり、350は口縁部片、351は体部片であり横位の貝殻条痕および波長の長い波文を施している。

その他　ＳＫ15からは、遠賀川系・条痕文系土器とともに外面ヘラケズリの甕281が、ＳＫ24およびＳＫ27からは遠賀川系土器に混じって浮線文を施した精製土器304・312がみられた。また、ガラス質石英安山岩製の剝片等を多量に出土し石器製作に関わると考えられるＳＫ26からは口縁部が肥厚する遠賀川系の甕307とともに、体部が球形状となる条痕文系土器308が出土している。

包含層出土（図版33～34－356～399）

356～365は弥生中期の細頸壷を出土したＳＤ03からの出土であり、362は本遺跡では数少ない外面ヘラケズリの甕。365は、精製土器の口縁部片であり、吸盤状の突起を有する。366～399は包含層中からの出土土器であり、384は口縁端部に条線を施す条痕文系の壷、398は浮線文とともに縄文を施した精製土器、399は北陸地方との関連が考えられる体部に綾杉状の文様をもつ資料である。

弥生中期（図版32－354～355）

354は、ＳＫ36より出土した口縁部が緩やかに外反する甕であり、底部はやや上げ底である。口縁端部下部にハケ原体の刻みが施される。355はＳＤ03より出土した細頸壷の体部片であり、櫛描き横線文帯が６列確認される。いずれも貝田町式期末～凹線文出現期に比定できる。

（服部信博）

（2）　石器

石器の記載と分類

ここで報告する石器は、その帰属時期にやや問題がある。すなわち、今次調査区の遺構・遺物は突帯紋系土器期終末（下り松段階）と遠賀川系土器期後半という二つの時期に分かれており、したがっては当然として、石器製作（ほとんど石鏃に関係する）関連遺構および住居跡内出土の大形石器以外の遺構外出土遺物については、時期の点で若干の含みを有する。

各石器およびガラス質石英安山岩製（下呂石：以下、下呂石とよぶ）の原石・石核・剥片等の出土地点等は第27図～第30図に示した。

＜磨製石器＞　図版38

ａ．石庖丁

１は刃部破片で、ほぼ片刃である。刃部の研磨は刃縁に平行に施されている。研磨は粗く、線条痕が顕著に認められる。刃縁から３㎜程度は線条痕は認められず、代わりに光沢が認められる。

刃部以外の研磨は非常に雑である。

ｂ．伐採斧

２は刃部破片である。これだけでは突帯紋系か遠賀川系か判断できない。

３は突帯紋系斧の基部破片である。全面に敲打痕を残している。この実測図の一点鎖線以下の部分には摩耗による光沢が観察できる。おそらく装着痕であろう。

ｃ．加工斧

４は片刃石斧であるが刃部は欠損している。

５は製作時の剥離痕を顕著に残しており、前主面は刃部側３分の１から傾斜している。そのため縦断面ではわずかな片刃となっている。後主面は刃部付近で弱凸をなす。

６～９はえぐり入り柱状片刃で、９は未成品である。

６は基部およびえぐり部分の破片である。全体に研磨時の線条痕を残しており、えぐり部分の条痕は顕著に観察できる。えぐり部分の後主面左側縁には敲打痕が認められる。

９は敲打痕のみで研磨痕は観察できない。後主面刃部側と基部側に剥離があり、右側面は欠損している。整形中に破損し、再調整されることなく廃棄されたものであろう。

ところで石器製作に関係すると推定されるＳＢ17からは角柱状をなす頁岩の破片が１点出土している。ほかにＳＫ36からも頁岩片が出土している。これらには特に敲打等の成形

痕を認めることができるわけではないが、上述した6～8のえぐり入り柱状片刃石斧の素材（頁岩）と同じであることは、この種の石材についても未成品の存在を考慮する必要がある。

＜打製石器＞　図版39～41

a．石錐

摘み部のあるもの（10～14）とないもの（15～20）がある。尖端部の使用痕は15が回転条痕を顕著に残している。19・20にも剝離（側縁）稜線の摩耗が観察される。

こうした使用痕を残す例は摘みのないものに多いようなので、21も摘みのない部類であろう。

これら石錐の穿孔対象については、摘み部を有する例が皮革などの軟質材、使用痕を残す例が石包丁の紐穴穿孔、または土器の補修孔や甕底部の穿孔などの焼成後穿孔を想定することができる。

b．石匙

22は摘みのつくりがやや不明瞭だけれども「石匙」としてよいだろう。刃部はなく身（表裏）の主要剝離稜線やリングに摩耗痕が認められる。

c．石鎌状石器

23は左図の右上部と左上部が欠損している。左下部と上部中央にはえぐり込みが認められる。自然面と剝離面によってつくられた刃部は摩耗のために鈍くなっている。

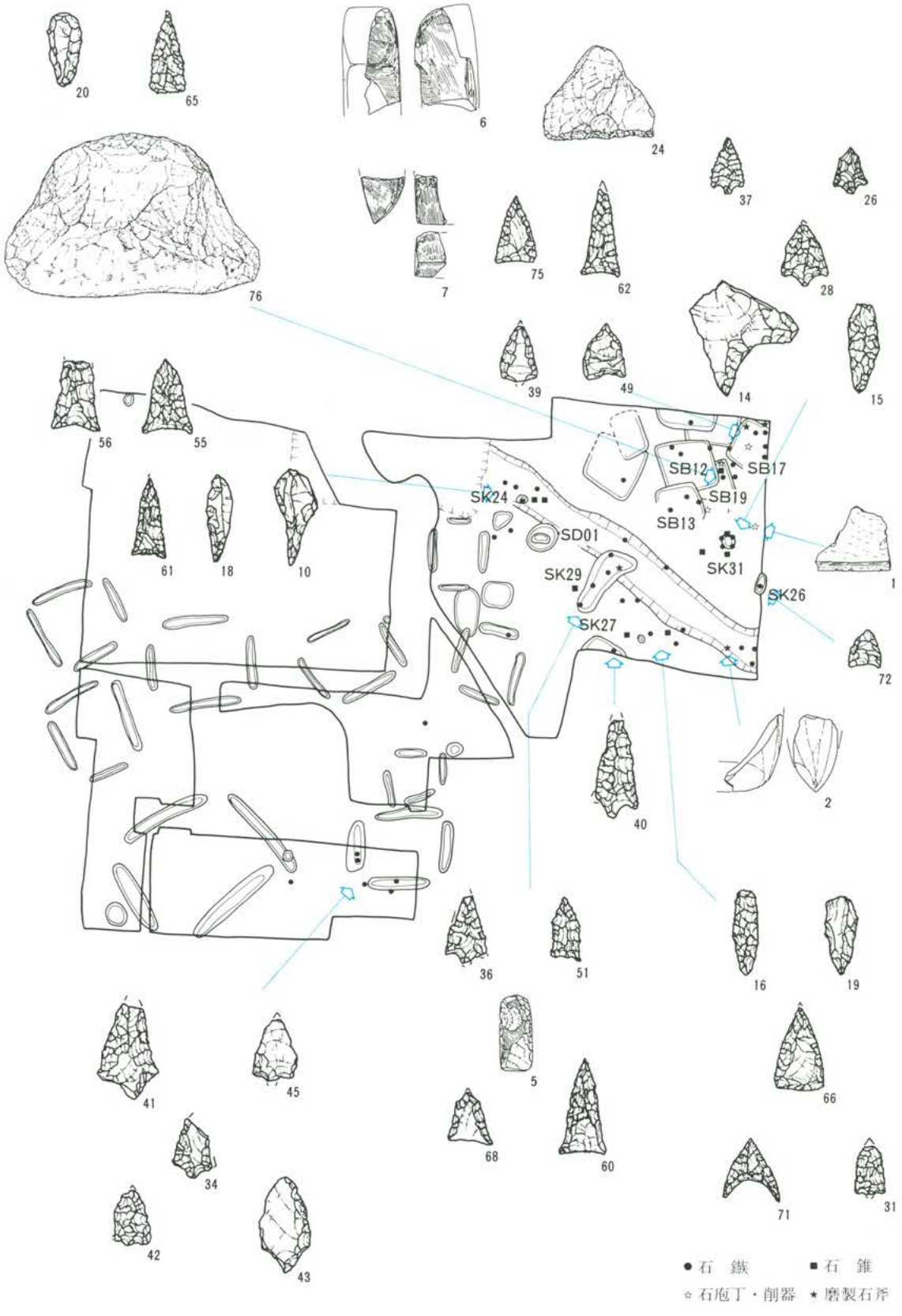
d．掻器

24・25はどちらもサヌカイト製である。24は背側に自然面を残している。23は縦長剝片の一方の側縁に連続した細部調整を加えている。両端の対角線上に相当する位置には「えぐり」が施されている。

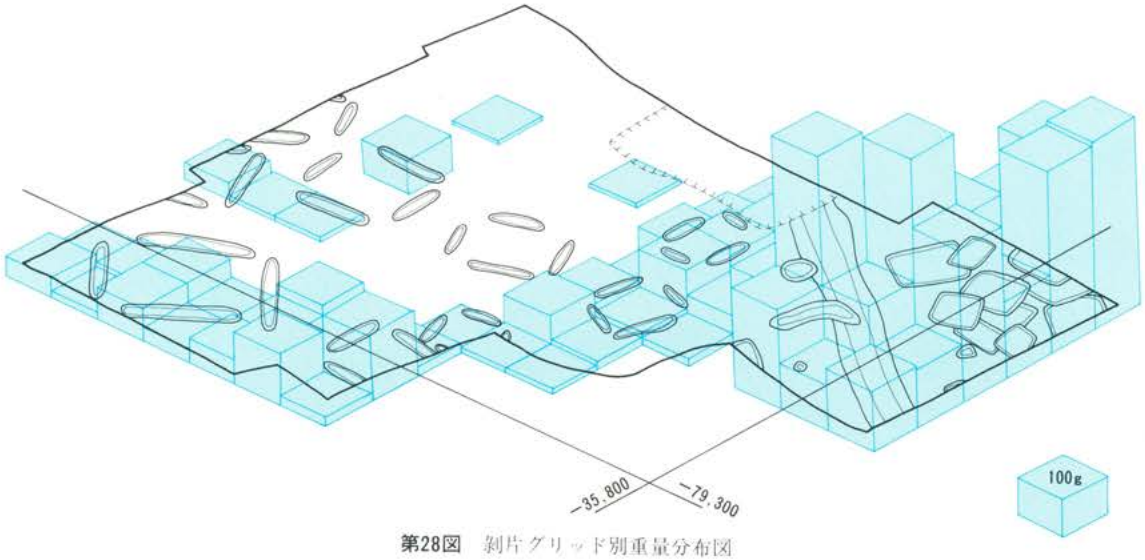
e．石鏃

26から66までは50・51がチャートである以外すべて下呂石、67以下はサヌカイト製である。

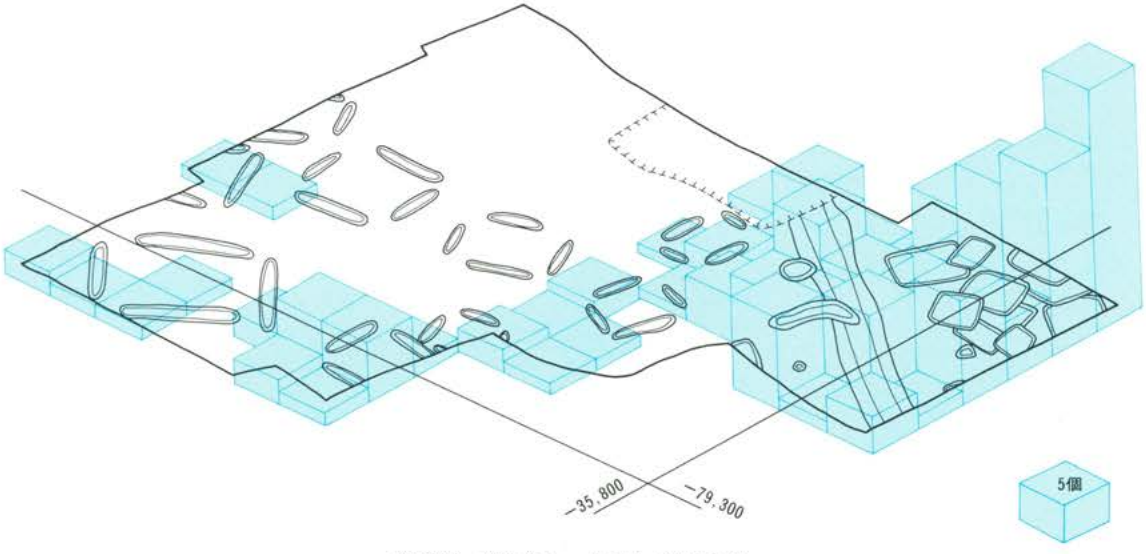
下呂石製のうち40・41・42は一応凸基有茎の形状をなしてはいるが、きわめて粗雑である。46も肉厚で同様粗雑な感じがする。43・44・45はそれらよりさらに粗雑で調整剝離さえ十分ではない。しかし、それでもまだ43・45においては重量・形状が石鏃製品に近似するのに対し、40・41・44は長さ・重量がそれを大きく超えており、石鏃の未成品をどのように理解するかに関わって問題がある。



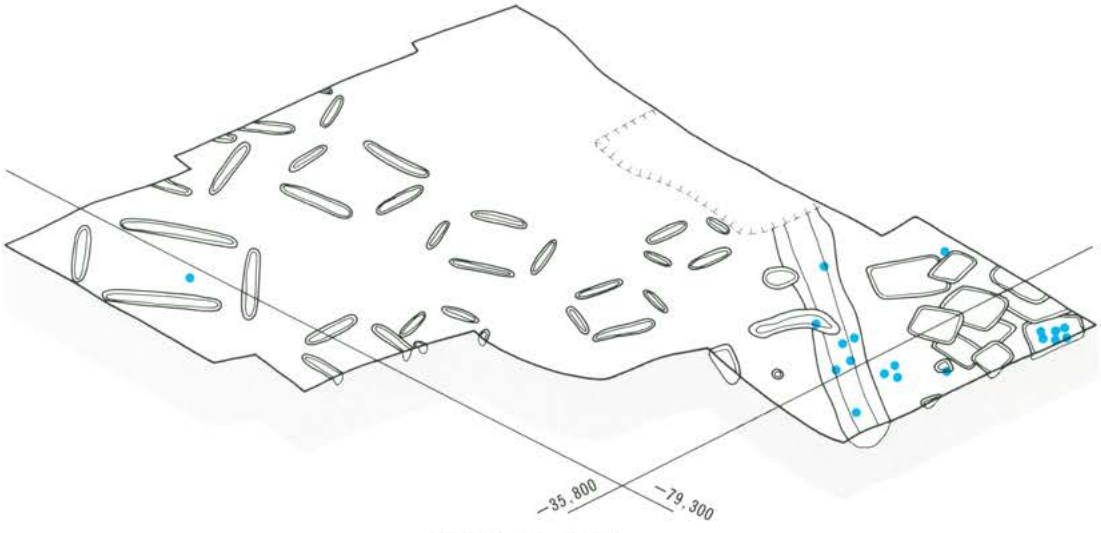
第27図　主要石器出土地点



第28図　剥片グリッド別重量分布図



第29図　石核グリッド別出土数分布図



第30図　原石出土地点

形態的には有茎と無茎がほぼ半々である。サヌカイト製に有茎は出土していない。71は基部のくりこみが大きく特殊である。

ｆ．横刃形石器（図版41）

76は大形品である。円礫から打ち剝がした楕円形剝片の打点側を背としてその両側にさらに敲打を加えて内湾させ略凸形に成形している。自然面と剝離面とによってつくられる刃部は中央部がやや内湾している。これは使用による刃部の後退であり、本来は突出していたと考えられる。

一点鎖線表示の間は表裏の剝離稜線に摩耗による光沢が観察できる。それが装着痕であるとするならば、刃部幅はかなり狭いものとなる。

77は76と同様に円礫から打ち剝した剝片を用いている。

ｇ．「打製石斧」（図版41）

土掘具である。

78・79・81は円礫から打ち剝した剝片を成形したもので、片面に自然面を残している。

80は石材が他と異なり、節理面で剝されており自然面は残っていない。刃部側の摩耗痕とは別に、基部側稜線の一部は研磨によって面が作られている。

＜その他＞

ａ．図示はしなかったが、棒状を呈する砂石の破片（石棒の可能性もある）やタタキ石が出土している。

ｂ．剝片・石核・原石（図版42）

山中遺跡ではＳＢ17、ＳＫ26・27・31それぞれから下呂石の剝片・石核・原石が出土し、石器製作に関係する遺構と推定されている。そのほかこれら遺構の周辺からも同種の資料が多く出土している。ここでは、ＳＢ17・ＳＫ26を中心にみる。

１）原石・石核

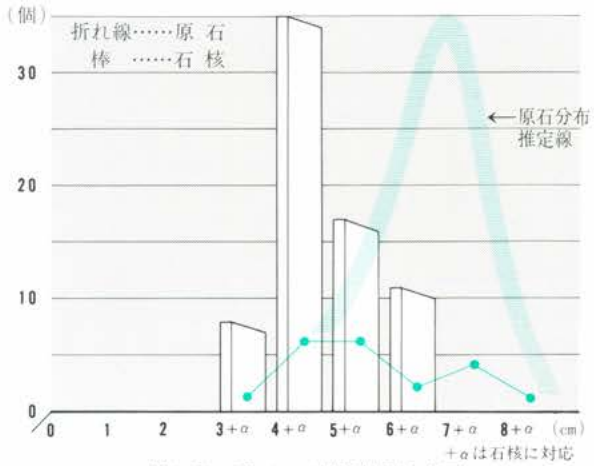
原石は、本来石器素材として遺跡に持ち込まれながら実際には割られることなく、つまり使用されることなく残ったものである。したがってこれから言えることは、使用に適するのはそれ以上の大きさのもの、形態のものであるということである。

原石は重量からみてＳとＬの２グループに明確に分かれる。数量はＳグループの方が多く、剝片製作には不適当であることを示している。大きさ・形態をみるとＳグループが長さ４cm以下で長幅比が小さく、球状を呈するという特徴が認められる。それに対しＬグループは長さ４cm以上であり、長幅比は、当然Ｓグループに比べて大きくなる。

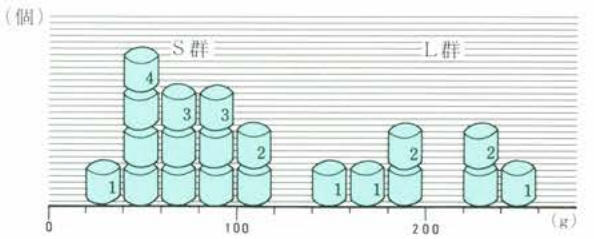
原石を考える上で深く関係する石核についてみると、法量差の度数分布は４＋αcmが

ピークをなし、それ以上の大きさのものは減少傾向にある。石核の大きさを厳密に復元することが困難である現状ではもともと大きな原石が搬入されていたのかいなかったのか判断することが難しいけれども、当初は大きい原石であっても残核として廃棄された段階では大きさが縮小していたことは十分考えられることなので、剥片製作上の限界である4cm周辺に残核量のピークがあることを重視して大きい原石の使用頻度が高かったことを指摘しておきたい。

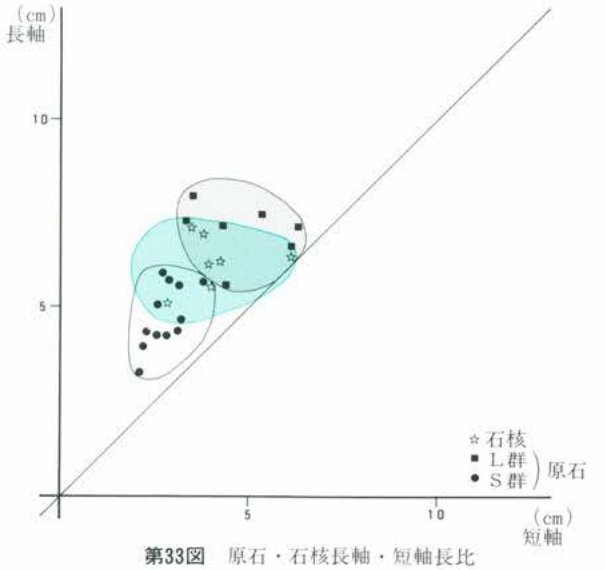
石核は、その大きさから多くの剥片がとれるものは限られている。接合できた例94では、加えられた打撃は2回で、特にこの場合は割られただけで剥片は使用されることがなかった。他の例95は自然面と剥離面のつくる縁を打点として石理に合わせた剥離が行われている。接合した剥片は中央に稜が走る厚いもので、剥離面の調整のために剥されたのであろう。しかし、母岩の剥離面はうまく整った面となることはなく、そのため放棄されたものであろう。



第31図　原石・石核長軸長分布図



第32図　原石重量分布図



第33図　原石・石核長軸・短軸長比

剥離方法は石核の大きさに規制されて、82・83のように大形で球形に近い原石では大きく打割したあと剥離面と自然面の縁を打点として求心方向に連続した剥離の加えられるものがある。それに対して、タマゴ形を呈するものは長軸方向への打割と剥離が中心となる85ために柱状の石核となる。

2）剥片

剥片も使用されなかったものである。したがって、形状の整った剥片はほとんどない。自然面と剥離面からなるもの、剥離面が2面以上で自然面を伴い横断面が三角形を呈するもの、打点側に自然面を残す剥片（縦長剥片はほとんどない）などがある。接合できた剥片には86のように「折断」されたものがあった。

剥片の平行する2辺から打撃が加えられ、断面凸レンズ状をなすいわゆるクサビ形石器はできるだけ図示した。87は剥片ではなく石核である。　（石黒立人）

（３）　Ｂ期の遺物

墳丘墓　ＳＺ１０

図版35-400～418。400～404は加飾広口壺で、401は口縁端部と内部にベンガラの塗布が認められる。 400は口縁内側が剝離し図化できないが、羽状の刺突文が確認できる。405～408 は甕で、受口系の405・406とく字台付甕の407・408がある。409・410は高杯の杯部で、410は波状文が施される。414～418は受口甕。411～413は主体部に伴なう土坑ＳＫ４７より出土したもので、すべて小型品。411・412は鉢、413は直口壺。これらの資料は山中式中期に主体を置くものである。

ＳＺ１１

図版35-419～422。419・420は小型土器で、419では外面ミガキ調整は見られず、口縁ヨコナデ・ナデ調整を施す。口縁端部にベンガラが認められる。420は外面ミガキ調整。421・422は高杯脚部で、422は無文帯を交えた横線文を施す。419の小型壺はいわゆる廻間Ⅲ式後半期に登場する「小型丸底土器」とは異なり、山中式５段階から廻間Ⅰ式期にかけて見られる、小型土器の範疇に属すものである。

ＳＺ１３

図版36-423～437・図版37-439～451。大きく２分でき、主体部を中心に出土したものと、溝内から出土した資料がある。前者は山中式中期に後者は廻間Ⅰ式後半期に所属する。まず山中式土器のものとしては439・440の広口壺があり、440はベンガラの塗布が観察できる。445～447は高杯杯部で波状文が施される。廻間Ⅰ式期に所属するものとしては、まず図版36-423・424・425・427・431・432・433・436の資料が見られ、これらは北溝よりまとまって出土している。ただし424・425はやや下位にて検出された。428・430・435は東溝内より出土し、426は南溝内土坑上位にて発見された。423・430はＳ字甕Ａ類新段階に所属するものであろう。ただし430では外面ハケメは単斜であるが台部内側には明確な折り返しが見られるものである。432・434・435は有段高杯で、脚部の内彎形態が崩れ始める段階の良好な資料である。426・436はパレス壺の口頸縁であるが、それぞれ型式を異にするものである。426は口縁が大きく、内側の文様面が内彎し、外面の拡張口縁には棒状浮文を施した形態で、廻間Ⅰ式後半に登場する型式と考えられるものである。なお体部の文様は全て波線文に統一されている。しかしその施文は小さく細かい刺突文である。

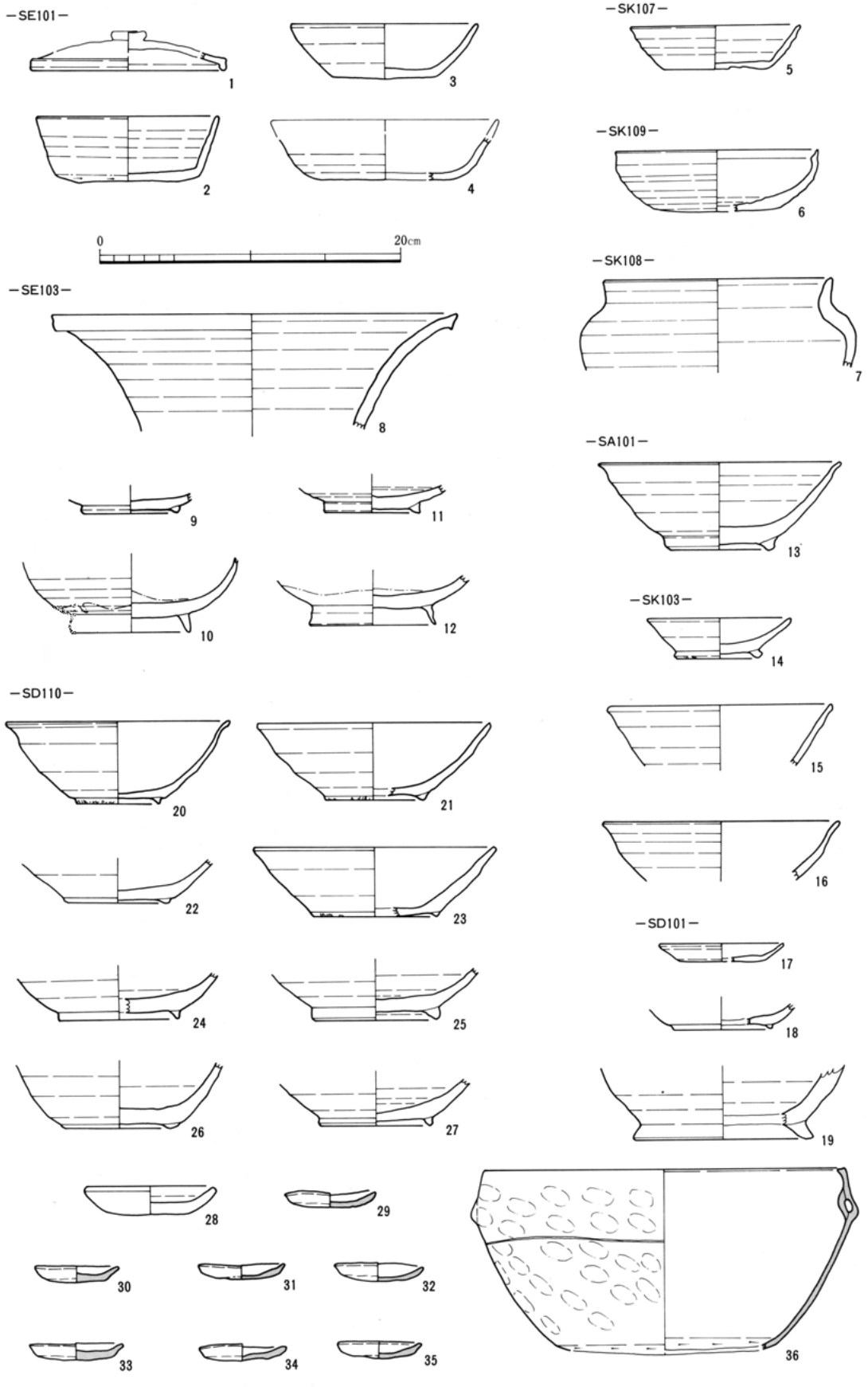
その他　図版37-453・454は、Ｇ区の水田耕作土下斑紋層より出土したものであり、Ｓ字甕Ａ類新段階である453とＢ類中段階の454である。455はＤ区ＳＺ１２南溝より出土した畿内系有段鉢である。内・外面に細かい横方向のミガキが施され、体部は大きく深い形態を留める。こうした特色は岩倉城下層ＳＸ01・ＳＥ01出土資料より古い様相であり、廻間Ⅲ式３段階でも古相を降るものではない。456・457はＡ区南に所在するＳＤ04から出土。456は広口壺で、口頸部は外反しつつ無文の端部にいたる。体部は最大径を体部中央に置く算盤

玉形で、平底となる。調整は、口頸部はヨコナデで、体部上半はハケメ後ヨコナデ、下半はハケメで一部ヨコケズリが見られ、ミガキ調整は認められない。457は直口内彎壺で、体部はやや下膨れ状を呈し、外面調整としてタテ方向のミガキが施される。こうした形態の特色から廻間Ⅰ式期１段階のものと考えておいてよいであろう。

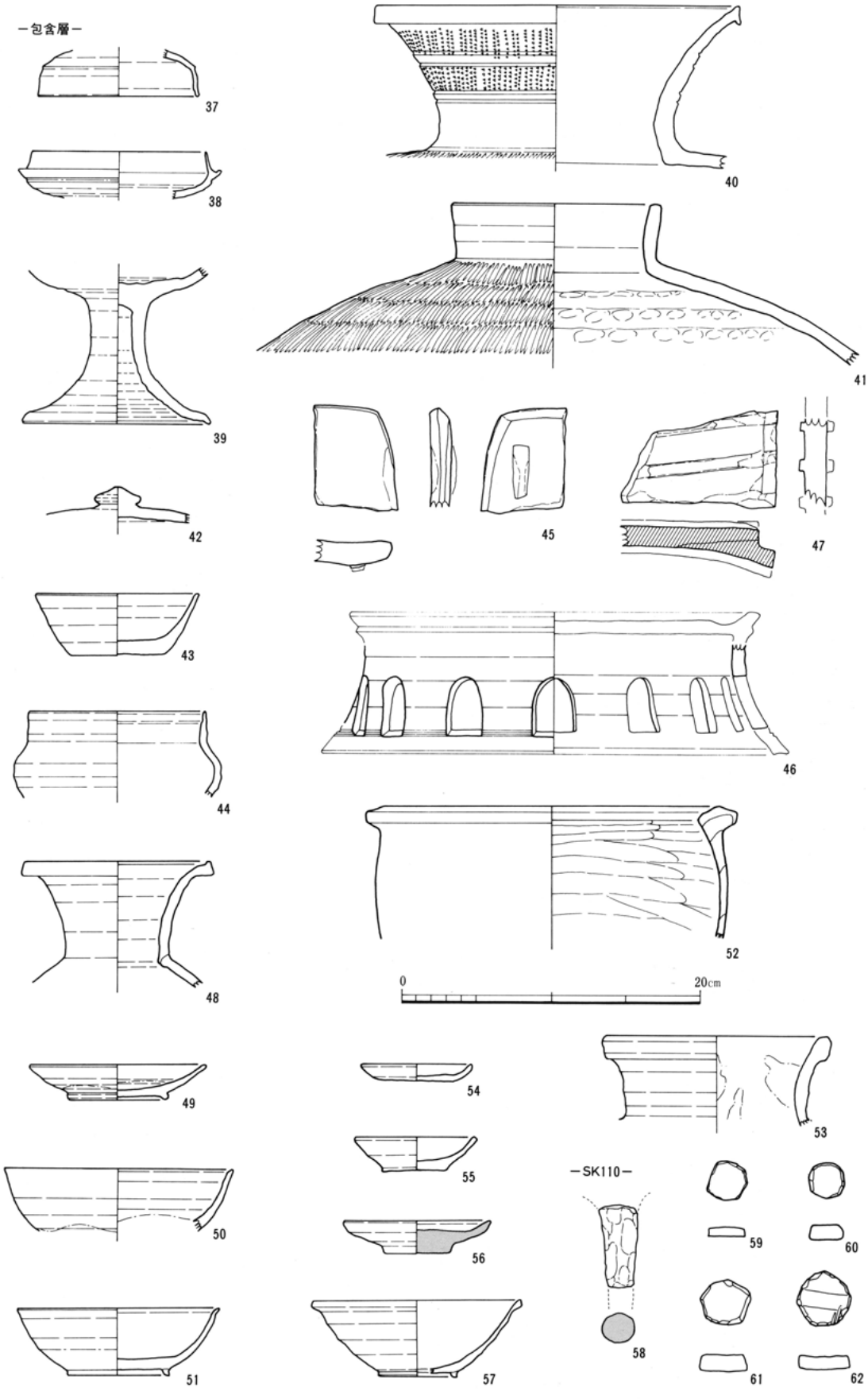
（４）　Ｃ期の遺物

第29図-1～4はＡ区南西のＳＥ101より出土した須恵器で、2・3・4は杯。その形態より８世紀前半に所属する資料であろう。8～12はＤ区中央のＳＥ103より出土した灰釉陶器で折戸５３号窯式に所属し、10世紀後半のもの。20～36はＤ区北東隅で検出したＳＤ110出土品であるが、29～36はその上位よりまとまって出土した資料である。20～27は灰釉系陶器で、12・13世紀を中心にする。14～16はＡ区北のＳＫ11より出土した灰釉系陶器で、12世紀に所属する資料である。17～19はＳＤ101から出土した灰釉系陶器で14世紀に所属する。

包含層資料のうち第30図-45・46は硯で、Ａ区南西に存在する江戸期の井戸に伴なう整地面より出土している。47も同じ地点より見つかった瓦塔。「型」成形のもので瓦葺きと軒の表現が認められる。52は清郷型鍋。56は底部に糸切痕をもつ土器。59～62は施釉陶器による加工円盤で、60のみに部分的な研磨痕跡が認められる。58はＡ区南部の土坑ＳＫ110より出土した製塩土器で、知多式５類に所属する資料である。　（赤塚次郎）



第34図　C期出土遺物１（１：４）



第35図　C期出土遺物２（１：４）

第Ⅲ章　自然科学分析

第１節　土器胎土重鉱物分析

今回、山中遺跡の発掘調査に関連して遠賀川系土器を中心とした土器胎土重鉱物分析を、㈱パリノ・サーヴェイに依頼し実施した。以下、上記依頼報告書に基づきその分析結果を報告する。ただし、考察（永井遺跡試料）に関しては、編者が一部改変した。

1　分析の目的

愛知県下で出土する弥生時代前期の遠賀川系土器では、形態・文様等の特徴から正統と亜流という２つの系統区分がなされており、また、亜流の分布の中心が三重県とりわけ中勢・南勢地方にあると言われてきた。本分析は、これらの土器の材質いわゆる胎土を調べることより、この系統区分の考古学的な意味付けを考える上での資料を提供する。

具体的には、濃尾平野各地から出土した遠賀川系土器の系統と胎土の特徴との対応関係を調べ、さらに分布の中心があるとされる三重県から出土した土器の胎土との関係を調べる。また、胎土の特徴から、胎土の材料となった砂や粘土の採取地の地質学的な背景を考察する。

2　試料

試料は、愛知県一宮市山中遺跡、同市元屋敷遺跡、清洲町朝日遺跡貝殻山貝塚地点、三重県四日市市永井遺跡、津市納所遺跡、明和町金剛坂遺跡、大道遺跡、神前山古墳下層遺跡の各遺跡より出土した弥生時代前期遠賀川式を中心とした土器合計60点（試料番号１～60）である。各試料の出土した遺跡とその地域・系統・器種および表面観察結果などを第３表に示す。

3　分析方法

土器片約10～15ｇを鉄乳鉢を用いて粉砕し、水を加え超音波洗浄装置により分散、250の分析篩により水洗、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4㎜-1/8㎜の粒子をテトラブロモエタン（比重2.96）により重液分離、重鉱物のプレパラー

トを作成、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

4　分析結果

鉱物の同定粒数は、250個を目標としたがこれに満たない試料が22点あった。このうち、さらに100 個に満たない試料が試料番号３・９・16・44の４点あった。一般に砂粒の鉱物組成を捉える場合、250個以上を数えるのが適当であると考えられるが、本分析の場合は、処理可能な試料の量が少ないため、100粒以上のものについても、おおよそ組成を表すものとして扱う。したがって、本分析では同定粒数が100個に満たない上記４点の試料の組成は、グラフにはせず、考察の対象とはしない。ただし、これらの試料は分析量が特に少ないわけではないことから、胎土中の砂分の重鉱物量がもともと少なかったといえる。すなわち、重鉱物の少ないことが胎土の特徴と考えることができる。以下、各遺跡ごとにその特徴を述べる。なお、全試料の胎土の重鉱物組成を第４表、第26図に示す。

（１）　山中遺跡（尾張北西部）

20点の試料のうち試料番号３・９・16の３点は、同定粒数100 個未満であった。他の試料 17 点は、斜方輝石と単斜輝石の両輝石を主体とするいわゆる「両輝石型」（矢作ほか、1990 ）の試料と黒雲母を主体とする試料との２つの大きな群とどちらにも属さない試料とに大きく分かれる。この状況を整理すると次のようになる。

・試料番号２・５・17

両輝石主体の組成に少量の角閃石と不透明鉱物を伴う。

・試料番号７・８・19

両輝石主体の組成に少量の角閃石と黒雲母を伴う。斜方輝石の量比は40％前後である。

・試料番号12・14・20

両輝石主体の組成に少量の角閃石を伴う。斜方輝石の量比は50～60％を示す。

・試料番号11

斜方輝石と角閃石を主体とする。

・試料番号４

「その他」が非常に多く、80％以上を占める。不明粒を除くと両輝石と角閃石が少量含まれる。

・試料番号１・18

黒雲母を主体とし、少量の斜方輝石と角閃石を伴う。

・試料番号６

上記試料と同様の組成であるが、黒雲母は褐色を呈するものが多い。

・試料番号13・15

「その他」が50％以上を占め、少量の角閃石、黒雲母、ジルコン、ザクロ石が含まれる。鉱物組合せは「角閃石型」（矢作ほか、1990）に類似する。

（2）　元屋敷遺跡（尾張北西部）

8点の試料のうち次に示す6点の試料が両輝石型を示し、他の2点はほとんど「その他」からなる組成を示す。

・試料番号22・23・25

両輝石主体の組成であるが、「その他」が50％近くを占める。両輝石以外では少量の角閃石とジルコンおよび不透明鉱物を伴う。

・試料番号26・27

組成は上記の試料とほとんど同じであるが、斜方輝石が40％前後の値を示すことから区別した。

・試料番号28

両輝石主体の組成であるが、少量の黒雲母を伴う。

・試料番号2124

ほとんど「その他」からなる。

（3）　朝日遺跡貝殻山貝塚地点（尾張南西部）

8点の試料の中で類似した組成を示すものはなく、胎土の組成にまとまりのないことが特徴といえる。各試料の特徴は次の通りである。

・試料番号30

斜方輝石を主体とする。斜方輝石以外はほとんど「その他」からなり、単斜輝石をほとんど含まないので両輝石型の組成とはいえない。

・試料番号32

両輝石型の組成に入るが、ジルコンの量比が特徴的である。

・試料番号34

両輝石型の組成と角閃石型の組成の中間的な組成を示す。

・試料番号35

「その他」が非常に多く、70％以上を占めるが、それを除くと両輝石型の組成になる。

・試料番号29

角閃石、ジルコン、ザクロ石の組合せは角閃石型に近いが、角閃石の量比が少ないこととそれに対する斜方輝石の量比がやや多いことから、角閃石型に相当するとはいえない。

・試料番号33

典型的な角閃石型の組成である。

・試料番号31

黒雲母主体の組成を示し、少量の斜方輝石と角閃石を伴う。

・試料番号36

「その他」が70％を占めるが、それを除けば少量のジルコンを伴う黒雲母主体の組成である。

（4）　永井遺跡（北勢）

7点の試料のうち4点は角閃石型の組成を示し、2点が黒雲母主体の組成を示す。

・試料番号37・38・40・43

いわゆる角閃石型の組成である。

・試料番号42

鉱物の組合せは、角閃石型に両輝石が加わった形であるが、不透明鉱物の量比が特徴的である。

・試料番号39・41

黒雲母主体の組成であるが、褐色の黒雲母が緑色のものと同量かやや多く、少量のジルコンを伴うことが特徴である。

（5）　納所遺跡（中勢）

全8点とも黒雲母を主体とし少量の角閃石を伴う組成を示す。ただし、試料番号46は少量の斜方輝石を伴い、角閃石の量比も他の試料に比べて多い。

（6）　大道・金剛坂・神前山古墳下層の各遺跡（南勢）

全8点とも黒雲母を主体とし少量の角閃石とジルコンを伴う組成を示す。

5　考察

第36図に、各試料の組成の横に系統、器種、部位を示したが、この図から正統と亜流の分類と胎土の組成は、対応しないことがわかる。しかし、各遺跡ごとに詳細にみると系統分類と胎土との間は、全く無関係であるとはいえない。

両輝石型　山中遺跡出土試料の胎土の主流は、両輝石型である。両輝石型の胎土を示す土器は、これまでの愛知県下の土器胎土分析の結果より、尾張地域産である可能性が高い。山中遺跡では、このような胎土の土器の中に正統や亜流さらには突帯紋系や条痕紋系精製壷の試料も含まれることから、土器の多くは系統に関係なく尾張地域でつくられたものが供給された可能性がある。しかし、小数派ながらも尾張地域以外のところからの供給のあった可能性は、今回の試料の中に黒雲母主体の試料や角閃石型に類似する試料があることから、十分に考えられることである。しかも、これらの試料の中には正統とされたものはなく、突

帯紋系や条痕紋系や亜流ばかりである。すなわち、正統以外の土器の中には、尾張地域産に他地域産が混在したという状況が考えられる。特に、緑色の黒雲母主体の胎土を示す試料番号1や18は、中勢や南勢の試料の胎土が全て緑色黒雲母主体の土器であることから、この地域から供給された可能性の高い土器として指摘できる。

山中遺跡と同じ地域属する元屋敷遺跡でも、胎土の主流は両輝石型であり、この中に正統と削痕系が混在することから、多くの土器は尾張地域産である可能性が高い。試料番号21と22のような組成の胎土については、現段階では「その他」とした粒そのものが化学的にも鉱物学的にも明らかにされていない状態であるために、考察をすることができない。

尾張南部の朝日遺跡では、胎土の組成にまとまりがなく、したがって土器の系統と胎土との明瞭な対応関係も認められない。しかし、正統とされた4点のうち3点までが両輝石型あるいはそれに近い組成を示し、亜流とされた試料2点が両方とも黒雲母主体の組成を示すことは、この地域おいても正統の多くは尾張地域産であり、亜流には他地域産、特に中勢や南勢地域産のものが多く混在する可能性を示唆する。

角閃石型 北勢地域の永井遺跡では7点の試料のうち5点までが角閃石型あるいはそれに近い組成を示す。角閃石型は、これまでの愛知県下の土器胎土分析の結果より三河地域産の土器の指標になると考えられる組成である。したがって、この遺跡の土器は、三河地域から供給された可能性も考えられようが、北勢地域の胎土分析の状況が判然としない現状では即断することはさけ、今後試料の増加を待って再考してみたい。また、黒雲母主体の組成である試料番号39と41は、同じ黒雲母主体の胎土の多い中勢地域や南勢地域との可能性が考えられるが、緑色と褐色の量比がこれらの地域の試料と異なることから、現段階では可能性が高いとはまだいえない。

黒雲母主体の組成 中勢および南勢地域の土器は、系統に全く関わらず全て黒雲母主体の類似した組成を示す。中勢および南勢地域の地質学的背景の主体は鈴鹿山脈の鈴鹿カコウ岩や紀伊半島北東部に広く分布する領家帯のカコウ岩類および変成岩である。これらの岩石は、どれも黒雲母を比較的多く含むことがわかっている（日本の地質『中部地方Ⅱ』編集委員会、1988）。したがって、これらの遺跡出土の土器の多くは、中勢または南勢地域で製作されて供給された可能性が高い。さらに、黒雲母主体の胎土は、今後の胎土分析において中勢および南勢地域産の土器であることを示す指標になり得ると考えられる。

（服部信博）

《謝辞》

今回の分析にあたっては、三重県埋蔵文化財センターをはじめ、各関係機関より試料の提供をうけた。文末ではあるが謝意を表したい。

《文献》

日本の地質『中部地方Ⅱ』編集委員会 1988 日本の地質5 「日本の地質『中部地方Ⅱ』」310p

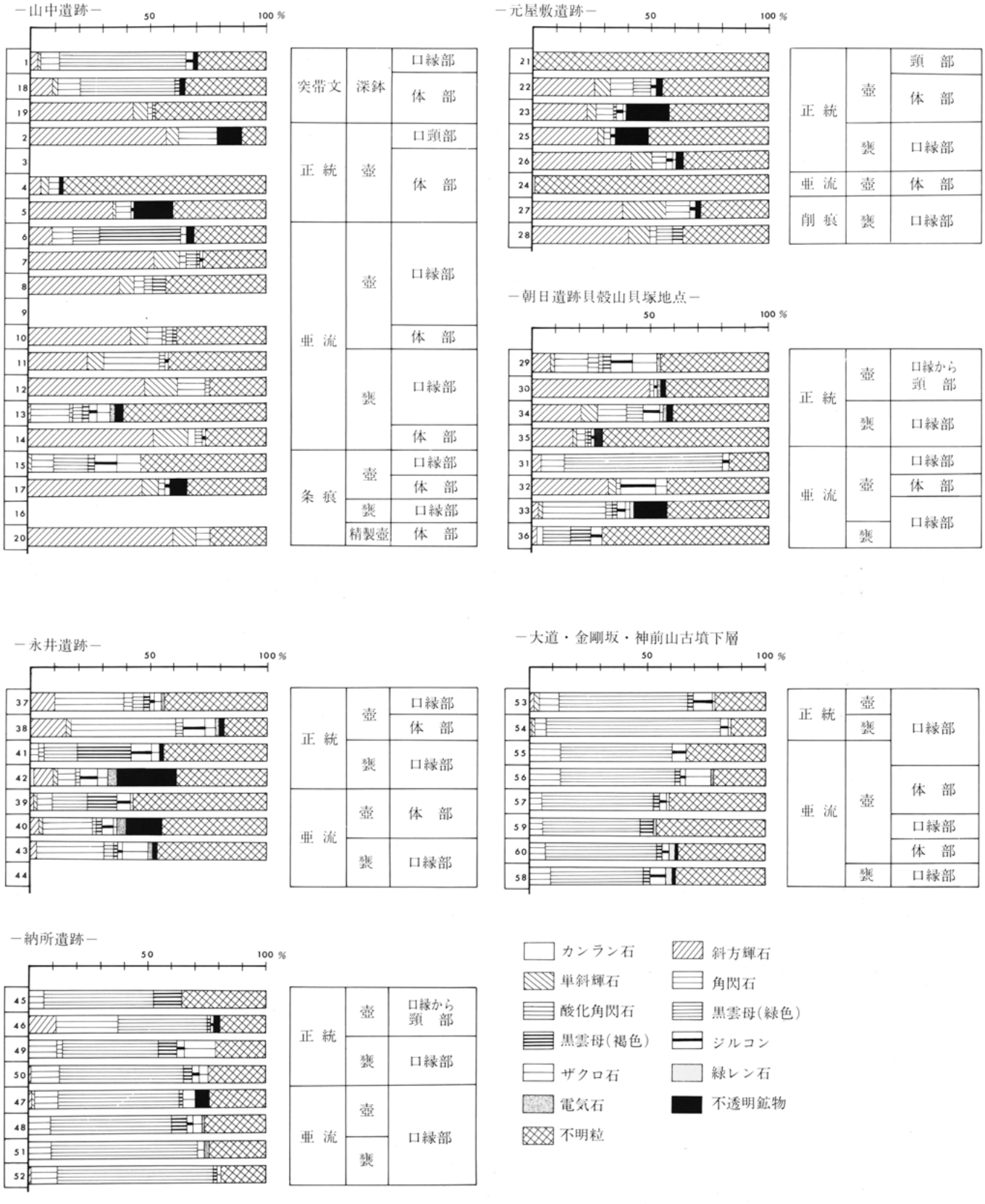
試料番号	遺跡名	地域	出土遺構	系統	器種	部位	備考	表面の色（表－裏）	表面の質感（表－裏）	表面観察結果（表－裏）
1	山中	尾張北西部	検出	凸帯文	深鉢	口縁部	図版6-63	にぶい黄褐－灰黄褐	粗い－やや粗い	灰色粒多量、黒雲母片微量含む。－灰色粒中量含む。
2			〃	正統	壺	口縁から頸部		にぶい黄橙－灰白	きめ細か	白色粒多量含む。
3			SB11	〃	〃	体部	図版19-185	灰褐－明褐灰	きめ細か－やや粗い	灰色粒少量含む。－白色粒中量含む。
4			検出	〃	〃	〃		にぶい黄橙	きめ細か	白色粒微量含む。－灰色粒少量含む。
5			〃	〃	〃	〃		にぶい橙－灰白	やや粗い	白色粒中量含む。－灰色粒多量含む。
6			〃	亜流	〃	口縁部		橙－にぶい黄橙	やや粗い－ややきめ細か	白色粒多量含む。
7			〃	〃	〃	〃		橙－にぶい褐	ややきめ細か	白色粒中量含む。
8			〃	〃	〃	〃		明褐－橙	やや粗い	白色粒中量含む。－灰色粒多量含む。
9			〃	〃	〃	〃		にぶい黄橙－にぶい橙	やや粗い－ややきめ細か	灰色粒多量含む。
10			〃	〃	〃	体部		明赤褐	やや粗い－やや粗い	白色粒多量含む。－灰色粒多量含む。
11			〃	〃	甕	口縁部		にぶい赤褐－明赤褐	きめ細か	灰色粒中量含む。
12			〃	〃	〃	〃	図版34-382	にぶい赤褐－にぶい橙	きめ細か	灰色粒微量、黒雲母片微量含む。－灰色粒多量含む。
13			〃	〃	〃	〃		にぶい赤褐－橙	ややきめ細か	灰色粒中量含む。－白色粒（最大径約5mm）多量含む。
14			〃	〃	〃	体部		明赤褐－にぶい橙	きめ細か	白色粒微量含む。－白色粒少量含む。
15			〃	条痕	壺	口縁部	図版34-384	淡黄－にぶい黄橙	やや粗い－ややきめ細か	灰色粒中量含む。－灰色粒少量含む。
16			〃	〃	甕	〃	図版34-391	浅黄橙－にぶい黄橙	粗い－やや粗い	白色粒多量含む。－灰色粒多量含む。
17			〃	〃	壺	体部	図版34-389	にぶい黄橙－灰白	ややきめ細か	黒色粒多量含む。
18			SD62	〃	深鉢	〃	図版10-91	褐灰	やや粗い	灰色粒多量含む。
19			〃	削痕	〃	〃	図版9-87	淡黄－にぶい黄橙	やや粗い－ややきめ細か	灰色粒多量含む。
20			SK28	大地	壺	頸部	図版26-300	にぶい黄橙	やや粗い－きめ細か	黒色粒多量含む。－白色粒中量含む。
21	元屋敷			正統	〃	〃		橙	きめ細か	白色粒中量含む。－白色粒中量、黒色粒中量含む。
22			溝	〃	〃	体部		にぶい黄橙	きめ細か－やや粗い	灰色粒多量含む。
23				〃	〃	〃		にぶい黄橙－灰白	きめ細か－ややきめ細か	白色粒多量含む。
24				亜流	〃	〃		橙	ややきめ細か	白色粒多量含む。－白色粒微量含む。
25			溝	正統	甕	口縁部		橙－浅黄橙	きめ細か	灰色粒多量含む。
26				〃	〃	〃		にぶい黄橙－にぶい褐	ややきめ細か－きめ細か	灰色粒多量含む。
27			掘り下げ赤褐色砂	削痕	〃	〃		にぶい橙－橙	ややきめ細か－やや粗い	白色粒多量含む。
28			〃	〃	〃	〃		にぶい黄橙－灰黄褐	粗い	灰色粒多量含む。
29	朝日貝殻山地点	尾張南西部	〃	正統	壺	口縁から頸部		にぶい黄橙	きめ細か	白色粒少量含む。－白色岩片（最大径3mm）・白色粒中量含む。
30			〃	〃	〃	〃		浅黄橙－灰白	きめ細か－ややきめ細か	黒色粒多量含む。
31			〃	亜流	〃	口縁部		にぶい橙－にぶい黄橙	きめ細か	白色粒少量含む。黒雲母片多量含む。
32				〃	〃	体部		にぶい橙	きめ細か	白色粒中量含む。－灰色粒中量含む。
33				〃	〃	口縁部		にぶい褐	きめ細か	白色粒多量含む。－灰色粒多量含む。
34				正統	甕	〃		灰褐－明赤褐	きめ細か－ややきめ細か	灰色粒多量含む。
35				〃	〃	〃		灰白	ややきめ細か	灰色粒多量含む。
36				亜流	〃	〃		橙	粗い	白色粒多量含む。
37	永井	北勢		正統	壺	〃		にぶい褐	きめ細か	灰色粒多量含む。
38				〃	〃	体部		にぶい黄橙－灰黄褐	ややきめ細か	灰色粒多量含む。
39				亜流	〃	〃		橙	やや粗い	白色粒多量、黒雲母片微量含む。
40				〃	〃	〃		橙－にぶい褐	やや粗い－ややきめ細か	白色岩片（最大径約8mm）多量含む。
41				正統	甕	口縁部		にぶい橙－にぶい黄橙	やや粗い	白色粒多量含む。
42				〃	〃	〃		にぶい黄橙	やや粗い－粗い	白色粒多量含む。
43				亜流	〃	〃		褐－明褐	やや粗い	白色粒多量、黒雲母片少量含む。
44				〃	〃	〃		明褐－橙	ややきめ細か－粗い	白色粒多量含む。－白色粒中量含む。
45	納所	中勢	包含層	正統	壺	口縁から頸部		明褐灰－にぶい褐	きめ細か	灰色粒多量含む。－灰色粒多量、黒雲母片少量含む。
46			〃	〃	〃	〃		にぶい黄橙	きめ細か	灰色粒中量、黒雲母片少量含む。－灰色粒多量、黒雲母片微量含む。
47			〃	亜流	〃	口縁部		橙－にぶい橙	きめ細か	白色粒多量、黒雲母片微量含む。－白色粒少量含む。
48			〃	〃	〃	〃		にぶい橙－にぶい褐	きめ細か	白色粒少量、黒雲母片多量含む。－灰色粒多量、黒雲母片多量含む。
49			〃	正統	甕	〃		にぶい褐－にぶい黄橙	きめ細か	白色粒少量、黒雲母片少量含む。－白色粒多量、黒雲母片多量含む。
50			〃	〃	〃	〃		黒－にぶい黄橙	きめ細か－粗い	灰色粒多量、黒雲母片少量含む。－灰色粒多量、黒雲母片多量含む。
51			〃	亜流	〃	〃		橙	やや粗い－粗い	灰色粒多量、黒雲母片少量含む。－白色粒多量、黒雲母片多量含む。
52			〃	〃	〃	〃		橙	やや粗い	白色粒多量、黒雲母片少量含む。
53	大道	南勢	SK01	正統	壺	口縁部		浅黄橙－にぶい黄橙	粗い	灰色粒少量含む。
54			〃	〃	甕	〃		にぶい黄橙	粗い	灰色粒多量含む。
55	金剛板		SK31・32	亜流	壺	〃		にぶい黄褐－にぶい黄橙	やや粗い	灰色粒多量含む。
56				〃	〃	体部		橙	ややきめ細か－きめ細か	白色粒多量含む。－白色粒多量、黒雲母片少量含む。
57				〃	〃	〃		にぶい橙－にぶい黄橙	粗い－やや粗い	白色粒中量含む。－白色粒微量含む。
58				〃	甕	口縁部		にぶい黄褐－にぶい橙	やや粗い	白色粒多量含む。
59	神前山古墳下層			〃	壺	〃		にぶい橙－明黄褐	粗い	灰色粒多量含む。－白色粒多量含む。
60				〃	〃	体部		橙－にぶい黄橙	粗い	白色粒多量含む。－白色粒多量、黒雲母片微量含む。

※　表面の色、質感、観察で表裏が同様な場合は裏の記載を省略した。
　岩片　：　粒径約 0.5 ～ 2mm 程度の角ばった砂粒。
　粒　：　粒径　0.2mm 程度。外見的には粘土の微細な固まりのように見える。

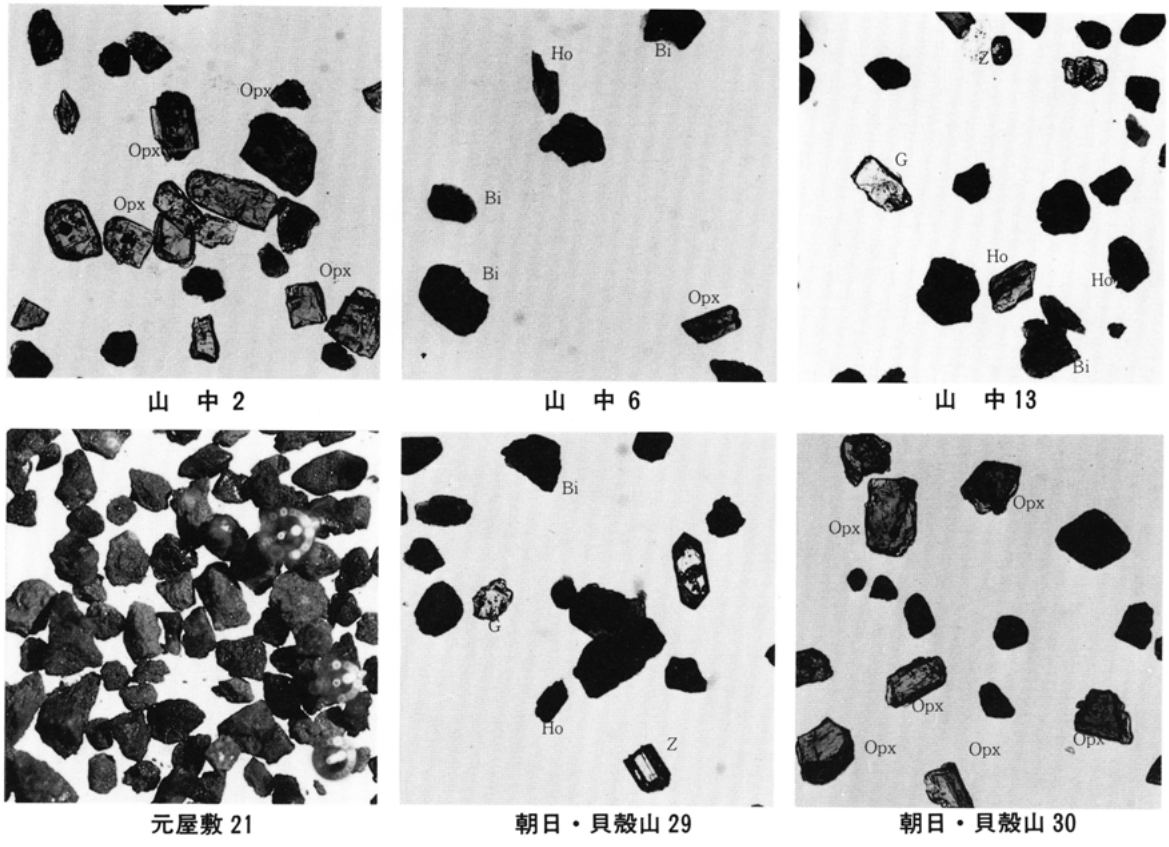
第3表　山中遺跡関連土器胎土分析試料表

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	普通角閃石	酸化角閃石	黒雲母・緑色	黒雲母・褐色	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	同定鉱物粒数
1	0	7	3	136	0	18	0	8	0	1	0	4	73	250
2	0	144	13	40	1	0	0	2	0	0	0	26	24	250
3	0	7	0	11	0	1	1	2	2	0	0	5	13	42
4	0	12	8	11	0	0	0	0	1	0	1	3	214	250
5	0	55	2	10	0	0	0	2	1	0	0	26	62	158
6	0	15	1	14	0	18	56	0	4	0	0	5	49	162
7	0	130	28	7	0	11	3	3	0	0	0	0	68	250
8	0	94	16	9	1	9	14	2	0	0	0	0	105	250
9	0	3	0	2	0	4	6	1	3	0	3	2	43	67
10	0	85	14	13	3	6	3	0	0	0	1	0	76	201
11	2	49	14	46	0	5	0	3	0	0	0	0	82	201
12	0	120	36	29	0	3	1	0	2	0	0	0	59	250
13	0	3	1	40	3	10	7	8	14	0	5	8	151	250
14	0	130	37	8	0	2	5	3	1	1	2	2	59	250
15	0	1	2	10	0	16	3	10	11	0	1	0	57	111
16	0	0	0	3	0	1	1	6	12	0	0	4	17	44
17	0	119	17	7	0	0	0	6	0	0	0	17	84	250
18	0	24	6	81	0	42	4	2	0	0	1	5	85	250
19	0	108	15	4	1	1	2	1	0	0	0	2	116	250
20	0	152	24	13	1	0	0	0	0	0	0	2	58	250
21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	250	250
22	1	44	11	16	0	11	1	4	1	0	0	4	73	166
23	0	58	10	16	2	1	2	7	3	0	0	46	105	250
24	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	246	250
25	0	70	6	7	0	1	1	5	1	0	1	35	123	250
26	0	105	22	15	0	1	1	7	3	0	0	8	88	250
27	1	96	46	25	0	1	0	6	0	0	0	5	70	250
28	0	103	22	7	0	17	11	1	0	0	0	2	87	250
29	0	15	3	27	9	3	7	17	20	0	3	1	86	191
30	0	105	1	2	1	0	0	3	0	0	3	4	91	210
31	0	10	2	173	0	16	2	7	0	0	0	1	39	250
32	0	68	7	4	0	1	0	31	10	0	2	1	86	210
33	0	3	2	29	0	3	2	4	2	2	0	15	47	109
34	0	42	14	24	1	12	2	14	3	0	3	5	82	202
35	0	42	4	6	2	3	3	3	1	0	0	8	167	239
36	0	6	2	6	0	29	21	12	1	0	0	1	172	250
37	0	23	0	64	8	10	6	4	7	0	3	2	96	223
38	0	37	5	108	0	6	1	23	11	0	4	6	44	245
39	0	4	4	16	0	36	31	14	3	0	2	0	140	250
40	0	5	2	26	0	2	3	6	2	0	5	19	56	126
41	0	1	0	5	3	18	30	11	5	0	0	2	57	132
42	2	9	2	8	0	2	0	8	5	0	4	28	42	110
43	0	7	0	71	0	10	4	5	27	0	5	5	116	250
44	1	2	1	9	0	1	2	7	0	0	3	11	44	81
45	0	0	0	60	0	72	29	2	0	1	1	0	85	250
46	0	29	1	103	1	57	2	3	2	0	0	7	45	250
47	0	3	3	74	1	78	3	1	13	0	0	15	59	250
48	0	2	0	49	1	105	11	6	10	1	3	0	62	250
49	0	1	1	72	6	58	20	7	34	0	1	1	49	250
50	0	3	0	52	0	108	9	7	10	0	2	2	57	250
51	0	1	2	51	0	126	0	2	7	0	6	1	54	250
52	0	3	2	27	0	164	4	0	4	0	1	0	45	250
53	1	6	6	19	1	136	6	20	3	2	0	1	49	250
54	0	4	3	12	0	182	2	8	3	0	0	0	36	250
55	0	2	2	34	0	117	1	15	1	0	0	1	77	250
56	0	2	1	34	0	121	6	5	27	0	3	0	51	250
57	0	0	0	15	0	117	7	7	3	0	0	1	100	250
58	0	2	0	20	0	82	6	14	2	6	0	3	76	211
59	0	0	1	16	0	102	14	2	3	1	0	0	111	250
60	0	0	0	19	0	117	6	7	0	6	0	3	92	250

第4表　山中遺跡関連土器胎土試料　重鉱物組成



第36図　土器胎土重鉱物組成ダイアグラム

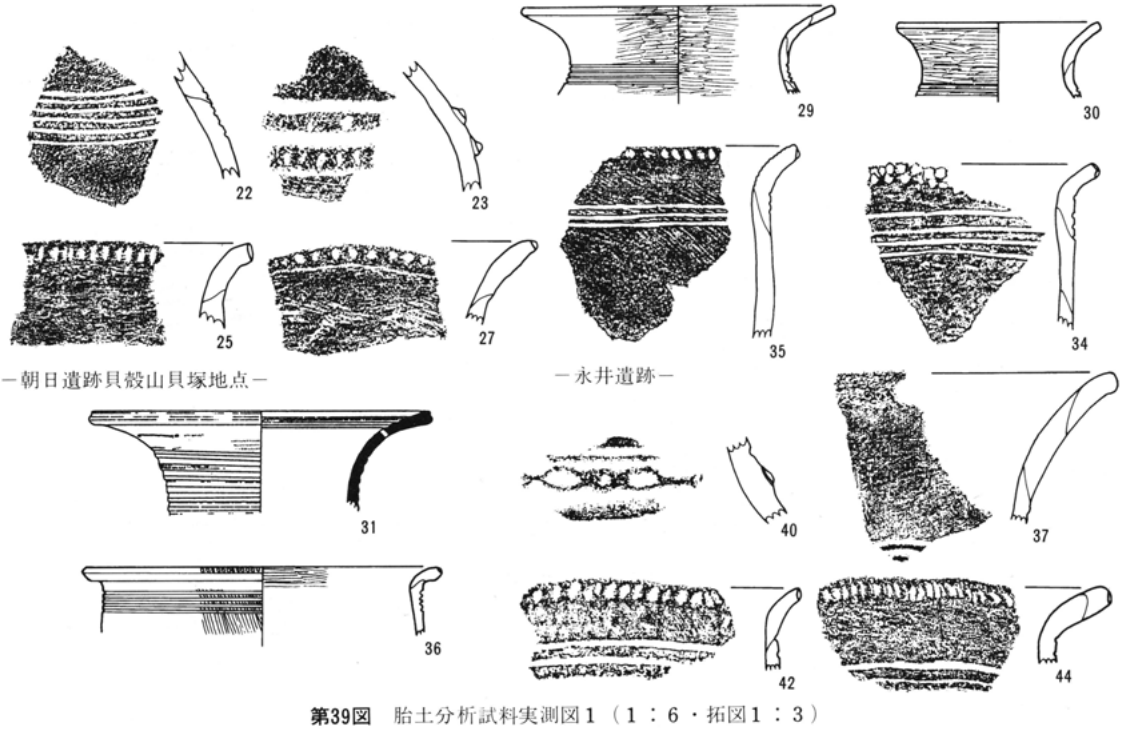


山　中 2　　山　中 6　　山　中 13

元屋敷 21　　朝日・貝殻山 29　　朝日・貝殻山 30

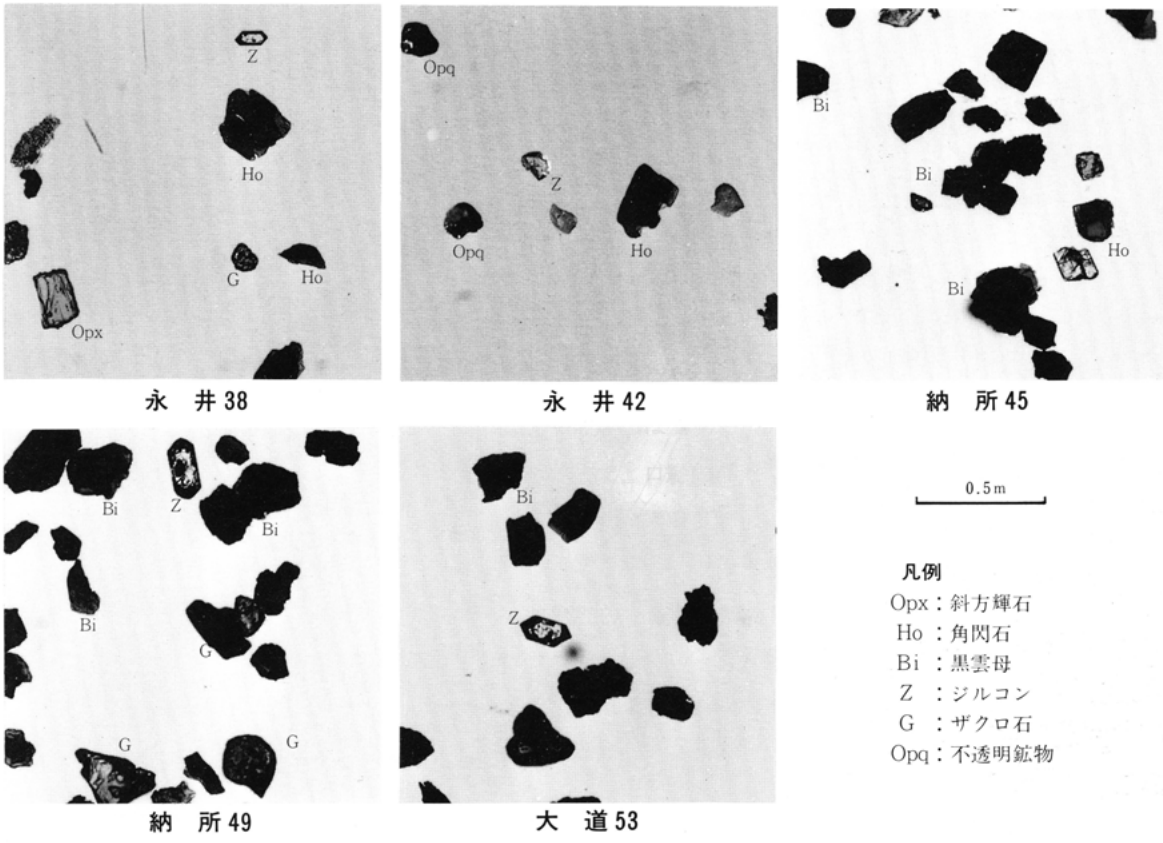
第37図　遠賀川系土器胎土分析写真(1)

－元屋敷遺跡－

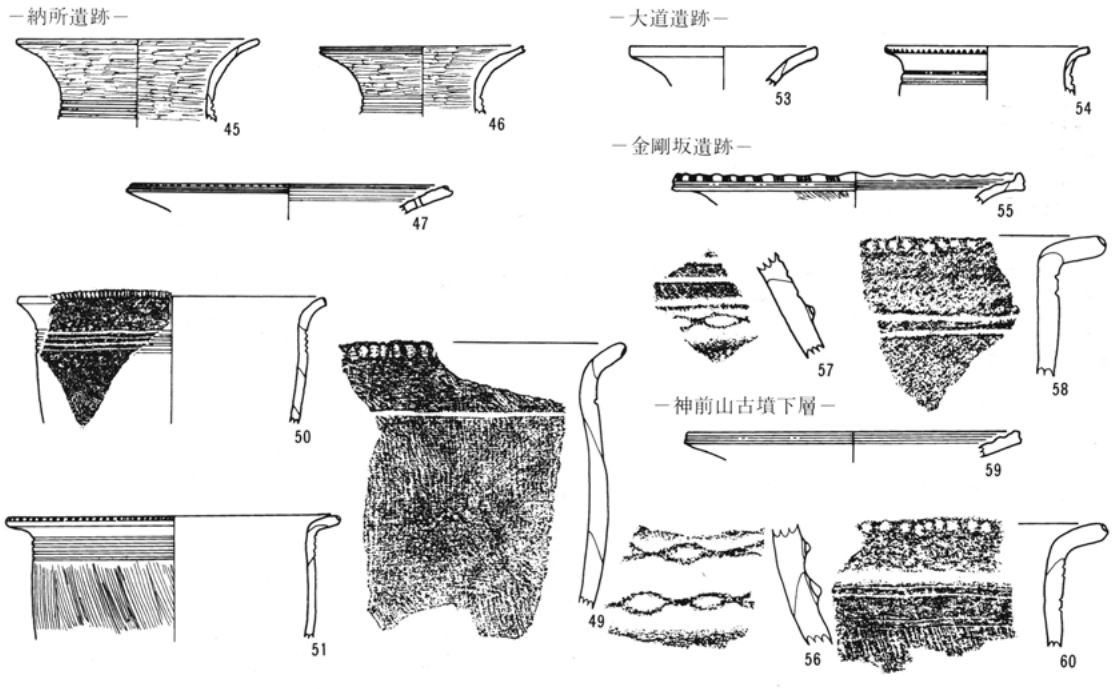


－朝日遺跡貝殻山貝塚地点－　　－永井遺跡－

第39図　胎土分析試料実測図1（1：6・拓図1：3）



第38図　遠賀川系土器胎土分析写真(2)



第40図　胎土分析試料実測図２（１：６・拓図１：３）

第2節　山中遺跡から発見された地震痕

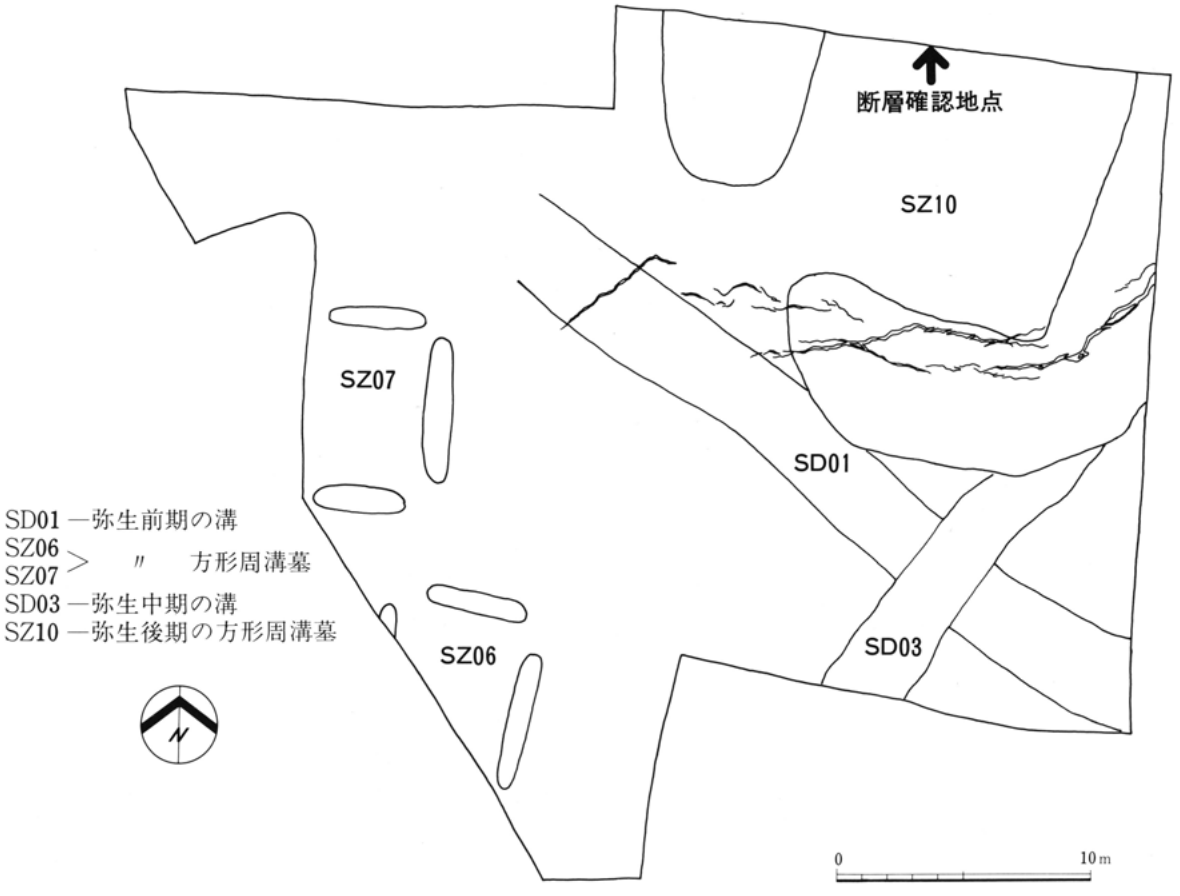
1　はじめに

遺跡と地震痕

近年、遺跡の発掘調査に伴って歴史地震の痕跡が多数発見されるようになった。遺跡で発見される地震痕は、歴史地震の記録をそのまま地層中に保存するものとして非常に重要であり、その与える情報も多い。最近の研究では、森ほか(1989)は遺跡における地震痕の発見の意義とその重要性について述べ、寒川ほか(1990)は、噴砂の粒度組成を調べ砂の液状化と分級作用の関係について報告している。

今回、山中遺跡の発掘調査において明瞭な地震の痕跡が発見されたので、噴砂の粒度分析結果とともにその概要について報告する。

なお、本報告をまとめるにあたり、通産省地質調査所寒川旭氏には、現場において指導いただくとともに大変有益な助言を数多くいただいた。記して厚くお礼申し上げる。



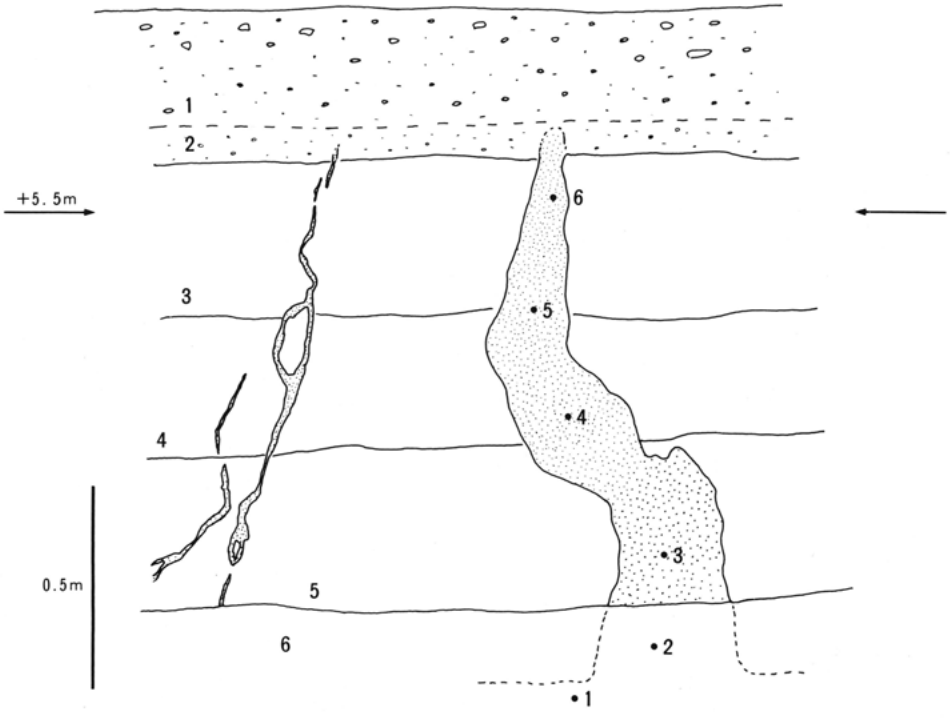
第41図　90A区噴砂平面図（1：300）

2　山中遺跡の地震痕

（1）噴砂

噴砂の平面分布　噴砂を伴う地割れは、９０Ａ区の弥生時代後期の方形周溝墓（ＳＺ10）の南溝に沿って東西方向に25m以上にわたって確認された（第41図）。最大幅は調査区東壁面において約20cmであることから、調査区外にもかなり延びているものと思われる。平面的にみると噴砂は１本ではなく、途切れながら部分的に雁行状配列を示している。また、周囲より地盤の軟弱な周溝墓の溝を選択的に貫いている点が非常に興味深い。

断面観察　東壁断面において噴砂は、弥生時代前期以前の遺跡基盤層、弥生時代後期～古墳時代の溝の埋土、古代、中世の各層を貫き、上限は現代の耕作等による攪乱を受けているため明瞭に確認することはできなかった。噴砂を供給した砂層は現地表面から約1.6m下位の標高4.4m以深にあり、確認できるだけでも噴砂の高さは1.4mに及ぶ。最大幅が20cmであることも考え合わせると、これまでに遺跡で見つかったものでは比較的規模の大きなものである。



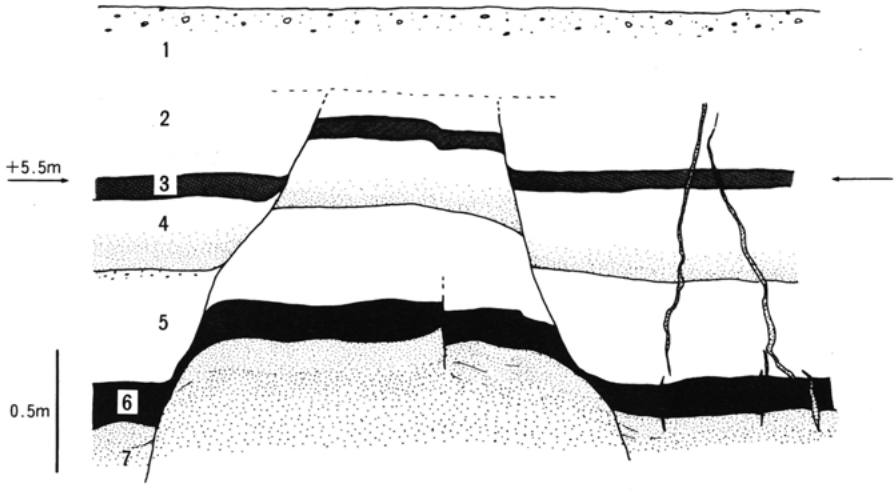
1層：盛土
2層：現代の耕作による攪乱
3層：中世(14～15世紀)の褐色シルト層
4層：古代(奈良～平安時代)の暗褐色砂混じりシルト層
5層：弥生時代後期～古墳時代の黒褐色シルト層
6層：遺跡基盤の黄灰色砂質シルト層

第42図　Ａ区東壁噴砂スケッチ

（2）断層

正断層　調査区の北壁において二本の正断層が確認された（第43図）。落差はともに約20cmで、断層の走向はそれぞれN10°E78°W（左側）、N10°E53°E（右側）であった。断層の右側には幅約1cmの噴砂を伴っている。断層は図中の2層までは明らかに変位を与え、2層上限は現代の耕作により攪乱を受けている。3層は考古遺物から14～15世紀頃の地層であることから、断層を起こした地震は15世紀よりもずっと新しいことになる。

断層の原因については、地震に伴う地盤変動によるものと、砂の液状化に伴う体積の減少によるものが考えられる。



1層：表土
2層：15世紀以降の褐色シルト層
3層：14～15世紀の遺物を含む暗褐色シルト層
4層：時期不明の黄褐色シルト～細粒砂層
5層：弥生時代前期の暗褐色シルト層
6層：時期不明の黒褐色シルト層
7層：遺跡基盤の中粒～粗粒砂層

第43図　A区北壁断層スケッチ

3　噴砂の粒度分析

（1）試料の採取と分析方法

試料の採取　90A区東壁面の噴砂断面において6試料（S-1～S-6）を採取した（第42図）。S－7～S-9の3試料は、発掘調査時の遺構検出面（標高約4.9～5m）において噴砂を平面的に採取した。

分析方法　試料は、乾燥後、二分法によって50～100gを取り出し、1，1/2，1/4，1/8，1/16mmの5種類の篩を用いて約20分間震とうさせた。各篩に残った試料の重量から累積頻度曲

線を画き、以下の値をφスケールで読み取った。φスケールの定義は、$d = 2^{-\phi}$（dは粒径mm）で表され、表中のφ16、φ50、φ84はそれぞれ累積頻度曲線の16%，50%、84%の粒径のφ値を表す。また粒度分布係数の算出には以下の式を用いた。

粒度分布係数

平均粒径　$M\phi = (\phi 16 + \phi 84) / 2$

淘　汰　度　$\sigma\phi = (\phi 84 - \phi 16) / 2$

歪　　度　$\alpha\phi = (M\phi - \phi 50) / \sigma\phi$

平均粒径は、値が大きいほど粒径が小さいことを示し、淘汰度は値の大きいほど淘汰がよいことを表している。歪度は粒度分布の偏りを表し、正の値は細粒に、負の値は粗粒に偏っていることを示している。

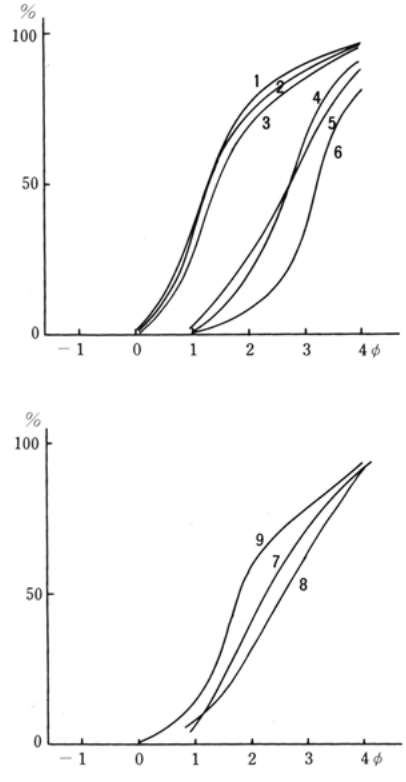
（2）分析結果

噴砂の粒度組成

噴砂の粒度分析結果を第44図および第5表に示した。この結果、S-3～S-6の噴砂試料は、噴砂を供給したと考えられる下位の砂層（S-1.2）に比べ粒径が小さく、上部ほど細粒になっていることがわかった。また、採取地点の標高がほぼ等しい試料（S-4,5,7,8,9）は、比較的似た粒度組成を示した。さらに、全ての試料に共通して淘汰度が比較的高い値を示していることなどから、地震によって液状化した砂が上昇する過程で分級作用を受けたことが推定される。

試料No.	φ16	φ50	φ84	平均粒径φ	濁太度	歪　度
S－1	0.56	1.29	2.47	1.52	0.96	0.24
S－2	0.64	1.29	2.74	1.69	1.05	0.39
S－3	0.74	1.43	2.94	1.84	1.10	0.37
S－4	1.89	2.74	3.47	2.68	0.79	-0.07
S－5	1.60	2.74	3.84	2.72	1.12	-0.02
S－6	2.47	3.18	4.32	3.40	0.92	0.23
S－7	1.29	2.25	3.47	2.38	1.09	0.12
S－8	1.43	2.56	3.64	2.54	1.10	-0.02
S－9	1.06	1.79	3.32	2.19	1.13	0.36

第5表　粒度分析結果



第44図　累積頻度曲線

分級作用　寒川ほか（1990）は京都府木津川河床遺跡の噴砂について粒度分析を行い、噴砂の上昇と分級作用の関連性について報告している。また筆者らも、清洲城下町遺跡において、液状化した砂層とそうでない砂層では粒度組成が異なり、液状化した砂は比較的淘汰のよいことを報告している（森・伊藤ほか:1990）。今回の分析で、噴砂の分級作用を示す明かな結果が得られたことは、今後の調査を進めるうえでたいへん興味深い。

4　濃尾地震の被害と活断層

地震の被害　濃尾地震は、宇佐美（1987）によれば、1891年（明治24年）10月28日6時38分50秒に発生し、マグニチュード8.0と推定されている。死者7,273人、負傷者17,175人、全壊家屋142,177戸という被害が報告され、まれにみる大災害であったことが想像される。

潜在断層　濃尾地震といえば根尾谷断層が有名であるが、濃尾平野でも、地震後の水準測量の結果や被害の分布状況から、岐阜県金原付近から一宮を通り名古屋北西部に至る潜在断層が生じ、断層に沿った地域では大規模な地盤沈下が発生したとされている（岡田:1979）。また、

噴砂の記録　飯田（1979）は、濃尾地震の被害について「愛知郡織豊村（名古屋市中村区）にて1000余箇所から噴水噴砂し…」など多くの噴砂の記録を報告しており、濃尾平野を中心に相当大規模な噴砂が発生していたことを窺い知ることができる。これまでに濃尾地震の痕跡と考えられる噴砂は、西春日井郡清洲町の清洲城下町遺跡でいくつも見つかっており（森ほか：1989）、潜在断層に沿った一宮市をはじめ、清洲町などでは相当な被害を受けたものと思われる。このような点から、山中遺跡から発見された地震痕は、その規模などから考えて濃尾地震によってもたらされた可能性が非常に高い。

5　まとめ

山中遺跡の地震痕　山中遺跡における発掘調査で、濃尾地震に伴うと考えられる断層と噴砂が発見された。粒度分析の結果、噴砂の断面において上部ほど粒径が小さくなっていることなどから、地震発生時に砂が上昇する過程で分級作用を受けたことがわかった。また、地盤の軟弱な場所を選択的に貫いている事実もみとめられた。これらのことは地震時の噴砂発生のメカニズムを知るうえで非常に興味深いものである。

今後の課題　今後さらに詳しい調査を行い、歴史地震の情報収集に努めたい。折しも今年（1992年）で、濃尾地震（1891年）からちょうど100年が経過したことになるが、低地に生活する私たちにとって、本報告が地震災害に対する意識を少しでも深めることができれば幸いである。

（伊藤隆彦）

《引用文献》

愛知県埋蔵文化財センター 1991　「山中遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報　平成2年度』　6-20.

飯田汲事 1979　「明治24年（1891年）10月28日　濃尾地震の震害と震度分布」　愛知県防災会議地震部会,304p.

森勇一・伊藤隆彦・楯真美子・永草康次 1990　「濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成」『愛知県埋蔵文化財センター年報　平成元年度』　131-142.

森勇一・鈴木正貴 1989　「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」『活断層研究　7』　63-69.

岡田篤正 1979　「愛知県の地質・地盤（その4）［活断層］」　愛知県防災会議地震部会 122p.

砕屑性堆積物研究会 1983　「堆積物の研究法－礫岩・砂岩・泥岩－，地学団体研究会」378p.

寒川旭・大草重康・岩松保 1990　「木津川河床遺跡の発掘調査（1988年度）において検出された地震の液状化跡」『考古学と自然科学，22』　103-111.

宇佐美龍夫 1987　「日本被害地震総覧，東京大学出版会」　437p.

第Ⅳ章　山中遺跡一次調査出土土器再実測調査

経緯

山中遺跡一次調査は合計３回行なわれている。第１回・２回の発掘調査は昭和34年(1959)11月で、尾張病院西側の池を構築中の土器発見に始まる。調査は横超大雄氏等により行なわれ、第１回は11月７・８日に、第２回は11月18日に実施された。第３回の調査は昭和35年(1960)３月で、池より西北の土堤付近であったとされている。これらの調査概要は『尾張病院山中遺跡』（以下「報告書」）としてすでに報告されている。

出土状況

第一次の発掘調査は、極めて偶然的な土器の出土を契機としているため、その出土状況の詳細な復原は困難である。しかしながら断片的な報告書の記述からその多くが、「溝」状の遺構に伴なうものであったことが類推される。その内最も多くの遺物が集中した第１回発掘地点の「Ｂ地点」では、東西方向の溝が７ｍ以上に掘削されていることが確認されている。そしてその内土器集積が、３ｍにわたって検出されている。こうした溝状遺構はおそらく、墳丘墓に伴なう周溝と想定するのが、現状において最も妥当であろう。それは例えば勝川遺跡ＳＺ19南溝に検出した土器集積（約３ｍ長）に類似するものと考えておくことができる。その他報告されている遺物は、多様な遺構・包含層からの出土であったものと推定できるのであり、その出土状況は一様ではない。したがって『尾張病院山中遺跡』出土遺物を、全てまとまりのある遺物群とすることはできないのであるが、おおまかに地点別に分類できる。

地点別土器群

すでに1960「報告書」の段階でやや混乱が見られ、また現在では出土遺物の所在が不明な資料もあり、土器群の抽出は難しい。そこでここでは出土状況図・写真・記述を基に、３回にわたって出土した土器を整理しておく。結果としてＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、４地点のまとまりを考えることができた。

Ａ地点　　第１回調査でのＡ地点及びその東西トレンチ内出土遺物。厳密には同一遺構の可能性は少ない。「見取図」によると７点の遺物が存在する。図版 47-1.2.3.5.6はほぼ誤りはないが、4の壺は「報告書」でのスケッチとはやや異なるようである。さらに番号不明の壺は図版47-7の可能性もある。Ａ地点の内さらにまとまりのあるものは1.3.(4).6である。

Ｂ地点　　最も重要な資料と考えるもので、第１回調査のＢ地点遺物集積資料。遺構内一括資料と推定する。「見取図」によると22点の土器が描かれているが、16点を充てることが可能である。しかしながら「一宮市史」の段階ですでに３点が、そして現状でさらに１点が所在不明であり残念である。

ベンガラ塗布資料が存在せず、高杯・壺に加飾性が極めて少ないという特色が窺える。（図版48）

C地点　第２回調査地点をC地点と呼ぶことにする。図版49-30～34の資料があり、さらに「報告書」記述によると周辺から壺・長頸壺が出土している。しかし資料の同定はできない。５点は集積して出土しているためほぼ同一遺構と推定できる資料である。

D地点　最も情報に乏しく、ここでは「一宮市史」掲載資料から「報告書」掲載を除いたものを一括してD地点とした。したがって極めて不明確なものといえよう。ほぼ第３回調査資料と推定される。なお出土状態の写真からは、少なくとも36.38.44.45.52は集積状態を示す。また高杯38～42は第３回調査の出土品であることは「一宮市史」に記載がある。

（赤塚次郎）

出土地点	図版番号	分類	口径cm	器高cm	特色	一宮市史図版番号	報告書図版番号	備考
A	1	壺A	15	28	ベンガラ塗布	第66-31	第8-6	市博蔵
A	2	壺A			体部中位に波状の文様	第66-28	第8-1	所在不明
A	3	壺	7.4	12.3		第66-21	第10-24	市博蔵
A	4	鉢	10.5	7.6		第66-23	第9-10	市博蔵
A	5	鉢	12.3	9.6		第66-22	第9-9	市博蔵
A	6	器台	14.3	7.7		第66-7	第10-26	市博蔵
	7	壺A	15.6	26		第66-30	第8-3	市博蔵
	8	器台	14.3	8		第66-6	第10-32	市博蔵
	9	器台	14	9.5		第66-9		市博蔵
	10	蓋	9.8	2.8	ベンガラ塗布・小孔４ヶ	第66-26	第9-7	市博蔵
	11	鉢	9.5	10	ベンガラ塗布	第66-26	第9-7	市博蔵
	12	壺	9	15.5		第66-19	第10-25	市博蔵
	13	高杯	13	21		第66-15	第9-12	市博蔵
B	14	高杯	14	19	口縁端部１条沈線	第66-14	第9-14	市博蔵
B	15	高杯			脚部横線文		第9-17	所在不明
B	16	高杯	13.5			第66-16	第9-15	市博蔵
B	17	高杯	13.8	17	外来系	第66-13	第9-11	市博蔵
B	18	器台	15.7	10		第66-12	第10-28	市博蔵
B	19	器台	17	9.8	脚部多条沈線文	第66-11	第10-27	市博蔵
B	20	器台	15.6	9.7		第66-10	第10-29	市博蔵
B	21	鉢					第9-8	所在不明
B	22	高杯	15	8.4		第66-4	第9-19	市博蔵
B	23	高杯					第9-18	所在不明
B	24	高杯	20			第67-45		市博蔵、D地点の可能性
B	25	高杯	20.3	12		第66-3	第9-20	市博蔵
B	26	壺A	17	30	煤付着	第66-29	第8-2	市博蔵
B	27	壺			口縁端部沈線	第66-20	第10-21	所在不明
B	28	壺	8.5	15.5	口縁端部１条沈線	第66-17	第10-22	市博蔵
B	29	壺	7.8	13.4		第66-18	第10-23	市博蔵
C	30	壺A	16	24		第68-35	第8-4	市博蔵
C	31	壺A				第68-34	第8-5	市博蔵
C	32	器台	14	10.5	ミガキ調整無し	第68-32	第10-31	市博蔵
C	33	壺	8.8	16		第68-33	第9-13	市博蔵
C	34	甕	17.3			第68-36	第10-33	市博蔵
D	35	壺A	18.5			第67-49		市博蔵
D	36	壺A	21	35	外来系	第67-50		市博蔵
	37	壺A			ベンガラ塗布	第66-27	17頁写真	市博蔵、地点不明
D	38	高杯	21.5	17	杯部上位ベンガラ塗布	第67-41		市博蔵
D	39	高杯	19.5			第67-39		市博蔵
D	40	高杯	21.5	15.5	口縁端部部分的ベンガラ塗布	第67-38		市博蔵
D	41	高杯	27	17.7	口縁端部条沈線文	第67-37		市博蔵
D	42	高杯	22.5			第67-40		市博蔵
D	43	壺	11.5	19.5	ベンガラ塗布	第67-53		市博蔵
D	44	壺	10.8	33.5	ベンガラ塗布	第67-52		市博蔵
D	45	壺	13		ベンガラ塗布	第67-51		市博蔵
D	46	高杯	11	18.2	部分的ベンガラ塗布	第67-48		市博蔵
D	47	高杯	12			第67-47		市博蔵
D	48	高杯	17.5			第67-46		市博蔵
D	49	壺			体部穿孔	第66-25		市博蔵
D	50	鉢	12.5		煤付着	第66-24		市博蔵
D	51	器台	13.5	11.5		第66-8		市博蔵
D	52	器台	14.8		ミガキ調整無し	第66-5		市博蔵

第６表　山中遺跡１次調査土器一覧表

第Ⅴ章　考察

第１節　Ａ期の遺構と遺物の変遷

１　A_1期の土器について

（１）　分　類

今回の調査で出土したA_1期の土器は、全体の形状を復元することのできる資料が極めて少ないため、以下の、①器形、②体部上半の形状、③口縁端部の文様と調整、④器面の調整、⑤体部の文様の５つの要素に基づき土器を分類する。

①　器形…器形の呼称については、壺・甕・鉢等が一般的には使用されているが、その使用については研究者間にまま混乱が見受けられる。それは基本的に遠賀川系土器以降に該当する機能分類を、無理に突帯紋土器終末期段階に結び付けようとしているところから生じていると考えるからである。この場合、壺・甕等の分類をそのまま使用するのは、現状にそぐわないであろう。まず、器形を大きく３つに区分する。

Ⅰ　口径より器高が大きく上回り、体部に明瞭な肩部を有さないもの。口縁部は直立するか緩やかに内湾する。

Ⅱ　口頸部が外反、またはほぼ直立し、体部との境が明瞭なもの。

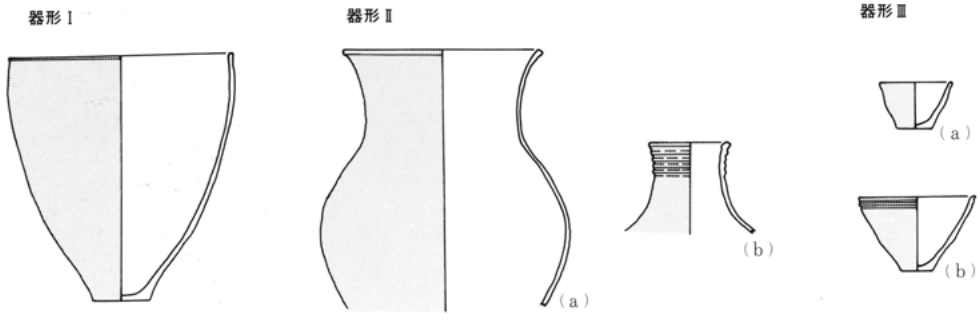
　　a　口頸部が緩やかに外反するもの。

　　b　口頸部がほぼ直立気味にたちあがるもの。

Ⅲ　口径と器高の差をほとんど有さないもの。

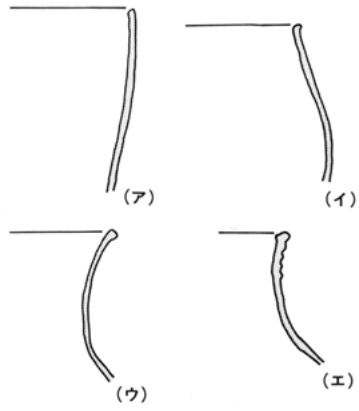
　　a　底部から緩やかに外方へ開きながら口縁部に至るもの。

　　b　底部から大きく外方へ「逆ハ字状」に開くもの。



② 体部上半の形状…体部上半の形状を以下の４種に分類する。

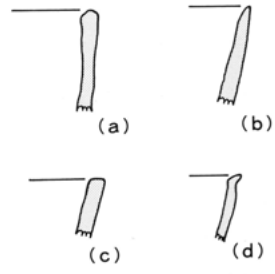
ア　ほぼ直立するか、緩やかに内湾するもの。
イ　大きく内湾しながら口縁部にいたるもの。
ウ　頸部より大きく外反しながら口縁部にいたるもの。
エ　頸部より大きく屈折し、ほぼ直立気味に口縁部にいたるもの。



体部上半の形状

③ 口縁端部の文様と調整…口縁端部に文様を施すものと施さないものに分類し、さらに、それらの特徴により細分する。

有文…a　押し引きを施す
　　b　押圧を施す
　　c　その他
無文…a　端部を丸く収める
　　b　端部を尖らせる
　　c　端部を平坦にする
　　d　端部は平坦だが、粘土のはみ出しがある。



口縁端部の調整

④ 器面の調整…外面及び内面の調整を以下の４種に分類する。

A　ケズリ調整の認められるもの
　　a　板状工具を使用するもの
　　b　貝殻を使用するもの　…　器面を整えるために貝殻を使用したものであり、一般的な貝殻条痕に比べ条痕幅が狭く、不整方向に施される。
B　ナデ調整が施されるもの
C　条痕を施すもの
　　a　貝殻を使用するもの
　　b　その他の工具を使用するもの
　　c　ハケメ状の条痕が施されるもの（細密条痕）
D　ミガキ調整を行うもの

ケズリAa（板状工具使用）

ケズリAb（貝殻使用）

⑤　体部の文様…体部に施される文様を以下の３種に分類する。

α　無文

β　突帯を巡らすもの

　　β1　一条

　　β2　二条

　　β3+　三条以上

γ　沈線を施すもの

器面調整 Cc・文様γ

（２）　A_1期の土器について

先にも述べたが、大半の資料が破片資料であり、全体の形状も判然としない粗製土器が中心ではあるが、以上のように土器の分類を試みた。遺構出土の資料および包含層出土の突帯紋土器をとり上げまとめてみたい。また、突帯紋土器終末期は、いわゆる遠賀川系土器との共伴が問題にされるが、今回の山中遺跡の調査においては、その共伴は認められなかった。第７表に遺構別の分析結果を示した。

まず、突帯紋土器は、今回の調査において６点出土した。すべて包含層出土遺物であるが、その出土地点は、概ねＳＫ02・03の近辺に集中していた。それらは、口縁下部に幅広の低い突帯を貼り付け、その突帯上に貝殻または指頭による押圧を加えたもの４点、肩部に施されたものが２点である。これらは、いずれも小破片であるため全体の形状・調整等は不明な部分が多いが、突帯に加えられた文様・手法より、概ね、従来の編年に照らせば馬見塚式の範疇に含まれるものであろう。また、肩部に突帯を施すものは、口縁下部にも突帯を配する２条突帯の可能性があり、注目される。尾張地方において、この種の突帯紋土器は、出現期から終末期に至るまで一貫して一条突帯であることが指摘されており[1]、他地域、とりわけ周辺地域で広く２条突帯が分布する伊勢地方との関連を考慮しなくてはならないであろう。

ＳＫ01出土土器は、２個体の器形Ｉよりなる土器棺墓に使用された資料である。図版13-112は、Ｉ＋ア＋無ｃ＋Ｃｃ・Ｄ＋γの組み合わせからなり、外面の細密条痕および内面のミガキ調整、口縁下部の沈線文等本遺跡出土の他資料にはみられない特徴的なものである。当然、当地域には系譜のおくことのできない資料であり、これに類似する資料を周辺地域に求めるならば、長野県を中心に分布する氷Ｉ式土器に求めることができよう。また、図版13-113は、Ｉ＋ア＋無ｃ＋Ｃａ・Ｂ＋αの組み合わせであり、口縁端部は平坦に収め、外面を貝殻による条痕および内面をナデによって仕上げる当地域で一般的にみられる粗製土器である。

ＳＫ02・03出土資料は、点数的には少数であるが、すべて器形Ｉよりなり、口径が34.8cmを測る大型品もみられる。体部上半の形状は、ほぼ直立するか、あるいは緩やかに内湾するアタイプに限られており、口縁部が外反するものは全くみられない。口縁端部は、刻み・押圧等の文様を施すものはみられずすべて無紋であるが、その形状は無ａ・無ｂ・無ｃがみられバラエティーに富む。最も特徴的

なのは、外面の調整であり、ケズリ（板・貝殻を工具として利用）・ナデによって調整されてるものばかりであり、貝殻条痕が施されるものはみられない。内面の調整は、すべてナデによって仕上げられている。

それに対し、ＳＤ01出土資料は量的に豊富であり、かつ、その土器様相も大きく異なっている。まず、器形および体部上半の形状においては、ＳＫ02・03と同様にＩ＋「ア」タイプが圧倒的ではあり、器形Ⅱ・Ⅲタイプ、体部上半の形状「イ」・「ウ」タイプも少量みられるようになる。

器形Ｉは、判別できる資料として23点出土している。それらの口縁端部の形状は、丸く収める無ａタイプ、平坦に収める無ｃタイプが多く、外面条痕調整のものに限り、刻み・押圧等の文様を施すものがみられるようになる。外面調整には、一部ＳＫ02・03と同様にケズリ・ナデにより調整するものもあるが、貝殻による条痕を施すものが多く認められ、大きな特色となっている。図版11-100・101のように条痕調整後口縁下部をナデあげるものも小数ではあるがみられる。内面の調整は、ナデによって仕上げるものが圧倒的である。また、図版12-111は、ＳＫ01出土の図版13-112と同様に氷Ｉ式土器に類似するものである。器形Ⅱは僅か１点のみの出土であるが、図版10-94 は、Ⅱａ＋ウ＋有ｂ＋Ｃａ・Ｂ＋αの組み合わせからなる大形品である。器形Ⅲは、２点出土している。図版９-84 は、大きく逆ハ字状に開く器形と口縁下部に２条の沈線を配し、外面全体をケズリあげるという当地域には類例のみられないものであり、他地域との関連を考慮する必要があるのかもしれない[2]。

次に、各出土資料の編年的位置付けについて考えてみたい。まず、ＳＫ02・03出土資料に関しては、馬見塚遺跡Ｆ地点出土遺物よりは新しく、下り松遺跡出土資料と共通する部分が多い。それに対し、ＳＤ01下層出土資料は、ＳＫ02・03段階の遺物も含むが、全面に貝殻条痕を施し、口縁端部に刻みや押圧を施文するなどＳＫ02・03にはみられない新しい様相を看取することができる。なかでも細片ではあるが、口縁端部直下部にナデ調整を施す土器片は、古沢町遺跡・西浦遺跡出土土器段階によくみられる手法である[3]。また、同時に出土している氷Ｉ式土器も古沢町遺跡・西浦遺跡出土段階にほぼ併行するとされる。故に、ＳＤ01出土資料は、単一時期とは考えられず、下り松遺跡出土土器段階から古沢町遺跡・西浦遺跡出土土器段階までの土器を含んでいるといえよう。ＳＫ01は、古沢町遺跡・西浦遺跡出土土器段階に比定することができる。

分類＼遺構			SK01	SK02	SK03	SD01	その他
器形		Ⅰ	2	2	6	23	17
		Ⅱ	0	0	0	1	1
		Ⅲ	0	0	0	2	1
体部上半の形状		ア	2	2	5	24	16
		イ	0	0	0	1	0
		ウ	0	0	0	1	0
		エ	0	0	0	0	1
口縁端部の文様と形状	有文	a	0	0	0	3	1
		b	0	0	0	1	0
		c	0	0	0	1	0
	無文	a	0	0	1	8	7
		b	0	0	2	0	0
		c	2	1	1	12	5
		d	0	1	0	1	1
器面の調整	外面	A	0	a 2	a b 7 2	a 9(1)	a b 7 2
		B	0	0	1	3(2)	2
		C	a c 1.1	0	0	a c 18(1).1	a 9
		D	0	0	0	0	0
	内面	A	0	0	0	0	0
		B	1	2	10(1)	28	23
		C	0	0	1(1)	0	0
		D	1	0	0	1	0
体部の文様		α	1	2	5	24	12
		β	0	0	0	0	a.b.c 4.2.1
		γ	1	0	0	2	0

第７表　A_1期土器分析一覧

2　A_2期の土器について

A_2期は今回の調査のメインとも言える時期であり、遺物の出土量も多くそれらがもたらす情報は多岐にわたる。しかし、残念ながらA_1期と同様に全形の判明する資料は少ない。大きく遠賀川系、条痕系（所謂「水神平式」とよばれる一群の土器））、その他の系統の土器に分け考えていきたい。

（1）　分　類

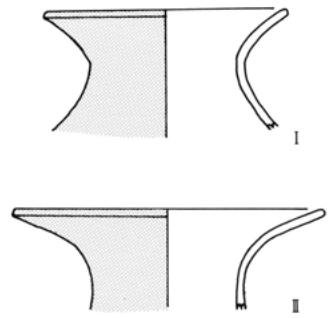
［遠賀川系土器］　遠賀川系土器の器種としては壷・甕・鉢・蓋・高杯等があるが、壷・甕以外は出土量が少ないか、または出土していないため分類の対象から除外する。

壷…①口縁の形態、②口縁部の文様・調整、③頸部の文様・調整、④体部の文様・調整、⑤色調の５つの要素に分類する。

①　口縁の形態…大きく２つのタイプに分類する。

Ⅰ…頸部が短く、口縁部の外反も短いもの

Ⅱ…頸部が長く直立し、口縁部の外反が大きいもの



口縁の形態

②　口縁部の文様・調整…口縁部に施される文様・調整を以下の端部の状況と内面とにわけ分類する。

口縁端部

有文…a　刻み

b　竹管

c　沈線

無文

内面

有文…口縁部の内面に幅広の沈線を施した後、ミガキこんだミガキ沈線を施すもの

無文

口縁端部の文様

③　頸部の文様・調整　④　体部の文様・調整

頸部・体部に施される文様・調整を大きく５つのタイプにわけ、さらにそれらを２～３種に細分する。

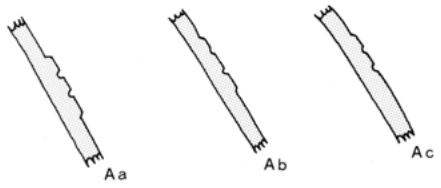
ミガキ沈線

A…ケズリ出し突帯＋沈線

a　ケズリ出し突帯が高いもの

b　ケズリ出し突帯が低いもの

c　片側のみケズリ出しを行うもの



ケズリ出し突帯＋沈線

B…沈線文が施されるもの

a　ヘラ描き沈線

b　ミガキ沈線

c　木目沈線…柾目の板の小口を押圧しながら、沈線を描くもの

d　その他…植物茎状の工具を利用するもの

C…貼り付け突帯を施すもの

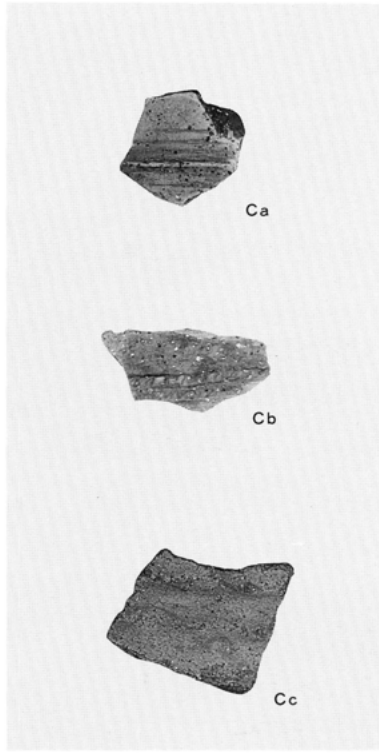
a　突帯上に施文しないもの

b　突帯に刻みを施すもの

c　突帯に押圧を施すもの

D…竹管の刺突を施すもの

E…無文



貼り付け突帯

⑤　色調…大きく２種類に分類する

ア…褐色

イ…赤褐色

甕…①口縁の形態、②口縁部の文様・調整、③体部の文様・調整、④色調の４種に分類する。

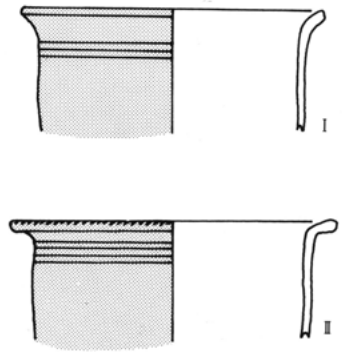
①　口縁の形態…口縁部の外反状況により、大きく２つのタイプに分類する。

Ⅰ…口縁部の外反が緩やかなもの

Ⅱ…口縁部が「逆Ｌ字」状に鋭く屈曲し、端部を肥厚させるもの

a　口縁部の肥厚が口縁端部の幅にほぼ等しいもの

b　口縁部の肥厚が口縁端部の幅より厚いもの



口縁の形態

②　口縁部の文様・調整…口縁部に施される文様・調整を端部の状況と内面の調整とにわけ分類する。

口縁端部

有文…刻みを施すもの

a　口縁端部上部に施すもの

b　口縁端部全面に施すもの

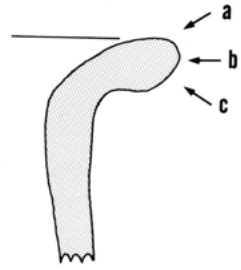
c　口縁端部下部に施すもの

無文

内面の調整

a　ナデ調整を行う

b　ミガキ調整を行う



口縁部文様部位

③　体部の文様・調整…体部に施される文様・調整を以下の通り分類する。

文様

A　沈線を施すもの

a　ヘラ描き

b　半截竹管

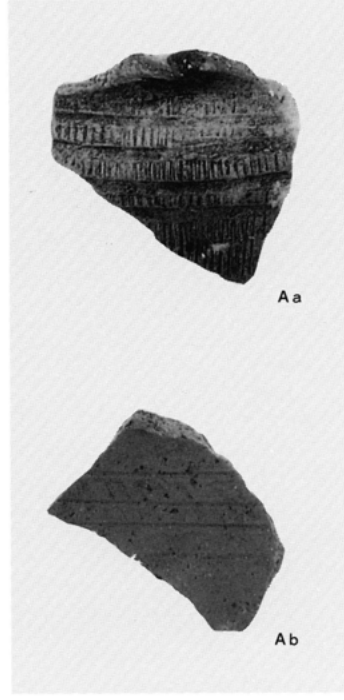
B　無文

調整

a　ハケ

b　粗ハケ…粗い不揃いなハケ工具を使用するもの

c　下半部ミガキ



文　様

④色調…大きく２つに分類する。

ア　褐色

イ　赤褐色

［条痕紋系土器］　いわゆる「水神平式」と呼ばれる土器を指す。器種には壷・甕があるが、残念ながら全体の形状を窺うことができる資料はない。

壷…破片資料が多いため、①口縁部の文様、②体部の文様・調整の２つの要素に基づき土器を分類する。

①　口縁部の文様…口縁端部の施文の有無により、大きく２つにわける。

有文

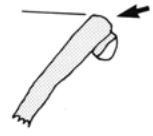
a　条線を施すもの

b　押し引きを施すもの

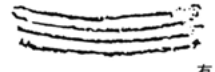
c　刻み状

d　刺突

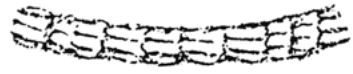
無文



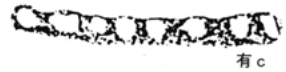
口縁端部の文様



有a



有b



有c

② 体部の文様・調整…体部に施される文様・調整を以下の通りに分類する。

文様

a　振幅の長い波文…1㎜以上

b　振幅の短い波文…1㎜未満

c　波文をコンパス状に施すもの

d　はね上げ状

調整…内面・外面の調整を以下の5種類にわける。

a　櫛状工具を利用した条痕

b　貝殻条痕を施すもの

c　二股工具を利用した条痕

d　ハケを施すもの

e　ナデ調整を行うもの

a

b

c

文　様

甕…壺と同様、破片資料のみであり、①口縁部の文様、②体部の調整の2つ要素にしぼり分類する。

① 口縁部の文様…口縁部の文様を有文・無文の2つに分類する。

有文

a　条線を施すもの

b　押し引きを施すもの

c　刻み状

d　刺突

無文

② 体部の調整…内・外面に施される調整を以下の5種類に分類する。

調整

a　櫛状工具を利用した条痕

b　貝殻条痕を施すもの

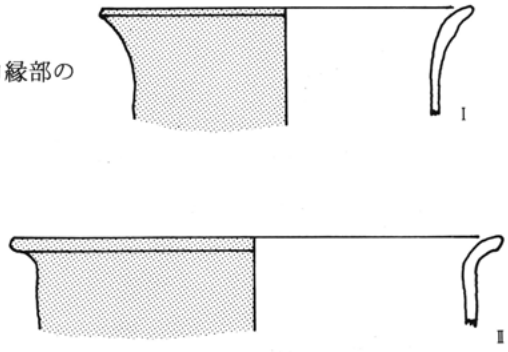
c　二股工具を利用した条痕

d　ハケを施すもの

e　ナデ調整を行うもの

［その他の系統の土器］　量的には少数ではある。大きくA～Dの4種に分類する。

A…いわゆる削痕系土器であり、①口縁部の形態、②口縁部の文様、③体部の調整の3つ要素に基づき分類する。



口縁の形態

① 口縁部の形態…口縁部の外反の度合いにより、つに分類する。

Ⅰ　口縁部の外反の度合いが弱いもの

Ⅱ　口縁部が強く外反するもの

② 口縁部の文様…口縁端部の施文を、以下の2つに分類する。

有文…刻み等を施すもの　　無文

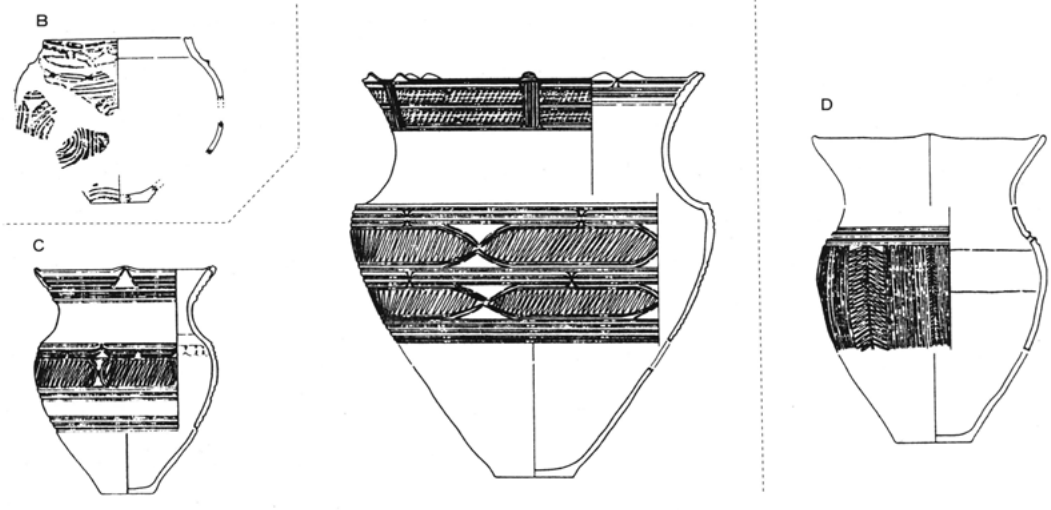
③ 体部の調整…体部外面の調整を、以下の3種にわける。

a　ケズリ　　b　ミガキ　　c　ナデ

B…浮線文系土器－いわゆる「大洞系」の浮線文土器を指す。

C…沈線文系土器－施文をすべて沈線文で飾る土器群であり、すべて器形は壺形を示す。大形と小形の2種類がある。

D…北陸系土器－縦方向と綾杉状の沈線文からなる北陸地方の「柴山出村式」に類似する土器を指す。



その他の系統の土器

（2）A_2期の土器について

尾張地方は、遠賀川系文化の波及した東端に位置しながら、全くと言っていいほどその当該期の様相は不明であった。しかし、今回の山中遺跡の発掘調査において、初めて多数の遺構と、それに伴う多くの遺物が出土した。それらは、当地方が東西両文化圏の接点に位置するという地理的な特性もあって、実に複雑な様相をみせる。A_2期の土器について、遠賀川系、条痕紋系、その他の系統にわけ、以上のように分類を試みた。主要な遺構出土の遺物を中心にまとめてみたい[4]。

［遠賀川系土器］[5]

ＳＤ01からは、多量の土器が出土しており、全形に近く復元できる資料もみられる。壺は、口縁形態の判明する資料が少ないが、すべて頸部が長くほぼ直立し、口縁部の外反の大きいⅡタイプのみであり、口縁部が短く外反するものはない。口縁部の文様・調整に関しては、２つのパターンがみられ、端部・内面ともに無文のものと、端部に沈線、刻みをもち、内面にミガキ沈線を施すものがある。頸部に施される文様の中心は、ヘラ描き沈線紋を施すＢａタイプが主流であり、描かれる沈線も多条化の傾向が見受けられる。体部に施される文様は、大きく３種に分かれ、ケズリ出し突帯＋沈線をもつＡｂ、ヘラ描き沈線紋からなるＢａ、貼り付け突帯を施したＣｂがあり、Ｃｂタイプは細片が多いため不明な部分が多いが、頸部と同様にヘラ描き沈線紋は多条化の傾向が窺うことができる。また、図版15-130は、沈線間に竹管を施した特異な文様構成をみせ、日本海側地方との関連が考えられ注目される。土器の色調に関しては、概ね褐色を呈するが、口縁内面に文様を施したいわゆる「亜流」は赤褐色を示す。甕に関しては、Ⅱ＋有ａ・ｂ＋Ａｂ・ｂ＋イの組み合わせを示す「亜流」がほとんどである。

次に、竪穴住居跡より出土した土器をみていく。壺に関しては、細片が多く全形を窺うことのできる資料が乏しいなかで、ＳＢ11より出土した図版19-185は、ほぼ完形に復元できた資料である。Ⅱ＋無・無＋Ａｂ3 ＋Ａｃ5 ＋アの組み合わせよりなる。頸部および体部の文様はやや退化した様相もみられるがケズリ出し突帯よりなり、山中遺跡出土の遠賀川系土器のなかではやや古手の様相を示す。他の資料については、体部の文様のみが判別できるものが多く、大きくヘラ描き沈線文からなるＢａ、貼り付け突帯よりなるＣｂタイプがみられ、Ｂａタイプに関しては、ＳＤ01と同様に多条化の傾向が窺える。甕の出土量は多くはないが、ＳＤ01と同様に赤褐色を呈し、口縁部に粘土を付加し肥厚させ、大きく「逆Ｌ字」状に屈曲させ、体部には半截竹管による沈線を施した「亜流」が多い。しかし、１点ではあるが、口縁部を緩やかに外反させ、体部にヘラ描き沈線紋を施した「正統」タイプがＳＢ19より出土している。

方形周溝墓より出土した資料は、ＳＺ03出土資料の一部を除き、洪水性の堆積層である褐色中粒砂からの出土であり、確実に供献土器として認められるものは少ない。ＳＺ03出土資料よりみていくことにする。壺は、細片が多く全形を窺うことのできる資料は少ない。頸部および体部に施される文様には沈線紋からなるＢタイプ（Ｂａ・Ｂｂ）が多く、ケズリ出し突帯を有するものもみられる。甕に

関しては僅か３点の出土であるが、すべて口縁部を肥厚させた「亜流」タイプのみであり、図版21－240 は、確実に方形周溝墓に伴うと考えられる資料である。他の方形周溝墓より出土した資料は、壺に関しては、一部貼り付け突帯紋もみられるが、概ね多条化した沈線紋を頸部および体部に施すものが主流である。ＳＺ07より出土した図版23-272は、多条化した沈線紋と貼り付け突帯からなる資料であるが、沈線紋には柾目の板の小口を利用した木目沈線がみられ、また、貼り付け突帯上の刻みは羽状に配されており特異な文様構成となる[6]。甕は、ＳＺ03と同様に、口縁部を肥厚させたⅡタイプが目立つ。

土坑出土資料に関しては、遺構の切り合い関係が明瞭なＳＫ17・22・29を中心にみていくことにする。ＳＫ17は、ＳＺ03と切り合い関係を有する（ＳＺ03→ＳＫ17）土坑であり、図版24-285の壺が単体で出土した。その組み合わせはⅡ＋無・無＋Ｂｄ＋Ｂｄ＋アよりなり、頸部から体部上位に連続的に施文される植物茎状の工具を利用し描いた沈線および鋸歯状の文様は特徴的であり、形態的には朝日式に近い形状を示すが、頸部の長胴化はまだ進んでおらず、遠賀川系土器の名残を残している。この土器に対する時期比定の問題は微妙であるが、遺構の切り合い関係でＳＺ03周溝を切っていること、山中遺跡では確実に朝日式といえる資料が確認されていないこととあわせ、遠賀川系土器の最末段階に位置付けておきたい。ＳＫ22はＳＤ01と切り合い関係をもつ（ＳＤ01→ＳＫ22）。壺は４点あるが、形骸化したケズリ出し突帯をもつものと、ヘラ描き沈線からなるものとにわけられる。甕は、半截竹管による沈線を施したものが１点ある。ＳＫ29もＳＤ01と切り合い関係を有する（ＳＤ01→ＳＫ29）土坑である。壺は８点出土しており、文様構成もケズリ出し突帯、ヘラ描き沈線、貼り付け突帯文とバラエティーである。図版29-317.319は、ケズリ出し突帯上に多条の幅広の沈線を施すものであり、かつて、中村友博氏が指摘された前期新段階に伊勢湾地方の「第３系列」（いわゆる亜流遠賀川）の土器にみられる上胴部の削り落としを目的とするものである[7]。図版29-322は、貼り付け突帯を渦巻状に配したものであり特徴的である。突帯上には刻みが施されるＣｂタイプである。甕は、２点と少ないが山中遺跡では数少ないヘラ描き沈線の施されるものもみられる。他の土坑出土資料は、壺に関しては概ねヘラ描き沈線文が多条のタイプ、甕では、他の遺構と同様にⅡタイプが中心となる。

壺

			SD01	SB11	SB15	SZ03	SZ07	SK22	SK29
口縁形態		Ⅰ	0	0	0	0	0	0	0
		Ⅱ	10	1	0	1	0	2	4
口縁部の文様・調整	端部	有	a・c 2	0	0	0	0	0	a・c 1
		無	2	1	0	0	0	1	1
	内面	有	2	0	0	1	0	0	1
		無	2	1	0	0	0	1	1
頸部文様調整		A	0	b1	0	0	0	b2	a1
		B	a8	a2	0	b2	a2	a1	a1b1
		C	b1c1	a1	0	0	a1	0	b1
体部文様調整		A	b2	c1	0	b1	0	b1	0
		B	a6	a1	a1	a3	a1	0	a1
		C	b7	c1	0	c1	1	0	b1
色調		ア	22	3	0	4	2	4	6
		イ	6	1	0	3	1	0	2

甕

			SD01	SB11	SB19	SZ03	SZ04	SK22	SK29
口縁形態		Ⅰ	0	0	1	0	0	0	1
		Ⅱ	7	1	0	2	3	0	0
口縁部の文様・調整	端部	有	a7	a1	b1	a2	a3	0	a1
		無	0	0	0	0	0	0	0
	内面	a	1	0	1	0	0	0	0
		b	6	1	0	2	3	0	1
体部の文様・調整	文様	A	b5	0	a1	b2	b3	b1	0
		B	0	0	0	0	0	0	0
	調整	a	1	0	1	1	0	0	0
		b	4	0	0	1	1	1	0
		c	1	0	0	0	0	0	0
色調		ア	0	0	1	1	1	0	0
		イ	9	1	0	2	3	1	1

第８表　遠賀川系土器遺構別分析一覧

［条痕紋系土器］

ＳＤ01より出土した条痕紋系土器には、壺・甕・内傾口縁土器がある。壺で口縁部の形状が判明する資料は２点と少ないが、いずれも口縁端部に押し引きを、内面はナデ調整および櫛刺突を施したものがみられる。体部の文様が判別できる資料は７点みられるが、波文の振幅幅の長いａタイプが主流であり、波文の振幅幅の短いｂ、コンパス状に描くｃタイプなども小数ながらみられる。甕と判断できる資料は３点のみであり、いずれも口縁部片である。口縁端部に施される文様は、無文と有文とに分かれ、有文に関しては、押し引きを施すものと、条線と刻みを組み合わせたものがある。内傾口縁土器は２点あり、いずれも外面はケズリ調整を行うものである。

竪穴住居跡より出土した条痕紋系土器には壺・甕があるが、量的には極めて少なく、その傾向は概ねＳＤ01にみられた様相に酷似する。ただ、壺に関してはＳＤ01では小数であった波文の振幅幅の短いｂタイプがＳＢ13・19から出土している点が注目される。

方形周溝墓より出土した資料の多くは、先述した遠賀川系土器と同様にその多くが洪水性の堆積層中から出土しており、確実に方形周溝墓に伴う供献土器であるかどうかの判断は困難である。出土土器には壺・甕があるが、概ね、壺・甕ともにＳＤ01、竪穴住居等でみられた様相に近いあり方をみせる。しかし、ＳＺ04より出土した図版22-256.258に関しては、他の遺構ではみられない特徴がみられる。258は壺の細片で識別が難しいがはね上げ状に近い波文をもち、256の甕は、口縁端部に刺突を施し、櫛状工具を利用した条痕調整を施している。時期比定の面で微妙な資料といえよう。

土坑出土の条痕紋系土器については、比較的出土量の多いＳＫ22・29を中心にみていく。ＳＫ22より出土した条痕紋系土器には壺１点、甕４点がある。注目されるのは、図版25-293.297の２点であろう。297は壺の体部片であり、細片ではあるが、外面の調整としてハケを施した後、振幅幅の長い波文を施したものである。ハケ調整をもつこの種の土器は、水神平式段階に出現するとされるものである[8]。また、293は、底部を欠損するがほぼ全形を窺うことのできる資料であり、外面の調整はハケ後斜位の条痕を施し

壺

			SD01	SB16	SB19	SZ03	SZ04	SK12	SK29
口縁部の文様	有文	a	0	0	0	0	0	0	0
		b	2	1	0	1	0	0	1
		c	0	0	0	0	0	0	0
		d	0	0	0	0	0	0	0
	無文		1	0	0	0	0	0	1
体部の文様・調整	文様	a	6	0	0	0	0	1	1
		b	1	0	1	1	1	0	2
		c	1	0	0	0	0	0	0
		d	0	0	0	0	1	0	0
	調整	内面	b11	b1	b1	b2	b2	d1	b6
		外面	e11	e1	e1	e2	e2	e1	e6

甕

			SD01	SB16	SB17	SZ03	SZ04	SK22	SK29
口縁部の文様	有文	a	1	0	0	0	0	0	0
		b	1	1	1	0	1	2	2
		c	1	0	0	0	0	0	0
		d	0	0	0	0	1	0	0
	無文		1	0	0	1	0	1	0
体部の文様・調整	文様	a	—	—	—	—	—	—	—
		b	—	—	—	—	—	—	—
		c	—	—	—	—	—	—	—
		d	—	—	—	—	—	—	—
	調整	内面	b3	b1	b1	b1	a1 b1	b3 d1	b2
		外面	e3	e1	e1	e1	e2	e3	e2

第９表 条痕紋系土器遺構別分析一覧

ている。形態的には「水神平式」というよりは「朝日式」により傾斜した形状を呈しており、水神平最末段階の壺の存在とあわせ興味深い資料といえる。ＳＫ２９からは、壺６点・甕２点が出土している。傾向としては、ＳＤ01・竪穴住居出土資料の様相と酷似するが、図版29-327のように口縁端部が細くなり文様を施さず、口縁下部に付加する突帯も低く突帯押し引きを施したものもみられる。また、他の土坑資料中でＳＫ31より出土した図版32-351は壺の体部片であるが残存状況は良好である。外面は、不揃いな振幅幅の長い波文を施した文様ａと横位の貝殻条痕・調整ｂの組み合わせからなる「水神平式」の壺に一般的にみられるものである。

［その他の系統の土器］

その他の系統の土器は、大きく４種に分類した。

Ａの削痕系土器の出土量は少なく、今回の山中遺跡の発掘調査では僅か２点確認できたにすぎなかった。いずれも、属性の組み合わせは、Ⅱ＋有＋ａからなる。

精製土器は、ＳＫ23出土資料を除き、いずれも遠賀川系土器・条痕紋系土器に共伴する形でで出土している。その出土点数は決して多いとは言えないが、そのあり方は様々なものがみられバラエティーに富む。大きく渦紋系、沈線紋系、北陸系土器に分類した。

浮線紋系土器は７点出土しているが全形の判明する資料はない。その内訳は口縁部片２点、体部片５点である。口縁部片は、吸盤状突起を貼り付け、浮線紋からなる無頸壺形土器であり、石川日出志氏分類のＥⅠ類に相当する資料である[9]。全体的に文様は、感覚的な表現ではあるがややだれた感じがみられる。体部片は、ＳＺ06出土資料のみ変形工字紋風の文様が認められるが、残りの資料は、ＥⅠ・ＥⅡ類に特徴的とされる浮き彫り風の渦紋が施されるものである。

Ｂの沈線紋系土器は、文様構成が沈線紋のみからなるものであり、総数11点出土している。いずれも壺形土器と考えられ、大・小の２つのタイプがあるようである。全体の形状の判明する資料が、ＳＫ23（図版26-300）およびＳＫ29（図版30-334）より出土している。時期的には334 が遠賀川系最末段階の土器と共伴しているので、前期末に位置付けて違いないと考えられる。

北陸系土器は２点のみ出土している。壺の体部が綾杉状の文様と縦位の沈線紋からなり、同様の器形・文様は北陸地方に広く分布する「柴山出村式」土器中に類例を求めることができる。しかし、肩部に施される文様は、北陸地方では工字紋風の文様がつくのに対し、図版31-341で明らかなように、山中遺跡出土例では、横位の沈線を施し、沈線間を刻みで飾る点で相違する[10]。

Ａ　削痕系

口縁部の形態		口縁部の文様		体部の調整		
Ⅰ	Ⅱ	有	無	a	b	c
0	2	2	0	2	0	0

Ｂ　浮線文系

口縁部	体部	底部
2	3	0

Ｃ　沈線文系

口縁部	体部	底部
4	7	1

Ｄ　北陸系

口縁部	体部	底部
0	2	0

第10表　その他の系統分析一覧

［小結］

以上、今回の発掘調査によって出土した土器を各系統に分け、その特徴を記してきた。ここでは、それを踏まえながら、各遺構の編年的位置づけを行ってみたい。出土量の豊富な遠賀川系土器を中心に考え、編年の基準は第２節の編年案に基づく。

山中遺跡の出土土器では、壷に関してみれば、口縁部が短く外反するⅠタイプはみられず、頸部が長くほぼ直立するⅡタイプのみであった。この点よりみれば、Ⅰ期の前半に遡ることはなく、すべての資料が、Ⅰ期後半に比定できると考えられる。大きく２時期に区分することが可能であり、各遺構の時期比定は、第11表に示した。

Ⅰ－３期

確実にⅠ－３期に比定できる資料としては、ＳＤ01、ＳＢ11出土資料がある。また、出土土器が細片であるため、不明瞭ではあるがＳＫ11・15・28もこの時期におけるであろう。遺構の切り合い関係より、ＳＢ10・17・19も相当するものと思われる。

壺は、この時期の特徴を示す、筒型に長く伸びた頸部を持ち、文様は幅広の削り出し突帯、貼り付け突帯などからなる。ＳＢ11より出土した図版19-185の壺は、その典型例と考えられる。甕については、出土量が少ないため判然とはしないが、「亜流」タイプが多く、口縁部内面にミガキを施ず、口縁部の肥厚が顕著でないものが散見できる。ＳＢ19からは「正統」タイプが出土している。

Ⅰ－４期

Ⅰ－４期は、山中遺跡の主体を占める時期であり、大半の遺構が当該期に相当するものと考えられる。遺構自体は、洪水の影響をうけた前後に区分できるため細分できる可能性がある。

洪水の影響をうけた前段階は、多条沈線紋からなる壺が最も特徴的であり、ＳＤ01より出土した図版15-131、ＳＺ07出土の図版23-272はその典型的な形態を示している。甕は、すべて口縁部が肥厚し、内面をミガキ込む「亜流」タイプである。

洪水後の遺構より出土した遺物は、判然としない部分が多いが、ＳＫ22出土の図版25-293のように、より中期に傾斜した土器が散見できるようになる。

遺構／編年位置	環濠	竪穴住居	方形周溝墓	土坑
Ⅰ－３期	ＳＤ01	ＳＢ10　ＳＢ11 ＳＢ17　ＳＢ19 （ＳＢ16・ＳＢ18）		ＳＫ11　ＳＫ15 ＳＫ28 （SK13・SK14・SK27）
Ⅰ－４期		ＳＢ12　ＳＢ15 （ＳＢ13・ＳＢ14）	ＳＺ01～09	ＳＫ23　ＳＫ25 ＳＫ26　ＳＫ30 ＳＫ31
				ＳＫ17　ＳＫ22 ＳＫ29 （ＳＫ24）

第11表　主要遺構編年的位置付け

3　A期の遺構とその変遷

前節で山中遺跡出土の土器に関して述べてきたが、それに基づき発掘調査で確認された遺構の変遷について考えてみたい。遺構の変遷は、遠賀川系土器が確認される段階を境として１期と２期に大別し、２期はさらに３小期に細分する。以下、各期を簡単にまとめておく。

［１期］　土器棺墓築造の時期（下り松遺跡から古沢町・西浦遺跡出土土器併行段階）

明確な遺構としては、古沢町遺跡・西浦遺跡出土土器段階に位置付けられる土器棺墓を１基検出したにすぎないが、土器棺に使用されたと考えられる資料は、それ以前の下り松遺跡出土土器段階からみられ、下り松遺跡出土土器段階以降、墓域として展開していたと考えられる。しかし、それに対応する居住域は確認されていない。

また、山中遺跡で検出される遠賀川系土器との間にギャップがみられ、基本的にはこの段階で一端遺跡は断絶する。

［２－１期］　土器棺墓から環濠掘削までの時期

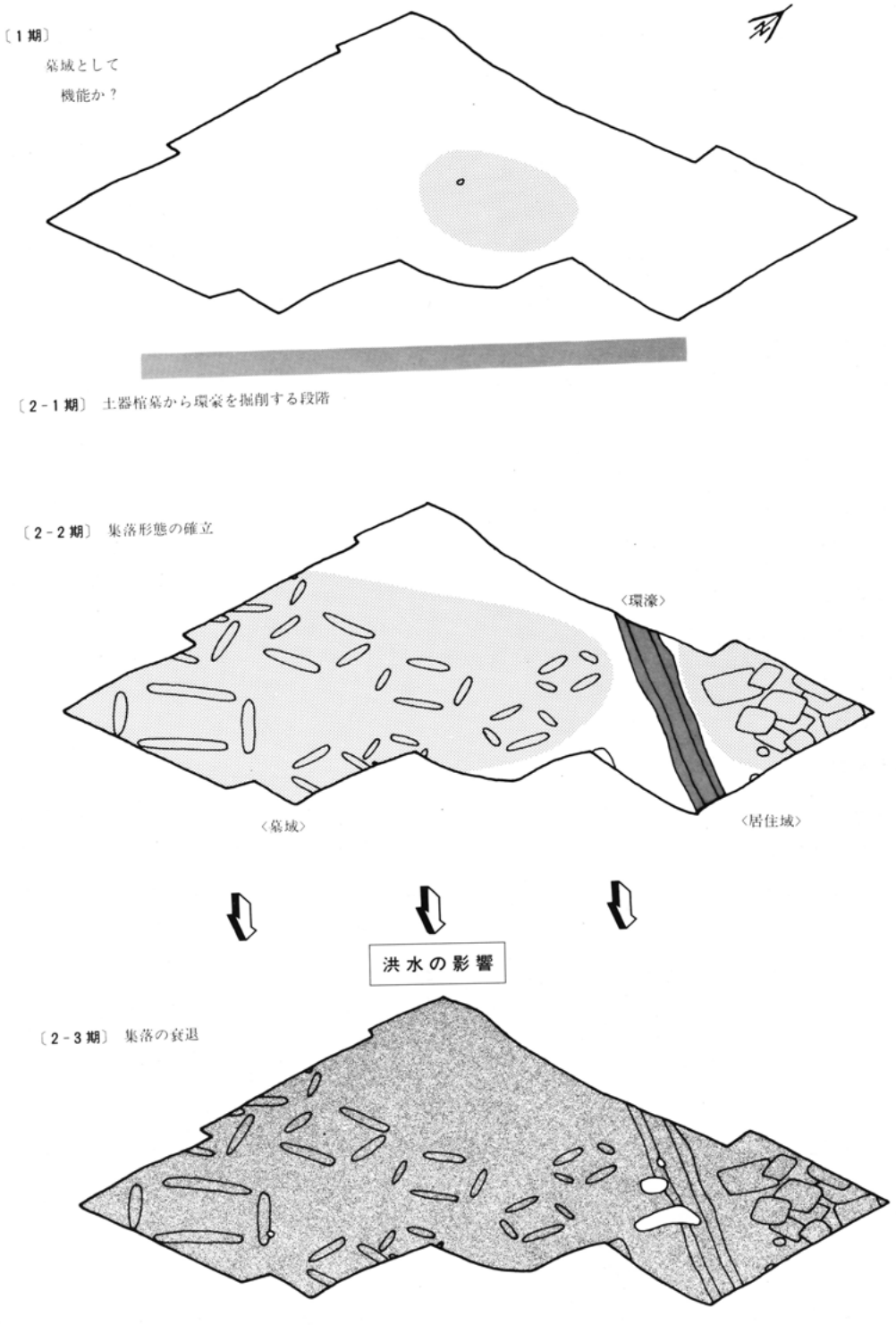
土坑２基（ＳＫ02・03）および環濠下層に多量の土器（A_1期段階）の廃棄がみられた。これら廃棄された土器中には土器棺に利用されたと考えられる資料も見られ、また、一部の土器についてはＳＤ01下層より出土した土器とＳＫ02出土資料との接合が認められた。ＳＤ01の掘削状況よりすれば、これら廃棄された遺物は、弥生集落形成時の整地に伴うものと考えられるが、何故、土器廃棄を環濠内と土坑とにわけて廃棄したのか、今後の問題である。

［２－２期］　弥生集落の形態が整う時期（Ｉ－３・４期）

３次調査の結果も併せ、遺構としては、環濠、竪穴住居11棟、方形周溝墓９基、土坑多数（石器製作関連遺構を含む）が確認され、集落としての形態が整う段階である。環濠掘削から後述する洪水の影響をうけるまでの時期であり、細分することも可能かと思われるが、ここでは大きく１時期として扱う。集落の構造としては、環濠をはさみ北側に居住域を、南側に方形周溝墓群を設定した弥生集落の典型的なあり方を示す。竪穴住居は、いずれも方形プランを呈するものであり、伊勢湾西岸地方において検出例が多い円形状のプランを呈するものとは相違する点は注目される。方形周溝墓は、いずれも四隅にブリッジを持つ「東日本型」であり、このタイプの起源を伊勢湾沿岸地域に弥生前期段階にまでに遡らせて求めることが可能となった。石器製作関連遺構としては、剝片等が廃棄された土坑がある。それらは概ね環濠の周辺に分布する。また、今回のＳＢ17、３次調査のＳＢ01のように特定の竪穴住居内で製作された可能性があり、集落内部における機能区分の存在も考えられよう。これらの遺構群の多くは、その埋土が洪水性の堆積層である褐色中粒砂に覆われており、ある時期、一気に洪水の影響を受け、遺跡自体は衰退する方向に進んでいくことになる。

［２－３期］　集落の衰退する時期（Ｉ－４期）

洪水性の堆積層を切って掘削された土坑を４基確認したが、環濠、竪穴住居、方形周溝墓等の集落を構成する遺構は全くみられず、集落としての機能を果たしていたか定かではない。出土遺物よりみれば、前期最末段階に比定されるが、続く朝日式土器は全くみられず、遺跡は断絶する。



第45図 A期遺構の編遷

4　一宮市内遺跡出土遠賀川系土器再実測報告

広大な濃尾平野のほぼ中央部に位置する一宮市の周辺では、遠賀川系土器を出土する遺跡が７遺跡確認されており、尾張地方においても特に弥生時代前期の遺跡が集中する地域として著名である。今回、山中遺跡報告書を作成する過程で、突帯紋終末期に位置付けられる下り松遺跡出土資料および一宮市内出土の遠賀川系土器を数多く実見し、再実測する機会を得たので紹介しておきたい[00]。その再実測結果は図版43～46、第12表に一括掲載した。　（服部信博）

遺跡名	図版番号	市史番号	口径(cm)	器高(cm)	備　考
下り松	1	1-53	/	/	Ⅱａ，／，／，Aa・B，B，α
下り松	2	1-06	12.8	/	Ⅰ，ア，無C，浮線・D，D，α
下り松	3	1-07	22.6	/	Ⅰ，ア，有ｂ，Cc，D，ｒ
下り松	4	1-24	27.8	23.2	Ⅰ，ア，無C，Aa，B，α
下り松	5	1-20	22.8	22.0	Ⅰ，ア，無ｄ，Ab・B，B，α
元屋敷	1	2-15	15.8	/	Ⅰ，無・無，Cb1，／，イ
元屋敷	2	未	16.8	/	Ⅰ，無・無，Ca1+，／，ア
元屋敷	3	2-19	24.8	/	Ⅱ，無・無，Ca2，／，ア
元屋敷	4	2-08	15.4	/	Ⅰ，無・無，Aa1，／，ア
元屋敷	5	2-13	19.0	/	Ⅰ，無・無，Aa1+，／，ア
元屋敷	6	2-12	20.2	/	Ⅱ，無・無，Ab5，／，ア
元屋敷	7	2-03	16.6	/	Ⅰ，無・無，Aa3，／，イ
元屋敷	8	2-39	17.6	/	Ⅰ，有ｃ・無，Ab3，Ab4，ア
元屋敷	9	2-11	/	/	／，有ｃ・無，Aa1，Aa2，イ
元屋敷	１０	2-24	/	/	／，有ｃ・無，／，Ab0，ア
元屋敷	１１	2-40	18.2	28.9	Ⅰ，無・無，Ac3，Ba4，ア
元屋敷	１２	2-41	16.6	24.2	Ⅰ，無・無，Ba6，Ba6，ア
元屋敷	１３	2-18	16.6	/	Ⅰ，有ｃ・無，Ba1，／，イ
元屋敷	１４	2-04	16.6	/	Ⅰ，有ｃ・無，Ba1+，／，イ
元屋敷	１５	2-06	16.6	/	Ⅰ，有ｃ・無，Ba2，／，ア
元屋敷	１６	2-32	18.6	/	Ⅰ，有ｃ・無，Ba1+，／，イ
元屋敷	１７	2-05	17.0	/	Ⅱ，有ｃ・無，Ba3，／，イ
元屋敷	１８	2-49	16.8	/	Ⅰ，有ｃ・無，Ba3，／，ア
元屋敷	１９	2-17	33.4	/	Ⅰ，有ｃ・無，Ba1+，／，イ
元屋敷	２０	2-20	22.0	/	Ⅰ，有ｃ・無，／，／，ア
元屋敷	２１	2-23	27.0	/	Ⅱ？，有ｂ・無，／，／，ア
元屋敷	２２	未	20.4	8.9	
元屋敷	２３	未	16.8	/	Ⅰ，有b・ａ，Aa・ａ，ア
元屋敷	２４	未	19.8	/	Ⅰ，有，ａ・ｂ
元屋敷	２５	未	25.8	/	Ⅱ，無，ａ
元屋敷	２６	未	24.4	/	Ⅰ，無，ａ・ｃ
元屋敷	２７	未	24.8	/	Ⅰ，有，ｃ
元屋敷	２８	未	27.4	/	Ⅰ，有，ｂ
元屋敷	２９	未	23.4	/	Ⅰ，有，ｂ
元屋敷	３０	2-63	23.2	/	Ⅰ，有，ａ・ｂ
元屋敷	３１	未	27.8	/	Ⅱ，有，ｂ
元屋敷	３２	2-34	14.9	8.6	
河　田	1	2-07	/	/	Ⅱ，／・／，Ac8+，Ba1+，イ
河　田	2	2-16	27.2	/	Ⅱ，有ａ・ａ，Ab・ｂ，ア
弥　勒	3	2-28	/	/	Ⅱ，／・／，／，Ba7+・Cb1，ア
弥　勒	4	2-09	/	/	Ⅱ，／・／，Ca3+，Ba7+・Cb3，ア
弥　勒	5	2-15	9.9	2.4	
弥　勒	6	2-16	14.0	/	
弥　勒	7	2-35	11.3	1.9	
弥　勒	8	未	24.2	/	Ⅰ，有ａ・ａ，Aa・ａ，ア

※　備考は各分析項目に対応する。

第12表　一宮市遺跡出土土器再実測資料一覧

註

(1) 野口哲也　1991 「愛知県(尾張)の概要」『東日本における稲作の受容』－第Ⅲ分冊　甲信越・北陸・東海地方－東日本埋蔵文化財研究会

(2) この資料も、氷系土器の可能性が考えられる。

(3) 設楽博己氏の御教示による。

(4) 遠賀川系土器と条痕紋系土器の比率は、口縁部の残存する資料からみると、遠賀川系土器(６割)、条痕紋系土器(４割)となる。また、壺・甕の出土比率は、遠賀川系土器(壺５：甕５)、条痕紋系土器(壺４：甕６)となった。

(5) 遠賀川系土器に関しては、いわゆる「正統」タイプと「亜流」タイプがあるが、その出土比率は、壺(正統７：亜流３)、甕(正統0.5：亜流9.5)となり、壺は正統タイプが主流となすのに対し、甕は圧倒的に亜流が主体を占める結果となった。

(6) この資料も日本海側地方との関連が考えられる資料である。これまで、遠賀川系土器といえば畿内地方とのつながりのなかで捉えられてきたが、それのみではなく視野を拡大して遠賀川系土器を見つめ直す必要が出てきたといえよう。

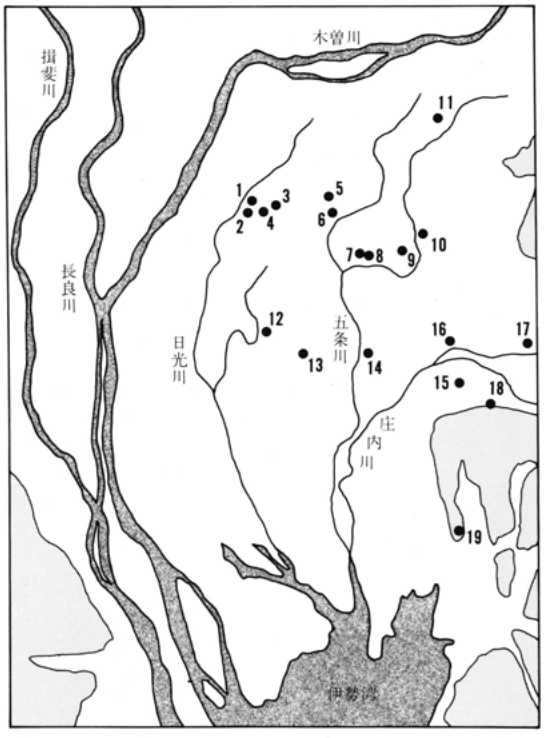
(7) 中村友博　1982 「土器様式変化の一研究－伊勢湾第Ⅰ様式から伊勢湾第Ⅱ様式へ－」『考古学論考　小林行雄博士古希記念論文集』

(8) 中村友博　1987 「水神平式土器」『弥生文化の研究』４　弥生土器Ⅱ

(9) 石川日出志　1981 「三河･尾張における弥生文化の成立－水神平式土器の成立過程について－」『駿台史学』52

(10) 久田正弘氏の御教示による。

(11) 資料の実見・再実測にあたっては、一宮市博物館の、土木典生氏・田中禎子氏の御配慮を得た。



1　山　中（一宮市）
2　河　田（一宮市）
3　北川田（一宮市）
4　八王子（一宮市）
5　馬見塚（一宮市）
6　弥　勒（一宮市）
7　元屋敷（一宮市）
8　白　山（岩倉市）
9　のんべ（岩倉市）
10　曽　野（岩倉市）
11　西　浦（大口町）
12　大塚古墳下層（稲沢市）
13　清　水（稲沢市）
14　朝　日（清洲町）
15　西志賀（名古屋市）
16　月縄手（名古屋市）
17　松河戸（春日井市）
18　片山神社（名古屋市）
19　高　蔵（名古屋市）

尾張地方の弥生前期遺跡分布図

第２節　尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相

１　はじめに

遠賀川系文化が波及した東端の地とされる尾張地方における弥生時代前期の状況は、朝日遺跡貝殻山貝塚、西志賀遺跡などの学史上著名な遺跡が数多く存在するにも関わらず、長らくその実態は不明であった。それは、小規模な発掘調査および表採資料に基づく土器の型式学的な研究にのみ終始し、それ以外の材料を用いての研究がなおざりにされていた点に起因すると考えられる。近年、ようやく当地方においても山中遺跡（一宮市）、松河戸遺跡（春日井市）、月縄手遺跡（名古屋市）、高蔵遺跡（名古屋市）等面的な発掘調査がなされ、良好な資料に接することができるようになってきた。

そこで本節では、尾張地方を中心として現在までに蓄積された資料を今一度整理し、「土器」・「石器」・「集落」・「墓制」等の観点より、弥生時代前期の抱える諸問題について考えてみたい。

（服部信博）

２　土　器

［突帯紋系土器］

まず、山中遺跡から出土した粘土紐を口縁部あるいは口縁部と肩部に張り付けた、縄文時代晩期後半に編年される、いわゆる突帯紋土器とそれに伴う土器について簡単にまとめてみたい。

山中遺跡出土の突帯紋土器は、３次調査のものも含め12点出土している。このうち口縁部が10点、肩部が２点である。

これらのおもな特徴は、口縁部が丸みをもちやや外反している。そして少し下がった位置に幅の広い低い突帯を貼り付け、その上に二枚貝あるいは指頭によって押圧を行っている。肩部突帯は２点と数少ないが、口縁部突帯と同じく幅の広い低い突帯が貼り付けられ、その上を貝殻によって押圧が施されている。これらの突帯紋土器はいずれも小破片であるため器表面の調整については良く解らないが、３次調査出土の資料（図版６－下段）や、今回出土の資料（図版６－63）は突帯以下に横位の二枚貝条痕施す。おそらく他の資料も同様の調整が行われているものと思われる。

以上の突帯上を貝殻や指頭によって押圧する手法などの諸特徴から、山中遺跡出土の資料は、当地方で馬見塚式とされる型式に相当するものと考えられる。

突帯紋土器以外の土器は、無文粗製の深鉢や鉢などがある。厳密な意味で突帯紋土器と共伴とはいえないが、調査時の所見などから同時期のものと見てさしつかえないものと考えられる。

このうち量的に最も多いものは、突帯紋土器と同じく器表面を貝殻によって調整した無文粗製の深鉢と、器表面をヘラ状工具などでケズリ調整を行った無文粗製の深鉢である。これらも突帯紋土器と同様、破片資料が多く全形が分かる資料は少ないが、口縁端部の形状によって、口縁端部を丸く仕上げるもの（図版９-87 ）、面取りを行い粘土が土器の内外にはみ出したもの（図版７-70 ）、端部が内傾し面取りが行われているもの（図版８-73 ）などに分類することができる。大参義一氏によれば、このような無文粗製深鉢の口縁端部の面取りは新しい要素とされ、馬見塚遺跡Ｄ地点は古い様相を示し、下り松遺跡は新しい様相を示すとされている（大参　1972)。これによるならば山中遺跡の資料は下り松遺跡に近く、馬見塚式の中でも新しい段階から、古沢町遺跡・西浦遺跡出土段階までの様相を示しているものと考えられる。

突帯上の施文は、近畿地方などではヘラ状工具などによって斜め横方向から刻み目を入れるものが一般的であるが、本遺跡のように貝殻もしくは指頭によって押圧を行う施文方法はこの地域の特色の一つであり、馬見塚式のメルクマールともされている。また、施文具や調整具などに貝殻が使い続けられるのもこの地域の特徴といえよう。

同時期の資料は尾張地方では、同じ一宮市内の馬見塚遺跡（一宮市　1970）や下り松遺跡（一宮市 1970)、南知多町の神明社貝塚（南知多町教育委員会　1989）などで出土している。また、岐阜県徳山村のはいづめ遺跡（岐阜県教育委員会　1990）出土の突帯文土器も山中遺跡出土の資料に近似するが、山中遺跡出土資料の底部が平底であるのに対し、はいづめ遺跡では丸底のものもみられる。時期差ではなく地域差であろう。このはいづめ遺跡の資料に関しては同報告書中において「下り松式」の名称が使われているが、その型式内容について詳しくは触れられておらず、安易な型式設定は問題があると思われる。

馬見塚式については増子康眞氏による一型式論、大参義一氏・中村五郎氏による細分論、設楽博己氏による否定論などその評価は大きく分かれており、問題の多い型式である。ただ、豊川市の麻生田大橋遺跡の同時期と考えられる資料が器表面の調整などにおいて様相を異にしており、尾張と東三河とでは型式内容が若干異なることが指摘されている。

馬見塚式を含む尾張地方のこの時期は、他地域の突帯紋深鉢が時間的に一条突帯から二条突帯へと変化をしていくのに対し、最後まで一条突帯であること、他地域の深鉢がほとんど全て突帯のつく深鉢であるのに対し、当地方では山中遺跡のように突帯紋深鉢と突帯のつかない無文の粗製深鉢が数多く存在すること、また、土器組成中の浅鉢の比率も他地域に比べ少ない、という諸傾向がみられる。この様な特色から同じ突帯紋土器圏内であっても、その東端にあたる尾張地方ではかなり様相の異なった状況であったことがうかがえる。この土器型式の内容の差異は、あるいは次代の稲作の受容のあり方に関わってくるものであるかもしれない。

他地域との対比では、氷Ｉ式併行と考えられる細密条痕の深鉢（図版12-111・図版13-112）が出土しており、これによって中部高地、あるいは関東との時間的な関係をある程度押さえることができると考えられる。西日本との関係については、直接対比できるような資料に恵まれていないが、現時点では従来増子康眞氏によって述べられているように、近畿地方の長原式に併行するものとしておきたい。

突帯紋土器に代表されるこの時期は、稲作の開始という日本文化の基盤にも関わる問題をともなっ

ており、そのために古くから重要視され、多くの研究者によって論じられてきた。そして、その文化の動態をとらえるためにはより細かなタイム・スケール、つまり編年が必要である。しかしながら突帯紋土器は突帯以外に特徴がなく、このために編年を行う上での大きな障害となっている。また、突帯紋深鉢は地域間の差異が大きいため広域編年にも不向きである。また、浅鉢による広域編年が泉拓良氏によって行われている（泉　1989）が、より細かなところまでは到達していないのが現状である。

山中遺跡の資料が全て良好な資料とは言い切れないが、今後この地域においても山中遺跡のような新資料と、これまでの資料をもとに詳細な編年を作りあげていくことが必要であり、他の資料も加え、再度検討してみたい。　（野口哲也）

［遠賀川系土器］

（1）　若干の問題

かつて紅村弘氏は尾張地方の前期土器を横軸において五つ、縦軸では二つに区分した（紅村 1956）。横軸の五つは、「第1類」から「第3類」までが遠賀川系土器群（組成）の変異態（組成）であり、それぞれ「正統」「亜流」「削痕系」とし、あと「条痕系」（組成）を「第4類」、出現頻度の非常に低い大洞式に類似するものを「第5類」とした。そして縦軸の二つは、「貝殻山式」と「西志賀式」とし、畿内編年との対比では、それぞれ中段階と新段階においた。

紅村氏より遅れて久永春男氏は二反地貝塚の調査成果から二反地諸式を設定した（久永　1966）。ところが、それは基本的に畿内編年を下敷にしたもので、紅村氏のようにこの地方の特性を明示する内容とはなっていない。

この地方の前期土器の内容を考える場合、研究史上からみて紅村氏の5系統区分の優秀性は明かである。ただ問題は、その後の資料増加のなかでそうした区分がどれだけ全体をカバーできているのかという点にある。これまでのところは資料増加（報告）が遅々としているところもあって特に大きな問題は生じていないようである（が、私にはそのこと自体大きな問題のようにも思える）。

さて、現状の問題は5系統区分ではなく「貝殻山式」から「西志賀式」への変遷過程が検証できないことにある。この点は久永氏の場合も同様である。いずれも基準資料の提示のないままに編年表のみ提出されているからである。紅村氏は「層位変化」に対応した「型式変化」に述べられているものの、層位ごとの資料提示がなければわれわれは判断の材料を持てないのである。まさに自分で判断できない弱者である。そのためにどうしたか。

これまで前期土器に言及した多くは、無理やり作り上げた「貝殻山式」や「西志賀式」のイメージに資料をねじ込むことになったのである。無残というほかない。

基準資料の提示がないことの責任を設定者に帰するにはこの地方の目にあまる多くの障害からみて一方的過ぎるきらいも無いとは言わないけれど、われわれ後塵を拝する朋輩が不可抗力で劣等的位置に置かれるのもまた慮外と言わねばならない。

（2）　編年

愛知県における遠賀川系土器の区分は、これまでの遅々とした資料集積の中で当遺跡を含めた遺構出土資料の漸増によって、ようやく単位の比較にもとづいて行うことができる段階に至った。すなわち、名古屋市西区月縄手遺跡土坑出土資料（愛知県埋蔵文化財センター　1990）、名古屋市熱田区高蔵遺跡SD03出土資料（南山大学人類学博物館　1988）などである。これに遺跡・地点（包含層）出土資料をあわせて大きくは次のように配列することができる。ただし、以下に述べるのは現状での試案であり、今後の資料の集積によって補正していかなければならない。

Ⅰ－1 期

貝殻山貝塚下層？　（愛知県教育委員会　1972）

朝日遺跡貝殻山地点（貝層）では、頸部と体部に段を有する壺や体部に削り出し突帯の壺が存在する。層位的にまとまりを有したものではないが、ここでは最古段階に位置づけておく。

Ⅰ－2 期

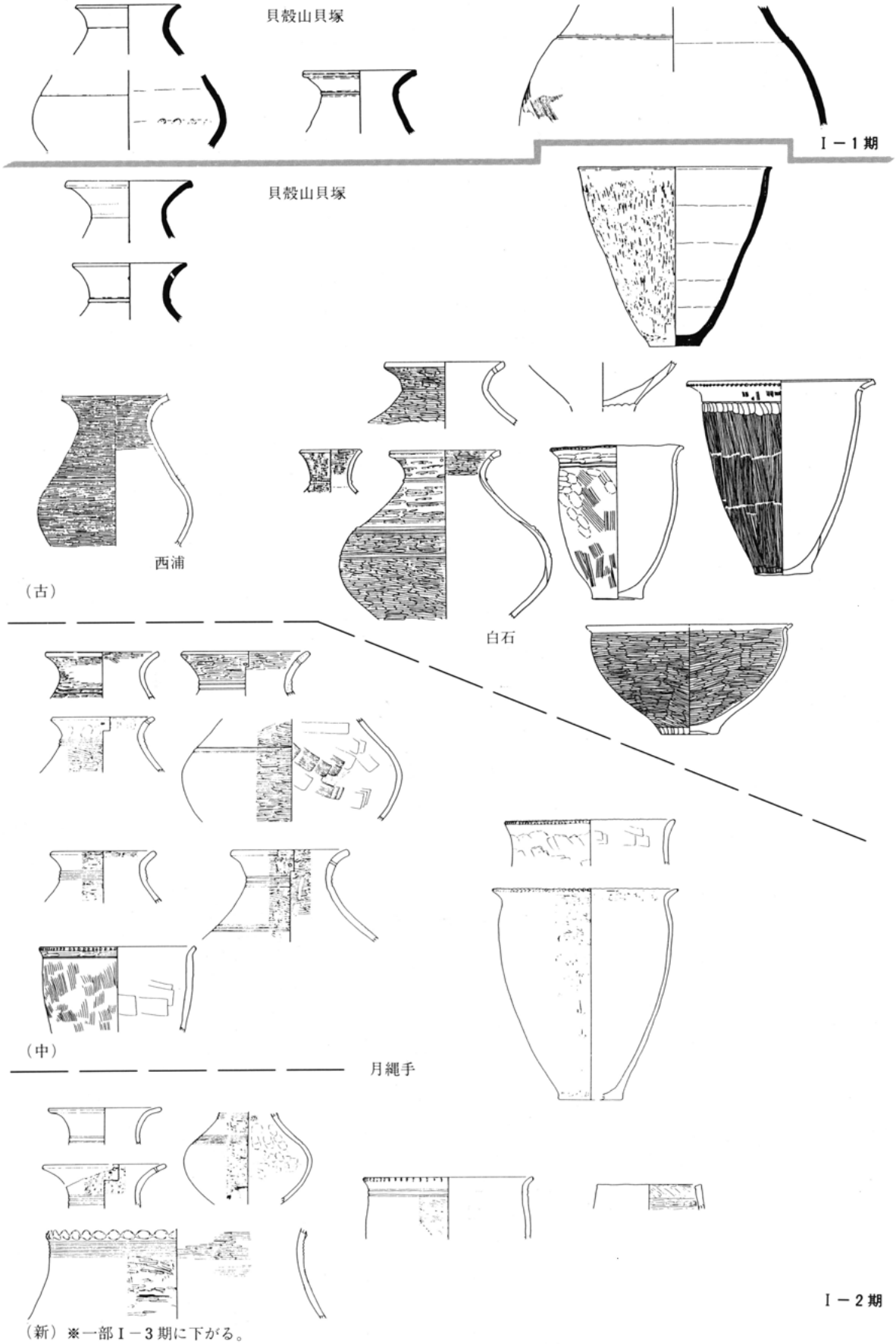
月縄手遺跡・元屋敷遺跡下層：古相（一宮市　1968）・白石遺跡（贄　1991）　／／西浦遺跡（愛知考古学談話会　1985）・古沢町１号溝（名古屋市教育委員会　1971）

月縄手遺跡を基準として考えてみる。月縄手遺跡の壺には「く」字状に外反する短い口縁部を有するものと、それより口縁部が長くゆるやかに外反するものとがある。形態的には前者が古い特徴を示しているので、新古の特徴が共存する資料と言える。壺では削り出し突帯、沈線ともに３条以下が主で、甕も沈線３条以下が主である。甕の沈線は壺に比べて多条化の傾向はそれほど強くなく、この時期以後も４条までを目安として普通それ以下の条数の甕が組み合わさるようである。

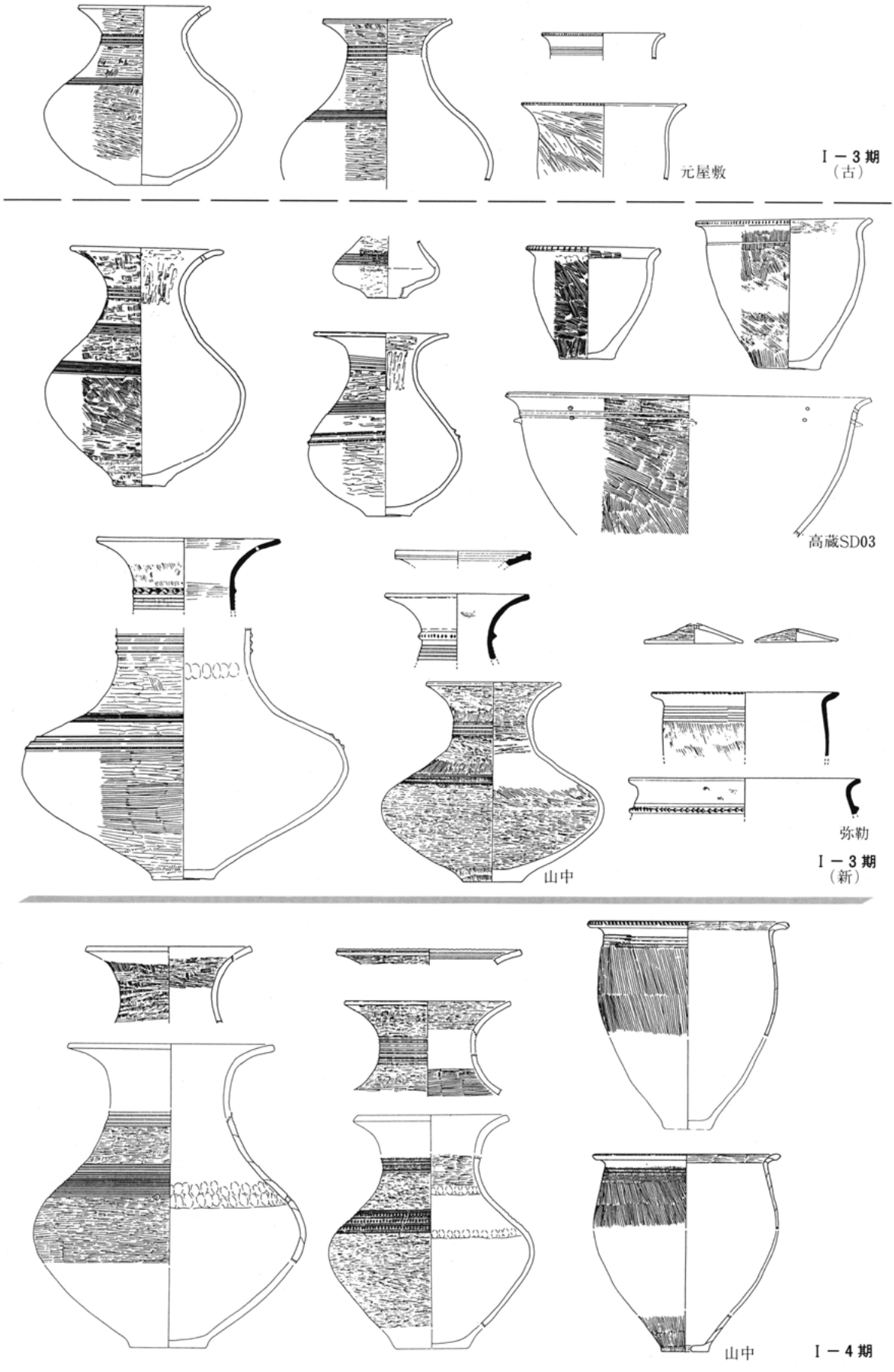
ところで月縄手遺跡資料にみる新古の様相には、それが同一時期であるのか混在であるのかなお検討すべき点がある。新しい部分には高蔵遺跡とかなり近接するか、ほとんど同じ時期と見なすことができる様相もありそうである。

問題はⅠ－1 期との間をどのように埋めるかである。現状では月縄手遺跡資料との間には型式学的差異が大きい。将来的に古相が主体をなす資料が検出される可能性は残されており、この時期がさらに区分される可能性もある。しかし、それでも白石遺跡・西浦遺跡出土の遠賀川系壺にみられる頸部沈線１条が明確な時間幅をもつことになれば、月縄手遺跡資料を最大限拡張しても同資料の出土していない現状では月縄手遺跡の範囲をそこまで広げることは難しいのである。したがって、その場合にはこれらの資料をⅠ－1 期に繰り上げるか、あるいはそれに後続する時間的位置として別に一時期設定することになるかである。

白石遺跡は三河地方で初めて検出された環濠を巡らすと推定される弥生時代前期の遺跡である。資料は十分とは言えないが、「く」字に外反する短い口縁部をもち頸部に沈線を１条施した壺があり、月縄手遺跡より明らかに古い特徴を有する。したがって、ここでは月縄手遺跡を新古に２区分して、そ



第46図　遠賀川系土器の変遷(1)



第47図 遠賀川系土器の変遷(2)

の前に白石遺跡を置くことにしたい（しかし、第46図の［中］にした資料はなお時間幅があり、将来の十分な検討を必要とする。）

古　　中　　新

西浦遺跡遠賀川系壺・白石遺跡　→→　月縄手遺跡：古相　→→月縄手遺跡：新相の一部

以上のように細分の余地は残されているが、Ⅰ－2 期として大きく一時期にまとめておく。

この時期体部外面ケズリ深鉢は口縁部を外反させるとともに刻みを加えて遠賀川系甕との接近を示す（いわゆる削痕甕の成立）。条痕紋系土器においても深鉢の口縁部は外反し、同様に接近する。

Ⅰ－3 期

高蔵遺跡D2（名古屋市教育委員会 1982 ）・高蔵遺跡SD03・元屋敷遺跡下層：新相・弥勒遺跡（一宮市　1968）・松河戸遺跡（神谷・後藤　1990）

高蔵遺跡は環濠と推定される溝から出土したもので、位置的にみてD2が内側の円弧に相当するので、SD03はそれより新しい可能性を考えていた。紹介された資料による限りは確かにD2から短く外反する口縁部をもち頸部に沈線？が１条施された壺があるけれども、資料的には不十分である。遠賀川系土器については十分に比較することができないのでおくとして、条痕紋系土器にはSD03のほうが古い特徴を示す資料もあるので、溝の埋没過程を含めて遺構の検討を必要としている。松河戸遺跡をふくめて正式報告を待ちたい。

この時期の特徴としては、壺は「く」字状に外反する短い口縁部を有するものはなくなり、口縁部がややのびてゆるく外反するものや、頸部が筒状をなし強く外反するものに主体が移る。これは頸部紋様である削り出し突帯や沈線の多条化に対応した動きと考える。他には、とくに体部下半が横に強く張り出す形態の壺（「西志賀式」の指標ともされた）が特徴的に存在する。紋様は削り出し突帯・沈線ともに４条以上が主となり、貼り付け突帯も盛行する。しかし、甕においては沈線の多条化する傾向は弱く、４条以下がほとんどである。

遠賀川系遺跡での条痕紋系土器の出現率はこの時期高率となる。壺・甕とも口縁部ナデ調整で無紋のものと押し引きのものとがある。いわゆる「亜流」もこの時期から目だつようになる。

Ⅰ－4 期

山中遺跡SD01上層（本文参照）

壺は沈線紋や貼り付け突帯が多条化する。この段階では削り出し突帯はほとんど見られない。

（３）　終末

遠賀川系土器に続いては「朝日式」が設定されている。これまでのところ「朝日式」に多条沈線紋の施された壺の共伴例はあるが、それを遠賀川系土器の名残であるかすることができるかどうかは明確でない。共伴しても個体数が著しく少ないこと、この壺以外に遠賀川系土器につながる器種は認められないことから、こうした単体をあえて遠賀川系土器の残存と言わなければならない根拠はない。

壺における紋様のレパートリーの一つとして、「朝日式」を構成する要素と考えるほうがよいだろう。

（石黒立人）

（4）　「亜流」について

紅村弘氏によって設定されたいわゆる「亜流遠賀川式土器」（以下、「亜流」と呼ぶ）について考えてみたい。

①「亜流」の分布

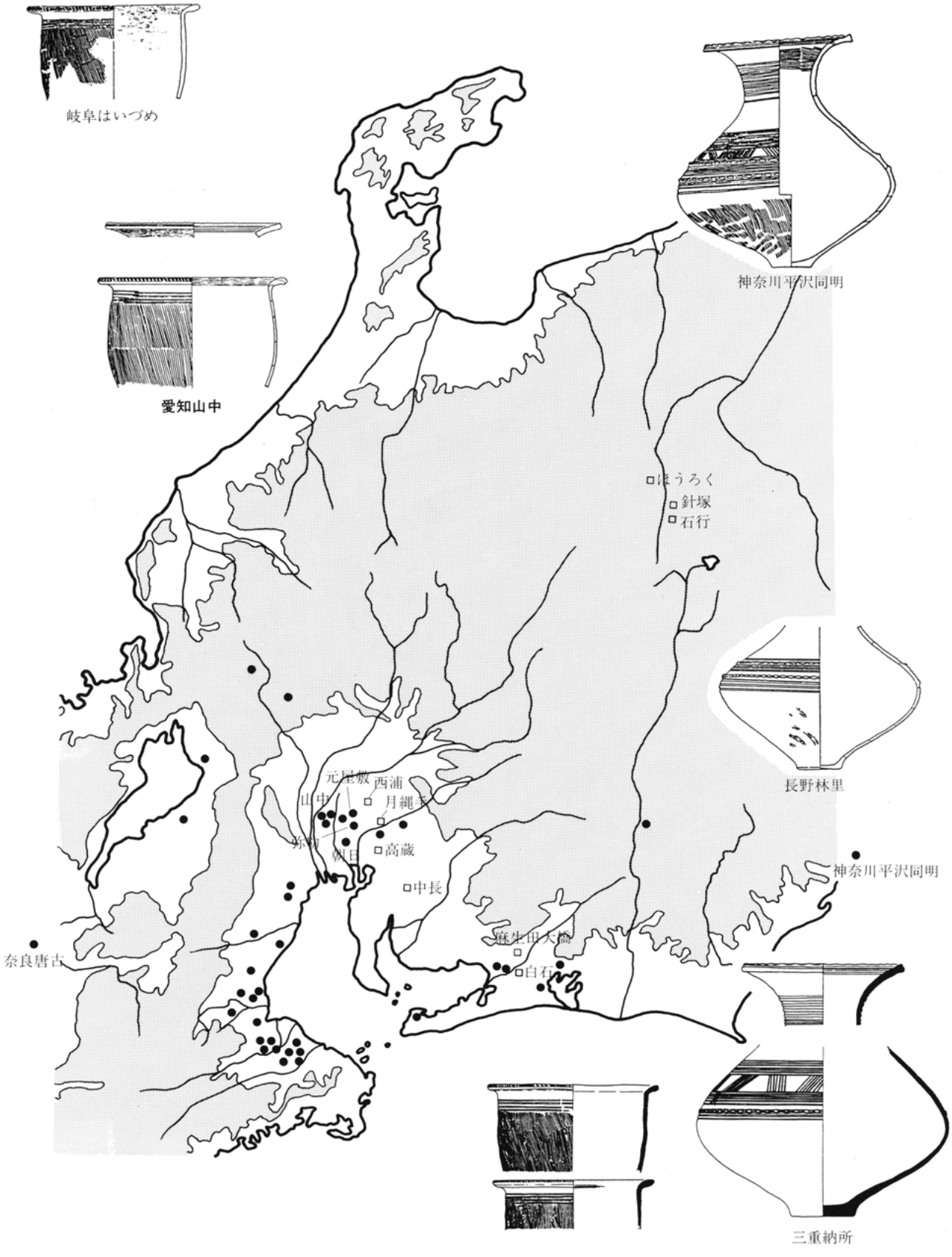
「亜流」の分布状況を第48図に示した。紅村氏が指摘されているように、その分布の中心は三重県津市の南方（中勢・南勢地方）にあることは明らかである。しかし、それのみで構成される遺跡はみられない。愛知県尾張地方の山中遺跡をはじめとした北西部にも、その分布の集中がみられるが、伊勢地方の状況と同様にやはり「亜流」単独の遺跡はない。他に、滋賀県湖北地方、岐阜県美濃地方にも出土遺跡が認められる。また、東海道沿いに遺跡が点在して分布しており、遠く長野県林里遺跡、神奈川県平沢同明遺跡等にもその出土がみられることは注目するに値しよう。中南勢地方および尾張地方における分布状況は、概ね突帯紋土器出土遺跡の分布状況に合致する（奥　1991）。

②成立の状況

伊勢湾沿岸地方の弥生前期土器研究に先鞭をつけられた紅村弘氏は、古くからこの「亜流遠賀川式土器」が、在地の晩期縄文土器（馬見塚式）に系譜がたどれ、型式学的にも追うことができると説明されてきた（いわゆる「正統遠賀川式土器」との２系統並存説）。この見解に対しては、三重県の研究者を中心に反論がだされ、「立地差説」（谷本・山沢　1971）、「１系統時期差説」（小玉・伊藤洋他1973、伊藤久嗣　1980）などの見解が示されてきた。近年、この「亜流遠賀川式」に関する研究が進み、高橋信明氏（高橋　1985）は、甕の製作技法の面より、鈴木克彦氏（鈴木　1991）は、遺跡の立地、分布、出土状況などから、「亜流遠賀川式土器」にみられる縄文的要素を認めておられ、筆者も系譜上は在地の晩期縄文土器にたどれるものと考える。しかし、紅村氏が説くような「亜流」の型式変遷（紅村　1981）は、現状の資料では認めることはできない。

石黒立人氏は、土器の型式変化を「変容」と「変換」という大きく２つのパターンをもって説明する。「変容」とは、型式学的連続性が認められる場合、「変換」とは、型式学的連続性が追えない場合をさす。また、「変換」類型を異化作用と同化作用の２つの側面から考える。異化作用が発生するのは、影響を与える側と受けた側とが基本的に均衡関係を保持している場合認められ、同化作用は、その均衡関係が崩れ、従属的包括関係への移行によって生じるとされる（石黒　1990）。

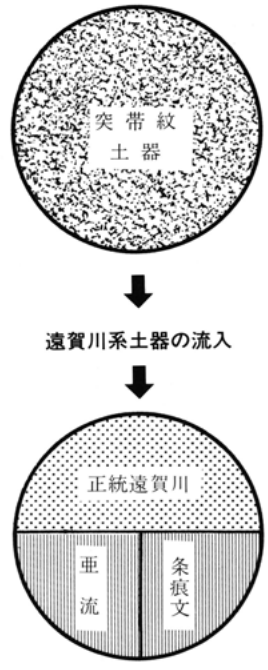
この石黒氏の考えに基づいて、「亜流」の成立を考えた時、次のような状況が推測される。縄文晩期終末期、地域性は認められるものの伊勢湾沿岸地域は、いわゆる「突帯紋土器文化」圏に含まれてい



第48図 「亜流」土器の分布

た。やがて、西方から新たな文化を持った「遠賀川系土器文化」が流入してくる。それがきっかけとなり、土器の「変換」が余儀なくされる。その「変換」は、文化的な側面よりみれば、明らかに同化作用を伴うものであったと考えられる。つまり、伊勢湾沿岸地域には上位階層としての「正統遠賀川系土器集団」と下位階層の「突帯紋土器集団」が成立することになり、土器のうえでも、それが反映され、晩期縄文土器と系譜のつながるいわゆる「亜流」が成立したものと考えられる。さらに、分布の項目で述べたように「亜流」単独で構成される遺跡が確認されないこと、短発的に遠方まで伝播している事実は、この「変換」レベルを如実に示していると思われる。また、同時期伊勢湾東岸地方に広がる「条痕紋系土器」の成立も「変換」類型の異化作用で説明がつくものと考えられる。

つまり、遠賀川系土器流入に伴う「変換」が、「亜流」と「条痕紋系土器」を生み出したといえよう。



第49図 「亜流」成立のシステム

③「亜流」の変遷

「亜流」を構成する器形は、壺、甕が中心であり、納所遺跡では鉢、無頸壺など他遺跡にはないものがみられる。しかし、現在までのところ遠賀川系土器を出土する遺跡を調査すれば必ず出土する蓋形土器は、１点もみられない。未だ蓋を掘り当てていないだけであるのか、蓋を欠く土器組成であったのか今後の検討課題である。

また、甕に関しては、近年、資料の集積がすすみ、ある程度その変遷をたどることができる。

Ⅰ－２期

甕の口縁部の外反は弱く、内面のミガキ調整もみられない。

Ⅰ－３期

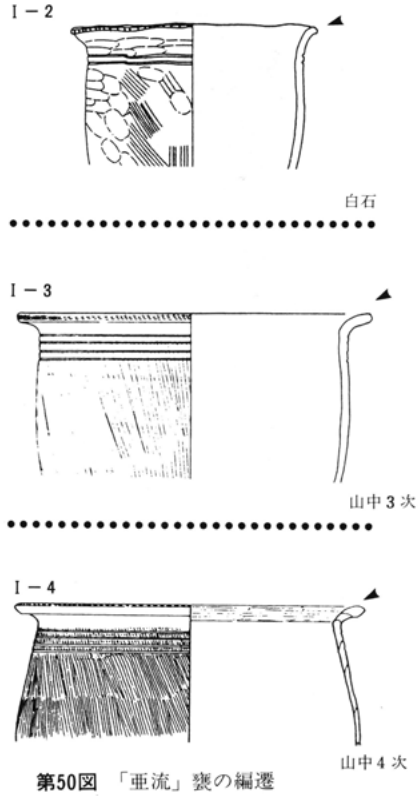
甕の口縁部は大きく屈曲するが、口縁部の肥厚はそれほど進行しておらず、口縁内面におけるミガキ調整も顕著ではない。

Ⅰ－４期

Ⅰ－３期と同様に、口縁部は大きく屈曲するが、前段階と大きく異なるのは、口縁部の肥厚が顕著となり、大半の資料が口縁内面にミガキ調整を施すようになる。

しかし、この変遷はあくまでも試案であり、壺の変遷とともに今後の検証が必要となろう[1]。

（服部信博）



第50図 「亜流」甕の編遷

［条痕紋系土器］

①遠賀川系土器との対応関係

Ⅰ－2 期（中？）には深鉢の口縁部外反によって「甕形土器」への移行が行われる。しかし体部条痕の羽状化開始はなお明確でない。壺・甕同時でない可能性もあり、また羽状条痕に関しては思いのほか斉一的ではないようである。口唇部への二枚貝による押し引きはⅠ－3 期には認められるものの、ナデも並存する。Ⅰ－4 期には壺・甕ともほとんどが口縁部に押し引きを施すようになる。頸部の波状紋はⅠ－3 期には確実存在するけれども、Ⅰ－2 期まで遡るかどうかは不明である。また口縁部内面の紋様はⅠ期を通して無紋が主であり、口縁部内面施紋はⅡ期以降である。三河地方でもおそらくはⅡ期の初頭に位置し、「水神平式」の細分に関わることになろう。

②「内傾口縁土器」について

中村友博氏が「内傾口縁土器」（中村　1987）と呼んだ器種はⅠ－2 期㈜には出現しており、Ⅰ－2 期㈜まで遡る可能性もある。分布はもっぱら尾張・美濃地方で、三河地方東部（豊川流域）ではみとめられない。大きく観て木曽川流域に分布すると言える。多くは破片であるため全形は窺えないが、基本形は口縁部が外反せず内傾して筒状に立ち上がる無頸壺形土器である。体部上半は条痕の施されるものとそうでないものとがある。条痕を施したものは近畿地方東縁部への搬出が知られる。これはⅡ期には「岩滑式」の「厚口鉢」へと変化する。したがって、「岩滑式」の起源は尾張・美濃地方のいずこかに求められる。

③「樫王式」から「水神平式」への移行に関して

いわゆる「樫王式」から「水神平式」への移行に関してはまだ整理し切れていない部分がある。かつて「樫王式」の認識が混乱したことの一つに「樫王式」壺の特徴である口唇部ナデ調整への過大な注目があった。この特徴はしかし、朝日遺跡や長野県ほうろく屋敷遺跡Ｂ群土器棺（明科町教育委員会　1991）のように、頸部下半に波状紋を施す「水神平式」壺にも認められるもので、なんら時間的な限定を有するものでないことが明かとなった。全形のわかる資料の重要性が痛感させられる。この点に関わって「水神平式」の細分についても問題がある。

関係する資料の時間的区分　「水神平式」の細分は頸部の波状紋を指標とする傾向が認められるけれども、少なくとも口縁部から頸部、頸部から体部、あるいは全形に近似する資料を見る限りでは波状紋を扱うだけでは不十分である。若干の資料を挙げれば次のようになる。

尾張地方では朝日遺跡（愛知県教育委員会　1982）において口唇部ナデ調整＋頸部波状紋の壺が出土している。高蔵遺跡には口縁部は不明だが、頸部に波状紋、体部は羽状条痕とはならずに横位条痕

の例がある。同様の例は山中遺跡ＳＫ31からも出土している。

三河地方では口唇部押し引き・体部羽状条痕であるが頸部無紋の資料が麻生田大橋遺跡（愛知県埋蔵文化財センター　1991）から出土している。豊川市教育委員会調査資料では頸部波状紋で体部斜位条痕の例がある。水神平遺跡資料（中村　1987）は口唇部押し引き＋頸部波状紋であり、体部は下半部が羽状条痕である。

長野県ほうろく屋敷遺跡では口唇部ナデ調整・頸部波状紋・体部羽状条痕の壺が出土している。刈谷原遺跡（愛知考古学談話会　1985）には波状紋・体部羽状条痕の壺が１点ある。以上挙げた資料の波状紋は複帯であり、概して振幅より波長が小さく波頂部が尖るような傾向を示す。

このあとに続くのは水神平式の最終段階となり、遠賀川系土器から「朝日式」という編年区分に従えばⅡ期となる。整った波状紋やコンパス描きの波状紋が単帯あるいは複帯で直線紋化した横位条痕と組み合わさる例で、朝日遺跡、岐阜県北浦遺跡（可児市教育委員会　1973）や静岡県青木遺跡（佐藤　1982）など尾張・美濃地方から遠江地方（関東地方南部）まで比較的広範囲に認められるが、一遺跡における出土点数は思いのほか少なく、尾張地方から遠江地方西部にかけてはハネアゲ紋と共に出土する傾向にある。この場合には波状紋とハネアゲ紋という型式差が時間差を含んではいても出土状況では時間差を示していない。一時期を画したとしても極めて短期である。体部調整は基本的に羽状条痕である。繰り返すが、「水神平式」にあると言われる壺口縁部内面紋はおそらくこの段階に始まり、「水神平式」の細分では最終段階、遠賀川系土器を基準とする弥生時代前期か中期かという区分論に合わせれば中期に位置づけられる。

変化の内容と意味　さて、現状で壺の属性の組み合せを時間差として示せば以下のようになる。

尾張地方	三河地方東部以東
a1口唇部ナデ調整・波状紋	b1　口唇部押し引き・体部羽状条痕
波状紋・体部横位条痕	b1’口唇部押し引き・体部斜位条痕・波状紋
↓↓↓	
a2口唇部押し引き（体部羽状条痕・波状紋）	b1’’口唇部押し引き・体部羽状条痕・波状紋
↓↓↓	↓↓↓
a3口唇部押し引き・体部羽状条痕・ハネアゲ紋 口縁部内面紋	b3　口唇部押し引き・体部羽状条痕・波状紋 口縁部内面紋

尾張地方におけるa1→a2という流れに逆転の可能性はなく、Ⅱ期のa3へも滑らかな組列をなして移行する。ここに長野県ほうろく屋敷遺跡資料を組み込めばa1とa2の連続はさらにスムーズとなる。

遡っても属性を一つ消去すれば「樫王式」壺と同じになる。

三河地方東部におけるb1・b1'・b1''は属性を消しb0とすればこれも「樫王式」と同じになるが、そのためには一度に二つの属性を消去しなければならない。連続した組列としては変化が大きいだけでなく、このような三種の存在は滑らかな組列を乱すものである。さて、二つの属性を消去して遡った資料が豊川市ＳＺ117壺（前田　1991）である。壺としての特徴は一見「樫王式」的だが、その壺には肩部に突帯は無く、しかもすでに甕（条痕はやや羽状気味か）が伴なっている。時期はどう遡らせても「水神平式」期であり、「樫王式」との間には時間差がある。同様の例は他にもあり、偶発的現象ではない。これを組列と見るならば、深鉢（内傾～直立口縁部）から甕（外反口縁部）への変化に併せて壺も２条突帯から１条突帯に変化しているということになる。さて、この深鉢から甕へという変化をわれわれは内的変化（自由変異）とみればよいのか外的変化（条件変異）とみればよいのかどちらであろうか。さらに、２条から１条へという突帯の減少はどうであろうか。そうした変化はいったい何に起因するのであろうか。

尾張地方において甕は「樫王式」に存在しない。甕があるのは「水神平式」である。それでは現在「水神平式」の特徴は完全に掌握できているであろうか。実際のところはできていない。破片資料が多く調査遺跡数もそれほど多くはないという事情がある。

かつて紅村弘氏は、壺に関して波状紋出現前を「水神平Ⅰ式」、波状紋を持つものを「水神平Ⅱ式」、ハネアゲ紋をもつものを「水神平Ⅲ式」として概略の変遷案を提示した（紅村　1967）。ところがこれによって説明できるのは三河東部に限定され、これに従えば尾張地方は「水神平Ⅰ式」相当が「樫王式」と大差ないものとなってしまう。こうした区分が口唇部押し引きと体部羽状条痕をすでにあるものとしている以上、その点自体が問われている現状では不十分なのである。尾張地方では口唇部ナデ調整が「樫王式」壺に後続する属性としてあり、体部羽状条痕はさらに新しい特徴なので、「水神平式」の属性として波状紋が初発となるからである。そうであれば、尾張地方と三河地方東部では「水神平式」初期の様相が異なるという予想もできる。しかし、では初期から異なる両者をなぜ外見の類似によって「水神平式」として一括しなければならないのかという疑問が生じることになる。少なくとも尾張地方に妥当しない事項を、三河地方において波状紋を持たないB1を何故に敢えて初発に置かなければならないのか、その理由はどこに求められるのであろうか。

問えば問うほど深みにはまっていくようだが、まず、

ｉ.尾張地方の「水神平式」壺は「樫王式」壺に波状紋を加えたものであり、その時深鉢は甕に変化している、

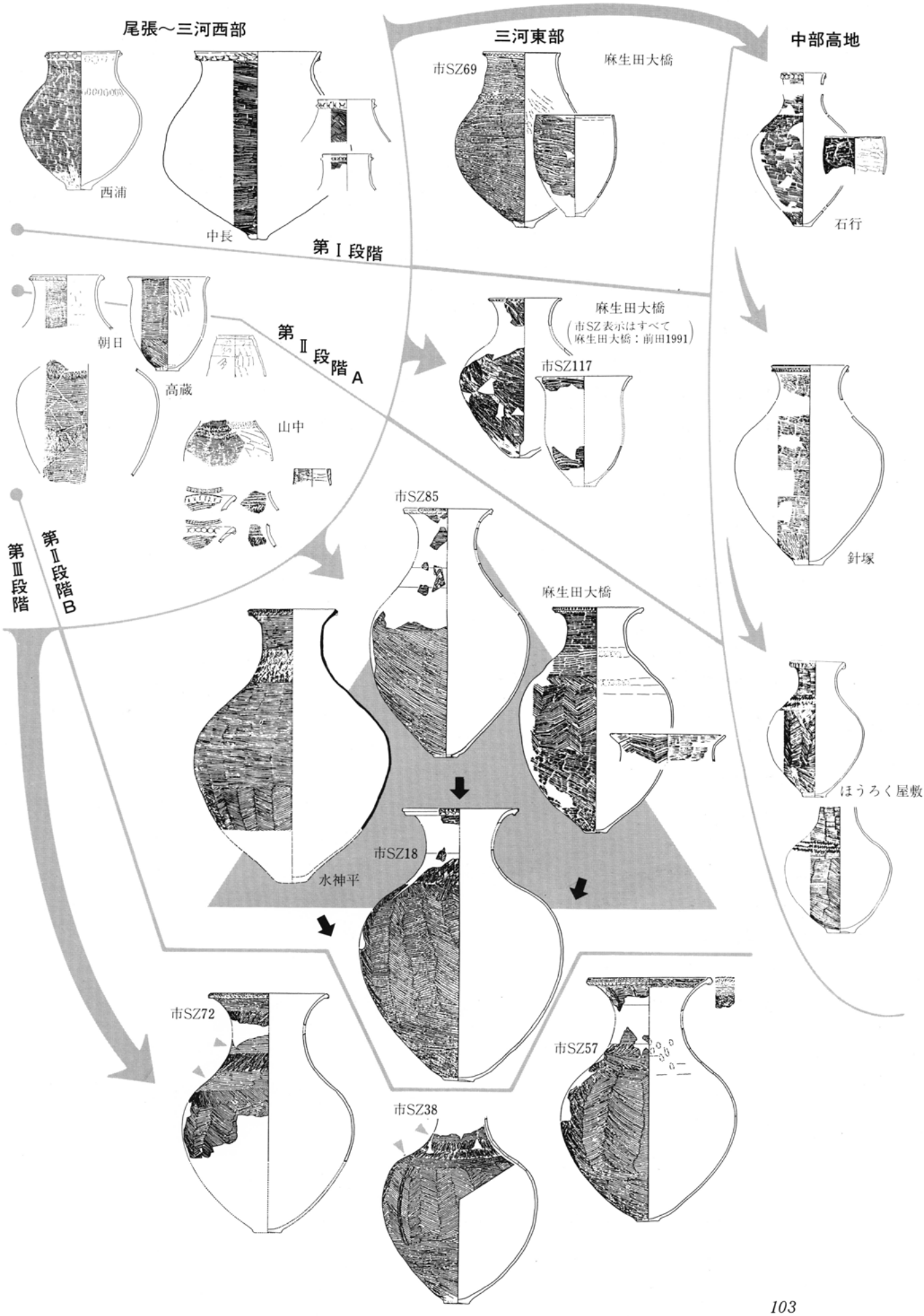
ことを認めよう。そして、

ｉｉ. 外面ケズリ深鉢の口縁部外反化にみるように、遠賀川系土器との並存期間の中で口縁部形態が変化する事実がある、

ことを傍証としよう。そうすると、

ｉｉｉ.深鉢から甕形への変化は波状紋の出現と同調しなくてもよい、

ことになるので、波状紋出現時及び以後に甕形が存在するのはすでに明らかであるとして波状紋出現以前に甕形化の始まっている可能性を引き出すことができる。その点で「市ＳＺ117 」土器はまさに



第51図　条痕紋系土器の変遷 －とくに壺形土器を中心として－

変化点の資料といえる。このようにこの一点に関しては尾張・三河両地方で同じ様に変化していると考えることもできる。しかし、それを「樫王式」と呼ぶか、あるいは「水神平式」と呼ぶかどうかは、また別の問題である。

ところで、三河地方東部における「樫王式」が２条突帯をもつことは従来から指摘されてきた。そして、それが「樫王式」の地域差であるとも言われた。しかし、そこに伊勢地方の２条突帯深鉢の影響があるとするのなら、そのことだけでも同じ「樫王式」としてくくることの根拠は希薄となる。前段階の突帯紋土器の特徴が復活したとしても同様である。少なくとも三河地方西部までは口縁部１条突帯のみがほとんどであって、そのような相違に系譜差を導入するならば逆に同じであることの説明はできないものとなる。かえって無理が生じる。市ＳＺ117 以下の資料に見るように一条突帯化の中に変化の中心があることにこそ「樫王式」の性格、「水神平式」の成立事情に深く関わる重要な点が潜んでいると考える。

この点で壺形土器のスムーズな組列が辿れ最末にはハネアゲ紋に移行する尾張地方と、その影響下にある美濃地方・三河地方西部（矢作川流域）、そしてその圏外にある三河地方東部（豊川流域）以東という差異の発生が、斉一性をもとに組み立てられた条痕紋系土器の枠組みを前提として単にその内部の地域差に過ぎないという重箱内部的な現象ではなく、特定土器文化の成立と展開における時間的なそして空間的な中心地の存在を示唆するように思える。麻生田大橋遺跡の三点と水神平遺跡の一点、これら３つの姿を見せる「水神平式」壺の存在は、それが組列という線条的な関係になく一種三角形的な位置関係にあることは、軸をずらし揺さぶるという外的な影響による放散現象であることを強く示していると考える。確かに、「水神平式」期には内傾口縁土器の有無、条痕原体の差異（尾張・美濃地方［および三河地方西部］はもっぱら二枚貝が多用され、三河地方では様相の不明な矢作川流域を別にして東部以東では二又工具［管状のものを半切したもの、二又の枝、あるいは棒を２本指に挟んで平行した条痕を施すようにしたもの］・櫛［植物茎束含む］を原体とし、二枚貝はほとんど認められないという相違がある）など固定した地域差も認められるものの、中村友博氏の指摘する「刷毛目」の問題などを読み込むならば、「樫王式」の成立と「水神平式」への移行という状況には、突帯紋土器終末時以降における尾張地方を中心とした非斉一的様相（同心円的差異）の固定化への動きと（決して完成はしないが）それを排除するような動きという、相反する二つの動きを窺うことができる。すなわち＜分化＞と＜統合＞の波（周期）をそこにみることができる。　（石黒立人）

［その他の系統の土器］

弥生時代前期にみられるその他の系統の土器としては、第１節で分類したように、削痕系、浮線紋系、沈線紋系、北陸系土器がみられ、それぞれが重要な問題を提起する。本来なら、そのすべてをあげ、考察の対象としなくてはならないが、ここでは沈線紋系土器、とりわけ山中遺跡出土の図版23-300をとりあげ、器形および各部位に施される文様構成を中心にして若干の問題を考えてみたい。

まず、この土器が持つ特色を記してみたい。器形的には、口縁部は緩やかに外反し、肩部が大きく張った器形であり、体部はやや内湾気味に底部に至る独特な形状を呈する。文様が施されるのは、口

縁端部・口縁下部・口縁内面・肩部から体部上半部の４ヶ所であり、文様帯ａ～ｄとする。

口縁端部（文様部ａ）…棒状の突起と２個一対の山形の突起を４ヶ所配し、口縁を５分割する。

口縁下部（文様部ｂ）…横位の沈線と縦位の沈線でワクを形成し、ワク内に棒状の工具を利用した刺突を加える。

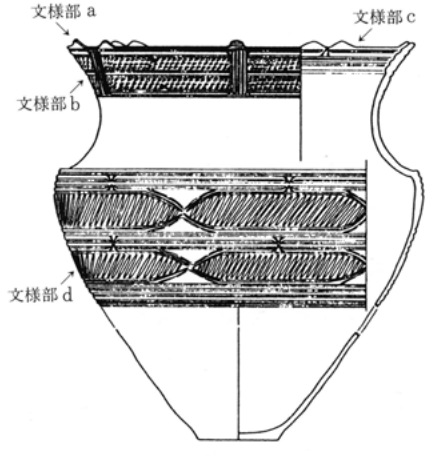
口縁内面（文様部ｃ）…横位の沈線からなり、突起部は三角状のえぐり入れる。

肩部～体部上半部（文様部ｄ）…横位の沈線紋帯とめがね状の区画に斜位の沈線を施す文様帯を交互に配する。横位の沈線紋帯の上・中段にはえぐりを入れる。めがね状区画は４分割。

器形的には、かつて伊勢湾岸地方の縄文晩期から弥生時代にかけての条痕紋土器研究をすすめられた石川日出志氏（石川　1981）が、ＥⅠ・Ⅱ類から明確にその型式変化を追うことのできるとされたＥⅢ類に相当するものである。この種の土器が分布する地域は、概ね北陸地方西部、美濃・飛騨地方、尾張地方、信濃地方であり、時期的には樫王式から岩滑式併行期の遺跡で確認されると言う（石川県埋蔵文化財センター　1988）。山中遺跡出土例は、単体の出土であり、時期的に判然としない部分もあるが、同様の器形をした図版30-334が前期末に比定される遠賀川系土器と共伴している点より、本資料も、ほぼ前期末に位置付けることができよう。時期的にこの種のタイプが出土する段階と矛盾はしない。また、文様構成の面から言えば、尾張地方においては、一宮市に所在する馬見塚遺跡Ｆ地点から、五貫森式段階に比定される吸盤状突起とメガネ状の区画内に縄文充塡した文様構成を持つ浅鉢が出土している（一宮市　1970）。しかし、前期末段階と考えられる本資料との時期差は余りにも大きく、直接関連付けるには多少無理があろう。そこで周辺地域に類似する資料がみられるかどうか確認してみたい。文様部ａにみられる山形突起は、北陸地方から信濃地方にかけてその広がりが認められ、長野県塩尻市五輪堂遺跡から同様の口縁形状をした資料が出土している（中沢　1991）。吸盤状突起と山形突起の組み合わせとなると類例は少なく、岐阜県飛騨川上流域に位置する阿弥陀堂遺跡で工字紋を施した鉢の口縁部にその類例をみることができる（大江　1965）。文様部ｂ・文様部ｄは、同様の文様構成を持つ資料は認められないが、基本的にワク内を文様で飾る区画内充塡紋であり、信濃地方から北陸地方にかけて広く分布する文様である。文様部ｃは、沈線により工字紋状に表現されたものであり、類例はやはり、北陸地方・信濃地方にみられる。

以上のように、文様的特徴からその類似する文様を周辺地域を求めてきたが、それより見られるのは、北陸地方・信濃地方との強い類似性が認められることである。今回の山中遺跡の発掘調査の結果をみれば、弥生時代前期を通してこの両地方との関連を窺える資料がみられ、本資料に色濃く反映されるこの両地方の影響を受ける基盤は整っていたと考えられる。よって、現段階においては、北陸・信濃両地方の影響を受けながら本資料が成立したと考えておきたい。

（服部信博）



第52図　文様部の位置

3　石　器

①石器組成類型について

弥生時代前期の石器は、遠賀川系遺跡に関しては伊勢湾東岸部において良好な資料に欠ける。それに対し突帯紋土器期、弥生時代前期の条痕紋系遺跡ではある程度の蓄積がある。

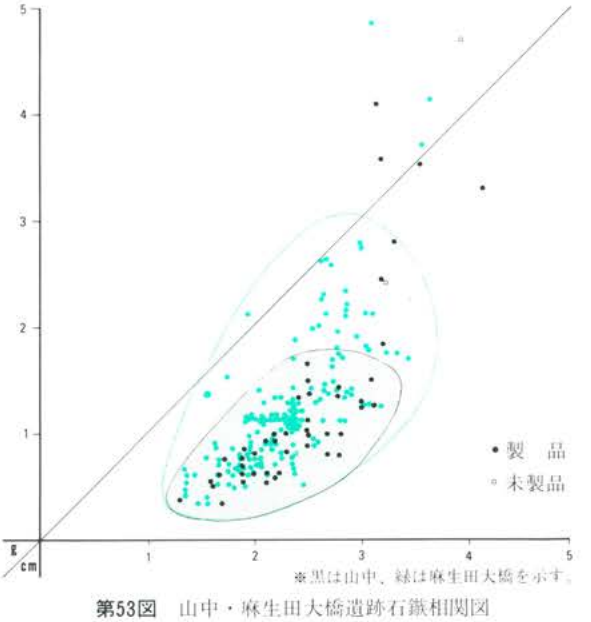
石川日出志氏は縄文時代晩期後半から弥生時代前期の資料を整理して、突帯紋系から条痕紋系への組成上の連続性を指摘した。そしてこうした石器群が弥生時代中期になっても河川上流域の台地部では中心的であるのに対し、朝日遺跡・西志賀遺跡など平野低地部に位置する遺跡では弥生時代初期には打製石斧など一部突帯紋系の石器が残ること、磨製穂摘具の僅少さを除けば基本的には西日本と共通する石器組成に移行する傾向にあるとして、前者を打製石斧・石鏃の組合せに特徴がある「台地型の石器組成」、後者を「低地型の石器組成」と呼んだ（石川　1988）。

ところで、石川氏が「第３の地域」として「台地型の石器組成」に含めた元屋敷遺跡・山中遺跡など一宮市周辺の遺跡については、今回の資料によって多少の訂正を必要とすることになった。打製石斧は突帯紋土器期に属す可能性があり、また石鏃に関しても関係する範囲を生業にのみ限定してよいかどうか検討の余地があること、そして山中遺跡における加工斧、特にえぐり入り柱状片刃石斧の製品と未成品の出土の評価についてである。

石鏃は法量分布に見るように２ｇ・３cmを境に大小の２群に分かれる。このうち小さい方は豊川流域の突帯紋系土器遺跡である麻生田大橋遺跡の石鏃法量分布とほぼ一致し「突帯紋系」群とよべる様相を示している。それに対し大きい方には無茎鏃もあることから新しい時期の混入とは考えがたく、弥生時代中期に典型化する大形化に先行する兆候を窺うことができる。これを「弥生」群とよべる可能性は高いが、この点については他の遺跡の追認をまつことにしたい。

次に山中遺跡の石斧未成品の出土について。山中遺跡の未成品は２種類の石材が認められた。一つは頁岩、もう一つはヒン岩である。頁岩は、突帯紋土器期には石斧素材ではなく、石包丁も頁岩なので外来系石器と頁岩の関係は強いといえる。もう一つのヒン岩は、頁岩と同様に在地での入手は木曽川流域では容易である。同じものは突帯紋土器期の石斧素材（たとえば、馬見塚遺跡の磨製石斧）としても用いられていたので②で触れる下呂石も含めて在地の伝統的な石材流通に依存しつつ独自に製品化（自家製作）をおこなっていたと考えることができる。

山中遺跡は環濠集落である。したがって、近畿地方以西との共通性を内包していることは十分予想される。これまでのところ決して明確で



第53図　山中・麻生田大橋遺跡石鏃相関図

はないけれども、おそらく伊勢湾地方において山中遺跡と同様の＜環濠集落＞という形態をとる集落では、在地（突帯紋土器期）的な石器群を一部伴いながらも、主要な石器に関しては近畿以西の遠賀川系土器文化に共通する石器組成を当初から保有していたと考えられる。そしてその最初期には一部搬入品を含む可能性はあるものの、時をへずして在地の石材流通に依存し、自家供給的に石器生産を行ったものと考える。とはいえ、今回明らかになった山中遺跡を除いてはなお不明瞭な当地方であり、今後の資料集積が望まれるところである。

②下呂石をめぐって

山中遺跡では下呂石を素材とした石器製作関連遺構が発見されている。製作された石器は石鏃・石錐が主であり、それに石匙が加わるかというところだが、その製品群が他の遺跡に供給される可能性を考える必要はないだろう。縄文時代から下呂石は主要石材として通用しているので、何も弥生時代だからと問題にすることもないが、注目したいのは弥生時代前期山中遺跡で確認され、また弥生時代中期の朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡でも認められたように、原石の中に全く手つかずのものがあるということである。

原石のうち、遺跡において無傷で廃棄されているものはだいたい長径４cm以下で、形状も球形のものが多い。中には割られているものもあるが、自然面を剝ぎ取る剝離が１回加えられるだけか、本文図版42－94のように、剝片を製作するというところまで至っていない。つまり、残存長５cm以上の石核から生産できる剝片は２分の１長としても2.5cm程度となり、石鏃ほかの製作には適合するが、４cm以下の原石では目的とされる剝片が十分はぎ取れないということであろう。

ではなぜそんな原石が素材として持ち込まれているのか。

Ai．製作者は石材採取を行っていない。

ii．採取者は石材の特徴は知っているが、その大きさまで注意が及んでいない。

iii.石材入手は製作者の直接管掌事項にはない。

Bi．下呂石は遺跡周辺での採取は不可能である。

ii．いずれも河原の転石であるから、木曽川まで採取にいかなければならない。

iii.しかし、木曽川で採取可能な地点は、ダム建設など治水事業の行われた現在、復元することは困難である。

ci．下呂石を石材とするのは縄文文化の知識である。

ii．いつ弥生文化の知識に移入されたかはまだ不明確である。

iii.山中遺跡の時期には弥生文化の知識となっている。

di．縄文時代以来の石材流通を破壊することなくそれに弥生社会が依存するのであれば、産地が圏外にある場合それに直接介入することは難しいだろう。あくまで受容者としての位置に立つことになる。

ii．物資交換が１点１点ではなく、原石１カゴを単位とするような形で行われたとすれば、そこに望まない規格の原石が含まれている可能性は高いだろう。

iii.そうした交換は、遠賀川系（土器製作・使用）集団が内陸に進出して搬送ネットワークを形成したというよりは、下呂石産出地が在来の突帯紋（土器製作・使用集団）系統（特に山間部を活動領域としその知識に富む集団であったことは当然考えられる）の分布圏内となるので、遠賀川系（土器製作・使用集団）主体の遺跡での条痕紋系土器の高頻度出土に示されるように、恒常的な交流のなかで搬入が行われたと考える。おそらく、石材以外の「山の幸」も同様にもたらされたと考える。

ei. 弥生時代中期は基本的にこのネットワークを継承する。

4　集落と墓制

［環濠集落］

伊勢湾地方における弥生時代前期の環濠集落は、伊勢地方永井遺跡（四日市市教育委員会　1973）・大谷遺跡（四日市市教育委員会　1966）、尾張地方高蔵遺跡・松河戸遺跡、三河地方白石遺跡がこれまで知られており、今回それに山中遺跡を加えることになった。

弥生時代前期の集落が基本的に環濠集落という形態をとることは、この伊勢湾地方においてもますます確実の度を強めたわけである。この点で朝日遺跡・西志賀遺跡がはたしてどうであったか知りたいところである。

朝日遺跡については貝殻山貝塚周辺は別にして、その北北西に位置する地点でⅡ期の方形周溝墓群下から弥生時代前期包含層が検出され、土器および石器の存在から居住域である可能性のあることが報告された。しかし、そこでは住居跡の検出はなくまた環濠とおぼしき溝の検出もなく、環濠集落として認定できる内容はない。このことがこの地区の特殊性、たとえばここが中心居住区ではなく周辺的地区であることを示している可能性もある。だが、果してそうだろうかという思いもある。朝日遺跡や西志賀遺跡では大規模な貝層が形成されており、単にそれが生業の一端を示すものではないことは、他にそのような貝塚を形成する遺跡の無いことから予想される。すなわち交易品生産としての海産物加工である。加工・交易という経済センター的な役割を想定することができるなら、そのような集落は果して環濠集落として営まれるかどうか考える必要があろう。環濠集落であることが普通の集落であることの証なら、しかもこの時期の環濠が以後のそれに比べて規模が劣り貧弱であることを観るなら、朝日遺跡・西志賀遺跡は地域の核としての特殊性から環濠集落ではない可能性を考えてみたい。

ところで山中遺跡の環濠集落は、調査によって検出された部分は南部のほんの一隅であり全体像を明らかにしたわけではない。しかし、その一隅から切り合い重複する竪穴住居群が検出されるとともにその中に石器製作遺構（ＳＢ17）が含まれていたのである。ＳＢ17からは下呂石の原石・石核・剝片が出土し、ここで石鏃などの石器が製作されたことが判明した。すでに第三次調査（一宮市教育委員会　1982）で検出された中央に土坑を有する同様の石器製作遺構の存在とともに、集落内部における機能区分の可能性を考える上での材料を提供することとなった。ただ、この点は石鏃

という限られた種類の生産だけでなく、未成品の出土しているえぐり入り柱状片刃石斧の製作を含めて、石器全体の生産体制についての集落内配置の検討が今後の課題である。　（石黒立人）

［墓制］

弥生時代前期の墓制については、現在までのところ土壙墓、土器棺墓、方形周溝墓が確認されている。突帯紋土器期には、火葬骨の存在が指摘されているが、弥生前期にはみられない。弥生前期の墓制は複雑な様相を呈する可能性がある。ここでは、方形周溝墓にしぼって考えてみたい。

①方形周溝墓の発生

方形周溝墓は、「溝により区画する墓」である。この区画するという発想は、稲作農耕社会の底辺を流れる基本的な原理であり、その根本には当然水田耕作を中心とした土地分割がある（石黒　1987）。水田耕作開始以降、この区画墓は、台状墓、四隅突出型墳丘墓、貼石墓など形こそ違え全国的に登場する。方形周溝墓は、その区画墓を代表する最もポピュラーな墓制といえる。

現在までに弥生時代前期（Ⅰ期）に属する方形周溝墓は、北部九州、近畿地方で確認されており、そして今回の山中遺跡の発掘調査によって伊勢湾沿岸地方がそれに加わることになった。

北部九州地方…北部九州地方では１例確認されている。

東小田峰遺跡（柳田　1986）福岡県朝倉郡夜須町　　全体の形状は不明であるが、18m×13mの長方形状の墳丘をもち、幅３m・深さ２mの周溝に囲まれるという。前期前半に属するとされる。

近畿地方…近畿地方では、現在のところ確実なものは池上遺跡例が唯一か。東奈良遺跡、安満遺跡例はセクション等からの確認であり、平面形態は不明である。近年調査された多遺跡検出例はⅠ期段階の方形周溝墓の可能性がある。

池上遺跡（第二阪和国道内遺跡調査会　1971）大阪府和泉市　　8.4m×6.7mの規模を有し、やや墳丘部が長方形状となる。周溝は南・西側の一部が削平？されており、不明確であるが、周溝が全周するＡ０形、または１ヶ所にブリッジを持つＡ１形の可能性が考えられる。前期新段階の土器が出土している。

多遺跡（橿原考古学研究所　1988）奈良県磯城郡田原本町　　一辺７m程度の墳丘を持つものである。西・南側の周溝は検出されておらず、その点で若干の問題が残る。方形周溝墓とすれば、２ヶ所にブリッジをもつＡ２ｂ形となる。第Ⅰ様式に比定される甕等が若干出土している。

伊勢湾沿岸地方…Ⅰ期に比定されるものは山中遺跡検出例がある。可能性として朝日遺跡例、松の木遺跡例がある。

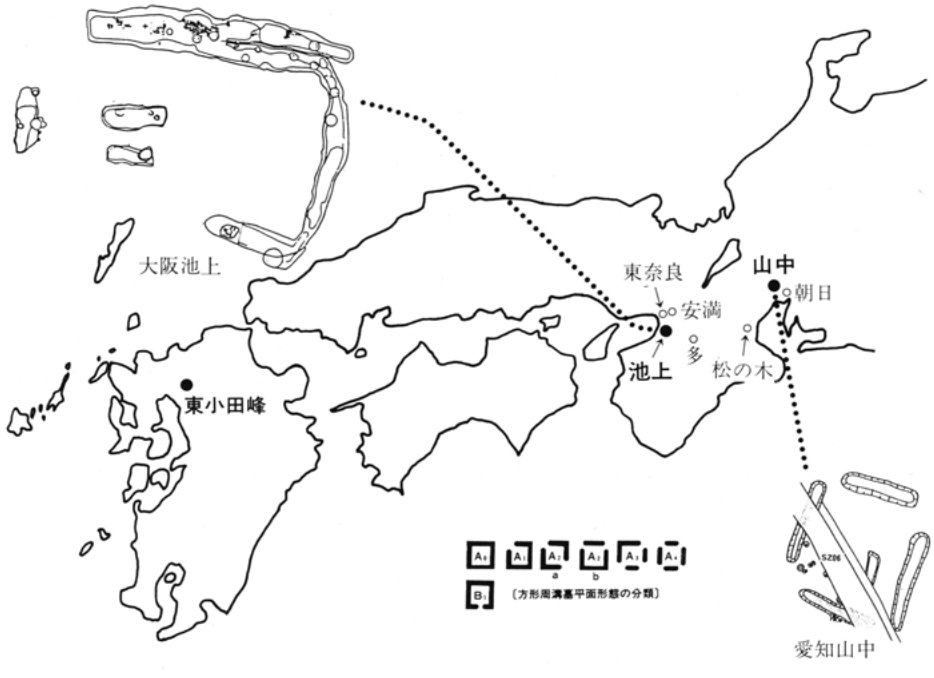
山中遺跡（本文参照）愛知県一宮市　　当該期の方形周溝墓を９基検出。詳細は本文に譲るが、いずれも四隅にブリッジを持つＡ４形である。規模は一辺６～10m前後である。Ⅰ－４期。

朝日遺跡（愛知県教育委員会　1982）愛知県西春日井郡清洲町他　　墓域Ａにおいて検出さ

れ、かつてＡ４形として報告されたされたものである。4.8 m×4.8 mの規模を持つ。墳丘部分よりＩ期の土器（壺棺？）が出土したこと、南東溝が弥生前期の溝に切られている可能性が高いことをその根拠として時期決定をされた。しかし、南西・南東溝は検出されていないこと、壺棺とされた土器と前期包含層との関係が不明瞭なこと、さらに朝日遺跡の方形周溝墓は非Ａ４形で出現する可能性が指摘されていること（石黒　1987）等の理由から、時期・形態ともに微妙な位置にある方形周溝墓といえよう。

松の木遺跡（三重県教育委員会　1990）三重県津市　　中期前半以前に遡る可能性のある方形周溝墓が１基検出されている。北　西側の周溝は未検出であるが、Ａ４形の可能性が考えられる。遺物としては細片ではあるが遠賀川系土器が周溝内より出土している。

以上、弥生時代前期に属する方形周溝墓をとりあげてきた。その発生については、現状では北部九州地方で検出された東小田峰遺跡例が最古となる。しかし、基本的に方形周溝墓という墓制は九州地方には定着しない点、北部九州地方と近畿地方を繋ぐ位置にある中国・四国地方では前期段階まで遡る方形周溝墓は確認されていない点等よりみれば、単純に北部九州地方から一元的に伝播したとは考えにくい。また、近畿地方で確認されている方形周溝墓の平面形態と伊勢湾沿岸地方で確認されるタイプとは異なっており、これもまた簡単には結び付けることはできないであろう。方形周溝墓という区画墓が水田農耕社会に内在する土地分割の原理に基づいて構築されたものとするならば、いづれの地域にも方形周溝墓の発生する基盤はあり、北九州－近畿－伊勢湾沿岸地方を確実に結び付ける要素がない現段階においては、各地域において自生的に発生したものと考えておきたい。



第54図　弥生前期の方形周溝墓分布図

②Ａ４形方形周溝墓の広がり

Ａ４形方形周溝墓は、四隅にブリッジを持ついわゆる“東日本形方形周溝墓”と称されるタイプである。

Ａ４形方形周溝墓の分布に関しては、前田清彦氏の研究（前田　1991）に詳しい。それによるとＡ４形（前田氏分類のｇ類）が主体的に分布する地域は、東海地方（Ⅰ期からⅣ期）、北陸地方（Ⅲ期から古墳）、関東地方（Ⅲ期からⅤ期）であり、客体的に九州（古墳）・中国（Ⅳ期から古墳）・近畿地方（古墳を中心）で散見できるという。

東海地方は、大きく伊勢湾沿岸地方と三河・遠江とにわけることができ、伊勢湾沿岸地方では、山中遺跡例にみられるように確実にⅠ期段階にＡ４形方形周溝墓を築造し、以後、弥生時代中期を通して、その主体的形態となる。一方、三河・遠江においては、伊勢湾沿岸地方に若干遅れて登場するようで、現状では静岡県山下遺跡（袋井市・掛川市　1984）のⅡ期末からⅢ期に位置づけられるものが最古例となる。北陸地方、関東地方において方形周溝墓が登場するのは、Ⅲ期以降のことであり、その出現期からＡ４形方形周溝墓をみることができる。

以上よりみれば、伊勢湾沿岸地方→三河・遠江地方→関東地方、伊勢湾沿岸地方→（美濃・飛騨地方）→北陸地方と伝播したものと推定できる。それは、Ａ４形方形周溝墓が分布する地域には東海系土器の進出が認められる（前田　1991）という点からも裏付けることができよう。とすれば、このタイプの方形周溝墓の起源が伊勢湾沿岸地方にあることは確実であろう。

③Ａ４形方形周溝墓の展開の背景

弥生時代前期に伊勢湾沿岸地方で誕生したＡ４形方形周溝墓は、②で記したように、主に東日本を中心に広がりが認められ活発に築造される。その展開の背景について考えてみたい。伊勢湾沿岸地方最大の拠点集落である朝日遺跡の動向がその鍵を握ると考えられる。

弥生時代前期の尾張地方の状況は、大きく２つの地域に分類できる。それは、一宮市周辺に展開する遺跡群と尾張南西部および名古屋台地上に広がる遺跡群であり、それぞれが安定した展開をみせてきた。しかし、前期末～中期初になるとその状況が揺るぎはじめ、集落の動向に大きな変化を生じてくる。それは、Ａ４形方形周溝墓など独自の文化をもった一宮市周辺地域の遺跡群の衰退であり、山中遺跡をはじめとしてそのほとんどの遺跡が姿を消してしまう。以後、継続して集落が営まれるのは、僅かに河田遺跡（一宮市　1968）がみられるのみである。そして、その一宮市周辺の遺跡群の衰退に対応する形で急激に朝日遺跡の成長が認められるのである。一宮市周辺の遺跡群の衰退が大規模な社会変動を誘引することになったと十分予想できるであろう[2]。

朝日遺跡における方形周溝墓の築造は、前期末から中期初にかけて非Ａ４形主導で方形周溝墓が築造され、中期前葉の段階で台状部が34mにもおよぶ超巨大方形周溝墓も含め一気にＡ４形に転換し、中期を通してほぼＡ４形に統一された墓域群を構成する（愛知県埋蔵文化財センター　1991）。

この朝日遺跡における造墓活動を、一宮市周辺の遺跡群の衰退に伴う社会変動を考慮に入れ、見

つめ直してみると、次のように想定できよう。前期末から中期初頭の段階で、朝日遺跡では非Ａ４形主導で方形周溝墓が築造されていた。しかし、ほぼ時を同じくして社会変動が引き起こり、集落規模の拡大が余儀なくされるとともに、非Ａ４形主導の方形周溝墓を築造する体制に変化が生じてくる。やがて、集落の拡大は集団内部における階層格差に一層拍車をかけることになり、その頂点として台状部長軸長が34mにもおよぶＡ４形タイプの超巨大方形周溝墓を出現させることになった。

この超巨大方形周溝墓がＡ４形タイプで築造されたことは重要な意味を持つ。超巨大であるが故に社会全体に与えるインパクトは強く、上位階層から下位階層へのカタチの浸透が図られ、それが、まず朝日遺跡におけるＡ４形方形周溝墓の統一的様相を形成する要因となった。そして、伊勢湾沿岸地方最大の拠点集落である朝日遺跡で築かれ、その主流形態に成り得たからこそ、東日本を中心とした弥生墓制に多大な影響を与え広く浸透させていったものと考えられよう。　（服部信博）

5　弥生時代の「道」をめぐって

集落内部においては各機能空間の接続、集落外においては他の集落あるいは活動拠点との接続のために人の往来が行われる。しかし、その経路がすぐさま恒常的な往来のために設けられる「道」といえるかどうかは確定していない。遺構として検出されれば別だが。

集落内部の場合には、住居の出入口をつないで「道」を想定するとしても、不定形な空間内に最短から最長まで経路は無数にあり、街区が形成されなければ「道」を想定することは困難である。

方形周溝墓からなる墓域では、「墓道」を想定することにより単位グループの抽出が行われてはいるが、古墳時代の横穴式石室墳という、出入口が確定でき、しかもある程度継続した葬送が行われる場合に想定される「墓道」概念をそのまま適用するのは問題があろう。

敦賀市吉河遺跡では確かに「墓道」が想定された。だがこの場合には、集落と墓域の展開に地形と整合した方向性があり、しかも想定される集落の出入口の一方にある墓域に帯状の空間が存在したことから「墓道」が想定できるのである。したがって、これを幹線としてこれから各方形周溝墓への経路を復元しても、それを支線としての「墓道」と見なし得るとは限らない。つまり、一回性の経路を「墓道」としてよいかということである。それではあまりに詩的だ。

集落間の場合には、集落間の最短経路を道として想定しやすいが、河川の乱流する平野部デルタ地帯ではそれは困難である。山間部では、谷底平野が形成され河川敷が連続している場合は別にして、河川両岸が崖面を形成し河川敷が不連続であれば、そこに安定した経路を求めることは難しい。もちろん、経路は固定したものではなく短期的にでも通行可能であればよいのであるが、実際集落間の経路を想定することは難しいのである。だから、集落間の交通を考える場合、地図上の集落分布から経路を復元することよりは、単に空間的位置関係として抽象的に議論するほうが困難は少ない。

酒井龍一の提唱する「面態」「線態」はそのように考えるべきであり、集落間をつなぐラインに意味はない。実際の「道」とは無関係な抽象概念である。そうであればこそ、実際の集落関係を検討することが必要となるのであり、われわれはモデルに人間の顔を与えなければならない。

（石黒立人）

註

(1)　一宮市内に所在する遺跡で検証すれば、絶対量は不足し判然とはしない部分が多いが、弥勒遺跡（1－3期）出土の「亜流」甕は口縁の肥厚が顕著ではない。それに対し、河田遺跡（Ⅰ－4期）遺跡出土例は、口縁部の肥厚が顕著となる。（図版46参照）

(2)　一宮市周辺の遺跡群の衰退が何に起因するのであるか、ここでは明らかにしえないが、広域的な影響を及ぼす災害と容易に想像がつこう。そういった点よりみれば、今回の山中遺跡の発掘調査でみられた前期末段階の洪水性堆積層の存在は示唆的である。

《参考文献》

石川日出志　1988　「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編2・研究編　愛知考古学談話会

石黒立人　1987　「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル』No.7　愛知考古学談話会

　　1990　「弥生時代の遺構と遺物」『阿弥陀寺遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集

泉　拓良　1989　「中国・四国地方以東の突帯紋系土器様式」『縄文土器大観』第4巻

伊藤久嗣　1980　「遺物・遺構の考察」『納所遺跡－遺構と遺物－』三重県教育委員会

大江　甯　1965　『飛騨の考古学Ⅰ－益田川流域の縄文遺跡』

大参義一　1972　「縄文式土器から弥生式土器へ」『名古屋大学文学部研究論集』56

奥　義次　1990　「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」『Mie History』 vol.1 三重歴史文化研究会

神谷友和・後藤浩一　1990　「春日井市松河戸遺跡SD120について」『愛知県埋蔵文化財センター年報－平成元年度』

紅村　弘　1956　「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』13

　　1967　「水神平式土器とその周辺」『信濃』19-4

　　1981　「東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸問題－本文編－補足改訂版』

小玉道明・伊藤　洋　1973　「補論弥生時代前期の土器について」『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会

佐藤由紀男　1982　「引佐郡三ヶ日町大字津津崎字青木採集の水神平式土器について」『静岡県考古学研究』12

設楽博己　1982　「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34-4

鈴木克彦　1990　「「亜流遠賀川式土器」再考」『Mie History』 vol.2 三重歴史文化研究会

高橋信明　1985　「尾張東北部・南西部」『マージナル』No.5愛知考古学談話会

谷本鋭次・山沢義貴　1971　「まとめ」『金剛坂遺跡発掘調査報告』　明和町教育委員会

中村五郎　1982　『畿内第Ⅰ様式に併行する東日本の土器』

中村友博　1987　「水神平式土器」『弥生文化の研究』4　弥生土器Ⅱ

贄　元洋　1991　「愛知県（三河）白石遺跡」『東日本における稲作の受容』－第Ⅲ分冊甲信越・北陸・東海地方－東日本埋蔵文化財研究会

久永春男　1966　「東海」『日本の考古学』Ⅲ　弥生時代

柳田康雄　1986　「集団墓地から王墓へ」『発掘が語る日本史』6－九州・沖縄編　新人物往来社

前田清彦　1991　「愛知県（三河）麻生田大橋遺跡」『東日本における稲作の受容』－第Ⅲ分冊甲信越・北陸・東海地方－東日本埋蔵文化財研究会

前田清彦　1991　「方形周溝墓平面形態考」『古代文化』Vol.43 古代学協会

増子康眞　1985　『愛知県を中心とする縄文晩期後半期土器型式と関連する土器群の研究』

愛知県教育委員会　1972　『貝殻山貝塚調査報告』

　　1982　『朝日遺跡』

（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990　『月縄手遺跡・貴生町遺跡』

　　1991　『麻生田大橋遺跡』

　　1991　『朝日遺跡Ⅰ』

愛知考古学談話会　1985　『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編1

明科町教育委員会　1991　『ほうろく屋敷遺跡』

一宮市　1968　『新編一宮市史』資料編2－弥生時代

　　1970　『新編一宮市史』資料編1－縄文時代

一宮市教育委員会　1982　『尾張病院山中遺跡発掘調査報告書』

橿原考古学研究所　1986　『多遺跡第11次発掘調査報告書』

可児市教育委員会　1973　『北裏遺跡』

岐阜県教育委員会　1989　『徳山ダム水没地区埋蔵文化財調査報告書　はいづめ遺跡』

塩尻市教育委員会　1989　『五輪堂遺跡』

第二阪和国道内遺跡調査会　1971　『第二阪和国道内遺跡発掘調査報告』4

名古屋市教育委員会　1971　『古沢町遺跡発掘調査報告Ⅰ』－縄文時代編－

　　1982　『高蔵遺跡発掘概要報告書』

南山大学人類学博物館『高蔵貝塚Ⅲ』人類学博物館紀要10

袋井市・掛川市教育委員会　1984　『山下遺跡発掘調査報告』

四日市市教育委員会　1966　『大谷遺跡発掘調査報告』

三重県教育委員会　1990　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』

南知多町教育委員会　1989　『神明社貝塚』

第3節　山中式土器について

1　はじめに

大参義一氏が1968年3月に発表した「弥生式土器から土師器へ」[1]は当山中遺跡出土土器を中心にした土器群をもって、愛知県の弥生時代後期の中に「山中期」を設定した。その瞬間から山中遺跡は弥生時代後期を代表する標式遺跡となるのである。大参氏が設定した「山中期」はその後、多くの論考を経て、伊勢湾地域における弥生後期の土器として容認されている。今回の山中遺跡の調査において、この「山中期」に所属する土器は認められたが、それらは墳丘墓からの出土に限られた。造墓時期及び主体部設営の時期決定にはさらに細かい編年が必要とされるのであり、「山中期」の再検討をかねてここでは細区分案を提示することにしたい。

基本的には大参氏が見通した編年観を踏襲するが、それにはまず基礎的な問題である標式資料の検討から始めなければならない。ところで最近の山中期をめぐる問題を整理しておくと、残念ながら大参論文からの前進はほとんど認められないのが現状といえる。それは「一括資料」が存在するにも係わらず、その提示がほとんどなされていないことに起因する。提示とは出土資料そのものへの批判であるとともにその明確な位置づけである。その様な中で山中期の細分としてはまず石黒立人氏の研究が見られる。弥生後期を3期に分け「後期2」を「山中式」に対応させる[2]。その後「山中式」に3つの変遷を想定した。それは「蕪池遺跡古相→新相.山中遺跡古相→新相」という流れであった[3]。宮腰健司氏は「山中式」を二分し、その前に「見晴台式？」[4]を想定する。これらの研究にはまず提示資料群自体の批判がほとんどなく、型式の分類が進んでいないため、したがって提示した資料には型式の新.古の逆転が多々見られる。それは朝日遺跡における一括資料に対する無批判の容認と、その既存の変遷観に影響されてのことであろう[5]。このように「山中期」は現状においても様式設定はなされていないものと判断でき、大参論文の意図は継承されてはいないようである。

ここでは「山中期」の設定基礎になった一宮地域出土の資料を基本に、その資料批判から山中式土器の設定とその細分を提示することにしたい。しかしここにおいてもやはり「資料的な不備」はつきまとうのではあるが。

2　山中遺跡出土土器とその他の資料

山中遺跡第1次出土土器については、すでに第Ⅳ章に述べておいたので、ここではそれを要約しておくことにする。

1、『尾張病院山中遺跡』[6]出土遺物は3回、各地点で出土しており、一括遺物とすることはできない。

2、出土遺物はA.B.C.Dの4地点にまとめられる。

3、山中遺跡B地点の出土遺物は、一括性の高いものと判断できる。

ところで、現状においても一宮地域における山中式土器の出土は、大参論文で取り上げられた遺跡

以外はほとんど認められない。そこで「蕪池遺跡」「北川田遺跡」「苗代遺跡」について、その出土状況をまとめておきたい[7]。

蕪池遺跡……極めて劣悪な状況において土器の出土が確認されている。それによると2×3mの限られた範囲からの土器集積であったようである。掲載された資料が、全てこの集積資料であるかは問題があろうが、細かい技法.形態の分析からはやや幅をもつ資料群と考えてよかろう。

北川田遺跡……3×5mの範囲からの土器集積資料である。ただしパレス壺1点は若干異なる地点での出土である。やや出土量が少ないものの、基本器種が一応揃っているため良好な資料と考えたい。

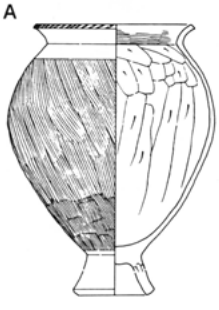
苗代遺跡第Ⅱ地点……山中遺跡と同じ「萩原遺跡」群に所属する[8]。第Ⅱ地点は径70～80cmの2つの「ピット」(第1．第2）及び周辺の「若干の土器」からなる資料群である。厳密には2ケ所の遺構から構成されるもので、第Ⅱ地点の遺物を取り扱う際には考慮しなければならない点である[9]。

以上の遺跡の他に、特に最近では良好な一括資料の発見が報告されている。まず岩倉城下層の遺物[10]があり、また稲沢市の堀之内花ノ木遺跡の資料[11]が存在する。こうした各遺跡は稲沢市.岩倉市.一宮市の濃尾平野低地部での「山中式土器」の在り方を示すものと考えることができ、そこで以下これらの資料を中心に山中式土器の細分を考えることにしたい。

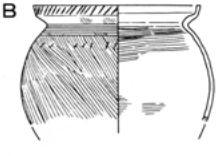
3　分類

まず器種分類であるが、大きく甕を3類に、高杯を4類、器台を2類、鉢を3類、そして壺を6類に分類する。その特徴は下記による。

甕A



甕B



甕C

［甕A］く字状口縁.端部に刺突文をもつ台付甕

A1 やや広口の甕。内面はタテ方向のケズリ調整が基本であり、外面はタテ方向の単斜ハケ。

A2 頸部がやや引き締まった形態をもつもの。調整はほぼA1に同じ。変化は体部最大径が上位から中位へ下降し、やがて球形になるという基本的な変遷が認められる。

［甕B］有段口縁をもつ台付甕

口縁外面に刺突文、体部上端に横線文と刺突文を施す。内外面ハケ調整を基本とする。

B1 口縁端部に明確な面をもち、外方へ突出する。

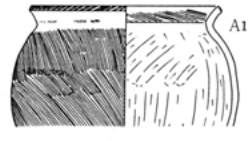
B2 大きく屈折し、直立する口縁部を有するもの。

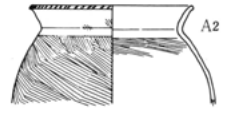
B3 端部を跳ね上げ状にするもの。

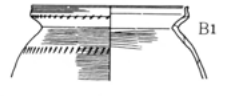
B4 内彎屈曲口縁をもつもの。廻間Ⅰ式期に見られる。

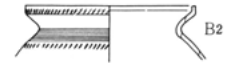
［甕C］S字状口縁台付甕

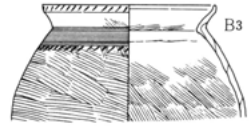
廻間Ⅰ式期から登場する。

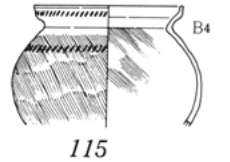




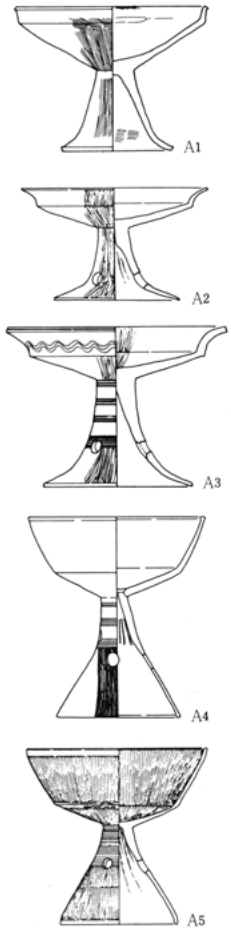








高杯A



［高杯A］有段高杯

A1 杯部上段が小さく直立するもので、ヨコミガキを基本とする。大きく外傾する中空脚をもつ。

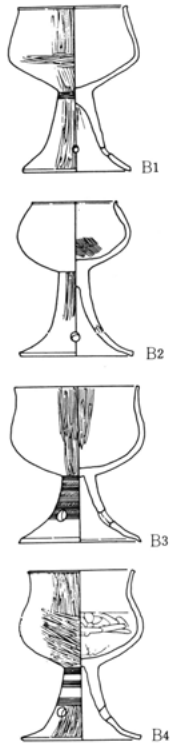
A2 杯部上段が外彎し、タテミガキ調整を基本とする。柱状脚をもつ。

A3 加飾性が強く、杯部上段にはヨコナデ調整後、波状文等が施される。大きく外反する脚には横線文が施される。

A4 杯部上段が大きく、外傾するもの。柱状部を残して外反.内彎する脚をもつ。

A5 杯部が深く、直接大きく内彎する脚をもつ。端部には細部彎曲調整がある。廻間Ⅰ式期に登場する。

高杯B



［高杯B］ワイングラス形

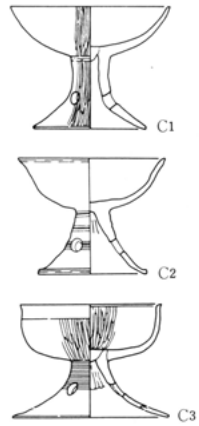
B1 杯部に屈折部をもつ。山中様式から端部に僅かな外彎をもつ。

B2 杯部が球形を呈するもの。山中様式から端部に僅かな外彎をもつ。

B3 口径と杯部最大径がほぼ同じ形状のもの。

B4 ワイングラス形高杯を代表する形式。杯部は内彎から外彎し、口縁端部に至る。

高杯C



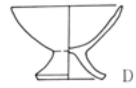
［高杯C］椀形高杯

C1 大きく弧状に開く杯部をもつもの。

C2 杯部口縁部がやや外反する傾向が見られるもの。

C3 口縁がやや直立傾向になり、細部彎曲調整を施す。廻間Ⅰ式期に登場する。

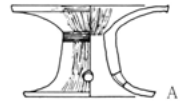
高杯D



［高杯D］

脚部に比べ杯部が大きく椀形なもの。どちらかといえば台付鉢に近い形態。

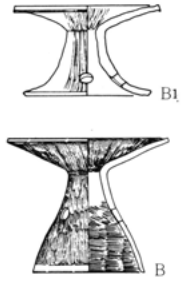
器台A



［器台A］

口縁から柱状の中空脚に至り、大きく開く裾部をもつもの。

器台B



［器台B］東海系器台

B1 大きく外反する円錐脚部をもつ。

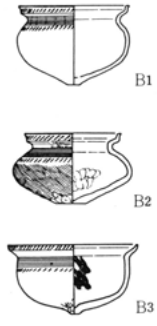
B2 内彎脚をもつもので、廻間Ⅰ式期をもって成立

鉢A

［鉢A］

口径が体部径より小さく、く字口縁、端部に刺突文を施すもの。

鉢B



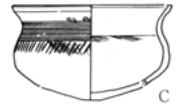
［鉢B］有段口縁鉢

B1 口径と体部径がほぼ同様なもの。

B2 体部径が口径を大きく凌駕するもの。

B3 口径が体部径を凌駕するもの。

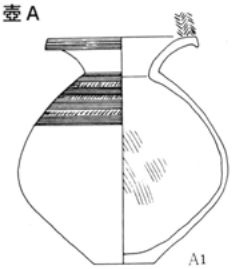
鉢C

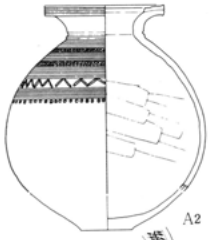


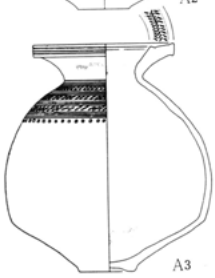
［鉢C］

大きく外傾する口縁部を有するもので、有段の有無により2分できる。

壺A







［壺A］加飾広口壺

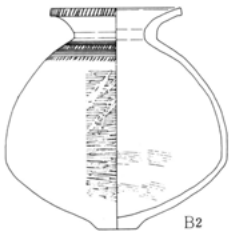
広義のパレススタイル壺（パレス壺）は壺Aを意味する。

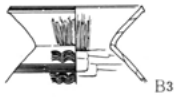
A1 口頸部は大きく外反し、端部は拡張して擬凹線をもつ

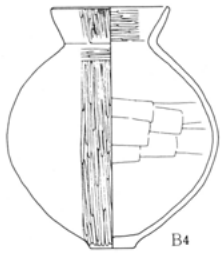
A2 口縁内面に明確な平坦面を作るもの。

A3 体部最大径が1/4 付近に下降し、しもぶくれ形態を呈する。口縁内面には文様面をもつ。廻間Ⅰ式期に成立する。

壺B







［壺B］広口壺

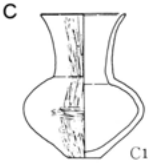
B1 長頸の外反する口縁をもつもの。体部外面調整はハケ調整を基本とする。廻間Ⅰ式期からミガキを多用するようになる。また同時に山中様式の平底から廻間様式の突出底に変化。

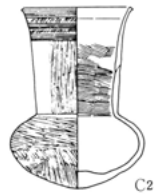
B2 短頸の外反する口縁を有するもの。ミガキ調整、突出底で、廻間Ⅰ式期から登場する。

B3 直口する口縁を有するもの。廻間Ⅰ式期から見られる。

B4 内彎口縁をもつ広口壺。ミガキ調整.突出底をもち廻間Ⅰ式期をもって成立。

壺C





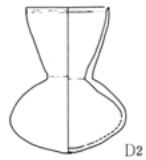
［壺C］長頸壺

C1 外反する頸部を有する壺。

C2 直口する頸部を有する壺。加飾性が強い。

C3 内彎する口頸部を有する壺。廻間Ⅰ式期に成立（長頸内彎壺）

壺D

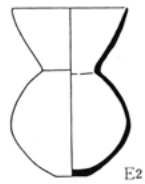


［壺D］細頸壺

D1 外反.外傾する口頸部を有する壺。

D2 内彎する口頸部を有する壺。尖底。廻間Ⅰ式期に見られる。（細頸内彎壺）

壺E

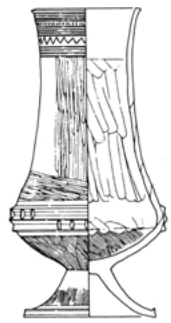


［壺E］短頸壺

E1 外反する口頸部を有するもの。

E2 内彎する口頸部を有するもの。山中式後期から認められる。（短頸内彎壺）

壺F



［壺F］

口頸部が内傾外彎するものを一括する。

次に基本的な技法.形態変化の方向についてまとめておきたい。

まず山中様式を代表する高杯は、高杯A2.3 であり、それは杯部の深さに変化の方向性が見出せる。すなわち口縁部径に対する杯深の比が徐々に増大し、径深比率[12]が15前後から40近くにまで増加する(第57図)。最終的には杯部が深く、上段が大きく外反するものに変化する。高杯の径深比率の傾向が口稜比率[13]に変化するのが高杯A5であり、その過程で登場する形式がA4と位置づけられよう。高杯Bの変化にもこの傾向が認められ、杯部の深さの増加が基調に存在する。その他高杯.器台にほぼ共通する変化として、まず透孔の数が山中式中期で4から3へ統一され、後期では穿孔方法の多様化[14]が認められる。また穿孔位置が1/3以下から上昇し、1/2付近へと変化する。甕.鉢.壺は体部最大径が徐々に下降するという基本的な変化の方向が窺われる。以下形態的な属性変化を手掛りに細分する。

4　山中様式の細分

上記の変化の方向性.基調を基本に山中様式を5段階に細分し、将来の良好な一括資料の発見による様式細分に備えたい。一宮地区では山中遺跡B地点.蕪池遺跡.苗代遺跡第Ⅱ地点.北川田遺跡という変遷を基本に、堀之内花ノ木遺跡.岩倉城遺跡下層の成果を加えて考えたい。

1段階

山中遺跡B地点出土遺物を基準資料とする。その他、朝日遺跡SX194　A群[15]土器を含めることになるが、今の所、古相を考える参考資料に留まる。将来、資料の増加をもって細分が可能であろう。(0段階)

全体に加飾性に乏しく、高杯A2.3、B3.4 、C、器台B、鉢B、壺A1、C1、D1、甕A2の各形式の登場を想定しておきたい。そしてこれらの形式が以下山中様式を構成する重要な型式となる。

高杯はAはA1が残存し、A2.3 が新たに登場する。A2は原則的には無文のタテミガキ調整を多用するもので、A3は櫛描文による加飾性が強く、杯部上段はヨコナデ調整。A2とA3は厳密に区分でき、その系譜が異なるものである。全体に杯部の深さが浅く、上段が低い形態で、脚部は前様式が中空で直線的であるのに比べ、柱状に伸び一気に大きく開く裾部に変化する。端部は明確な面を留めない。透孔は4方向に、脚部1/3 以下に穿孔される。ワイングラス形高杯Bは1～4の全ての形式が整う(B3.4は新たに出現)。その内共通する特色は、口縁端部の僅かな外彎であり、山中様式の一つの特徴と位置づけたい。形状は杯部最大径に比べ深さが浅い。脚部は高杯Aと同じ。器台はやや中空状を呈するが口縁部から大きく外反する形態である器台Bが、この段階に完成されている点は大きく評価でき、以下東海を代表する基本形態となる[16]。高杯Bと器台の脚部の形態と透孔は、高杯Aと同じであるが、端部は内傾する面をもつ。有段口縁鉢Bの登場は注目でき、体部最大径を上半におく形態をもつ。高杯Cはミガキ調整をもつ椀形高杯[17]。一方、杯部が深く脚部が小さい高杯Dは前様式から残存する。壺はA1.C1.C2.D1は山中式をもって登場する形式と考えてよいであろう。全体に体部最大径を上半におき、ミガキ調整を多用し、長頸直口壺C2以外は加飾性に乏しい。加飾広口壺A1は算盤形の体部で平底を呈し、体部の文様は櫛描文があくまで主体であるが、それに加えパレス文様Ⅰが新たに加わる可能性が高い[18]。甕は口縁端部に刺突文を施すく字状口縁台付甕で、内面タテケズリ。広口のA1に加えて新たにA2が登場し、その後徐々に甕の主体を占めるようになる。

2段階

現状では明確な基準資料は見られない。大型品を除く蕪池遺跡出土土器及び山中遺跡Ａ．Ｃ．Ｄ地点を参考にして設定する。急速に加飾性．赤彩塗布が多形式に広がる。透孔は４から３へ、そして穿孔位置の上昇傾向が見られる。端部には明確な面が見られるようになる。壺．鉢の体部最大径がほぼ中央部に下降する。以上の特色は基本的には２．３段階に共通するものといえる。（山中式中期）

高杯ＡはＡ３形式が主体を占めるようになる。端部を拡張して明確な文様面を構成するものと、面取りを行なう形態の２方向に分化する。両者とも端部に擬凹線文を施す場合が多い。杯部は直線的な形状を今だ留めるものが多い。高杯ＢはＢ1.2.3 が多く散見できるが、Ｂ4は主体的な存在ではないようだ。壺Ａ1は、はやくも体部最大径の下半への下降が開始される。但しこの現象はパレス壺に限定される。

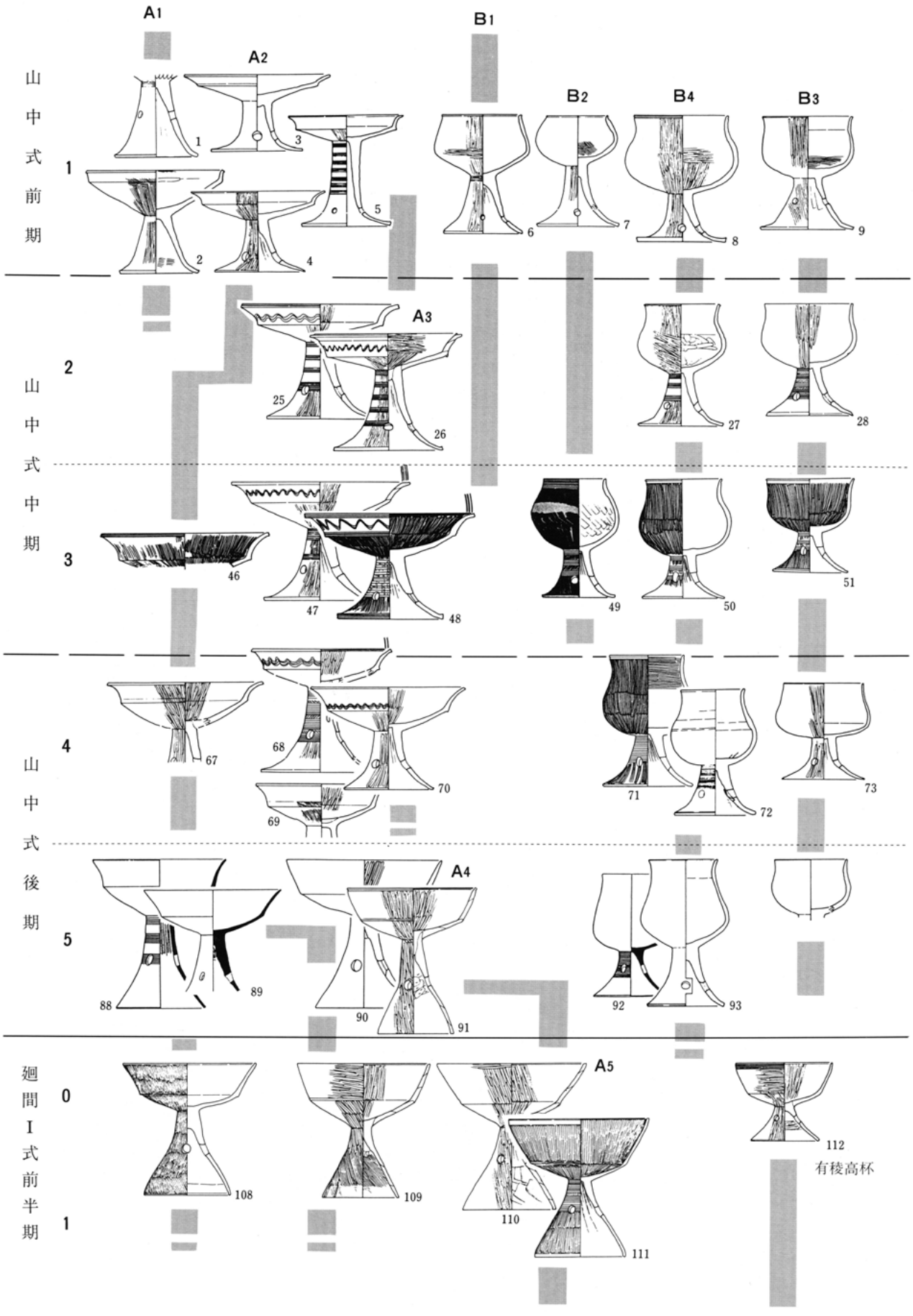
3段階

苗代遺跡第Ⅱ地点第１及び第２ピット出土土器を中心に考えることができる。また名古屋台地部では高蔵遺跡ＳＤ０４もこの段階に中心をおくものであろう[19]。

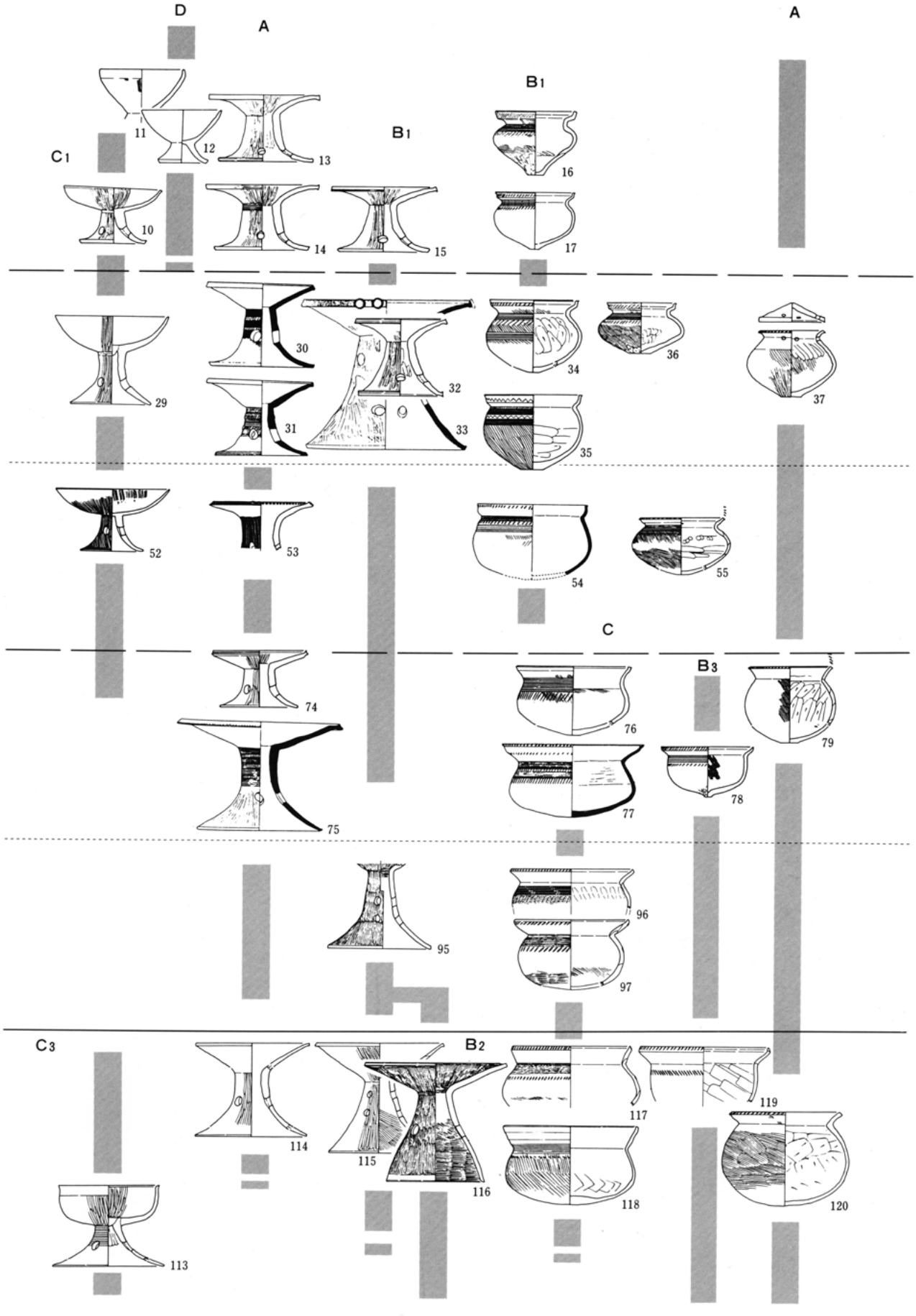
高杯は、脚部が大きく外反する形態が登場し、透孔はほぼ３方向に統一され、1/3上位に穿かれることが多くなる。なお脚部の櫛描文は無文帯を構成しない連続的な施文方法も認められるようになる。高杯Ａ3は最も加飾性が強い段階で、杯部の形態にも多様性が認められる。杯部の形状は明確に下部が内彎、上部が外彎となり、杯部上段にはヨコナデ調整のち波状文、さらにその下位に擬凹線文が施されるものが主体となる[20]。杯部端部の擬凹線文は文様面を構成することがほとんど痕跡程度になる。ワイングラス形高杯ＢはＢ4形式が主体的になり、杯深を増す。器台は口縁部と脚部が明確に屈折するものから、ゆるやかに屈曲させる形態が登場する。なお、甕であるが、苗代遺跡からは受口状の口縁を有する甕が出土しているが、外面のハケ調整にヨコ方向が認められる点と、体部の横線文．刺突文が欠損していることから、この段階に所属する積極的な根拠が見られず、また他の資料群においても甕Ｂの山中式中期の共伴は知られていない。

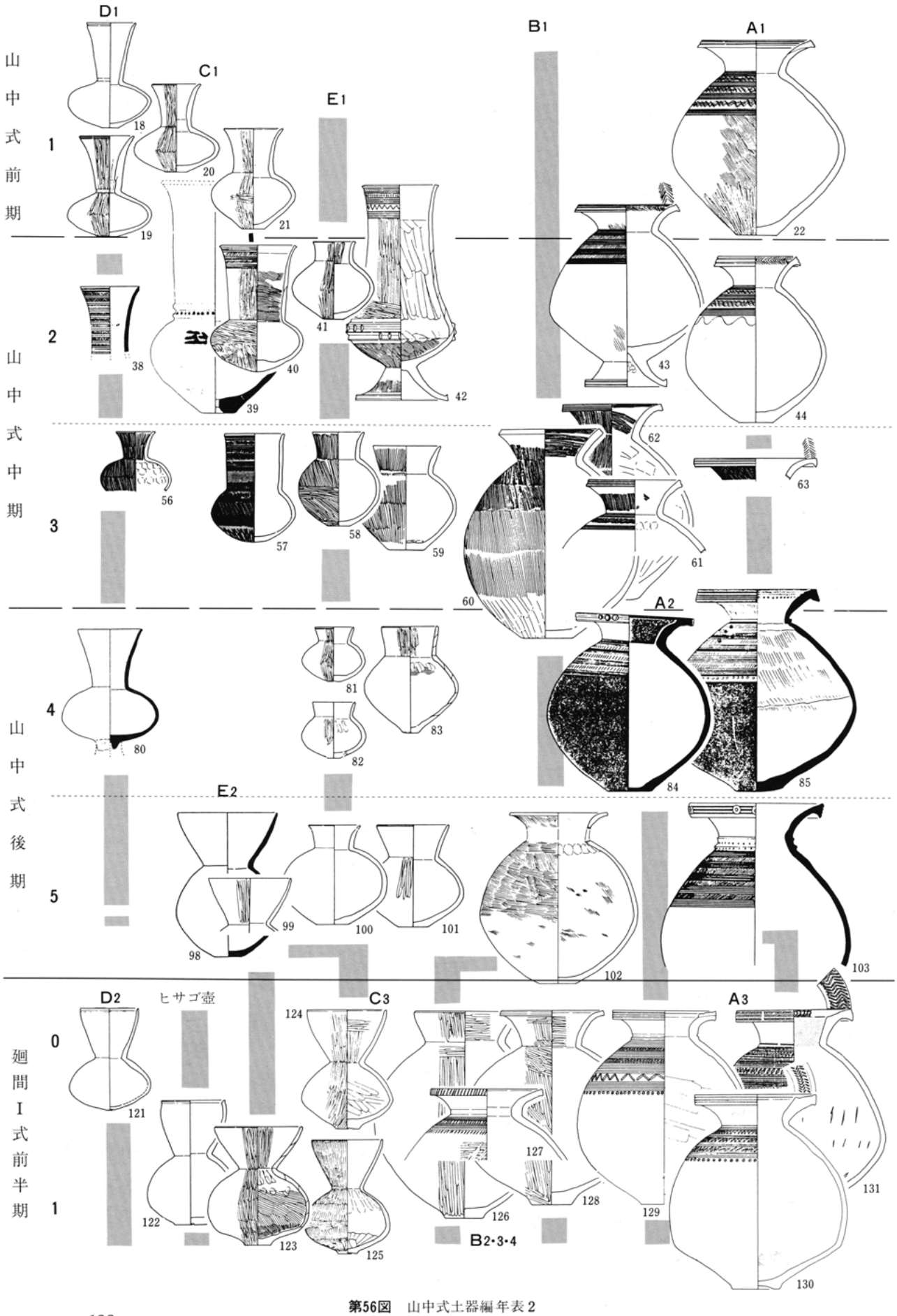
4段階

北川田遺跡．堀之内花ノ木遺跡ＳＫ５０をもって設定する。新たな器種の登場が認められる。鉢Ｂ3及びＣ、壺Ａ２、そして甕Ｂ２である。高杯Ａ３は３段階で見られた加飾性がしだいに消失していく。それは杯部上段の擬凹線文がほとんど見られなくなり、波状文は上段下位に施されるものが多い。また杯部の深さが増すとともに、下段の内彎が強調され、さらに上段がより大きく外彎する。口縁端部の擬凹線も形骸化し、消失するものもある。高杯ＢはＢ３．４以外はほとんど見られず、Ｂ１．２は消失したものと思われる。高杯Ｃは彎曲する形態から直線的で大きく開く形態に変化するようである。鉢は、あらたに口径が体部径を凌駕するＢ３形式と口縁部が大きく拡張するＣ形式が見られるようになる。しかし体部最大径の下降は基調として認められる。底部は僅かに残存し、確実に欠損するのは廻間Ⅰ式期からである。壺Ａ１はわずかであるが低部が明確化しはじめ、体部の文様に、下段列点文が加わるパレス文様Ⅱが登場する[21]。なお口縁端部の垂下拡張が著しくなる。口縁部に明確な平坦面を持つ壺Ａ２が登場する。ただしＡ２の平坦面には基本的には文様が施されず、加飾性をもつが体部変化は他の壺と同じである。甕では明らかに甕Ａ２が主体となり、体部中央付近に最大径をおく。外面調整においてはタテ方向に加えてあらたにヨコ方向のハケが認められるようになる。内面はケズリのほか掻壁技法も確認できる。甕Ｂが確実に共伴し、刺突文は大きく施される。

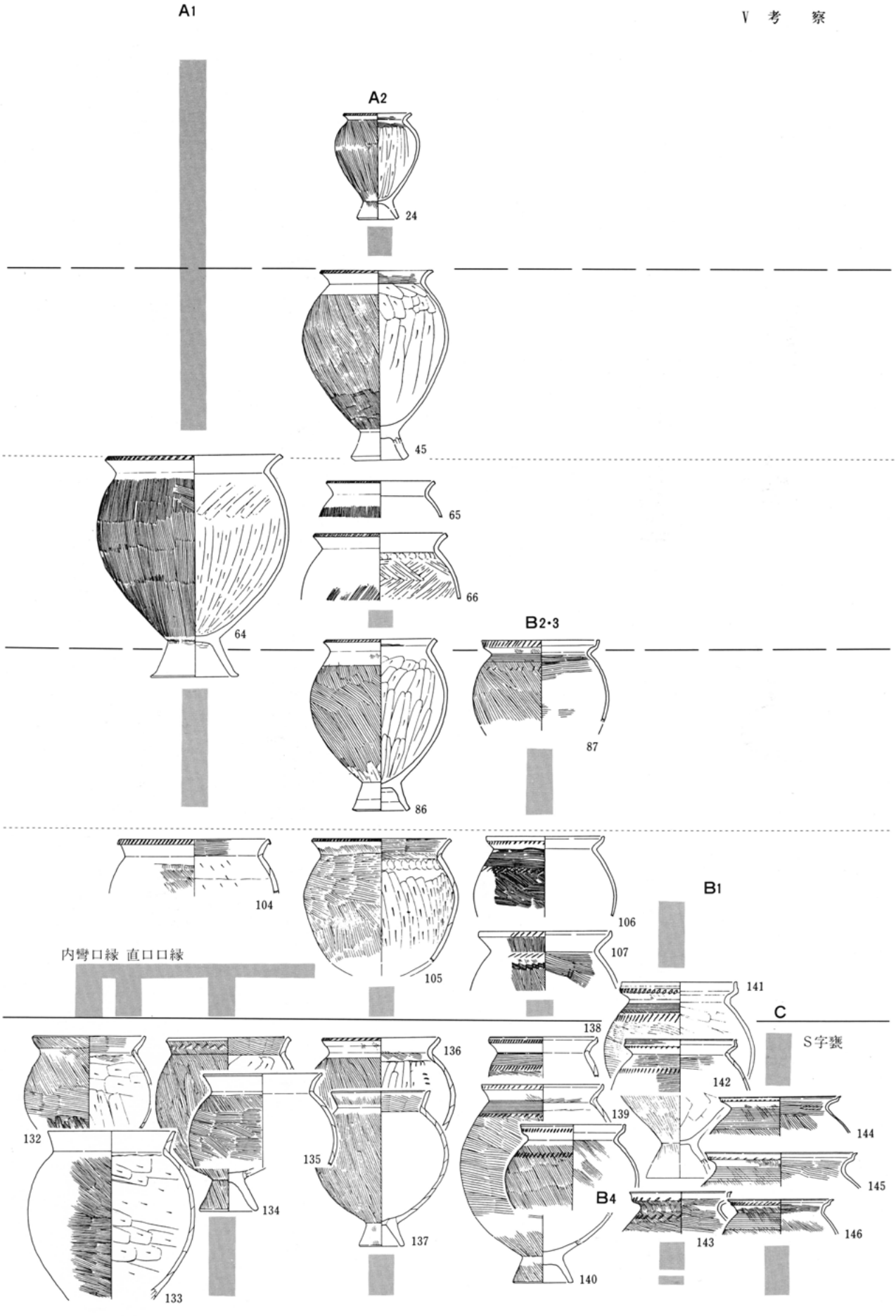


第55図　山中式土器編年表1


D
A
A
B1
B1
C1
11
12
13
16
10
14
15
17
30
32
34
36
37
29
31
33
35
52
53
54
55
C
B3
74
76
79
75
77
78
95
96
97
C3
B2
114
115
116
117
119
118
120
113



第56図　山中式土器編年表2


A1
A2
24
45
64
65
66
B2・3
86
87
104
105
106
107
B1
内彎口縁 直口口縁
138
141
C
S字甕
132
133
134
135
136
137
139
140
142
143
144
145
146
B4

5段階

岩倉城遺跡ＳＢ０６、名古屋台地部では瑞穂遺跡４次ＳＢ０２[22]を中心に設定できる。また伊勢地域では西ヶ広遺跡ＳＢ２１がほぼこの段階に相当しよう[23]。

高杯A3は急速に消失し、変わってA4が主体を占めるようになる。この形態はおそらくA2の形態変化から生み出されてくるものと考えれる。それはミガキ調整も含めて、A2の脚部が、3.4段階のA3の変化に同調することなく柱状をたもつことからも想定できよう。A4は脚部が外反するものと、柱状をたもちつつ内彎するものが見られる。径深比率は30となる。なお細部彎曲調整.直接大きく内彎する脚部をもつ高杯A5の登場は廻間Ⅰ式期からである。因みに径深比率は40となり、その後は杯部径稜変化が基調となる。高杯B4は著しく深さが増加した形状を呈し、脚部は大きく八字状に開く。高杯は全体に端部の面取りが欠損する場合が多い。透孔は多様化し、２段構成や、互違穿孔等も見られ、穿孔位置も脚部中央位が一般化する。壺はA1以外に未だ平底を保ち、明確な定部を表面化していないのであり、突出した底部の登場は廻間Ⅰ式期からである。口頸部の内彎化は基本的には短頸壺E2に限定でき、他の器種への普遍化は廻間様式をまたねばならない。壺A1は口縁端部の垂下拡張が内傾する。なお口縁内面に文様面をもち、体部最大径が1/4付近に下降した、所謂しもぶくれ形態をもつA3形式は廻間Ⅰ式期の段階であり、山中式５段階での共伴例はない。甕は４段階と共通するが、甕B2が増加する傾向が認められる。また口縁部における多様な形状や、台部の明確な内彎もこの段階では見られない。

5　山中様式について

以上の変遷による器種の消長を基本にして山中様式を設定できる。山中様式を構成する基本形式は以下の器種といえる。有段高杯Ａ２．Ａ３、ワイングラス形高杯である高杯B3.B4、器台Ａ及び「東海系器台」である器台Ｂ、有段鉢Ｂ、加飾広口壺A1(パレス文様Ⅰ)、長頸壺C1.C2、細頸壺D1、平底の短頸壺E1、台付甕A2。これらの器種はすでに１段階の標式資料と考えた、山中遺跡Ｂ地点に共伴しており、この段階をもって山中様式が確立していることが想定できるのである。したがってこれらの型式がほぼ同時に濃尾平野低地部において生み出されていたとすれば、その時点をもって新しい様式の誕生を考えるべきであろう。そしてその要素が現状において最も整っているものが山中遺跡である限り、その様式名称に「山中」の名を称することになんのためらいもないのである。

山中様式直前段階

さて山中様式直前の土器群に関してはほとんど情報がない。直前様式から残存する形式は少なく、僅かに高杯Ａ１．Ｂ１．D、鉢A、壺Ｂ１くらいである。その点からも高杯Ａ１．Ｂ１のみの出現をもって「山中期」とすることは無理であろう。やはり基本構成形式のほぼ一斉の出現の意味するところの方が重要なことはいうまでもない。さて直前様式を探る唯一の手掛りは阿弥陀寺遺跡における阿弥陀寺Ⅲ-3期.Ⅳ期古相とした段階の土器群の評価にかかっているといえる[24]。特にⅣ期古相の良好な資料の発見が、研究の進展には欠かせない。なお「見晴台式？」として公表されている極僅かな土器群には、直接的に山中様式と結び付ける要素がまったくみあたらない。ただ型式が異なるものの、甕の技法.特色からは山中式中期と併行するようにも思われる。現状では山中様式前半と併行する別の土器群か。

山中様式の終焉

次に山中様式に後続する廻間Ⅰ式期との関係をまとめておこう。近年廻間Ⅰ式1段階の良好な資料が発見され、土器形式の変遷がほぼ詳細に遺構資料に基づき立証できるようになった[25]。廻間Ⅰ式期をもって出現する形式としてまず有段高杯A5、椀形高杯C3、そして箱状杯部の有稜高杯がある。器台は細部彎曲調整内彎脚をもつ器台B2、直口鉢。壺では加飾広口壺A3、広口壺B2.B3.B4、長頸内彎壺C3とヒサゴ壺、細頸内彎壺D2。さらに甕においてはく字状口縁台付甕の多様な在り方、そしてS字甕。こうした廻間様式を構成する基本形式の出現とともに見逃すことができないのが技法.基調の問題である。まず有段高杯では細部彎曲調整をもつ内彎脚（杯部と直接接続する脚）の成立。杯部の変化が径深比率から径稜比率に移行する（第57図）。さて内彎志向であるが、明らかに山中式後期の段階で出現する。しかしその器種は極限定でき、高杯A4と短頸壺E2である。ところが廻間Ⅰ式期になると各種の高杯を初め器台.長頸壺.広口壺.甕の口縁.台部と様々な部位に採用され、様式全体としてのデザインの統一が計られることになる。形態の内彎志向は廻間Ⅰ式期に確立する。パレス壺A3の出現は注目でき、さらに赤彩と刺突文を組み合わす画期的な文様である、パレス文様Ⅲの登場は興味深い。またミガキ調整を多用する壺の多様化と底部の突出は廻間Ⅰ式期の特色である。山中様式を構成した基本形式の終焉は、同時に廻間様式を構成する主要型式群の出現によってのみ実現できたのである。

山中様式２題

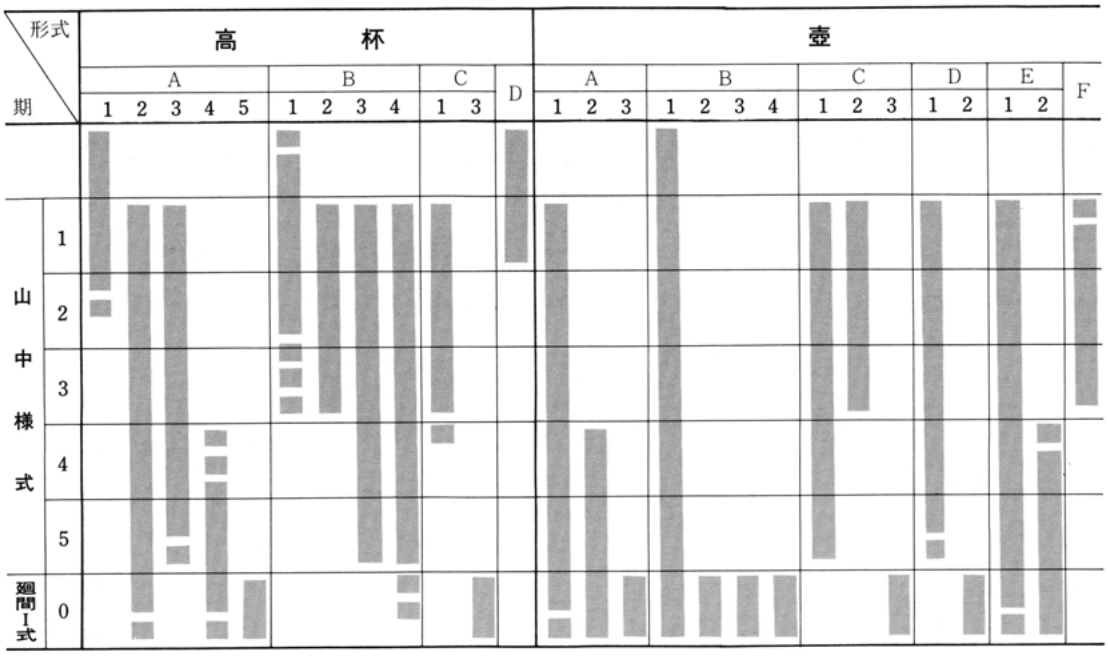
さてここで山中様式をめぐる当面の問題を２つ取り上げておきたい。一つは山中様式は通説によると畿内弥生後期の土器群の影響下で成立したように理解されているが、はたしてそうであろうか。今一つは山中様式後期4.5 段階の評価である。

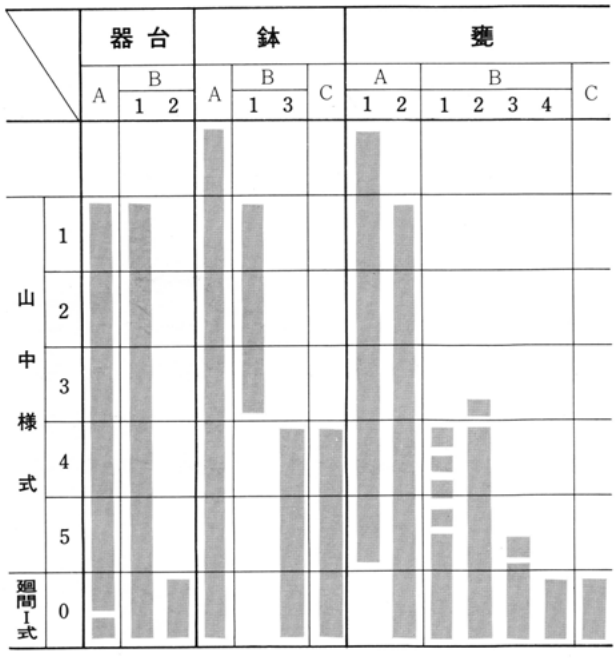
まず山中様式成立期の土器群である1段階の形状を概観すると、どうも畿内の型式に類似するというようなものはほとんど見当たらない。高杯A3.B.鉢.壺C1.D1.Fが大和.河内の弥生後期の土器群の中に近似する資料が見当たらない。類似品を捜すとすれは、吉備地域からの影響とされる土器に行き当たる。こうした諸点を総合すると山中様式の成立には直接畿内地域を考える必要はなく、むしろ中.東部瀬戸内地域の土器様式をまずは考慮すべきであろう。ところで大阪府巨摩・爪生堂遺跡沼状遺構上層の内には山中式前期と共通する資料が認められ[26]、山中様式の成立が畿内Ⅴ様式初段階まで遡って考えることが可能であることを示すものである。

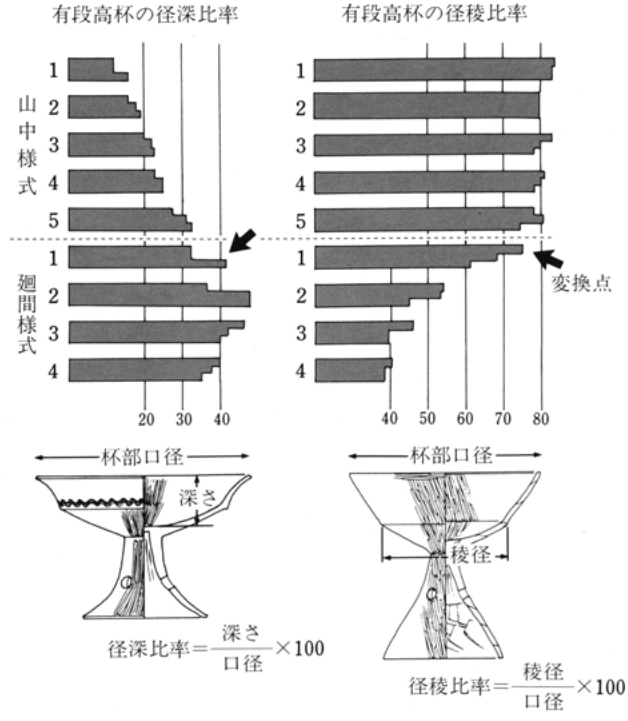
次に山中式後期の問題であるが、高杯A4.鉢B3.鉢C.壺A2.E2.甕B2という新たな器種が参入する。こうした山中様式を構成する基本形式の変遷の中での新たな型式の参入は、廻間様式におけるⅢ式期の状況と類似する。廻間Ⅰ式期に登場するパレス壺A3形式の成立には、どうしてもA1とA2の相乗が必要であり、高杯A5の成立においても同様にA2とA4が不可欠である。新たな形式.形態を摸作する混沌とした製作環境を想定できるかもしれない。するとこうした状況は社会的に大きな変動、混乱を予見するものであるように思われる。また手焙形土器の登場と小型品の増加も山中式後期にあり、それは畿内庄内様式直前段階との共鳴現象を想定できる。

（赤塚次郎）

第57図 形 式 の 消 長







編年表遺跡一覧

1段階　朝日SX194(1・2・5・6・7・11・12・23・24)
山中B地点(3・4・8・9・10・13・14・15・17～22)
山中A地点(16)

2段階　山中D地点(26・27・32・36・37・40・42・43・44・45)
蕪池(25・28・29・30・31・33・34・35・38・39・41)

3段階　苗代第Ⅱ地点(46・48～53・56・58・59・61・63～66)
高蔵SD04(57・60・62)
山中(47・55)無地(54)

4段階　掘之内花ノ木SK50(67・68・76・81・87)SB54(69)
北川田(70・73・74・75・77・78・80・84・85)
朝日SX192(72・86)山中SK56(79・83)

5段階　岩倉城SB06(95～97・102・104・105)
瑞穂SB02(90・94・99・100・101・106・107)
西ヶ広SB21(88・92・103)SB23(98)SB15(89)
朝日SD178(93)廻間SB02(91)

廻間Ⅰ式　岩倉城SB04(108・116・117・119・135・138)
掘之内花ノ木SB52・SX01(112・114・118・136・144)
廻間SB02(134・135・109・110)SB17(113)SB32(143)SB67(115・142)
SB75(140・145・146)SU04(133)SZ01(120・132)SB01(139)
土田(124・126・127・128・129・130・141)
岩倉城SZ01(111・125)山中SD10(123)朝日SD177(121)SD04(122)

註

(1) 大参義一1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ＸＬＶ11

(2) 石黒立人1987「高蔵式から山中式へ」『欠山式土器とその前後　研究.報告編』

(3) 石黒立人1988「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点」『古代』86号

(4) 宮腰健司1991「濃尾平野」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第8回東海埋蔵文化財研究会

(5) 註4)に同じ。山中遺跡Ｂ地点土器を山中式でも新しい段階とする見方に代表される。

(6) 吉田章一郎1960『愛知県一宮市萩原町の弥生文化遺跡』愛知県教育委員会

(7) 一宮市1967『新編一宮市史　資料編』２

(8) 山中遺跡.南木戸遺跡.苗代遺跡.二夕子遺跡.河田遺跡等を含め「萩原遺跡群」として大きく一つにまとまる。

(9) 第Ⅱ地点の遺物には廻間Ⅰ式期の土器が混入しており、資料の取り扱いには配慮が必要である。

(10) 服部信博1991「岩倉城遺跡下層出土の遺構と遺物」『愛知県埋蔵文化財センター　年報』平成２年度

(11) 赤塚次郎他「堀之内花ノ木遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター　年報』平成３年度

(12) 杯部深さを口縁部径で除し、100を乗する。径深比率での数値でおおよその段階を比定できる。但し大型高杯はその限りではない。

(13) 杯部稜径を口縁部径で除し、100を乗する。口稜比率の変化は廻間Ⅰ式０段階をもって開始される。

(14) ２段構成の穿孔.互違穿孔.4以上の透孔を穿つ等。但し大型高杯は例外であり、穿孔方法は多様である。

(15) SX194とした資料には山中式前期（Ａ群）とその他の資料（Ｂ群）が混在する。『朝日遺跡』1982

(16) 「東海系」器台と呼んでよいものである。山中様式から廻間様式にかけて存続する。

(17) 現状では山中様式をもって出現する型式に含めて考えることができよう。

(18) 一定の装飾が組み合わされ、特定形式に多用する文様は、パタン化され普遍化できる。パレス壺の文様は大きく２分でき、一つは櫛描文で、今一つは刺突文と横線文の組み合わせ。前者は他の広口壺等に広く使用されるため、後者を特にパレス文様としておきたい。パレス文様は４種あり、Ⅰは横線文と刺突文の組み合わせ。ⅡはⅠに下段列点文帯を加える。Ⅲは横線文と波線文を組み合わせ、さらに赤彩を波線文に加える。ⅣはⅢから下段列点文帯、時に横線文が欠損するもの。パレス文様Ⅲの成立が文様においても一つの画期であり、壺Ａ３の形式の成立と呼応する（廻間Ⅰ式前半期）。

(19) 重松和男他1987『高蔵遺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XX

(20) 杯部上段下位の擬凹線文は2段階にも見られるが、その普及は3段階の特色としてよい。

(21) 註18)に同じ現状では山中式後期から廻間Ⅰ式前半期に散見できる。

(22) 服部哲也1987『瑞穂遺跡第4次調査の概要』名古屋市教育委員会

(23) 小玉道明他1970「西ケ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会

(24) 石黒立人1990『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集

(25) 岩倉城遺跡下層SB04(註10).堀之内花ノ木遺跡SB52(註11) これらは廻間Ⅰ式０段階の基本資料である。なお廻間遺跡SB02はこれらの資料の発見により、この段階に主体を置くことが明らかとなった。赤塚1992「廻間Ⅰ式覚書92」『庄内式土器研究Ⅰ』

(26) 玉井功・伊藤暁子1982『巨摩・瓜生堂遺跡』（財）大阪文化財センター

資料の実見に際し、一宮市博物館の土本典生・田中禎子両氏には多くの御配慮を賜わった。

第４節　山中遺跡の墳丘墓について

今回の山中遺跡の発掘調査では、墳丘墓が８基確認された。その内、ほぼ全体の形状と、編年的な位置づけが可能なものは、ＳＺ１０．１１．１３の３基にすぎない。しかしこれらの内容は主体部の検出も含めて、豊富である。そこで以下この３基にこだわりながら、その情報の分析をまとめておくことにしよう。なお個々の状況については第Ⅱ章を参照されたい。

墳形

ＳＺ１０は南西隅に陸橋部をおき「Ｌ字型」を呈す。ＳＺ１１には西溝内に掘り残しが認められる、所謂広義の「前方後方型」である「Ｂ型墳」と考えてよいものである。ＳＺ１３は墳形の改変が伴なう注目すべきもので、本来は北西と南西部に陸橋部を置く「コ字型」を呈しており、その後に「前方後方型」に再整備される。なおこの改変には、主体部の重複という他の墳丘墓に見られない行為が伴なっていた。なお「コ字・Ｌ字型」は山中様式を代表する墳形であり、まったく問題はない。ただＳＺ１１はやや開口部の位置が中央部よりズレており、「Ｂ1亜式」(1)の範疇で捉えられよう。最近の調査によると山中様式にはすでにＢ型が広く伊勢湾沿岸地域に分布しており、ＳＺ１１はそうした類例にあてはまる(2)。

時期

ＳＺ１０は、ＳＫ５６の土器から山中式4段階に含めてよく、さらに周溝内出土土器もやはり4段階に中心を置くものである。したがって造営時期をこの段階としておく。ただしＳＫ３８の資料はさらに遡るものであり、山中式中期に掘削時期を求めることも可能ではある。ここでは主体部の設営を含めて山中式4段階に中心をおく墳丘墓と理解しておきたい。ＳＺ１１は明らかに山中式5段階に位置づけてよい。さてＳＺ１３は主体部等の遺物から山中式後期(4.5段階)に造営を想定でき、その後廻間Ⅰ式後半期になって墳形の改変が行なわれた。

主体部

ＳＺ１０で７基の主体部と４基の土坑を検出でき、これらの土坑はＳＫ５６等により主体部に伴なう供献物整理用の機能を想定した。なおこの種の土坑は他の墳丘墓で確認できていないところから、時期差による祭祀形態の変化を想定したい。ＳＺ１１で２基がＳＺ１３で５基の主体部を確認。その内中心主体は全て東西方向に、墳丘の中軸線上に設営されている。規模は５～６ｍとほぼ似かよっている。なお棺は3mほどの組立式木棺と想定でき、副葬品は認められない。中心主体を中心に「コ」字状に副主体部等が配置されることは共通するようである。それによると「南」を意識したものとなる。なお主体部の掘削は下記のような順になる。

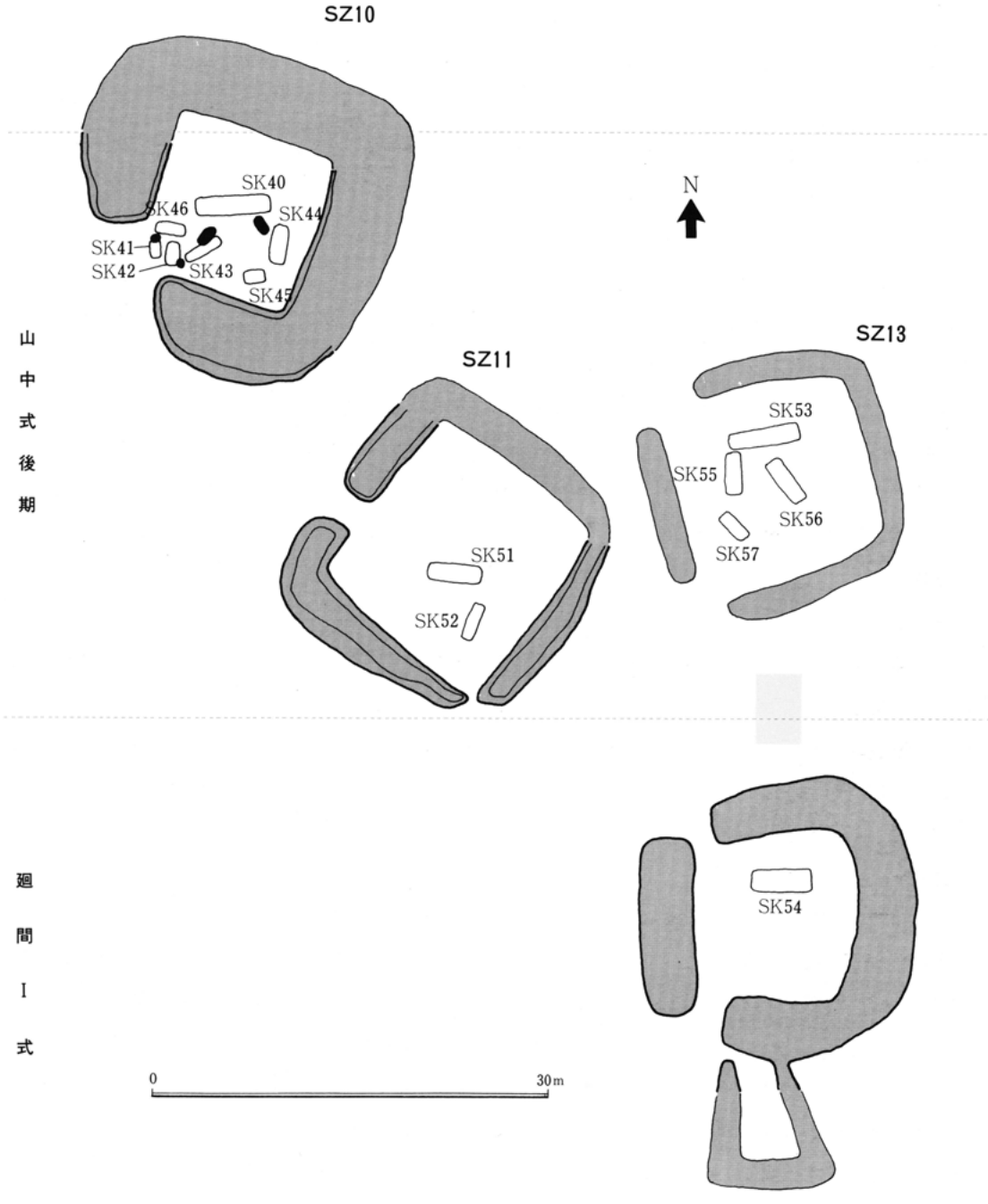
ＳＺ１０　　ＳＫ４１・４２・３７→ＳＫ４３→ＳＫ４６・４０

ＳＺ１３　　ＳＫ５３→ＳＫ５５・５６・５７→ＳＫ５４

（赤塚次郎）

註1)田中新史1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号

2)墳形及び前方後方型墳丘墓については、赤塚次郎1992「東海系のトレース」『古代文化』第44巻第６号による。



第58図 墳 丘 墓（1：500）

第Ⅵ章　まとめ

山中遺跡は、濃尾平野のほぼ中央部に位置する一宮市の西方に広がる高燥な自然堤防上で展開した遺跡である。遺跡の発見は、昭和34年の県立尾張病院の建築工事に伴うものであり、その際、パレス・スタイル土器をはじめとして多量の弥生後期の土器が出土した。大参義一氏はこれらの資料を当地方の弥生後期土器編年上の基準資料に位置付け、「山中式」を提唱され、遺跡は一躍脚光を浴びることとなった。しかし、それらの資料は、小規模な調査によって出土したものであり、遺跡の持つ性格等は明らかにされないまま今日に至った。今回、(財)愛知県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査は本遺跡にとって、はじめての大規模な調査であり、調査面積は3500㎡におよんだ。その結果は、前章までに記してきた通りである。簡単にまとめておきたい。

発掘調査によって確認された遺構と遺物は、大きくＡ期～Ｃ期の３時期に分類することができた。Ａ期は縄文晩期終末から弥生時代前期を中心とした時期、Ｂ期は山中式土器の時代を中心として古墳時代前期まで、そしてＣ期は古代・中世を中心とした時期である。

Ａ期の成果…弥生時代前期を中心として、予想もしなかった多大な成果をあげることができた。それは、伊勢湾沿岸地方ではじめて弥生前期集落の具体像に迫るデータを得られた点にある。環濠によって居住域と墓域とが明確に区分された集落構造の確認は、今後の弥生前期集落研究にとって注目すべき内容を提供したといえよう。また、今回検出された方形周溝墓の平面形態は、四隅にブリッジを持ついわゆる“東日本形方形周溝墓”であり、この種のタイプの起源を伊勢湾沿岸地方に求めることが可能になった点も見逃すことはできない。

検出した遺構は、環濠１条、竪穴住居10棟、方形周溝墓９基、石器製作関連遺構がある。

Ｂ期の成果…弥生時代後期から古墳時代前期に関しては、居住域を構成する要素は一切認められず、検出された遺構は、墳丘墓に限定されるあり方を示し、従来から想定されていたように、墓域を形成していたことが明らかとなった。検出した墳丘墓は８基あり、ＳＺ13のように「前方後方型」に改変した墳丘墓もみられた。また、Ｇ区において、古墳時代前期の水田跡も確認でき、遺跡の東方に生産関係の空間を設定する必要性も新たに生じてきた。

Ｃ期の成果…遺構の分布は、希薄であったが、古代・中世の遺物が若干みられた。

以上、今回の山中遺跡の発掘調査によって得られた成果を述べてきた。これらは、今後の地道な調査・研究があってこそはじめて具体化され、保証されるものである。本書の内容が今後の調査・研究に積極的に活用されることを期待して、筆を置くこととする。

（服部信博）

別　表

目次

遺構一覧表……132
遺物一覧表……135

・遺構一覧表

A1期

土器棺墓
土　坑

調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
B	SK01	SK06	(0.68)	0.64	16	
A	SK02	SK64	3.20	2.50	5	
A	SK03	SK65	4.50	2.20	8	
A	SK04	SK45	0.88	0.74	9	
A	SK05	SK61	1.70	0.70	6	

A2期

溝

調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
A	SD01	SD62	／	4.50	60	
A	SD02	SD57	／	1.20	40	
A	SD03	SD56	／	3.00	43	弥生中期

竪穴住居

調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
A	SB10	SB10	5.40	／	8	
A	SB11	SB11	6.10	／	12	
A	SB12	SB12	5.30	5.20	8	
A	SB13	SB13	4.10	4.00	7	
A	SB14	SB14	／	／	6	
A	SB15	SB15	／	／	13	
A	SB16	SB16	3.90	3.00	17	
A	SB17	SB17	4.60	／	10	石器製作関連
A	SB18	SB18	5.40	／	12	
A	SB19	SB19	4.20	4.00	1	
	SB19－SK37	SB19－SK01	0.90	0.80	32	集石

方形周溝墓

調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
A．B	SZ01		9.80	8.00		
	SD10	SD02	(7.00)	1.10	27	
	SD11	SD36.SD10	4.60	0.80	46	
	SD12	SD37	7.30	0.78	39	
	SD13	SD13	5.80	1.00	33	
A	SZ02		10.0	7.00		北、西周溝未検出
	SD14	SD39	4.00	0.63	44	
	SD15	SD38	7.40	1.07	34	
A	SZ03		10.8	10.50		
	SD16	SD43	(11.40)	1.18	49	
	SD17	SD44	(7.40)	1.26	48	
	SD18	SD33	(12.20)	1.46	37	
	SD19	SD32	(9.40)	0.88	23	
A	SZ04		(8.00)	6.70		東周溝未検出
	SD20	SD52	／	／	／	
	SD21	SD48	(5.60)	1.60	43	
	SD22	SD49	(6.80)	1.15	32	
A	SZ05		5.60	4.20		
	SD23	SD51	(3.40)	0.70	25	
	SD24	SD41	(3.60)	0.56	11	
	SD25	SD42	(3.60)	0.70	27	
	SD26	SK23	／	0.68	25	
A	SZ06		6.50	5.60		
	SD27	SD60	4.00	1.00	20	
	SD28	SD46	4.60	0.54	23	
	SD29	SD47	3.90	0.63	25	
	SD30	SD53	5.60	0.90	15	
A	SZ07		6.50	(5.10)		西周溝未検出
	SD31	SD59	2.20	0.42	17	
	SD32	SD58	3.00	0.47	18	
	SD33	SD55	4.20	1.12	32	
B	SZ08		8.40	(6.00)		南周溝未検出
	SD34	SD12	4.80	0.60	13	
	SD35	SD11	／	0.70	32	
	SD36	SD04	／	0.70	34	
B	SZ09		(9.50)	7.00		西周溝未検出
	SD37	SD07	／	0.70	7	
	SD38	SD09	(4.40)	0.90	14	
	SD39	SD08	5.00	0.80	29	

土　坑

調査区	遺跡番号	旧遺跡番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
A	SK11	SK01	(1.10)	0.80	20	
A	SK12	SK14	／	／	3	
A	SK13	SK15	2.10	2.10	12	
A	SK14	SK04	1.60	1.10	18	
A	SK15	SK16	(1.40)	1.33	76	
A	SK16	SK25	1.30	1.10	13	
A	SK17	SK26	1.20	1.00	16	
A	SK18	SK24	1.80	1.00	18	
A	SK19	SD53	／	1.00	27	
A	SK20	SD54	／	1.05	11	
A	SK21	SD40	／	1.00	30	
A	SK22	SK34	3.00	3.00	40	
A	SK23	SK28	0.80	0.57	14	精製壺
A	SK24	SK32	1.10	0.90	15	
A	SK25	SK30	1.36	0.83	10	
A	SK26	SK50	2.30	1.00	42	石器関連遺構
A	SK27	SK57	5.20	(2.00)	37	石器関連遺構
A	SK28	SK58	2.70	1.60	4	
A	SK29	SD61	6.70	1.90	38	
A	SK30	SK74	1.70	1.20	13	
A	SK31	SK75	1.00	1.00	23	
A	SK32	SK31	1.00	1.00	11	
A	SK33	P－21	0.62	0.52	21	
A	SK34	SK48	1.20	0.85	22	
A	SK35	SK44	0.70	0.59	31	
A	SK36	SK67	1.90	1.15	15	弥生中期

B期

水　田

調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
G	ST01	ST01	／	／	／	
G	ST02	ST02	／	／	／	
G	ST03	ST03	／	／	／	

溝

調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
A	SD04	SD31	3.60	1.40	28	
G	SD05	SD02	／	0.95	7	
F	SD06	SD05	／	0.60	42	
F	SD07	SD08	／	1.50	44	

墳丘墓

調査区	遺構番号	旧遺構番号	規模（m）	溝幅（m）	深さ（cm）	方位	備考
A	SZ10	SZ10	13×(13)	6.0～7.0	0.4	N-20°-E	
A．B	SZ11	SZ11	16.5×(11)	2.6～3.8	0.4	N-35°-E	
D	SZ12	SZ12	／	1.8～2.6	0.35	N-30°-E	
F	SZ13	SZ13	15×15	4.0	0.5	N-4°-E	前方後方型に改変
F	SZ14	SZ14	／	／	0.25	／	
F	SZ15	SZ15	／	／	1.66	／	
H	SZ16	SZ16	／	／	0.1	／	
H	SZ17	SZ17	／	／	0.25	／	

墳丘墓主体部・関連施設

調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	方位	備考
A	SK40	SK36	6.00	1.40	23	N-88°-E	SZ10主体部
A	SK41	SK41	1.30	0.70	6	N-5°-W	SZ10主体部，配石
A	SK42	SK42	1.92	0.95	18	N-3°-E	SZ10主体部，朱の痕跡
A	SK43	SK43	2.85	0.88	18	N-57°-E	SZ10主体部，配石
A	SK44	SK37	3.00	1.20	19	N-10°-E	SZ10主体部
A	SK45	SK38	1.35	9.40	25	N-77°-E	SZ10主体部
A	SK46	SK35	2.22	1.10	8	N-70°-E	SZ10主体部
A	SK47	SK56	1.65	1.00	8	／	SZ10関連施設
A	SK48	SK29	1.70	0.80	15	／	SZ10関連施設
A	SK49	SK47	0.60	0.60	18	／	SZ10関連施設
A	SK50	SK55	3.55	1.30	30	／	SZ10関連施設
B	SK51	SK07	4.10	1.30	25	N-95°-E	SZ11主体部，棺3.2×0.50m
B	SK52	SK08	2.70	0.80	25	N-25°-E	SZ11主体部，棺2.4×0.35m
F	SK53	SK06	5.50	1.35	28	N-81°-E	SZ13主体部
F	SK54	SK02	4.50	1.90	25	N-91°-E	SZ13主体部，棺2.9×0.72m
F	SK55	SK01	3.55	1.30	30	N-0°-E	SZ13主体部，棺2.8×0.75m
F	SK56	SK03	3.70	1.20	30	N-37°-W	SZ13主体部，棺2.7×0.65m
F	SK57	SK04	2.60	0.80	22	N-43°-W	SZ13主体部

C期

	調査区	遺構番号	旧遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備考
柵	D	SA101	SA01	5間(10.8)	3間(8.6)	／	
建物	A	SB101	SB01	3間(6.2)	／	／	
	A	SB102	SB02	4間(7.0)	／	／	
	B	SB103	SB01	3間(7.5)	／	／	
溝	A	SD101	S23	／	1.14	40	
	A	SD102	SD21	／	0.35	9	
	A	SD103	SD22	／	0.40	10	
	A	SD104	SD14	／	1.80	3	
	A	SD105	SD10	／	0.60	8	
	A	SD106	SD12	／	0.80	30	
	A	SD107	SD11	／	0.60	12	
	A	SD108	SD15	／	0.60	10	
	A	SD109	SD16	／	0.75	25	
	D	SD110	SD51	／	1.50	34	
	F	SD111	SD01	／	0.65	30	
	F	SD112	SD02	／	0.50	12	
	F	SD113	SD03	／	0.50	13	
	F	SD114	SD04	／	1.20	24	
	F	SD115	SD06	／	2.40	31	
井戸	A	SE101	SE03	2.06	1.90	75	
	A	SE102	SE02	1.14	1.10	(40)	
	D	SE103	SE51	2.85	2.70	(100)	
	F	SE104	SE02	3.10	2.70	(221)	
	F	SE105	SE01	2.00	1.70	105	
土坑	A	SK101	SK03	2.00	1.90	10	
	A	SK102	SK06	2.20	／	13	
	A	SK103	SK11	1.60	1.20	60	
	A	SK104	SK12	／	1.50	15	
	D	SK105	SK51	1.25	0.90	39	
	D	SK106	SK52	1.70	1.20	40	
	D	SK107	SK53	2.10	1.80	60	
	D	SK108	SK54	／	／	15	
	D	SK109	SK60	／	／	32	

※墳丘側下端間を計算する

方形周溝墓の規模計測方法

遺構の表記

- SA …… 柵
- SB …… 建物
- SD …… 溝
- SE …… 井戸
- SK …… 土坑
- ST …… 水田
- SZ …… 墓

・遺物一覧表

A期

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目 器形	体部上半の形状	口縁端部の文様と調整	器面の調整 外	器面の調整 中	体部の文様	備考
63	A－E－568	／	／	検出	Ⅰ	ア	無a	Ca	B	βa	
64	A－E－122	／	／	検出	Ⅰ	ア	無b	／	B	βa	
65	A－E－526	／	／	検出	Ⅰ	ア	無b	／	B	βa	
66	B－E－006	／	／	検出	Ⅰ	ア	無a	／	B	.βa	
67	A－E－354	／	／	検出	Ⅰ	／	／	Ca	B	βb	
68	A－E－295	／	／	検出	Ⅰ	／	／	Ca	B	βb	
69	A－E－186	／	／	SK02	Ⅰ	ア	無c	Aa	B	α	
70	A－E－187	34.2	38.0	SK02,SD01	Ⅰ	ア	無d	Aa	B	α	
71	A－E－194	／	／	SK03	／	／	／	Aa	B	／	
72	A－E－188	／	／	SK03	Ⅰ	／	／	Aa	B	／	
73	A－E－195	／	／	SK03	Ⅰ	ア	無b	Aa	B	α	
74	A－E－196	／	／	SK03	Ⅰ	ア	無c	Ab	B	α	
75	A－E－189	／	／	SK03	／	／	／	Aa	B	／	
76	A－E－192	12.4	／	SK03	Ⅰ	ア	無a	B	B，C	α	
77	A－E－193	／	／	SK03	Ⅰ	ア	／	Ab	B	／	
78	A－E－190	／	／	SK03	／	／	／	Aa	B	／	
79	A－E－197	34.8	／	SK03	Ⅰ	ア	無b	Aa	B	α	
80	A－E－191	／	／	SK03	／	／	／	Aa	B	α	
81	A－E－427	12.2	／	SK04	Ⅲ a	ア	無a	Aa	B	α	
82	A－E－440	／	／	SK05	／	／	／	Aa	B	／	
83	A－E－210	11.4	7.2	SD01	Ⅲ a	ア	無a	B	B	α	
84	A－E－203	18.4	11.5	SD01	Ⅲ b	ア	無c	Aa	B	γ	
85	A－E－306	19.0	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Aa，B	B	α	
86	A－E－204	／	／	SD01	／	／	／	Aa	B	／	
87	A－E－230	37.6	／	SD01	Ⅰ	ア	無a	Aa	B	α	
88	A－E－211	／	／	SD01	／	／	／	Aa	B	／	
89	A－E－231	19.5	／	SD01	Ⅰ	ア	有a	Ca	B	α	
90	A－E－226	32.5	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
91	A－E－225	24.0	／	SD01	Ⅰ	イ	無a	Ca	B	α	
92	A－E－228	29.8	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
93	A－E－209	／	／	SD01	／	／	／	B，Ca	B	／	
94	A－E－235	34.3	／	SD01	Ⅱ a	ウ	有b	Ca	B	α	
95	A－E－223	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Aa	B	α	
96	A－E－200	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無a	Aa	B	α	
97	A－E－307	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Aa	B	α	
98	A－E－202	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無d	Aa	B	α	
99	A－E－222	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無a	Ca	B	α	
100	A－E－218	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無a	Ca	B	α	
101	A－E－207	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無a	Ca	B	α	
102	A－E－224	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無a	Ca	B	α	
103	A－E－208	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
104	A－E－213	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
105	A－E－234	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
106	A－E－221	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
107	A－E－206	／	／	SD01	Ⅰ	ア	有a	Ca	B	α	
108	A－E－205	／	／	SD01	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
109	A－E－216	／	／	SD01	Ⅰ	ア	有a	Ca	B	α	
110	A－E－214	／	／	SD01	Ⅰ	ア	有c	Ca	B	α	
111	A－E－227	24.0	29.2	SD01	Ⅰ	ア	無c	Cc	D	γ	
112	B－E－001	23.8	29.2	SK01	Ⅰ	ア	無c	Cc	D	γ	
113	B－E－002	26.2	33.5	SK01	Ⅰ	エ	無c	Ca	B	α	
114	A－E－514	12.4	／	検出	Ⅱ b	ア	無a	Ca	B	βc	
115	A－E－242	28.6	／	SD03	Ⅰ	ア	無a	B	B	α	
116	A－E－237	26.2	／	SD03	Ⅰ	ア	無c	Aa	B	α	
117	A－E－236	21.8	／	SD03	Ⅰ	ア	無c	B	B	α	
118	A－E－241	／	／	SD03	／	／	／	Aa	B	／	
119	A－E－238	／	／	SD03	／	／	／	Aa	B	／	
120	A－E－240	／	／	SD03	Ⅰ	ア	無b	Aa	B	α	
121	A－E－243	／	／	SD03	Ⅰ	ア	無a	Aa	B	α	
122	A－E－315	／	／	SD03	Ⅰ	ア	無d	Ca	B	α	
123	A－E－239	／	／	SD03	Ⅰ	ア	無a	Ab	B	α	
124	A－E－317	／	／	SD03	Ⅰ	ア	有a	Ca	B	α	
125	A－E－244	／	／	SD03	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
126	A－E－246	／	／	SD03	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
127	A－E－245	／	／	SD03	Ⅰ	ア	無c	Ca	B	α	
128	A－E－247	／	／	SD03	／	／	／	Ab	B	／	

A₂期

遠賀川系土器

壺

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目 口縁の形態	口縁部の文様・調整 口縁端部	内面	頸部の文様・調整	体部の文様・調整	色調
129	A－E－323	23.4	／	SD01	Ⅱ	無	無	Ba3＋	／	ア
130	A－E－248	／	／	SD01	Ⅱ ?	／	／	Ba4＋	Ba，D	ア
131	A－E－249	／	／	SD01	Ⅱ	／	／	Ba5＋	Ba15	イ
132	A－E－305	／	／	SD01	Ⅱ	／	／	E	／	ア
133	A－E－299	15.4	／	SD01	Ⅱ	無	無	／	／	ア
134	A－E－255	／	／	SD01	Ⅱ	／	／	Ba2＋	／	ア
135	A－E－254	／	／	SD01	Ⅱ	／	／	Ba4＋	／	ア
136	A－E－334	／	／	SD01	Ⅱ	／	／	Ba2＋	／	ア
137	A－E－256	／	／	SD01	／	／	／	／	／	ア
138	A－E－275	／	／	SD01	／	／	／	／	／	ア
139	A－E－257	25.6	／	SD01	Ⅱ ?	有a．c	有	／	／	イ
140	A－E－258	／	／	SD01	Ⅱ ?	有a．c	有	／	／	イ
148	A－E－271	／	／	SD01	／	／	／	／	Ab6＋	イ
149	A－E－311	／	／	SD01	／	／	／	／	Ab5＋	ア
150	A－E－273	／	／	SD01	／	／	／	／	Ba4＋	ア
151	A－E－300	／	／	SD01	／	／	／	／	Ba6	ア
152	A－E－264	／	／	SD01	／	／	／	Ba6＋	／	ア
153	A－E－263	／	／	SD01	／	／	／	／	Ba9＋	ア
154	A－E－534	／	／	SD01	／	／	／	Ba5＋	／	イ
155	A－E－268	／	／	SD01	／	／	／	／	Cb1＋	ア
156	A－E－310	／	／	SD01	／	／	／	／	Cb1＋	ア
157	A－E－269	／	／	SD01	／	／	／	／	Cb1＋	ア
158	A－E－272	／	／	SD01	／	／	／	／	Cb2＋	イ
159	A－E－266	／	／	SD01	／	／	／	Cc2	／	ア
160	A－E－536	／	／	SD01	／	／	／	／	Cb1＋，Ba	ア
161	A－E－535	／	／	SD01	／	／	／	／	／	ア
162	A－E－274	／	／	SD01	／	／	／	Cb	Cb	ア
163	A－E－265	／	／	SD01	／	／	／	／	Cb	ア
185	A－E－014	18.8	28.0	SB11	Ⅱ	無	無	Ab3	Ac5	ア
186	A－E－013	／	／	SB11	／	／	／	／	Ba3，Cc	ア
187	A－E－012	／	／	SB11	／	／	／	Ba，Ca	／	イ
188	A－E－011	／	／	SB11	／	／	／	Ba3＋	／	ア
192	A－E－002	14.6	／	SB10	Ⅱ	無	無	／	／	ア
193	A－E－005	／	／	SB10	／	／	／	／	Cb1	ア
194	A－E－001	／	／	SB10	／	／	／	／	Cb1	ア
195	A－E－004	／	／	SB10	／	／	／	／	Cb1＋	ア
200	A－E－045	／	／	SB18	／	／	／	／	Cb3＋	ア
204	A－E－020	／	／	SB12	／	／	／	／	Bb5＋	イ
205	A－E－016	／	／	SB12	／	／	／	／	Ba4＋，Cb	イ
209	A－E－022	18.4	／	SB13	Ⅱ ?	無	無	／	／	ア
210	A－E－027	／	／	SB13	／	／	／	／	／	ア
211	A－E－028	／	／	SB13	／	／	／	／	Cb	ア
212	A－E－032	／	／	SB13	／	／	／	／	Cb1＋	ア
213	A－E－030	／	／	SB13	／	／	／	／	Ba3＋	ア
214	A－E－031	／	／	SB13	／	／	／	／	Ba2＋	ア
219	A－E－038	／	／	SB15	／	／	／	／	Ba7＋	イ
223	A－E－043	／	／	SB17	／	／	／	／	Ba6・4＋，	イ
225	A－E－103	／	／	SZ01	／	／	／	Cb1＋	／	ア
226	A－E－104	／	／	SZ01	／	／	／	／	Ba11＋	ア
231	A－E－136	／	／	SZ03	Ⅱ	／	有	／	／	イ
232	A－E－118	／	／	SZ03	／	／	／	Bb5＋	／	ア
233	A－E－129	／	／	SZ03	／	／	／	Bb4＋	／	イ
234	A－E－115	／	／	SZ03	／	／	／	／	Ba1＋，Cc	ア
235	A－E－119	／	／	SZ03	／	／	／	／	Ba2・1＋，	イ
236	A－E－114	／	／	SZ03	／	／	／	／	Ba	ア
237	A－E－120	／	／	SZ03	／	／	／	／	Ab6	ア
247	A－E－149	／	／	SZ04	／	／	／	／	Ba7	ア
248	A－E－155	／	／	SZ04	／	／	／	／	Ba4	ア
249	A－E－154	20.6	／	SZ04	Ⅱ ?	有a．c	有	／	／	イ
260	A－E－162	／	／	SZ05	／	／	／	／	Ba5	ア
263	A－E－168	／	／	SZ06	／	／	／	／	Cc1	ア
264	A－E－169	／	／	SZ06	／	／	／	Ba5＋	／	ア
269	A－E－177	／	／	SZ07	／	／	／	Ba3＋	／	イ
270	A－E－176	／	／	SZ07	／	／	／	Ba5＋，Ca	／	ア
272	A－E－174	／	／	SZ07	／	／	／	／	Ba13＋，C	ア
273	A－E－370	／	／	SK11	／	／	／	／	Ba4	ア
274	A－E－371	／	／	SK14	／	／	／	Cb3＋	／	ア
278	A－E－379	／	／	SK13	／	／	／	／	Ab1＋	ア
279	A－E－380	／	／	SK13	／	／	／	／	Cb1＋	イ
283	A－E－381	／	／	SK15	／	／	／	／	Cb4＋	イ
284	A－E－382	／	／	SK15	／	／	／	／	Bb2	イ
285	A－E－392	18.0	32.4	SK17	Ⅱ	無	無	Bc	Bc	ア
286	A－E－408	23.5	／	SK22	Ⅱ	／	／	Ba4＋	／	ア
287	A－E－414	16.8	／	SK22	Ⅱ	無	無	Ab5＋	／	ア
288	A－E－413	／	／	SK22	／	／	／	／	Ab3＋	ア
289	A－E－417	／	／	SK22	／	／	／	Ab5	／	ア
301	A－E－401	23.2	／	SK24	Ⅱ	有a	無	Ba6＋	／	ア
302	A－E－403	／	／	SK24	／	／	／	Ba6	／	ア
303	A－E－403	／	／	SK24	／	／	／	Ba6＋	／	ア
305	A－E－400	／	／	SK25	／	／	／	／	Ba4＋	ア
309	A－E－435	／	／	SK27	／	／	／	／	Cb2	ア

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目 口縁の形態	口縁部の文様・調整 口縁端部	内面	頸部の文様・調整	体部の文様・調整	色調
313	A－E－439	／	／	SK28	／	／	／	／	Ba7＋	ア
314	A－E－438	／	／	SK28	／	／	／	／	Ba7＋	ア
315	A－E－351	／	／	SK29	Ⅱ ?	有a．c	有	／	／	ア
316	A－E－337	／	／	SK29	Ⅱ	／	無	Ba4＋	／	ア
317	A－E－335	／	／	SK29	Ⅱ	／	／	Bb7＋	／	イ
318	A－E－350	／	／	SK29	／	／	／	Cb2＋	／	ア
319	A－E－338	／	／	SK29	／	／	／	Aa1＋	／	ア
320	A－E－356	／	／	SK29	／	／	／	／	Ba2＋	ア
321	A－E－343	25.8	／	SK29	Ⅱ	無	無	／	／	イ
322	A－E－344	／	／	SK29	／	／	／	／	Cb渦	ア
342	A－E－453	／	／	SK30	／	／	／	／	Cc1＋	イ
343	A－E－441	／	／	SK30	／	／	／	／	Ba7・3＋	ア
345	A－E－452	／	／	SK31	Ⅱ	有a．c	有	／	／	ア
346	A－E－451	／	／	SK31	Ⅱ	有a．c	有	／	／	ア
353	A－E－444	／	／	SK31	／	／	／	／	／	ア
356	A－E－319	／	／	SD03	／	／	／	Ba4＋	／	イ
357	A－E－320	／	／	SD03	／	／	／	Ba6＋	／	ア
358	A－E－324	／	／	SD03	／	／	／	Ba5＋	／	ア
359	A－E－326	／	／	SD03	／	／	／	／	Ba4＋	ア
360	A－E－313	／	／	SD03	／	／	／	Cb3＋	／	ア
366	A－E－566	36.8	／	検出	Ⅱ	無	無	／	／	イ
367	A－E－561	／	／	検出	Ⅱ	／	／	Ba1＋	／	ア
368	A－E－564	24.6	／	検出	Ⅱ	無	無	／	／	ア
369	A－E－565	26.2	／	検出	Ⅱ ?	有a．c	有	／	／	ア
370	A－E－543	／	／	検出	／	／	／	／	Ba3＋	イ
371	A－E－544	／	／	検出	／	／	／	／	Ba8＋	ア
372	A－E－537	／	／	検出	／	／	／	Bb5＋	／	イ
373	A－E－541	／	／	検出	／	／	／	／	Ab4＋	イ
374	A－E－540	／	／	検出	／	／	／	／	Ab3＋	イ
375	A－E－546	／	／	検出	／	／	／	／	Cb1	ア
376	A－E－545	／	／	検出	／	／	／	／	Cb，Bb	イ
377	A－E－538	／	／	検出	／	／	／	／	Cb渦	ア
378	A－E－539	／	／	検出	／	／	／	／	Cb渦	ア
379	A－E－542	／	／	検出	Ⅱ	／	／	Ba3+,Cb2＋	／	イ

甕

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目 口縁の形態	口縁部の文様・調整 口縁端部	内面	頸部の文様・調整	体部の文様・調整	色調
141	A－E－252	20.6	／	SD01	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
142	A－E－251	27.6	／	SD01	Ⅱ	有a	a	Ab	b	イ
143	A－E－293	25.2	27.4	SD01	Ⅱ	有a	b	Ab	b．c	イ
144	A－E－250	34.8	／	SD01	Ⅱ	有a	b	Ab	a	イ
145	A－E－260	／	／	SD01	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
146	A－E－253	／	／	SD01	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
147	A－E－301	／	／	SD01	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
164	A－E－533	／	／	SD01	／	／	／	Ab	b	イ
165	A－E－532	／	／	SD01	／	／	／	Ab	b	イ
189	A－E－008	／	／	SB11	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
201	A－E－046	／	／	SB19	Ⅰ	有b	a	Aa	a	ア
206	A－E－017	／	／	SB12	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
215	A－E－033	／	／	SB13	／	／	／	Ab	b	イ
216	A－E－026	／	／	SB13	／	／	／	Ab	b	イ
240	A－E－144	27.0	／	SZ03	Ⅱ	有a	b	Ab	b	イ
241	A－E－137	／	／	SZ03	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
242	A－E－128	／	／	SZ03	／	／	／	Ab	a	ア
250	A－E－152	26.4	／	SZ04	Ⅱ	有a	b	Ab	／	イ
251	A－E－148	／	／	SZ04	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
252	A－E－150	／	／	SZ04	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
253	A－E－147	／	／	SZ04	／	／	／	Ab	b	イ
254	A－E－146	／	／	SZ04	／	／	／	Ab	／	ア
280	A－E－386	24.0	／	SK15	Ⅱ	有a	b	Ab	b	イ
290	A－E－420	／	／	SK22	／	／	／	Ab	b	イ
307	A－E－429	27.2	／	SK26	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
310	A－E－436	／	／	SK27	Ⅰ	／	／	Aa	a	ア
324	A－E－342	／	／	SK29	Ⅱ	有a	b	／	／	イ
325	A－E－347	／	／	SK29	／	／	／	Aa	a	ア
347	A－E－447	／	／	SK31	／	／	／	Aa	／	イ
348	A－E－446	／	／	SK31	Ⅱ	有a	a	／	／	イ
352	A－E－445	／	／	SK31	／	／	／	／	a	ア
361	A－E－321	／	／	SD03	／	／	／	Ab	b	イ
380	A－E－560	19.8	／	検出	Ⅱ	有a	a	Ab	／	ア
381	A－E－567	28.6	／	検出	Ⅱ	有a	b	Ab	／	イ
382	A－E－569	22.4	／	検出	Ⅱ	有a	a	Ab	b	イ
383	A－E－563	26.4	／	検出	Ⅱ	有a	b	Ab	b	ア

鉢

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構
238	A－E－113	／	／	SZ03	292	A－E－405	32.4	／	SK22
239	A－E－117	／	／	SZ03	323	A－E－365	12.6	11.6	SK29

条痕紋系土器

壺

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目 口縁部の文様	体部文様と調整 文様	外	内
166	A－E－288	／	／	SD01	有b	／	b	e
167	A－E－287	／	／	SD01	有b	／	b	e
168	A－E－277	／	／	SD01	／	a	b	e
169	A－E－285	／	／	SD01	／	a	b	e
170	A－E－302	／	／	SD01	／	a	b	e
171	A－E－284	／	／	SD01	／	a	b	e
172	A－E－280	／	／	SD01	／	a	b	e
173	A－E－308	／	／	SD01	／	b	b	e
174	A－E－283	／	／	SD01	／	c	b	e
175	A－E－282	／	／	SD01	／	a	b	e
198	A－E－102	／	／	SB10	／	／	b	e
202	A－E－096	／	／	SB19	／	b	b	e
217	A－E－079	／	／	SB13	／	b	／	e
221	A－E－087	／	／	SB16	有b	／	b	e
227	A－E－108	／	／	SZ02	／	a	b	e
243	A－E－123	／	／	SZ03	有b	／	b	e
245	A－E－111	／	／	SZ03	／	b	b	e
255	A－E－145	／	／	SZ04	／	b	b	e
258	A－E－158	／	／	SZ04	／	d	b	e
265	A－E－173	／	／	SZ06	／	b	b	e
275	A－E－374	／	／	SK14	／	a	b	e
297	A－E－411	／	／	SK22	／	a	b	e
306	A－E－399	／	／	SK25	／	／	b	e
308	A－E－428	／	／	SK26	／	／	b	e
326	A－E－348	／	／	SK29	有	／	b	e
327	A－E－346	／	／	SK29	無	／	b	e
329	A－E－336	／	／	SK29	／	／	b	e
330	A－E－345	／	／	SK29	／	b	b	e
331	A－E－339	／	／	SK29	／	b	b	e
332	A－E－340	／	／	SK29	／	a	b	e
350	A－E－448	／	／	SK31	無	／	b	e
351	A－E－443	／	／	SK31	／	a	b	e
364	A－E－327	／	／	SD03	／	d	b	e
384	A－E－570	／	／	検出	有a	／	b	e
385	A－E－555	／	／	検出	有b	／	b	e
386	A－E－558	／	／	検出	有b	／	b	e
387	A－E－551	／	／	検出	有b	／	b	e
388	A－E－554	／	／	検出	／	a	b	e
389	A－E－572	／	／	検出	／	a	b	e

甕

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目 口縁部の文様	体部文様と調整 外	内
176	A－E－304	／	／	SD01	有b	b	e．櫛刺突
177	A－E－278	／	／	SD01	無	b	e
178	A－E－291	／	／	SD01	有a．c	b	e
220	A－E－084	／	／	SB15	有c	b	e
222	A－E－088	／	／	SB16	有b	b	e
224	A－E－092	／	／	SB17	有b	b	e
230	A－E－109	／	／	SZ02	／	b	e
244	A－E－138	／	／	SZ03	無	b	e
256	A－E－160	／	／	SZ04	有d	b	e
257	A－E－159	／	／	SZ04	有b	b	e
261	A－E－167	／	／	SZ05	有b	b	e
277	A－E－378	25.4	／	SK13	無	b	e
282	A－E－384	／	／	SK15	有b	b	e
293	A－E－406	25.6	24.4	SK22	無	d→b	e
294	A－E－418	／	／	SK22	有b	b	e
295	A－E－416	／	／	SK22	有b	b	e
296	A－E－410	／	／	SK22	有b	b	e
298	A－E－407	24.4	22.0	SK22	／	b	e
328	A－E－353	19.0	／	SK29	有b	b	e
333	A－E－349	／	／	SK29	有b	b	e
390	A－E－550	／	／	検出	有b	b	b．e
391	A－E－571	／	／	検出	有b	b	e
392	A－E－556	／	／	検出	有b	b	e
393	A－E－552	／	／	検出	有b	b	e
394	A－E－549	／	／	検出	有b	b	e
395	A－E－559	／	／	検出	有a	b	e
396	A－E－557	／	／	検出	無	b	e
397	A－E－548	／	／	検出	無	b	e

体部

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目 口縁部の文様	体部文様と調整 文様	外	内
179	A－E－303	／	／	SD01	／	／	b	e
190	A－E－071	／	／	SB11	／	／	b	e
191	A－E－070	／	／	SB11	／	／	b	e
196	A－E－060	／	／	SB10	／	／	b	e
197	A－E－062	／	／	SB10	／	／	b	e
199	A－E－066	／	／	SB10	／	／	b	e

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目			
					口縁部の文様	体部文様と調整		
						文様	外	内
203	A－E－097	／	／	SB19	／	／	b	e
207	A－E－075	／	／	SB12	／	／	b	e
208	A－E－074	／	／	SB12	／	／	b	e
218	A－E－080	／	／	SB13	／	／	b	e
228	A－E－107	／	／	SZ02	／	／	b	e
229	A－E－106	／	／	SZ02	／	／	b	e
246	A－E－125	／	／	SZ03	／	／	b	e
259	A－E－156	／	／	SZ04	／	／	b	e
262	A－E－165	／	／	SZ05	／	／	b	e
266	A－E－172	／	／	SZ06	／	／	b	e
267	A－E－171	／	／	SZ06	／	／	b	e
311	A－E－433	／	／	SK27	／	／	b	e
344	A－E－453	／	／	SK30	／	／	b	e
363	A－E－316	／	／	SD03	／	／	b	e

内傾口縁土器

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目			
					口縁部の文様	体部文様と調整		
						文様	外	内
180	A－E－276	／	／	SD01	無	／	ケズリ	e
181	A－E－289	／	／	SD01	無	／	ケズリ	e
271	A－E－175	14.8	／	SZ07	無	／	ケズリ	e
191	A－E－415	11.1	／	SK22	無	／	条痕	e

削痕系土器

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分析項目		
					口縁部の文様	口縁部の文様	体部の調整
281	A－E－385	／	／	SK15	Ⅱ	有	a
325	A－E－325	／	／	SD03	Ⅱ	有	a

その他の系統の土器

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分類	図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構	分類
182	A－E－298	／	／	SD01	C	336	A－E－361	／	／	SK29	C
183	A－E－296	／	／	SD01	C	337	A－E－360	／	／	SK29	C
184	A－E－294	／	／	SD01	C	338	A－E－363	／	／	SK29	B
268	A－E－170	／	／	SZ06	B	339	A－E－364	／	／	SK29	B
276	A－E－273	／	／	SK14	C	340	A－E－359	／	／	SK29	B
298	A－E－412	／	／	SK22	C	341	A－E－426	／	／	SK29	D
300	A－E－398	27.2	32.2	SK23	C	349	A－E－450	／	／	SK31	B
304	A－E－402	／	／	SK24	B	365	A－E－318	／	／	SD03	C
312	A－E－434	／	／	SK27	B	398	A－E－515	／	／	検出	B
334	A－E－358	14.0	／	SK29	C	399	A－E－553	／	／	検出	D
335	A－E－355	／	／	SK29	C						

B 期 の 土 器

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構
354	A－E－376	22.0	27.2	SK36
355	A－E－469	／	／	SD03
400	A－E－464	23.9	／	SZ10
401	A－E－457	17.2	／	SZ10
402	A－E－459	16.0	／	SZ10
403	A－E－460	／	／	SZ10
404	A－E－456	／	／	SZ10
405	A－E－465	17.5	／	SZ10
406	A－E－455	12.6	／	SZ10
407	A－E－463	20.7	／	SZ10
408	A－E－461	／	／	SZ10
409	A－E－462	19.2	／	SZ10
410	A－E－468	／	／	SZ10
411	A－E－432	15.0	／	SZ10，SK47
412	A－E－430	12.2	／	SZ10，SK47
413	A－E－431	8.8	16.0	SZ10，SK47
414	A－E－529	13.2	／	SZ10，SK48
415	A－E－530	14.2	／	SZ10，検出
416	A－E－528	16.2	／	SZ10，SK45
417	A－E－531	／	／	SZ10，SK45
418	A－E－528	／	／	SZ10，SK45
419	A－E－468	8.8	／	SZ10，SK47
420	B－E－005	7.4	9.0	SZ11
421	B－E－003	／	／	SZ11
422	B－E－004	／	／	SZ11
423	F－E－004	12.8	21.0	SZ11
424	F－E－030	15.2	／	SZ13
425	F－E－011	19.0	／	SZ13
426	F－E－007	21.2	／	SZ13
427	F－E－013	9.8	／	SZ13
428	F－E－016	／	／	SZ13
429	F－E－010	／	／	SZ13
430	F－E－005	19.0	29.2	SZ13
431	F－E－017	／	／	SZ13
432	F－E－002	23.5	17.3	SZ13
433	F－E－018	／	／	SZ13
434	F－E－003	22.4	18.0	SZ13
435	F－E－006	21.6	／	SZ13
436	F－E－009	21.4	／	SZ13
437	F－E－010	／	／	SZ13
438	F－E－001	／	／	SZ14
439	F－E－021	20.2	／	SZ13，SK55
440	F－E－022	16.8	／	SZ13，SK55
441	F－E－023	16.0	／	SZ13，SK54
442	F－E－024	18.0	／	SZ13，SK54
443	F－E－026	19.2	／	SZ13，SK56
444	F－E－025	／	／	SZ13，SK56
445	F－E－008	22.8	／	SZ13，SK56
446	F－E－012	19.6	／	SZ13
447	F－E－028	22.0	／	SZ13，SK53
448	F－E－027	12.8	／	SZ13，SK56
449	F－E－020	／	／	SZ13
450	F－E－015	／	／	SZ13
451	F－E－014	／	／	SZ13
452	F－E－029	／	／	SZ15
453	G－E－002	24.2	／	ST
454	G－E－001	18.6	／	ST
455	D－E－030	16.4	5.0	SZ12
456	A－E－366	13.4	24.8	SD04
457	A－E－369	13.2	9.0	SD04

C 期 の 土 器

図版番号	登録番号	口径(cm)	器高(cm)	遺構
1	A－E－481	12.7	2.7	SE101
2	A－E－482	12.0	4.5	SE101
3	A－E－483	12.2	3.7	SE101
4	A－E－480	15.0	4.0	SE101
5	D－E－010	11.2	3.0	SK107
6	D－E－009	13.2	4.0	SK109
7	D－E－008	15.2	／	SK108
8	D－E－006	26.6	／	SE103
9	D－E－004	／	／	SE103
10	D－E－001	／	／	SE103
11	D－E－003	／	／	SE103
12	D－E－002	／	／	SE103
13	D－E－007	15.8	5.8	SA101
14	A－E－478	9.4	2.8	SK103
15	A－E－477	14.8	／	SK103
16	A－E－479	15.6	／	SK103
17	A－E－473	8.2	1.2	SD101
18	A－E－472	／	／	SD101
19	A－E－471	／	／	SD101
20	D－E－023	14.7	5.5	SD110
21	D－E－024	15.4	5.3	SD110
22	D－E－022	／	／	SD110
23	D－E－021	15.8	4.7	SD110
24	D－E－025	／	／	SD110
25	D－E－026	／	／	SD110
26	D－E－028	／	／	SD110
27	D－E－027	／	／	SD110
28	D－E－018	8.4	1.9	SD110
29	A－E－014	6.0	0.9	SD110
30	D－E－012	5.4	1.1	SD110
31	D－E－013	5.6	1.0	SD110
32	A－E－017	5.8	1.3	SD110
33	D－E－014	6.0	1.1	SD110
34	D－E－016	5.6	1.1	SD110
35	D－E－015	5.5	1.2	SD110
36	D－E－029	24.6	12.4	SD110
37	D－E－037	10.6	／	検出
38	D－E－036	11.6	／	検出
39	A－E－484	／	／	検出
40	A－E－497	24.0	／	検出
41	A－E－503	13.6	／	検出
42	A－E－485	／	／	検出
43	D－E－035	10.8	4.0	検出
44	D－E－040	11.6	／	検出
45	A－E－487	／	／	検出
46	A－E－496	27.0	9.6	検出
47	A－E－495	／	／	検出
48	D－E－043	12.2	／	検出
49	D－E－034	11.6	2.4	検出
50	D－E－041	15.2	／	検出
51	A－E－504	13.4	4.4	検出
52	A－E－513	23.0	／	検出
53	A－E－499	15.2	／	検出
54	A－E－501	7.4	1.1	検出
55	A－E－502	8.1	2.2	検出
56	D－E－039	9.6	2.2	検出
57	A－E－500	14.0	5.1	検出
58	A－E－488	／	／	SK110
59	A－E－511	／	／	検出
60	A－E－509	／	／	検出
61	A－E－490	／	／	検出
62	A－E－491	／	／	検出

石　器

磨製石庖丁

磨製石斧

石　錐

不定形刃器

石　鏃

図版番号	登録番号	遺構	タテ(cm)	ヨコ(cm)	重さ(g)	材質
1	A－S－006	検出	4.3	5.1	11.84	頁岩
2	A－S－075	SD01	5.3	4.1	39.12	硬砂岩
3	F－S－076	SD01	／	／	105.56	緑色岩
4	A－S－001	検出	8.0	4.6	118.9	玄武岩質凝灰岩
5	A－S－078	SK29	5.1	2.2	14.26	緑色岩
6	A－S－073	検出	6.9	2.5	65.41	頁岩
7	A－S－072	検出	3.4	2.1	21.86	頁岩
8	A－S－074	SB19	／	／	27.06	頁岩
9	A－S－077	検出	16.7	6.1	568.0	ヒン岩
	A－S－098	検出	8.5	2.6	／	砂岩
	A－S－107	検出	／	／	／	頁岩
	A－S－108	SB10	／	／	33.81	頁岩
	A－S－110	SD01	／	／	12.54	頁岩
	A－S－111	検出	／	／	2.10	頁岩
	A－S－112	検出	／	／	／	頁岩
	A－S－113	検出	／	／	／	頁岩
10	A－S－060	SK24	3.2	1.5,0.4	2.37	下呂石
11	A－S－061	検出	2.9	2.1,0.6	1.59	下呂石
12	A－S－062	SK26	1.5	1.9,0.5	／	下呂石
13	A－S－063	SZ04	／	2.0,0.8	2.37	下呂石
14	A－S－064	SK31	3.8	3.7,0.6	8.4	下呂石
15	A－S－065	検出	3.0	1.2,0.5	1.93	下呂石
16	A－S－066	検出	2.9	0.8,0.4	1.1	下呂石
17	A－S－067	SK26	3.2	0.9,0.3	／	下呂石
18	A－S－068	検出	2.9	0.9,0.3	1.2	下呂石
19	A－S－069	検出	2.6	1.2,0.7	1.71	下呂石
20	A－S－070	検出	2.5	1.2,0.5	2.22	下呂石
21	A－S－071	SB12	3.1	1.4,0.4	3.74	安山岩
22	A－S－009	SB10	5.7	3.5	10.9	下呂石
23	A－S－005	SB12	5.3	11.1	／	珪質頁岩
24	A－S－010	検出	6.2	7.3	51.8	サヌカイト
25	A－S－008	SK24	8.4	4.2	16.3	安山岩
26	A－S－014	SK31	1.6	1.3	0.51	チャート
27	A－S－026	SK27	2.8	1.3	0.82	下呂石
28	A－S－011	検出	2.2	1.6	0.96	下呂石
29	A－S－021	検出	2.3	1.5	1.14	下呂石
30	A－S－025	検出	2.5	1.5	1.14	下呂石
31	A－S－024	検出	2.1	1.0	0.53	下呂石
32	A－S－016	SD01	3.1	1.4	1.31	下呂石
33	A－S－013	検出	3.0	1.6	1.26	下呂石
34	A－S－015	検出	2.5	1.4	0.84	下呂石
35	A－S－012	検出	2.4	1.8	1.38	下呂石
36	A－S－018	SD01	3.1	1.5	1.18	下呂石
37	A－S－079	SK31	1.9	1.1	0.58	下呂石
38	A－S－023	検出	1.7	1.2	0.37	下呂石
39	A－S－027	検出	2.3	1.3	0.84	下呂石
40	A－S－019	SK27	4.9	1.7	2.16	下呂石
41	A－S－030	SZ04	3.7	2.1	3.55	下呂石
42	A－S－028	SZ04	2.0	1.4	0.84	下呂石
43	A－S－020	SZ04	3.2	2.7	2.43	下呂石
44	A－S－031	検出	3.8	2.5	4.98	下呂石
45	A－S－029	SZ04	2.5	1.5	0.83	下呂石
46	A－S－017	検出	3.4	1.6	2.80	下呂石
47	D－S－002	検出	4.2	1.3	3.31	下呂石
48	A－S－022	検出	3.3	2.0	3.56	下呂石
49	A－S－053	検出	1.9	1.5	0.77	安山岩
50	A－S－059	SK31	2.8	1.2	1.00	下呂石
51	A－S－058	検出	1.9	1.2	0.66	チャート
52	A－S－050	検出	2.5	1.3	1.02	下呂石
53	A－S－051	SK29	2.2	1.0	0.70	下呂石
54	A－S－059	SK31	2.8	1.2	1.00	チャート
55	A－S－055	SD01	2.5	1.8	1.70	下呂石
56	A－S－057	検出	3.2	1.7	1.77	下呂石
57	A－S－042	検出	2.2	1.7	0.98	下呂石
58	A－S－056	検出	3.1	1.6	4.10	安山岩
59	A－S－043	検出	1.9	1.4	0.71	下呂石
60	A－S－040	SK29	3.2	1.7	2.45	下呂石
61	A－S－038	SD01	2.7	1.2	0.80	下呂石
62	A－S－039	検出	2.7	1.4	1.01	下呂石
63	A－S－044	SZ06	1.6	1.3	0.53	下呂石
64	A－S－045	検出	2.1	1.5	0.66	下呂石
65	A－S－041	SB19	2.8	1.5	1.44	下呂石
66	A－S－037	検出	3.0	1.7	1.32	下呂石
67	A－S－047	検出	1.9	1.4	0.84	安山岩
68	A－S－049	SK29	1.7	1.5	0.78	下呂石
69	A－S－036	検出	2.5	1.3	0.89	安山、岩
70	A－S－048	検出	2.8	1.7	1.44	安山岩
71	A－S－035	検出	2.1	1.9	0.96	頁岩
72	A－S－046	SK26	1.3	1.1	0.37	安山岩
73	A－S－033	検出	2.0	1.3	0.65	下呂石
74	A－S－032	SK26	2.5	1.2	1.00	頁岩
75	A－S－034	検出	2.3	1.4	1.00	サヌカイト
	A－S－101	SD01	／	0.8	0.29	黒燿石
	A－S－102	検出	／	／	0.74	下呂石
	A－S－103	検出	2.3	1.0	0.92	下呂石
	A－S－104	SK31	1.6	0.8	0.40	下呂石
	A－S－105	SD01	／	／	1.92	下呂石

横刃形石器

打製石斧

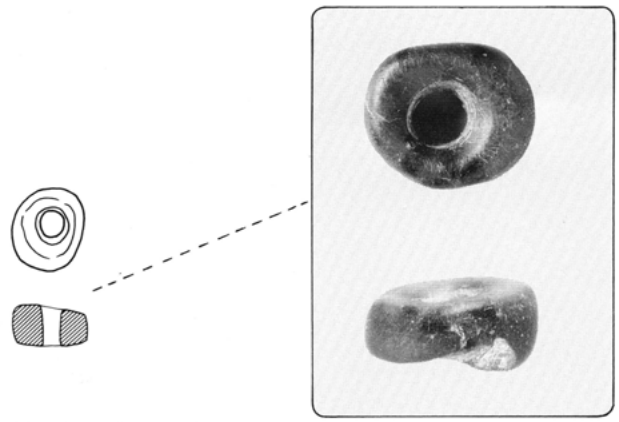
石核剝片
楔形石器

磨　　石

玉

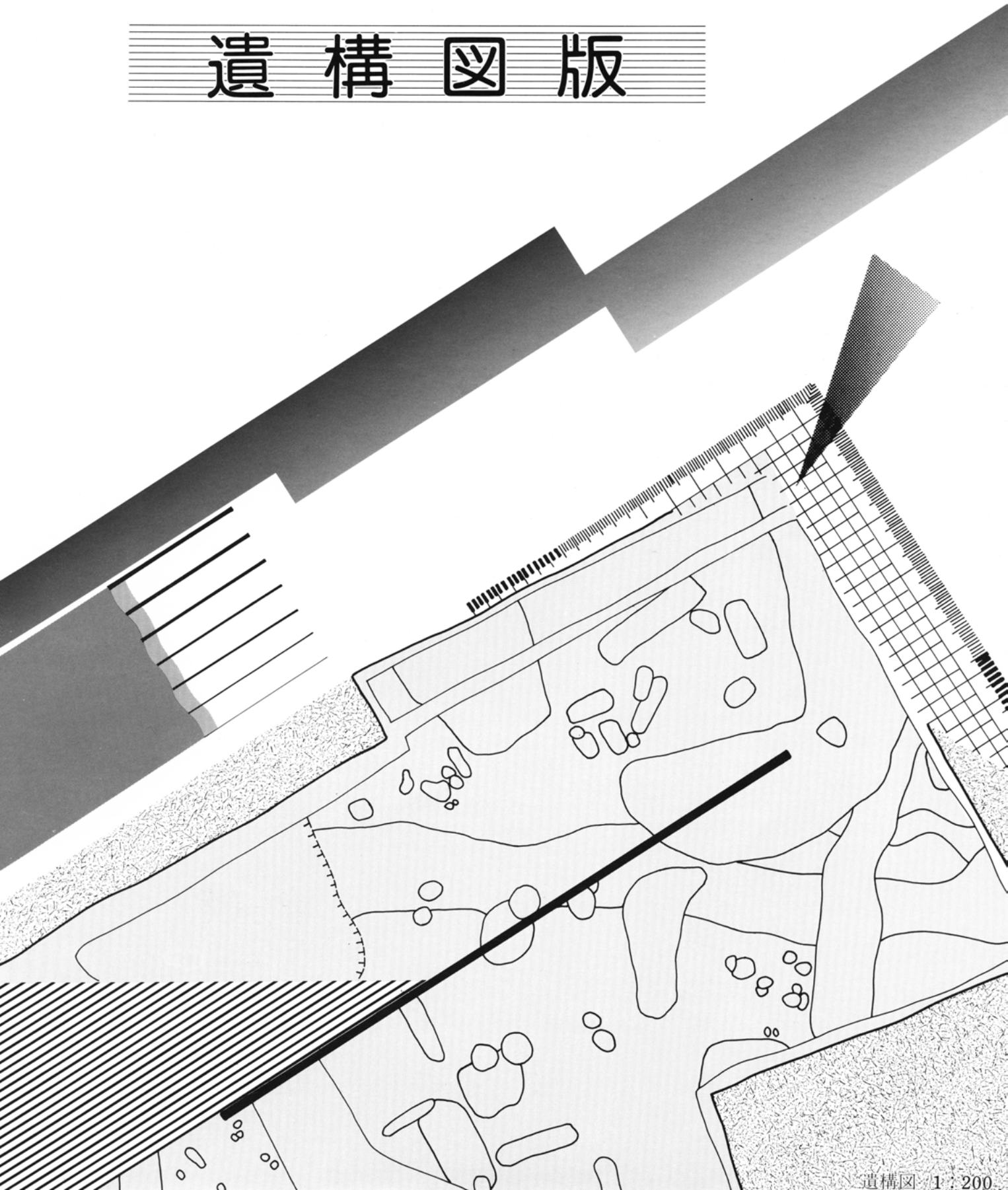
下呂石原石

図版番号	登録番号	遺構	タテ(cm)	ヨコ(cm)	重さ(g)	材質
76	A－S－007	SB19,SK37	10.9	17.1	706.0	細粒砂岩
77	A－S－001	SD03	5.5	／	52.1	ホルンフェルス
78	A－S－002	SD01	／	／	43.3	頁岩
79	A－S－001	検出	／	／	63.3	安山岩
80	A－S－003	検出	9.8	5.8	77.2	ホルンフェルス
81	A－S－004	SK28	16.6	8.5	448.0	濃飛流紋岩
	A－S－109	検出	／	／	46.25	頁岩
82	A－S－089	SK26	6.6	6.2	／	下呂石
83	A－S－087	SK26	／	／	／	下呂石
84	A－S－088	SK26	／	／	／	下呂石
85	A－S－090	SK26	／	／	／	下呂石
86	A－S－091	SK26	／	／	／	下呂石
87	A－S－081	SK26	／	／	／	下呂石
88	A－S－096	SK26	／	／	／	下呂石
89	A－S－092	SK26	／	／	／	下呂石
90	A－S－093	SK26	／	／	／	下呂石
91	A－S－094	SK26	／	／	／	下呂石
92	A－S－095	SK26	／	／	／	下呂石
93	A－S－097	SK26	／	／	／	下呂石
94	A－S－080	SB17	4.6	4.6	／	下呂石
95	A－S－086	SB17	／	／	／	下呂石
96	A－S－084	SB17	／	／	／	下呂石
97	A－S－082	SB17	／	／	／	下呂石
98	A－S－083	SB17	／	／	／	下呂石
99	A－S－085	SB17	／	／	／	下呂石
	A－S－106	検出	5.6	3.1	79.47	砂岩
	A－S－099	SB14	1.1	1.2	0.85	滑石
	A－S－114	SD01	4.3	3.4	48.5	下呂石
	A－S－115	SK29	8.1	5.7	224.3	下呂石
	A－S－116	検出	7.1	6.2	232.4	下呂石
	A－S－117	SB17	6.6	6.1	165.2	下呂石
	A－S－118	SB17	7.5	5.3	246.3	下呂石
	A－S－119	SD01	6.3	4.6	111.6	下呂石
	A－S－120	SD01	5.7	3.7	86.8	下呂石
	A－S－121	検出	5.7	4.6	90.4	下呂石
	A－S－122	検出	5.0	4.6	90.5	下呂石
	A－S－123	SB17	4.4	3.9	56.7	下呂石
	A－S－124	SK21	3.9	3.6	41.8	下呂石
	A－S－125	検出	4.3	3.5	57.6	下呂石
	A－S－126	SK31	5.0	4.5	77.6	下呂石
	A－S－127	SB17	7.2	4.9	183.2	下呂石
	A－S－128	検出	5.3	5.0	90.1	下呂石
	A－S－129	検出	5.6	3.5	67.1	下呂石
	A－S－130	SB17	4.5	3.6	64.9	下呂石
	A－S－131	SB17	5.9	5.2	116.6	下呂石
	A－S－132	SD01	3.3	2.8	27.1	下呂石
	A－S－133	検出	4.8	4.0	55.7	下呂石
	A－S－134	検出	4.8	3.2	63.9	下呂石

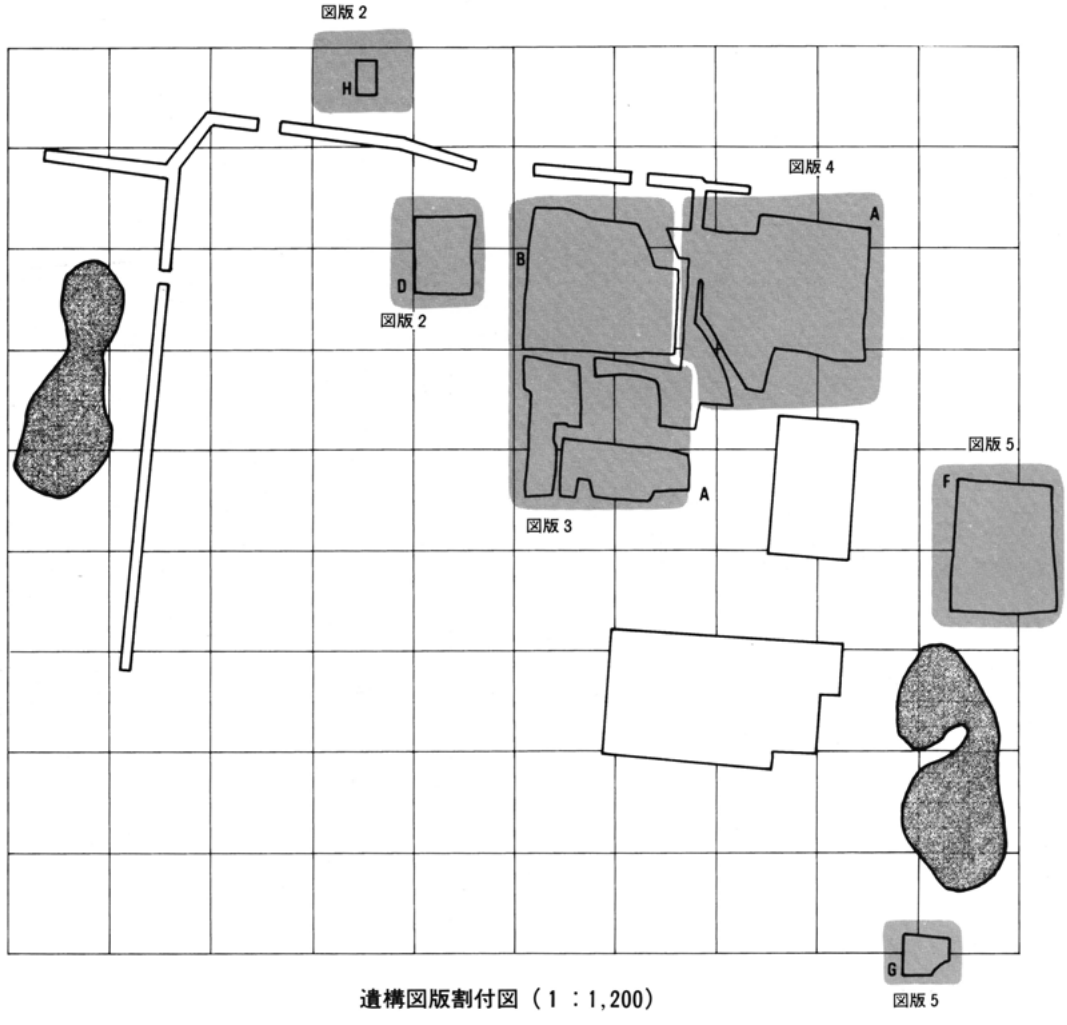


包含層出土（1：1）

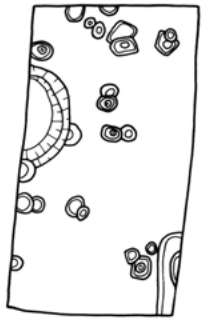
遺構図版



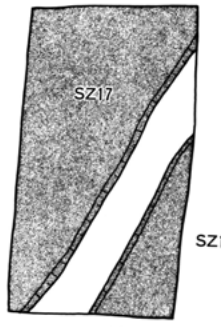
遺構図 1：200



遺構図版割付図（1：1,200）



上 面



下 面

Y −35,890

X −79,245

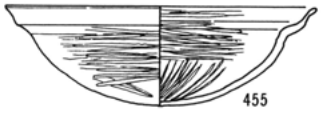
10 m

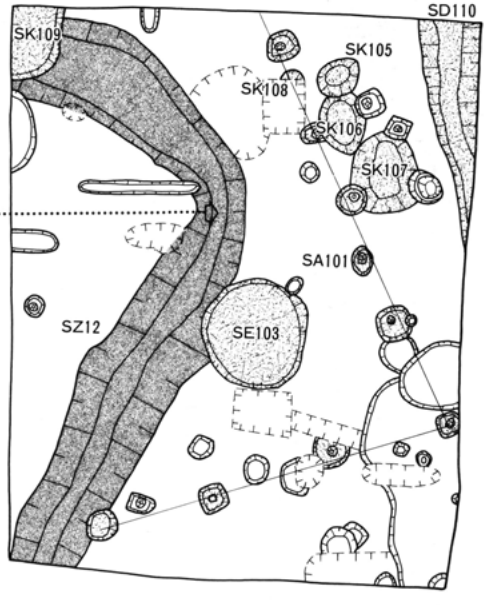
H 区

D 区

X −79,255

Y −35,895



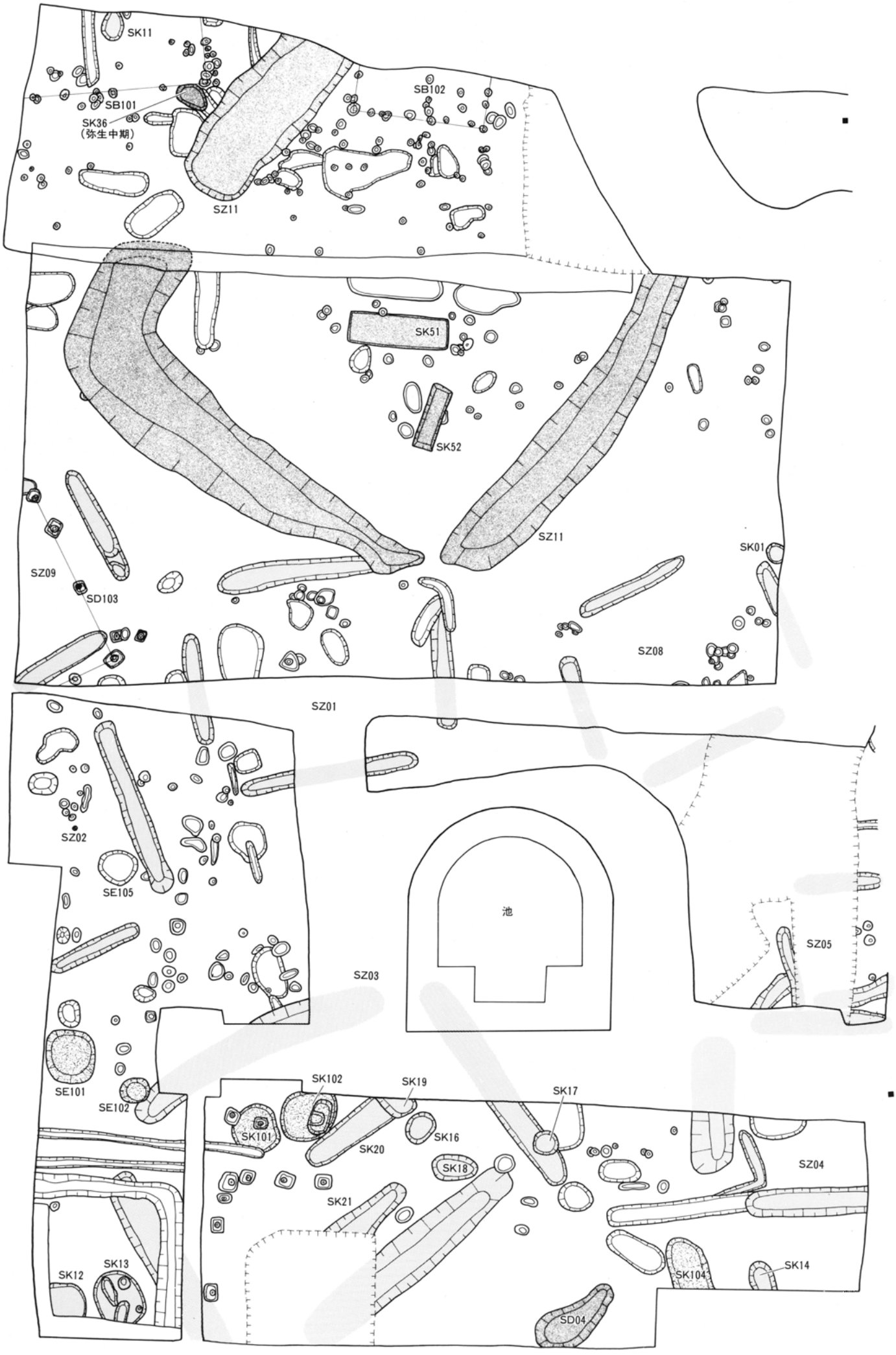


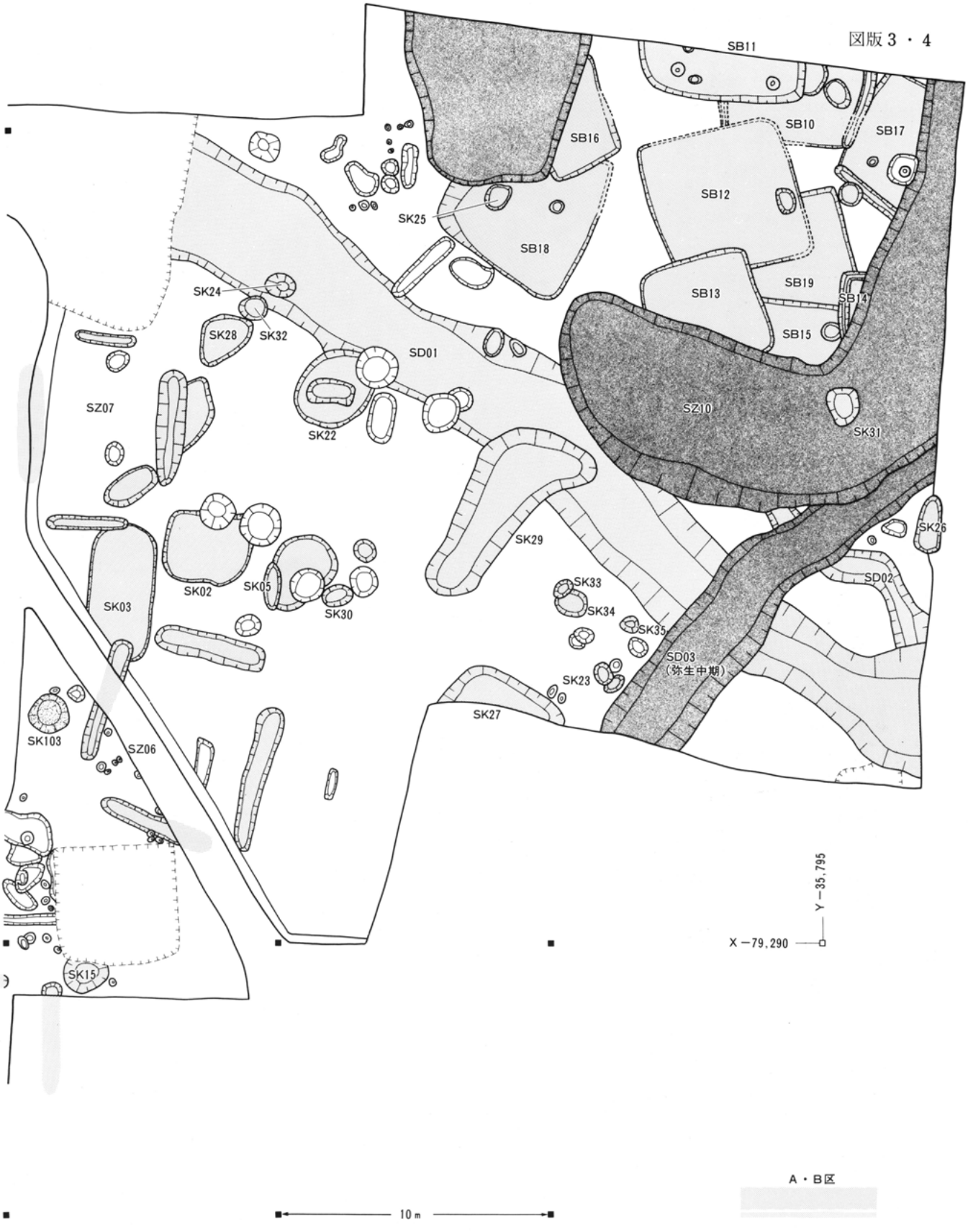
A 期

B 期

C 期

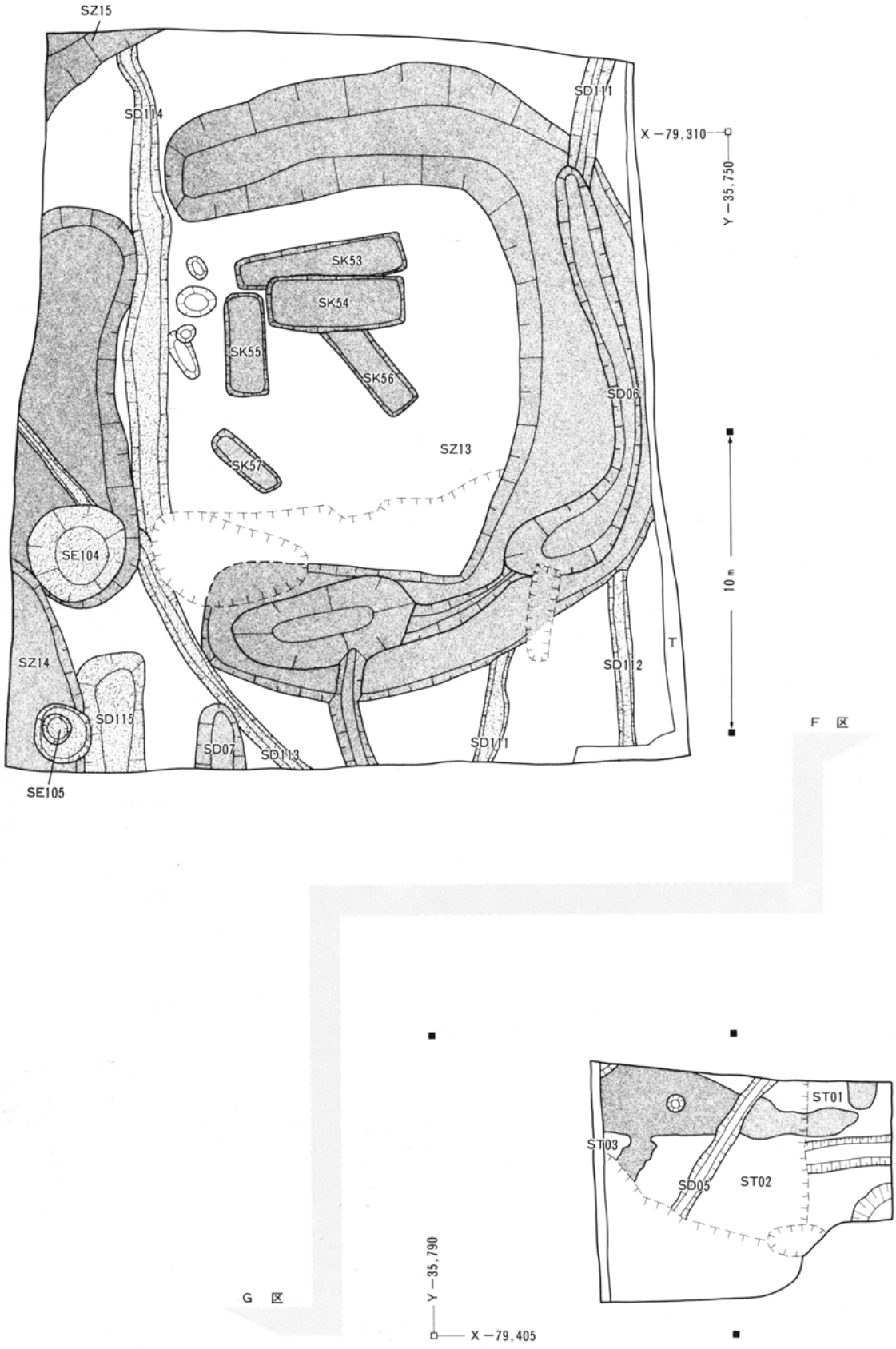
X −79,275


SK11
SB101
SK36
（弥生中期）
SB102
SZ11
SK51
SK52
SZ11
SK01
SZ09
SD103
SZ08
SZ01
SZ02
SE105
池
SZ05
SZ03
SE101
SE102
SK102
SK19
SK17
SK101
SK20
SK16
SK18
SZ04
SK21
SK12
SK13
SK104
SK14
SD04


SB11
SB10
SB17
SB16
SB12
SK25
SB18
SB13
SB19
SB14
SB15
SK24
SK28
SK32
SD01
SZ07
SZ10
SK31
SK22
SK29
SK26
SD02
SK03
SK02
SK05
SK30
SK33
SK34
SK35
SD03
（弥生中期）
SK23
SK27
SK103
SZ06
SK15
Y −35,795
X −79,290
10 m

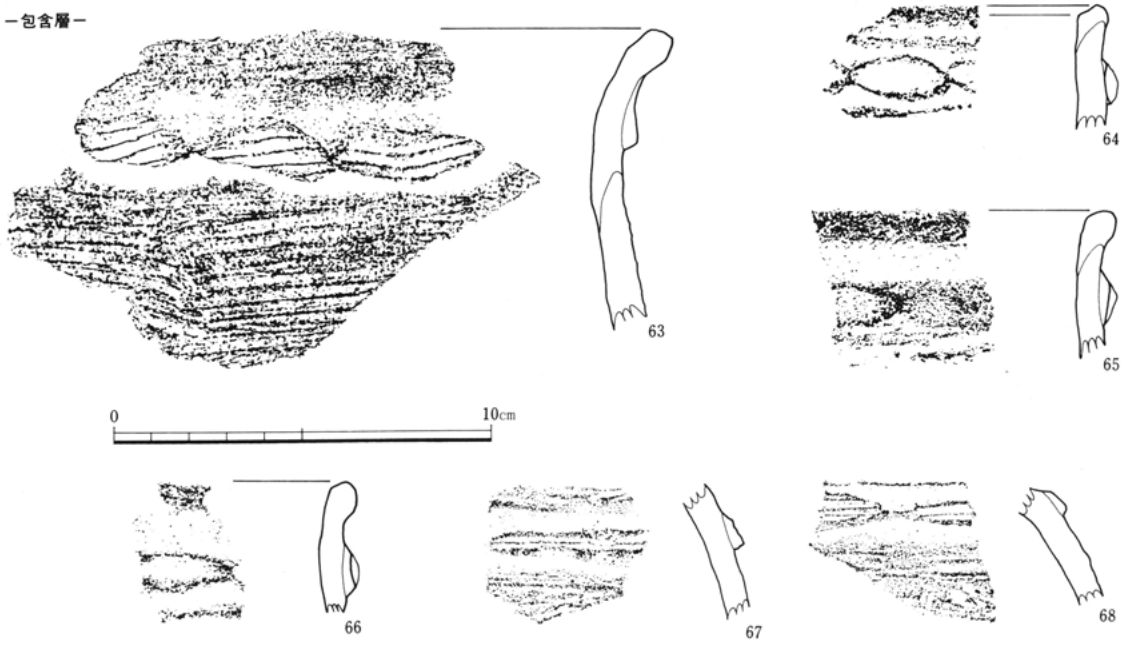
A・B区

図版 5

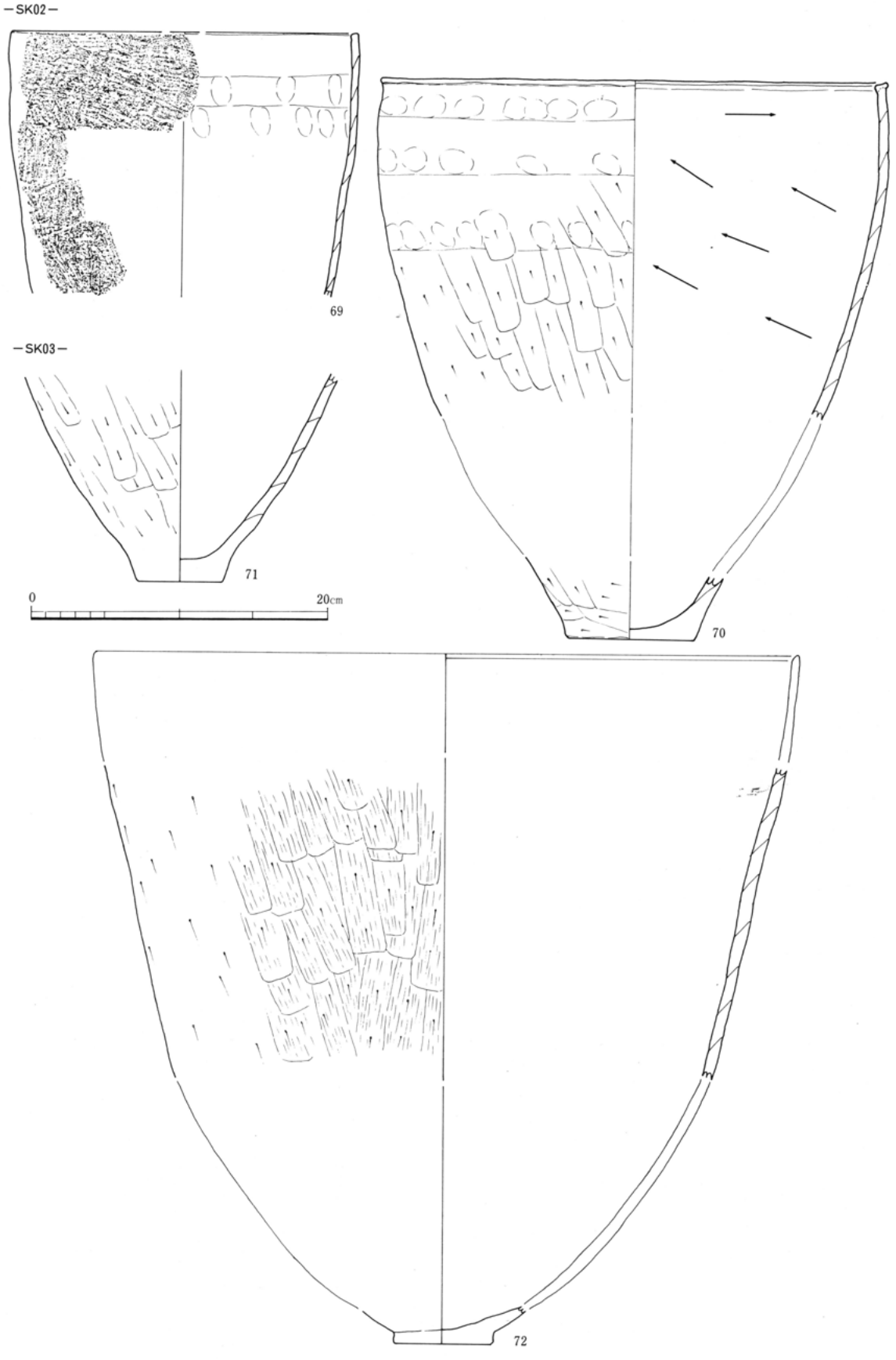

SZ15
SD114
SD111
X −79,310
Y −35,750
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SD06
SZ13
SE104
10m
T
SZ14
SD112
SD115
SD07
SD113
SD111
SE105
F 区
ST01
ST03
SD05
ST02
G 区
Y −35,790
X −79,405

遺物図版

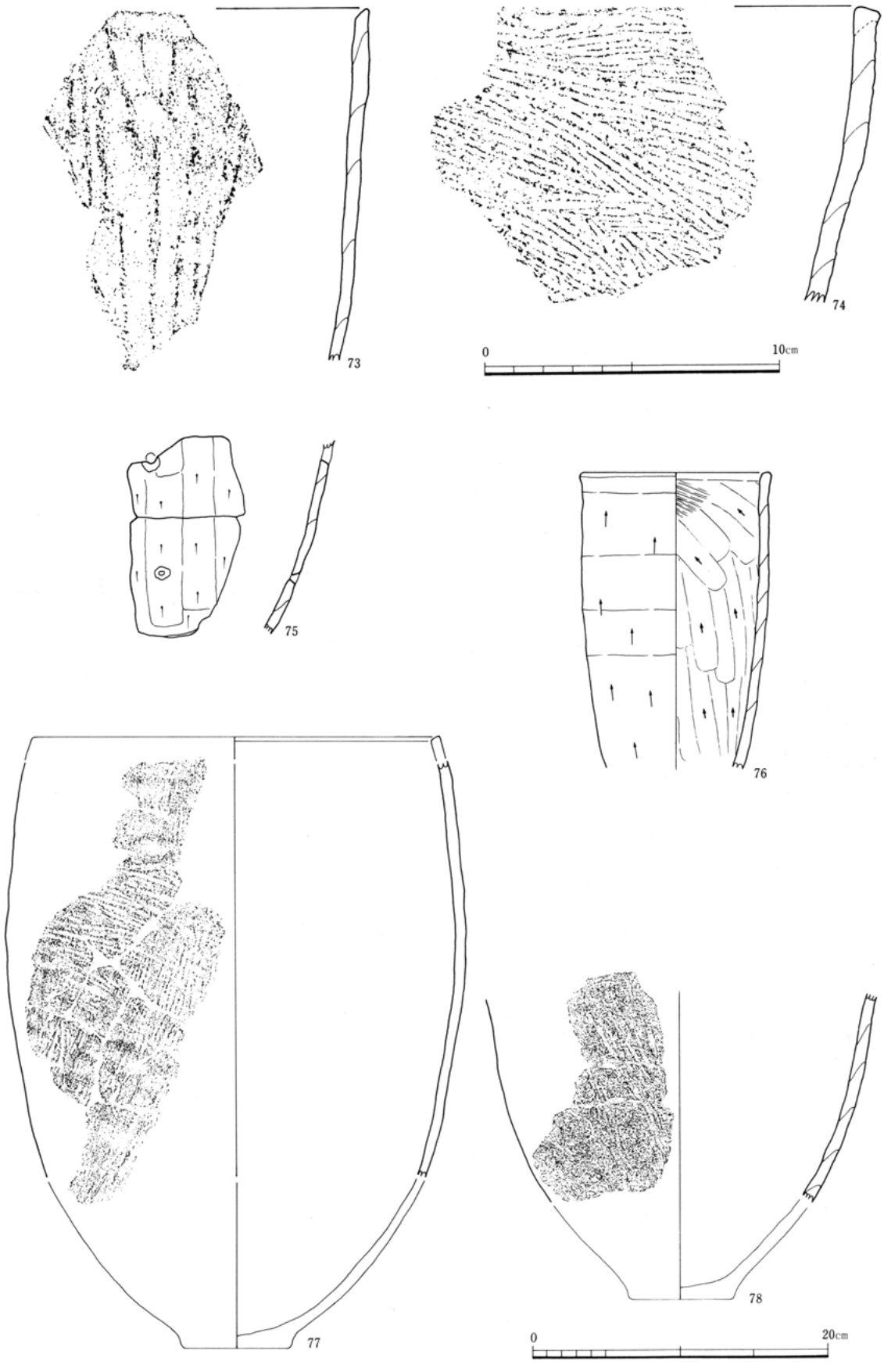
上器　1:2、1:3、1:4
右器　1:2

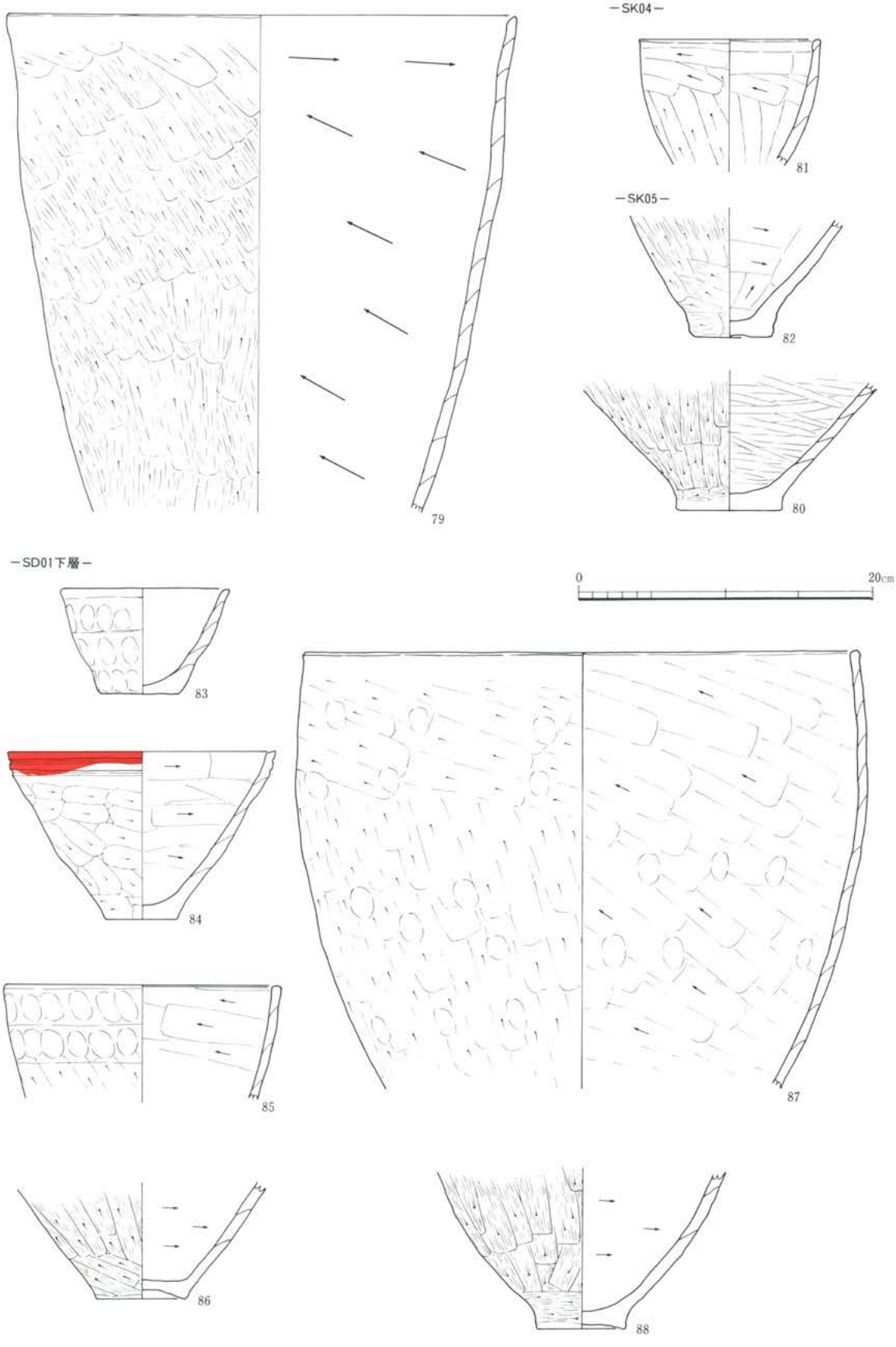


第 3 次調査出土遺物（1:4、拓図1:3）

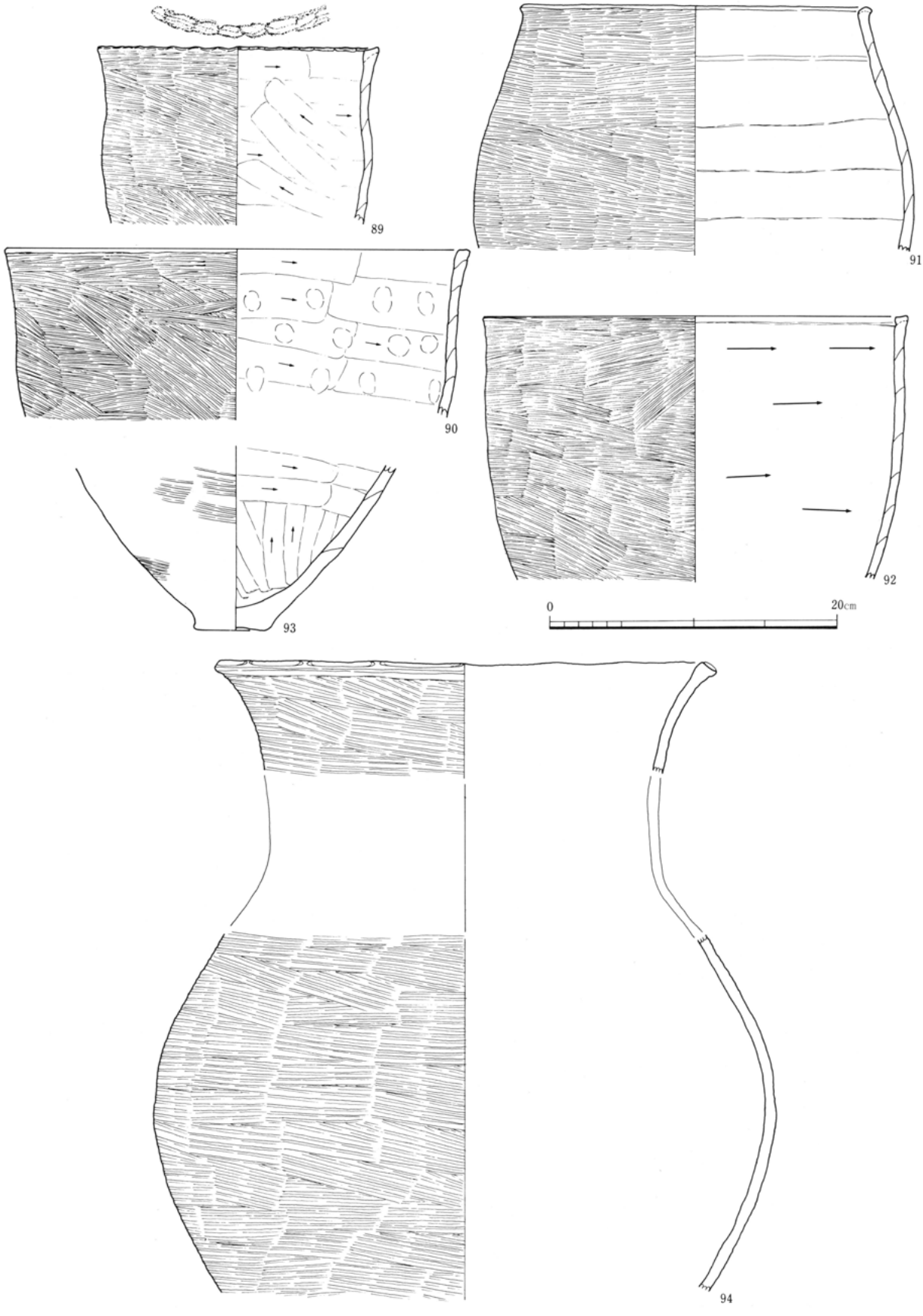

—SK02—
69
—SK03—
71
0
20cm
70
72

図版 8




79
－SK04－
81
－SK05－
82
80
－SD01下層－
0
20cm
83
84
85
87
86
88

図版10

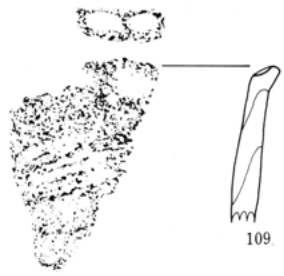


95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
0
10cm

図版12

107

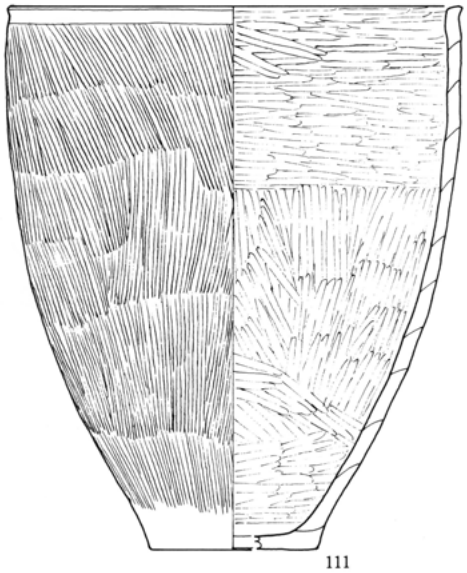
108



109

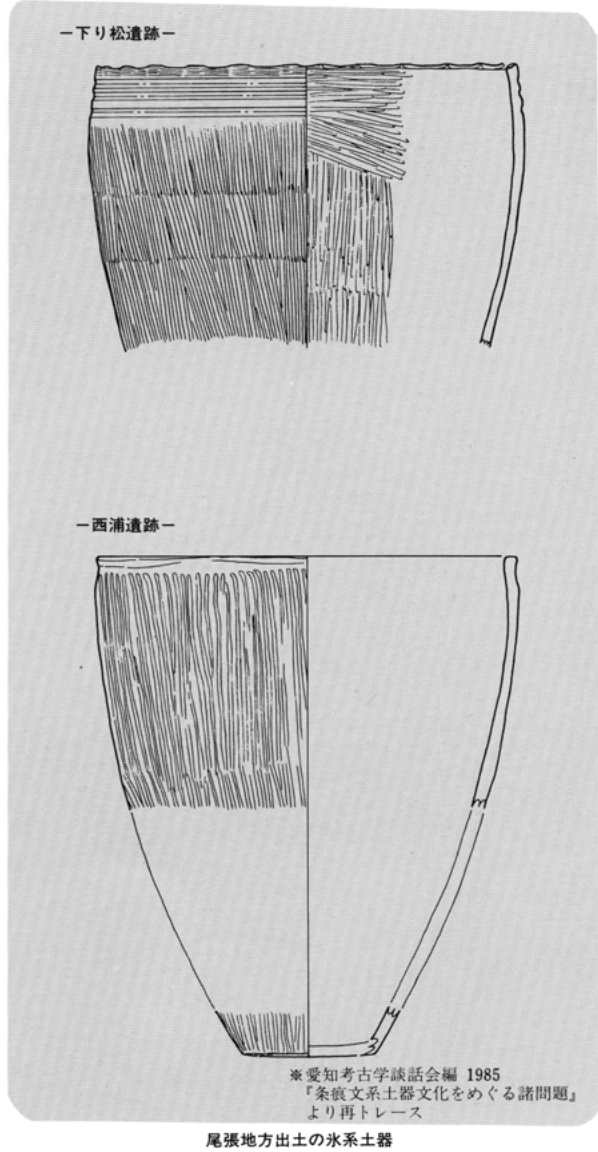
110

0　10cm



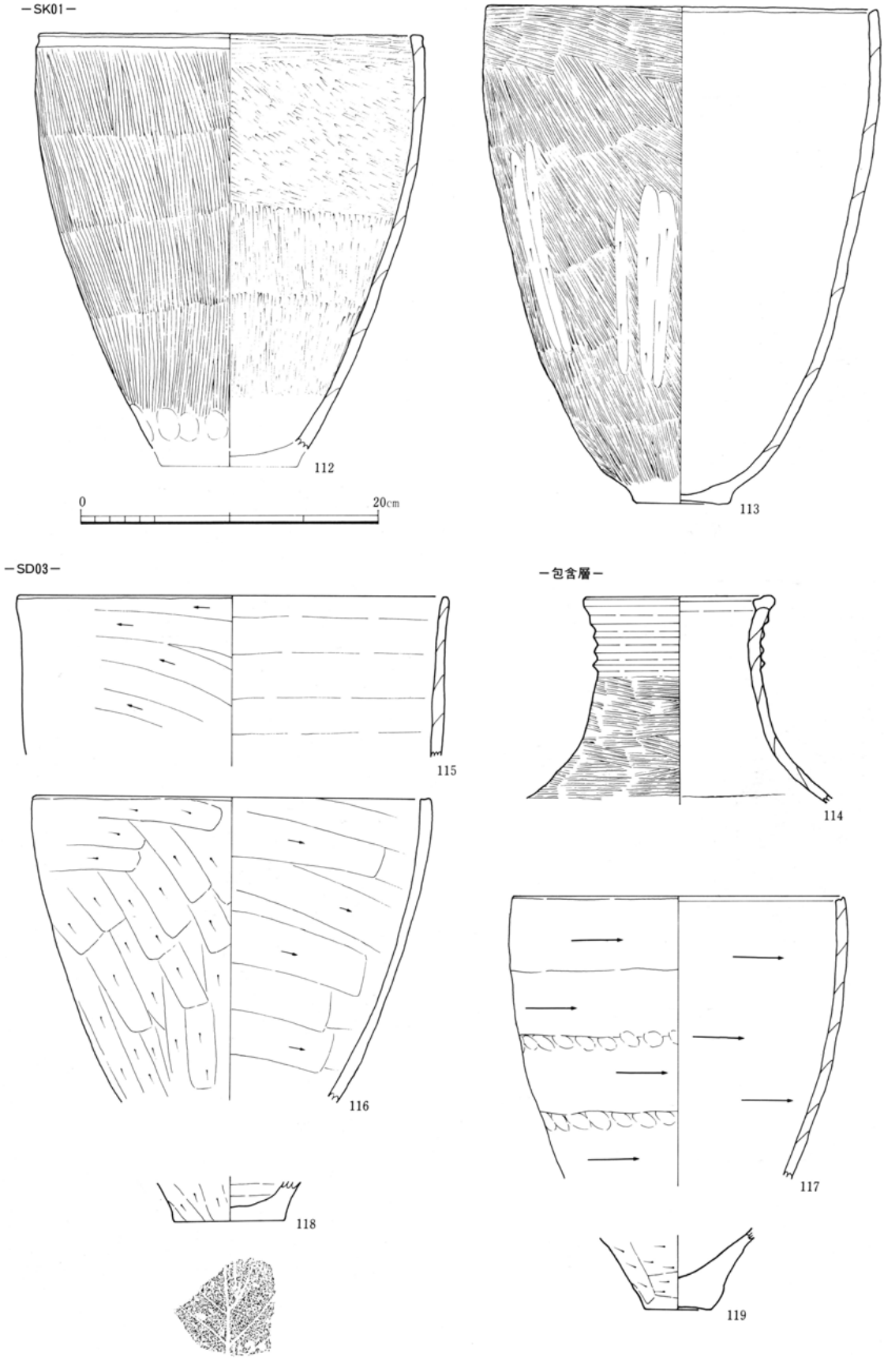
111

0　20cm

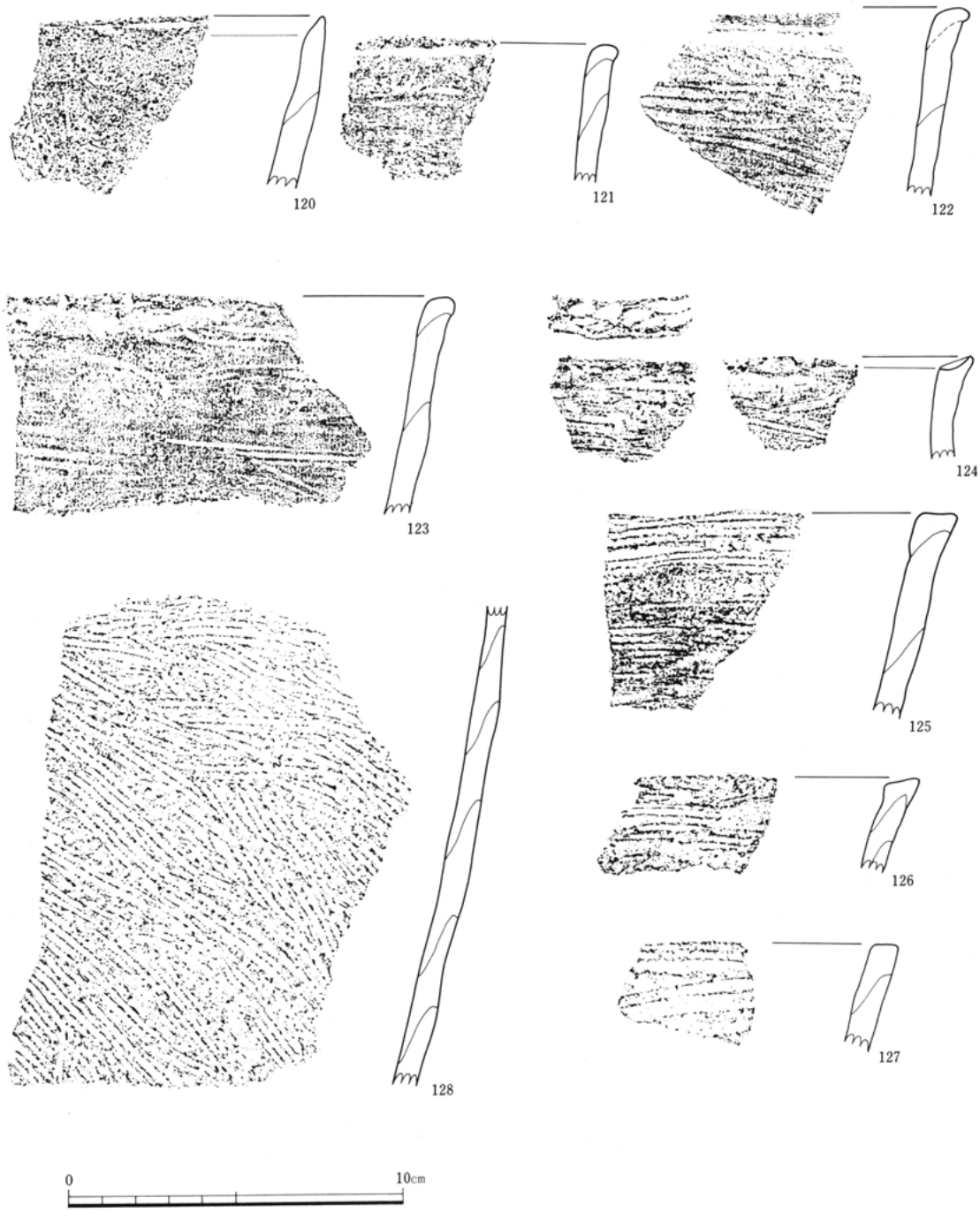


※愛知考古学談話会編 1985
『条痕文系土器文化をめぐる諸問題』
より再トレース

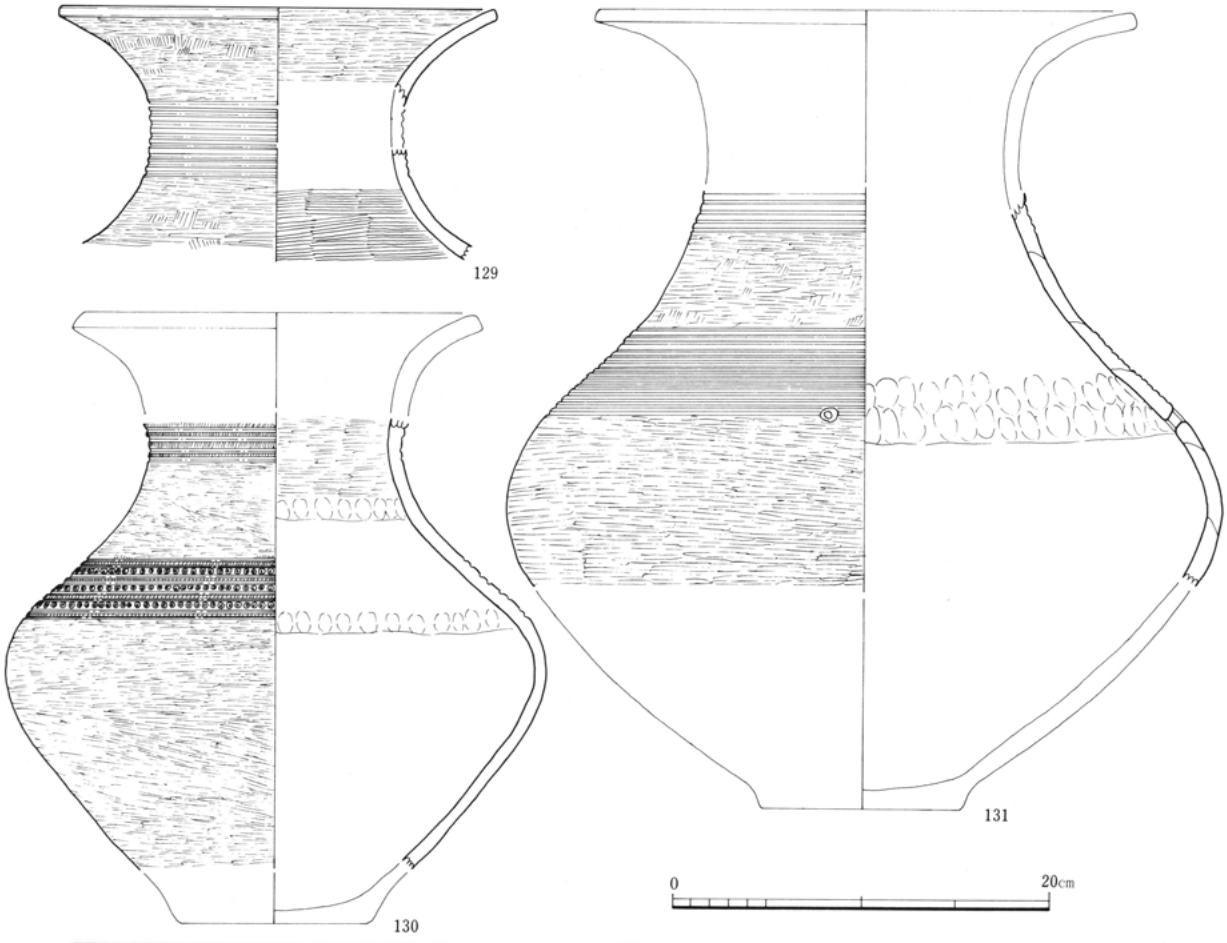
尾張地方出土の氷系土器

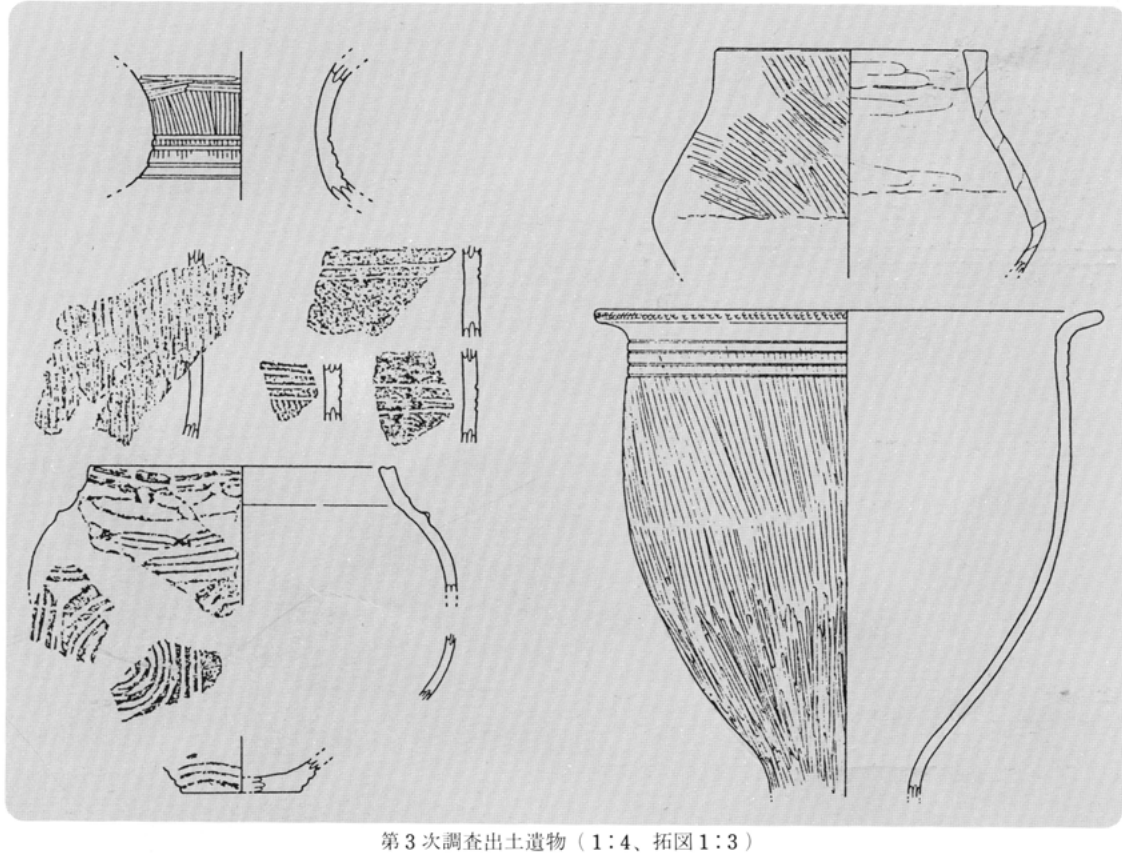

－SK01－
112
113
0
20cm
－SD03－
115
116
118
－包含層－
114
117
119

図版14



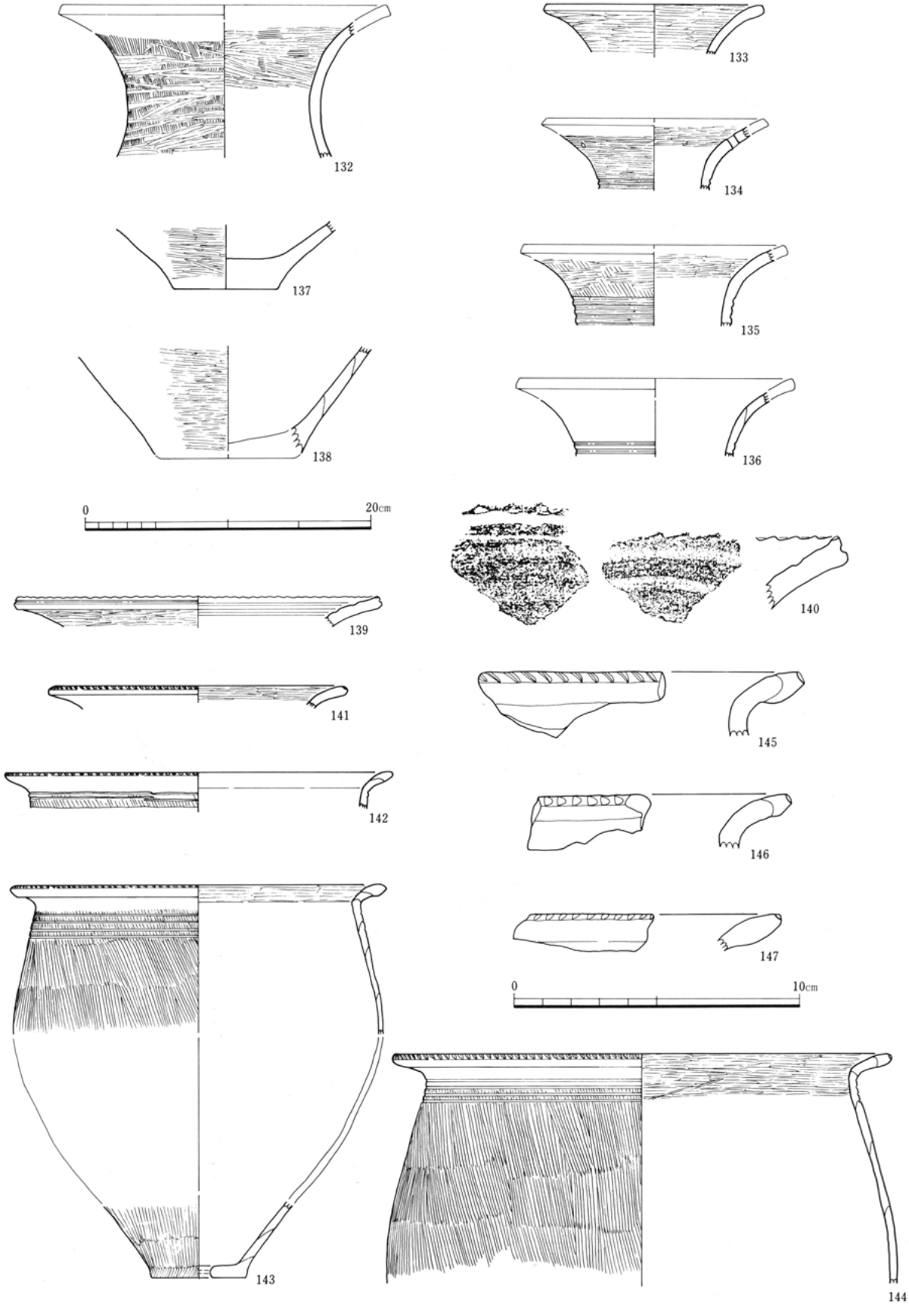
－SD01上層－

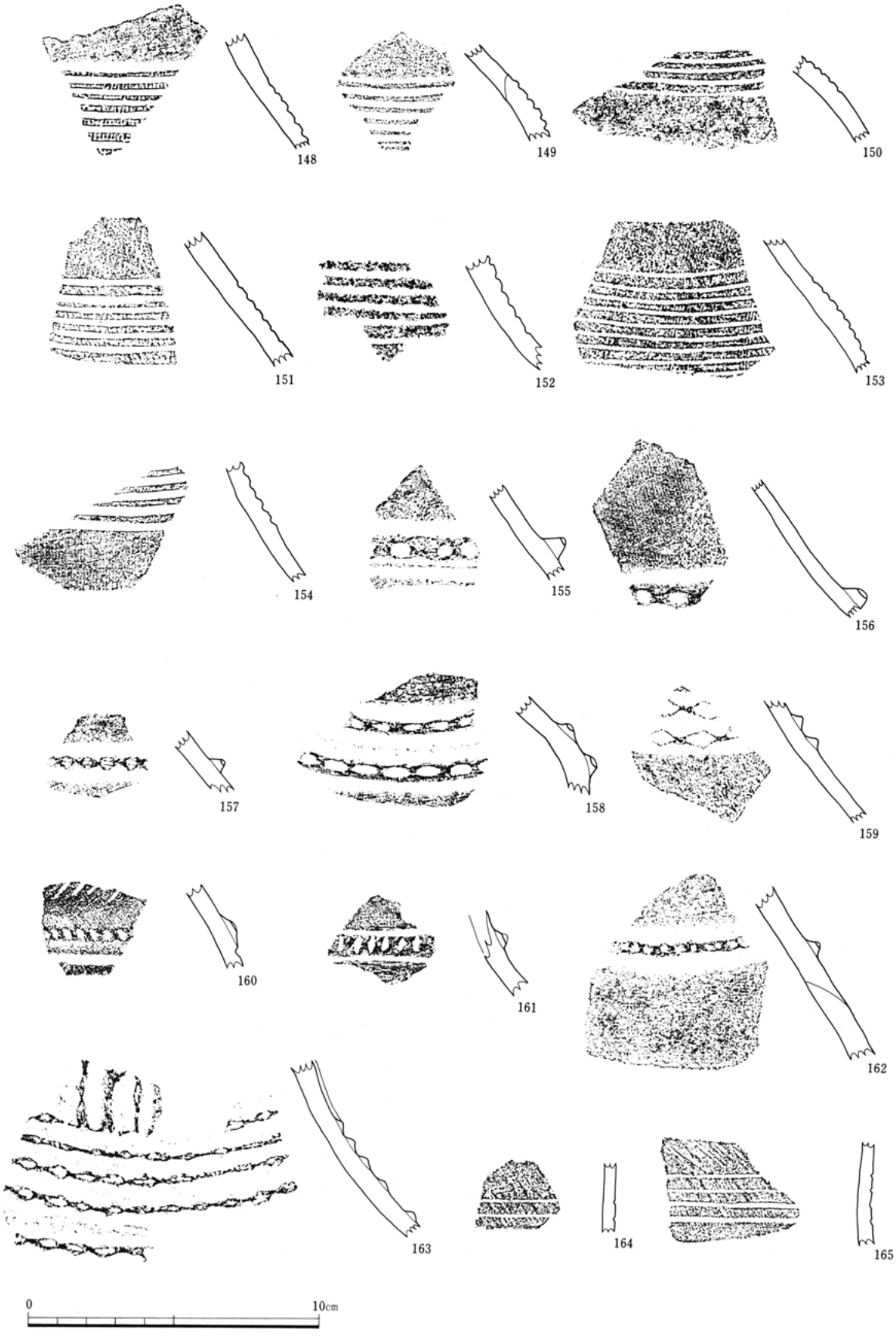




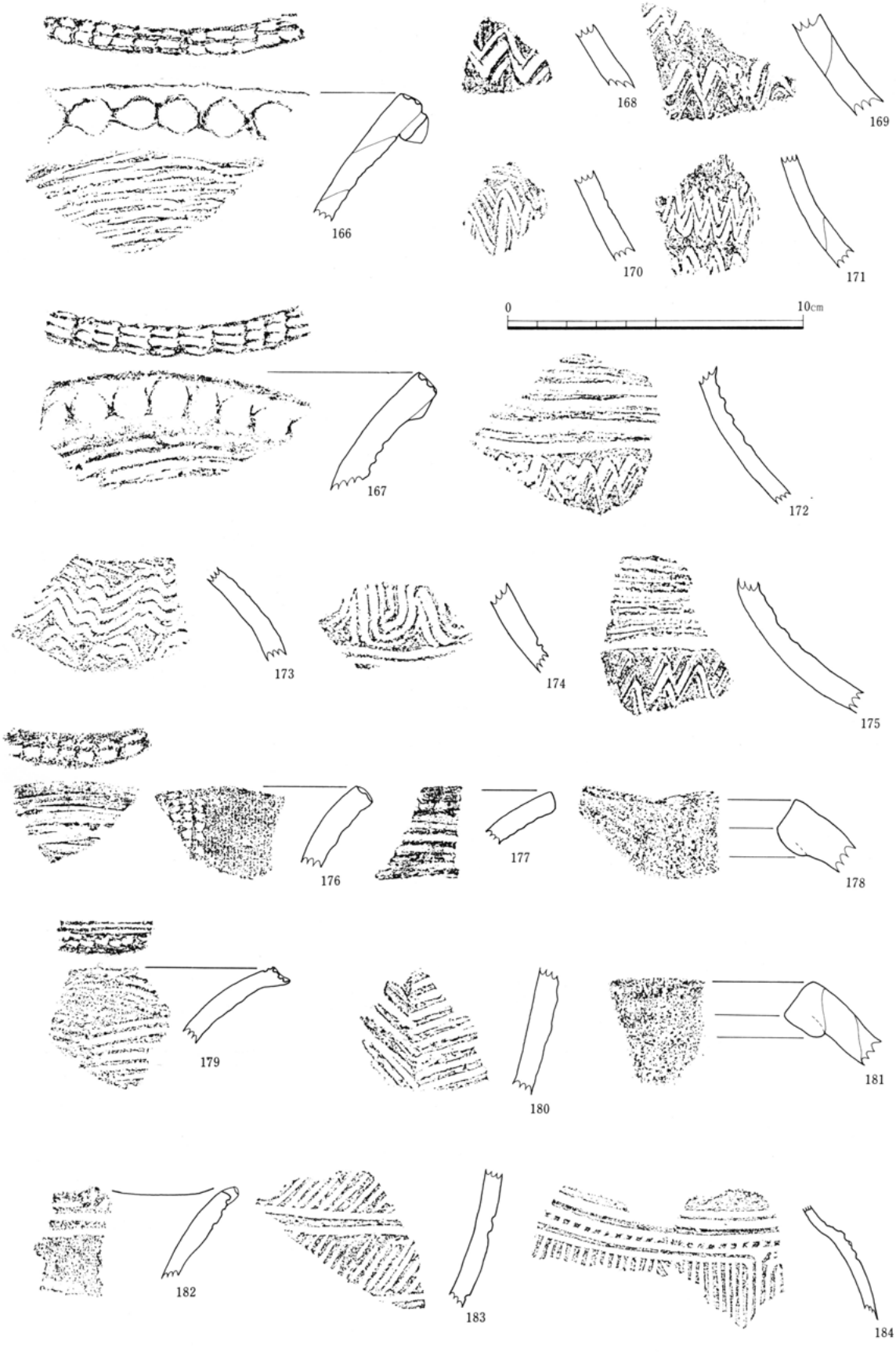
第３次調査出土遺物（１：４、拓図１：３）

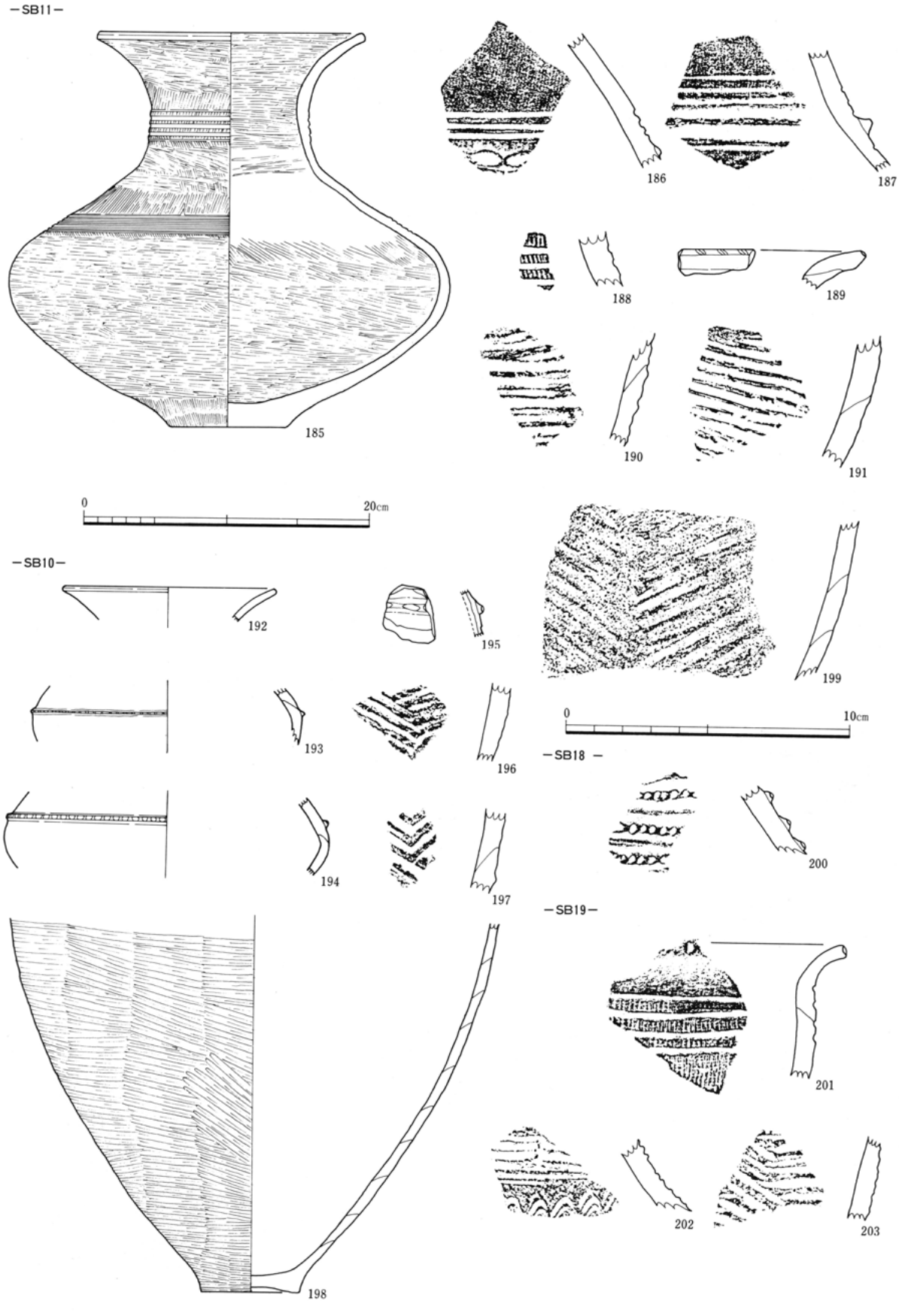
図版16


132
133
134
137
135
138
136
0
20cm
139
140
141
145
142
146
147
0
10cm
143
144

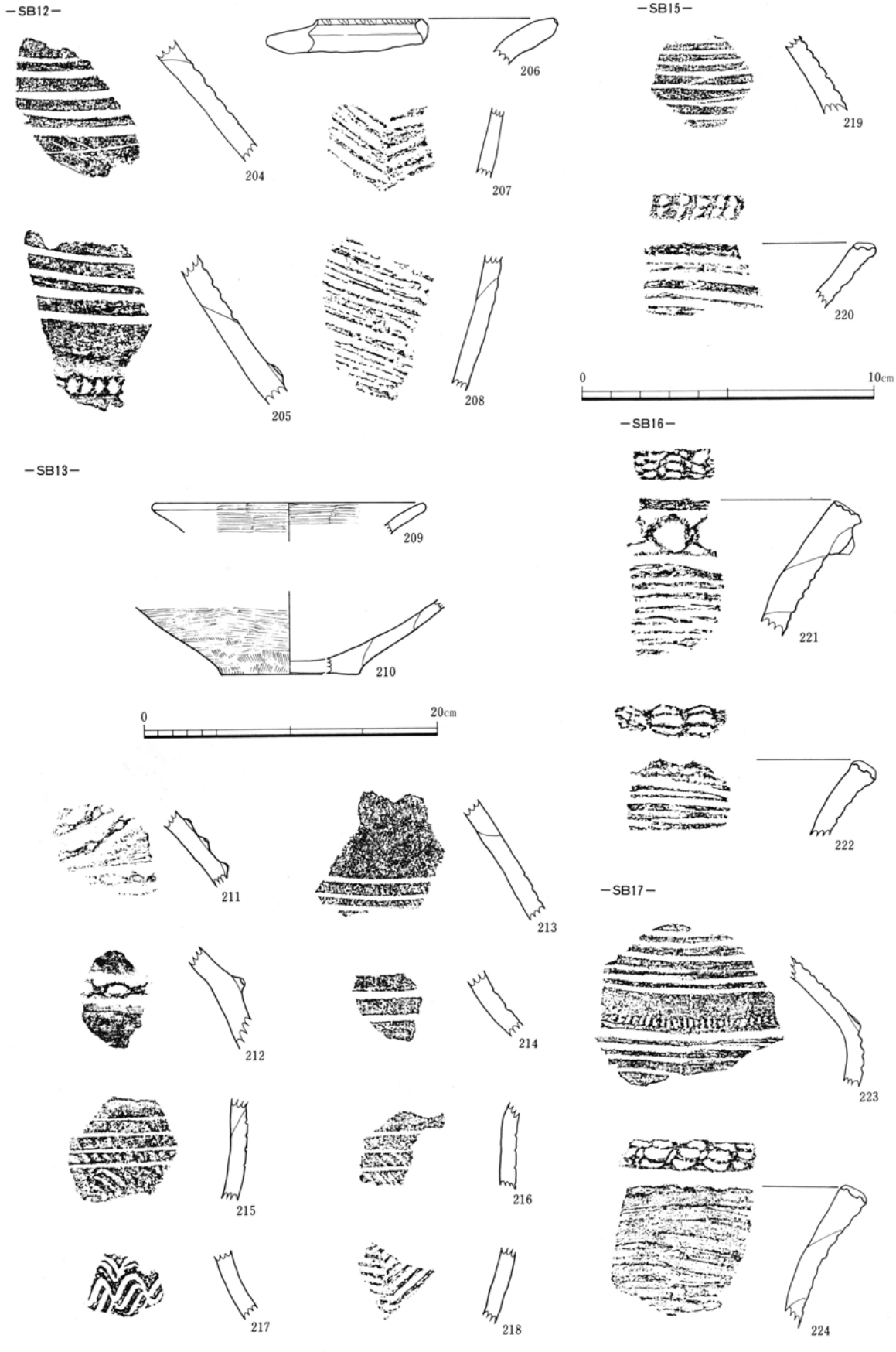

148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
0
10cm

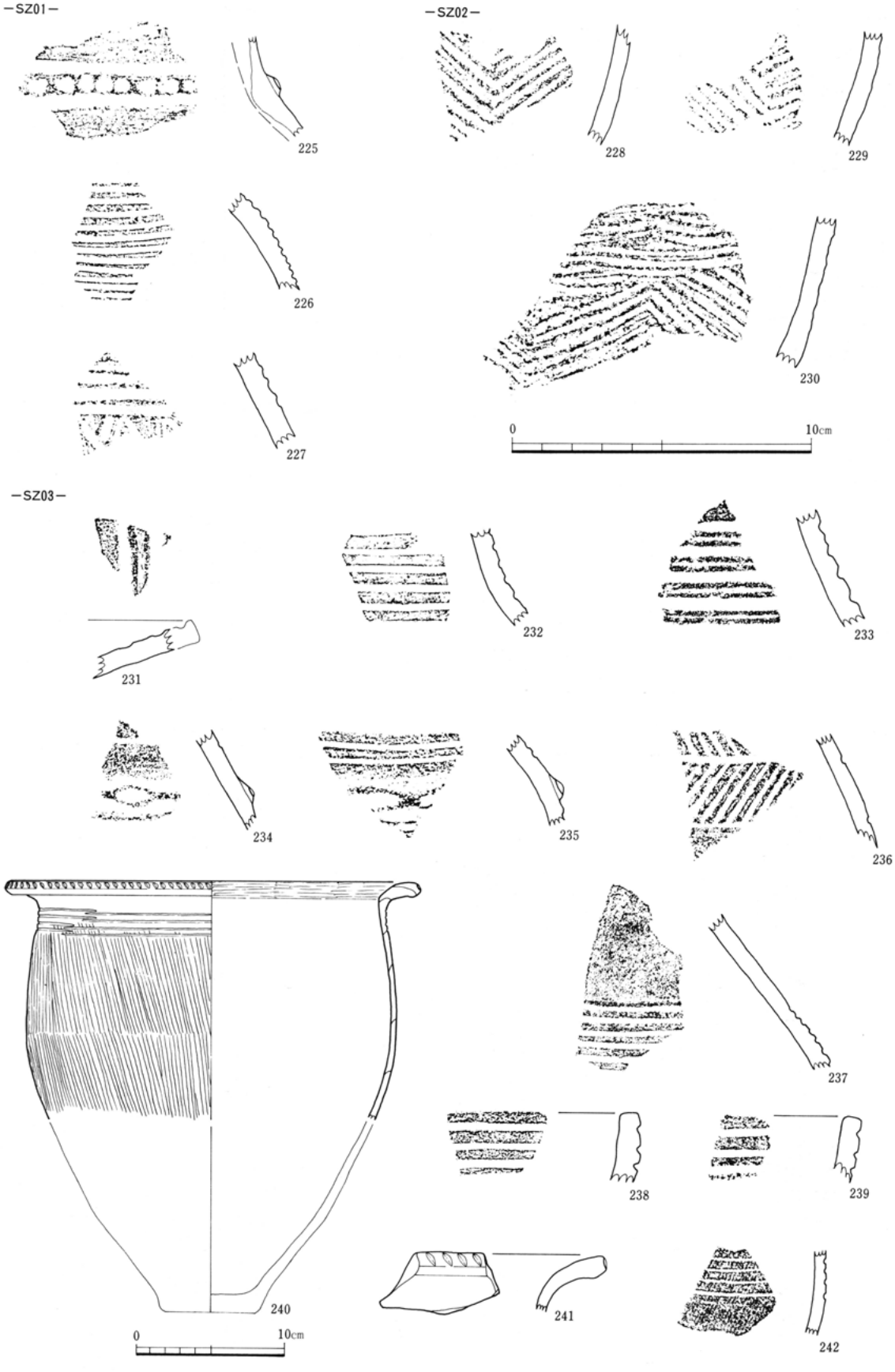
図版18


166
168
169
170
171
0
10cm
167
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184

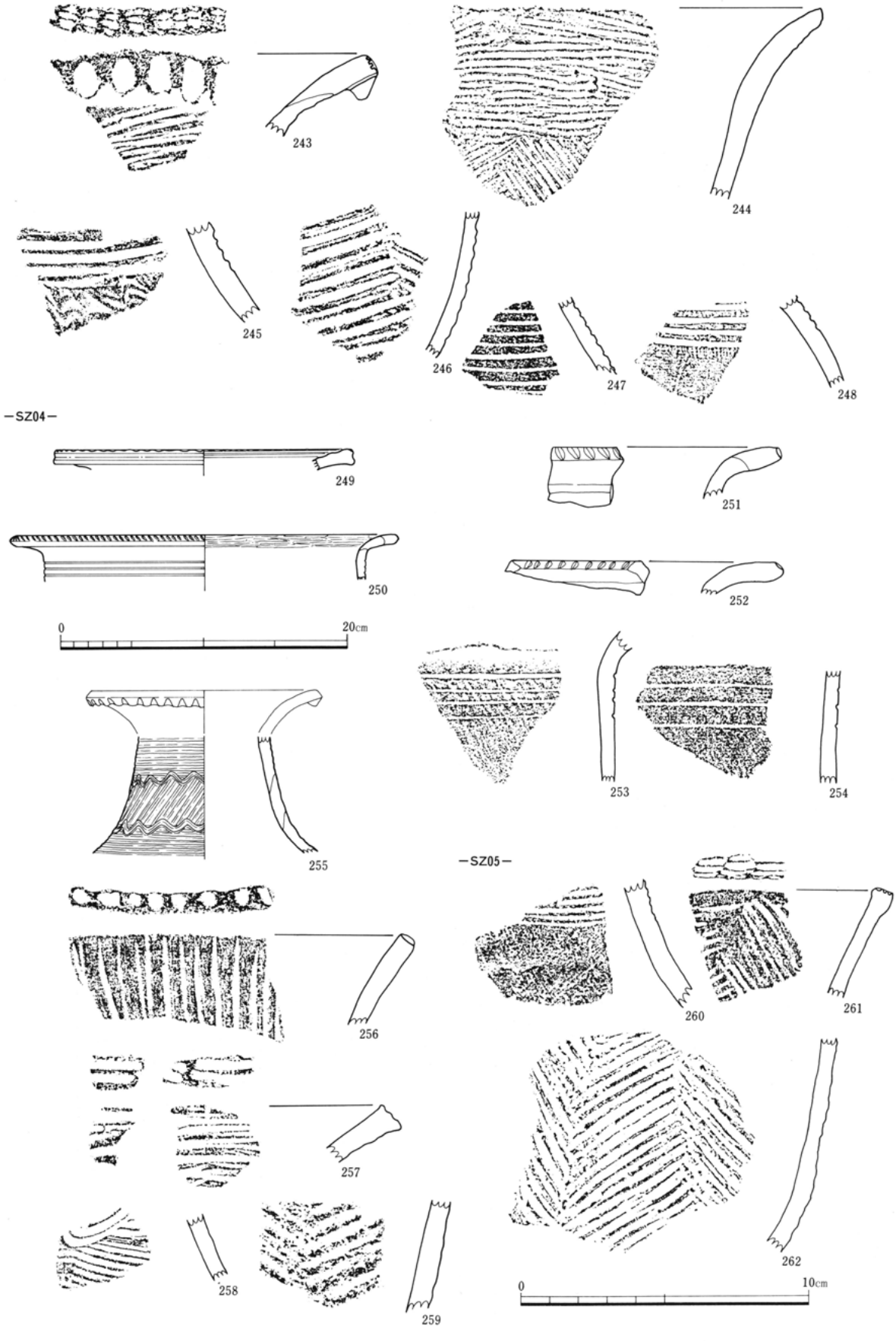

—SB11—
185
186
187
188
189
190
191
0
20cm
—SB10—
192
193
194
195
196
197
198
199
0
10cm
—SB18 —
200
—SB19—
201
202
203

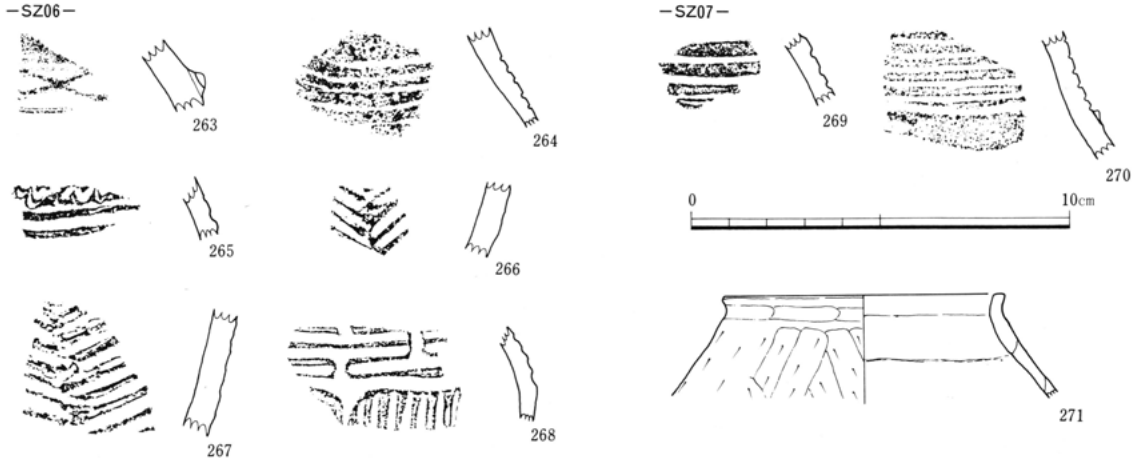
図版20

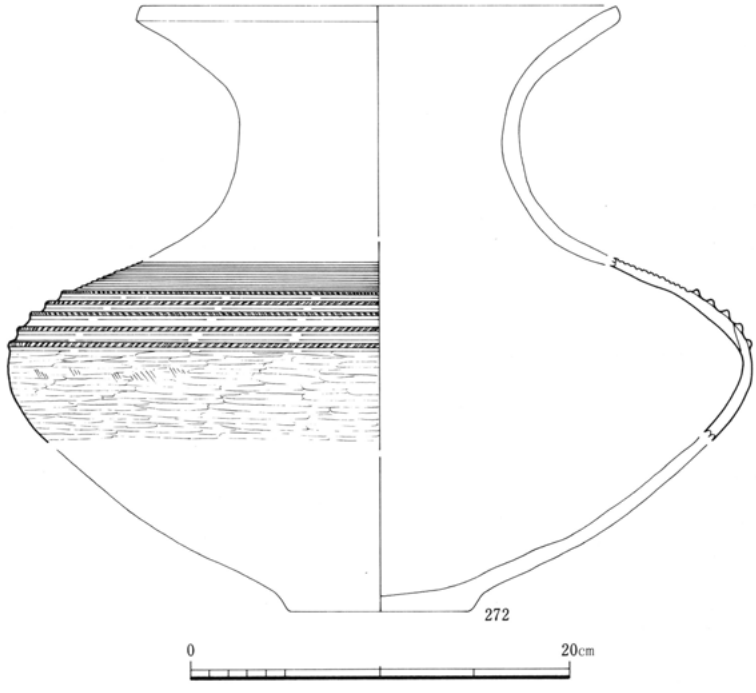

—SB12—
204
205
206
207
208
—SB13—
209
210
0
20cm
211
212
213
214
215
216
217
218
—SB15—
219
220
0
10cm
—SB16—
221
222
—SB17—
223
224


—SZ01—
225
226
227
—SZ02—
228
229
230
0
10cm
—SZ03—
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
0
10cm
241
242

図版22


243
244
245
246
247
248
−SZ04−
249
250
251
252
0
20cm
253
254
255
−SZ05−
256
257
258
259
260
261
262
0
10cm

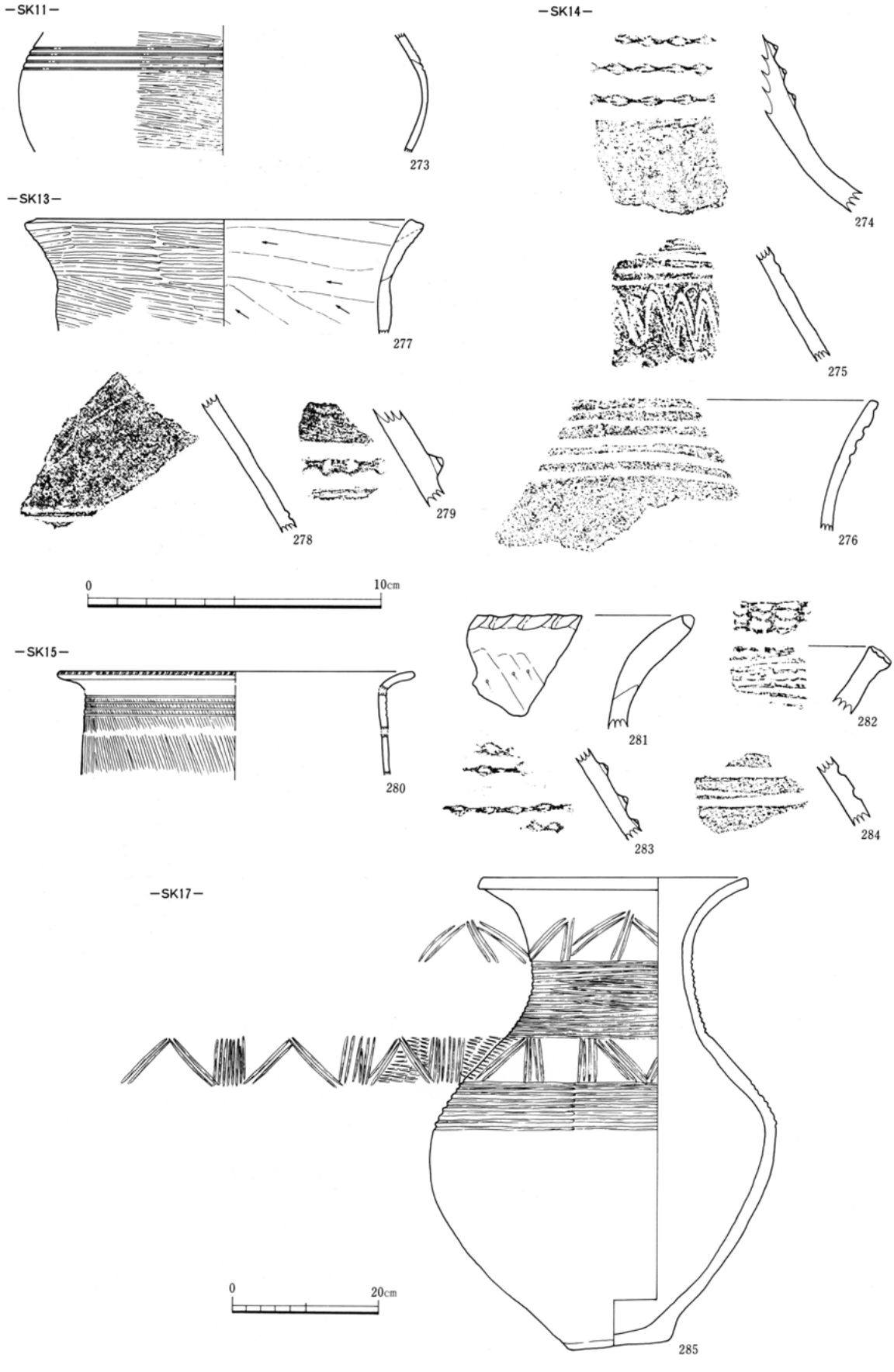




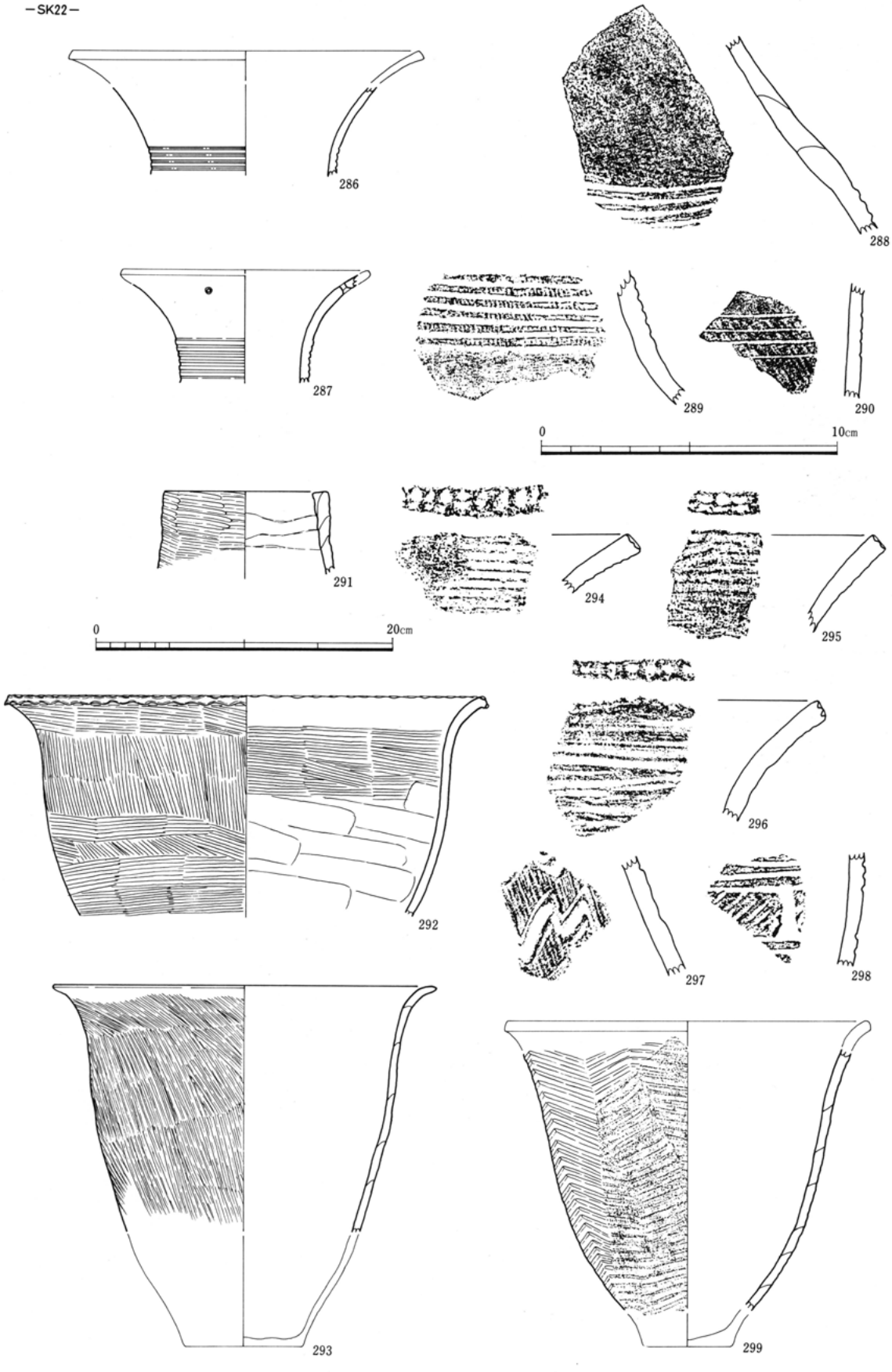
SZ01	SD12	225・226	SZ02	SD16	227・228・229・230
SZ03	SD20	245	SZ04	SD22	247・248・249・251・252 253・254・255・259
	SD19	232・234・235・236 237・238・239・240・244		SD23	250・256・257・258
	SD17	231・241	SZ06	SD28	267
	SD18	233・242・243・246		SD29	263・264・265・266 268
SZ05	SD25	262			
	SD26	260・261			
SZ07	SD33	269・272			
	SD32	271			
	SD31	270			

方形周溝墓土器出土地点

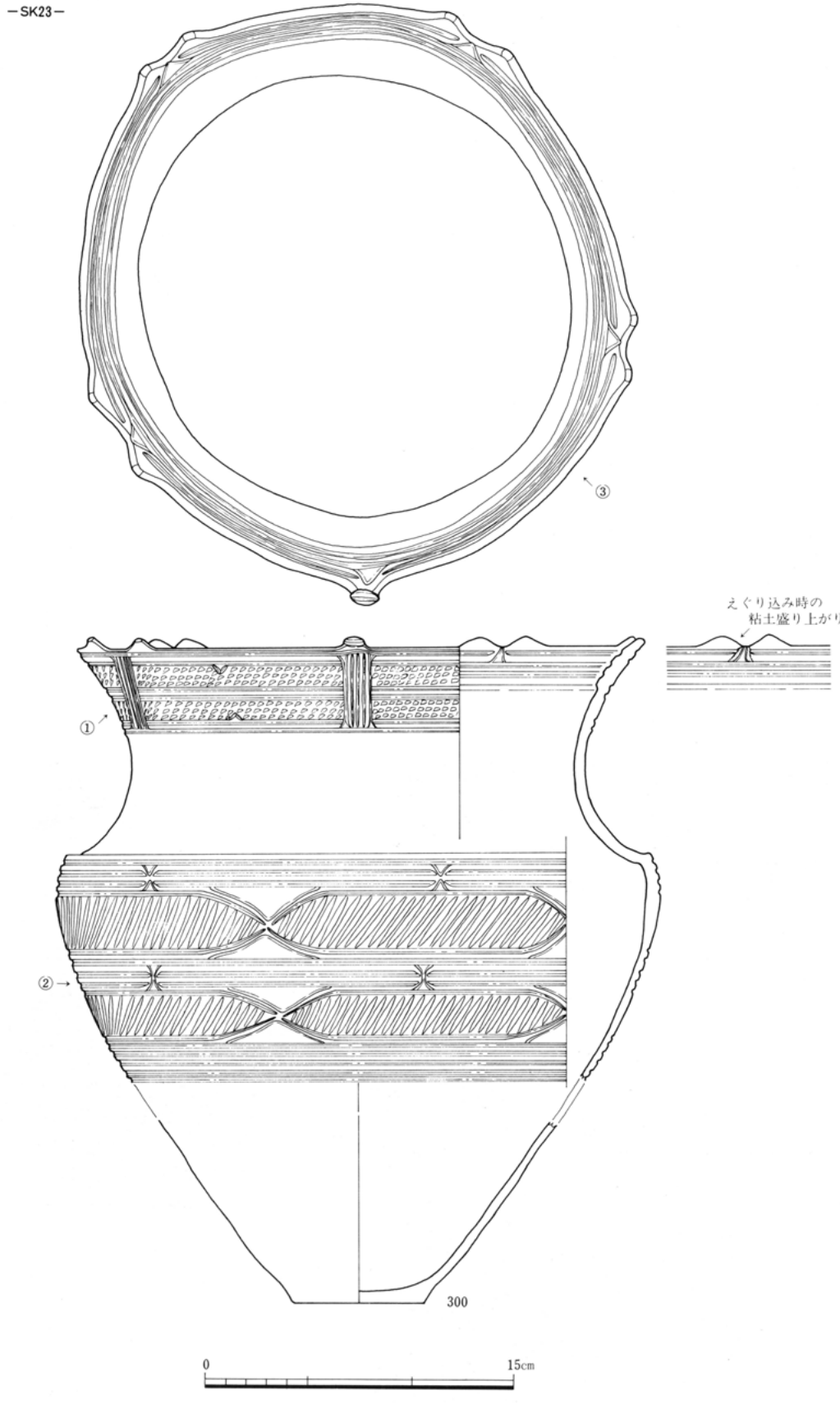
図版24

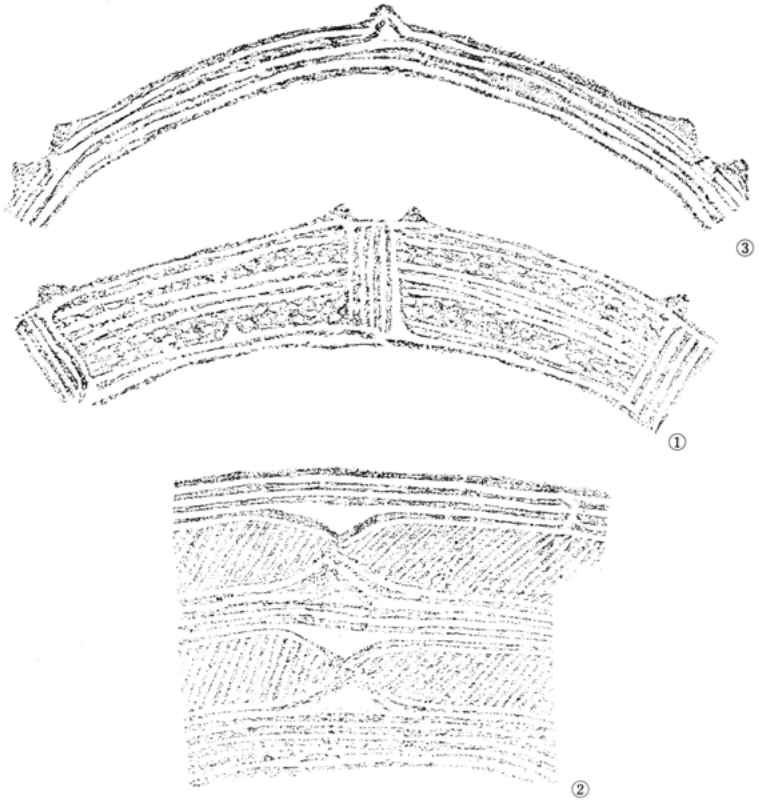

—SK11—
273
—SK14—
274
—SK13—
277
275
278
279
276
0
10cm
—SK15—
280
281
282
283
284
—SK17—
285
0
20cm

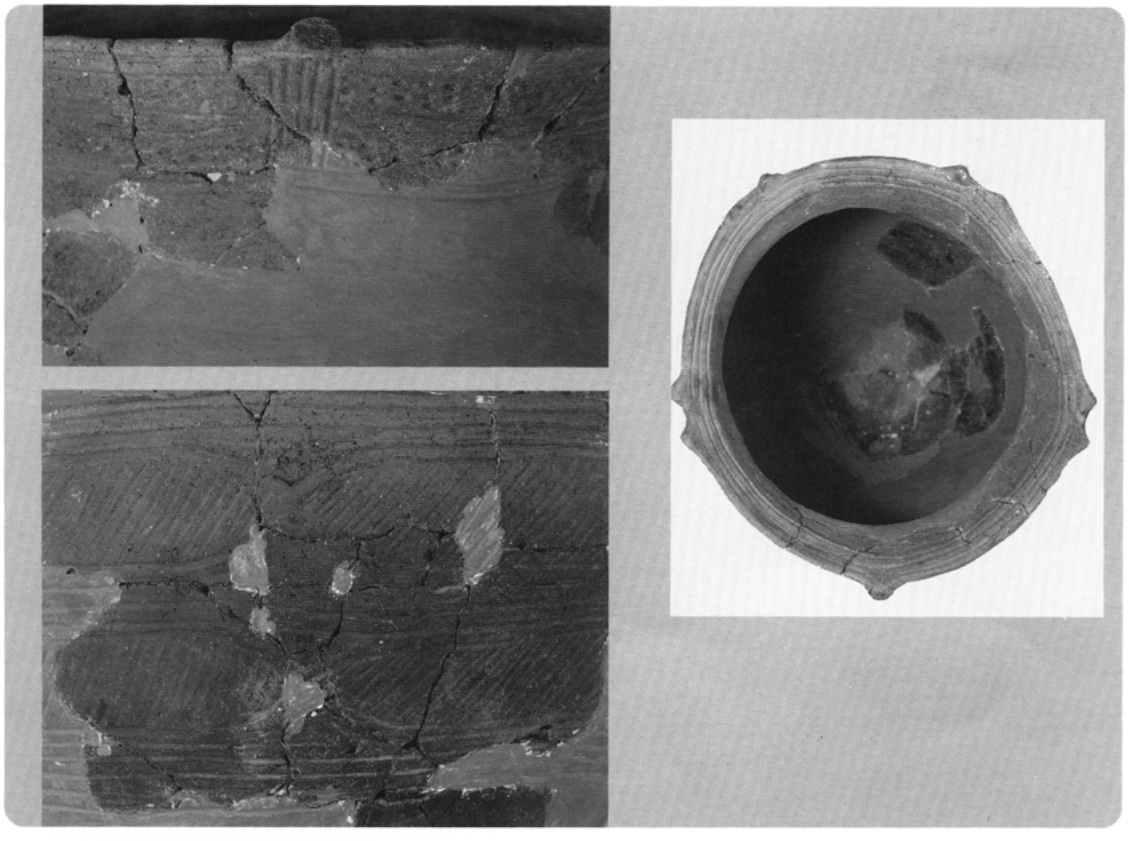
—SK22—


286
288
287
289
290
0
10cm
291
294
295
0
20cm
292
296
297
298
293
299

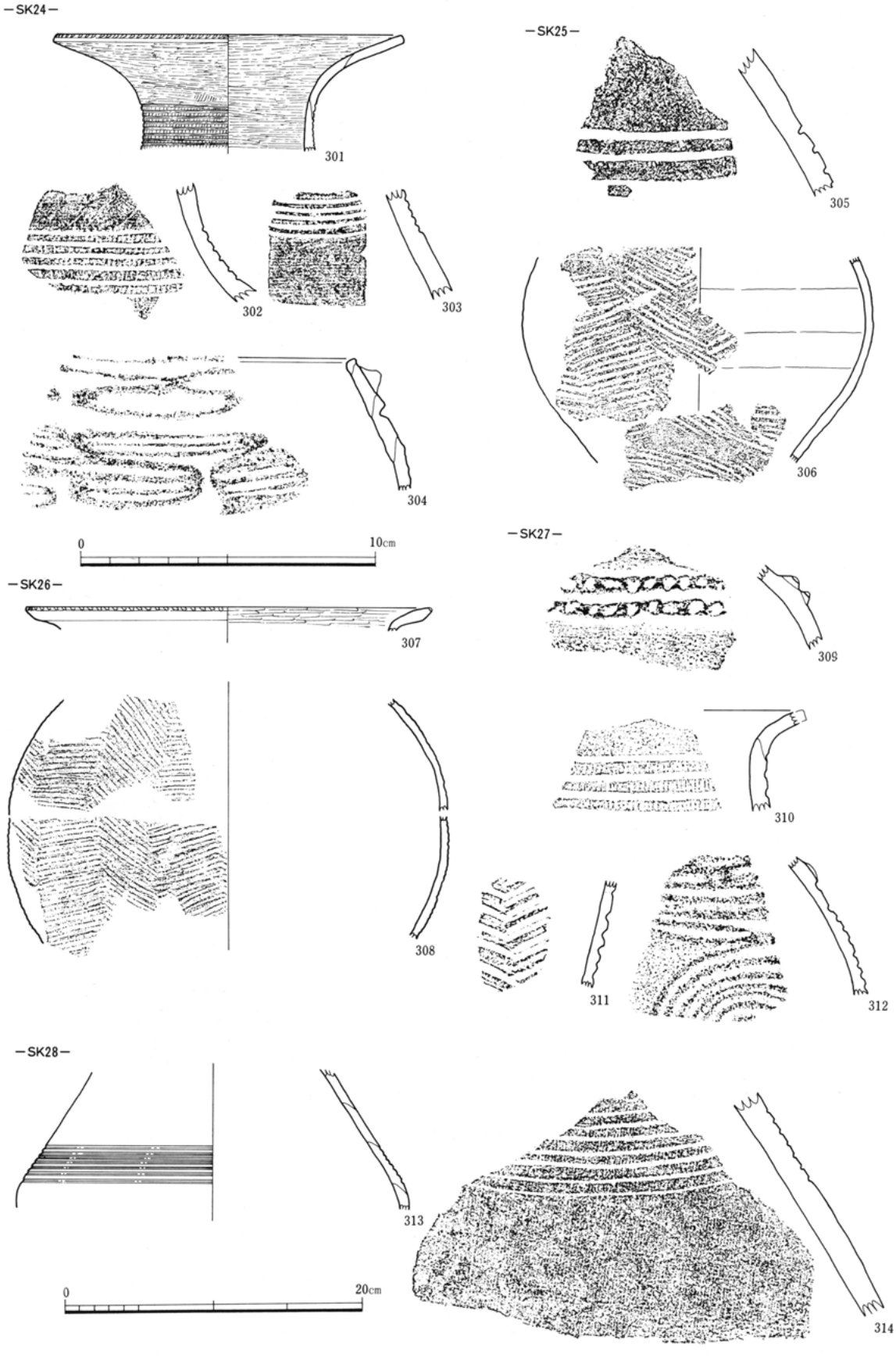
図版26



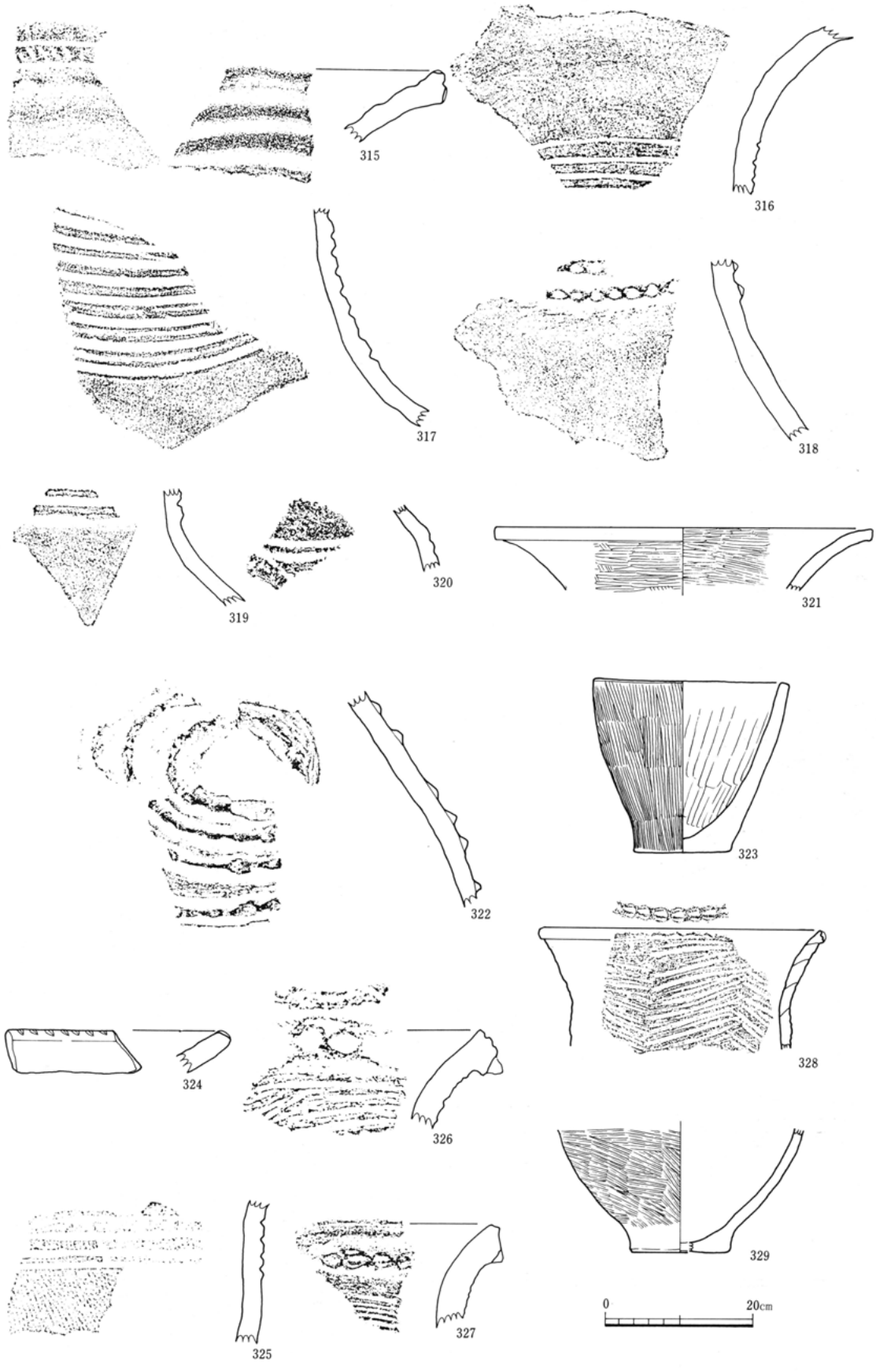

③
①
②



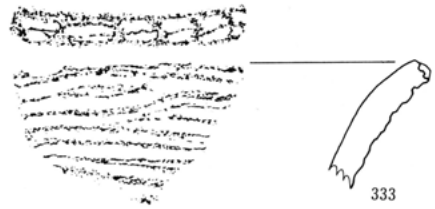
図版28

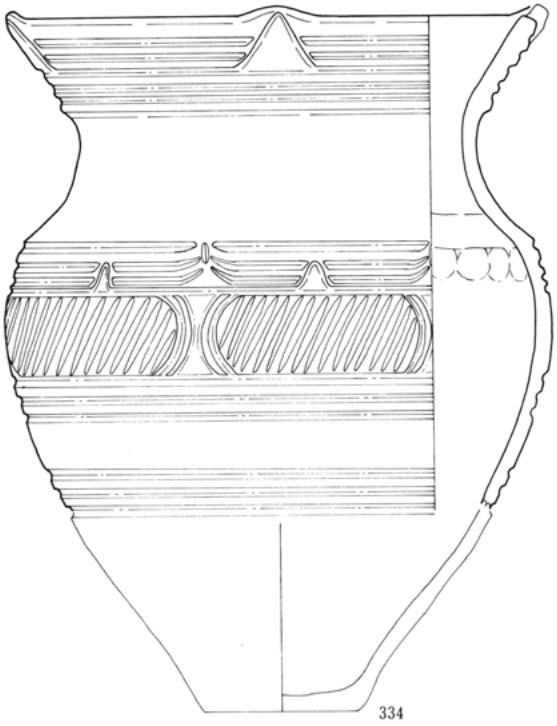

—SK24—
301
302
303
304
0
10cm
—SK25—
305
306
—SK26—
307
308
—SK27—
309
310
311
312
—SK28—
313
314
0
20cm

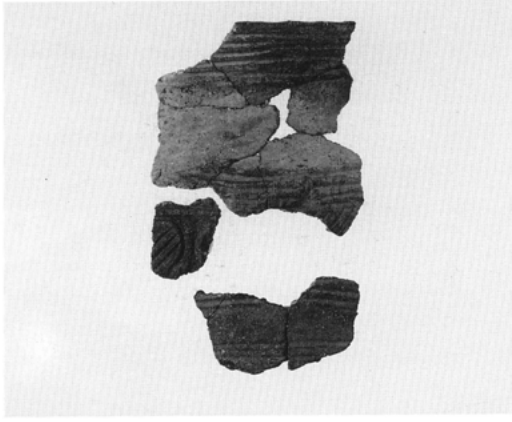
－SK29－

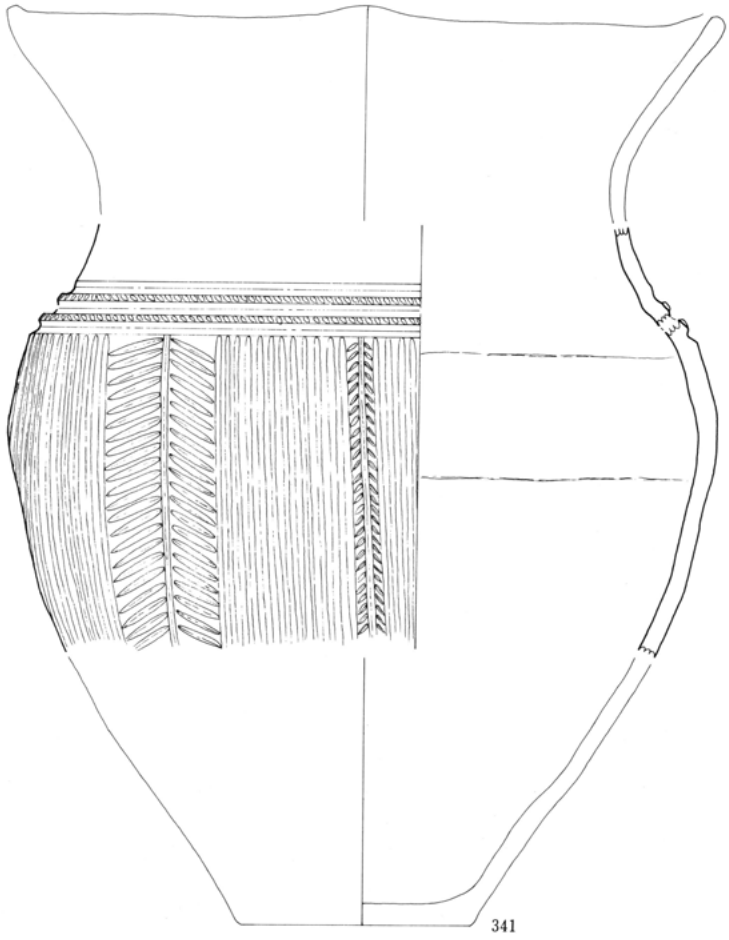

315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
0
20cm

図版30

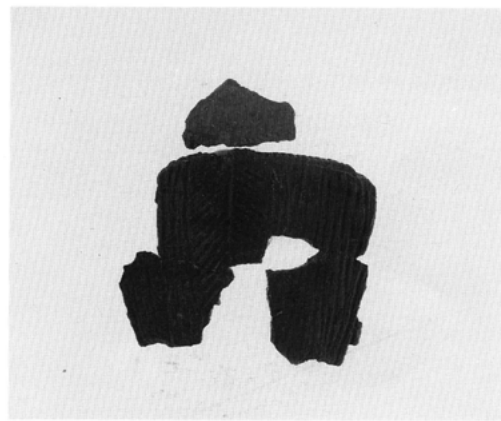




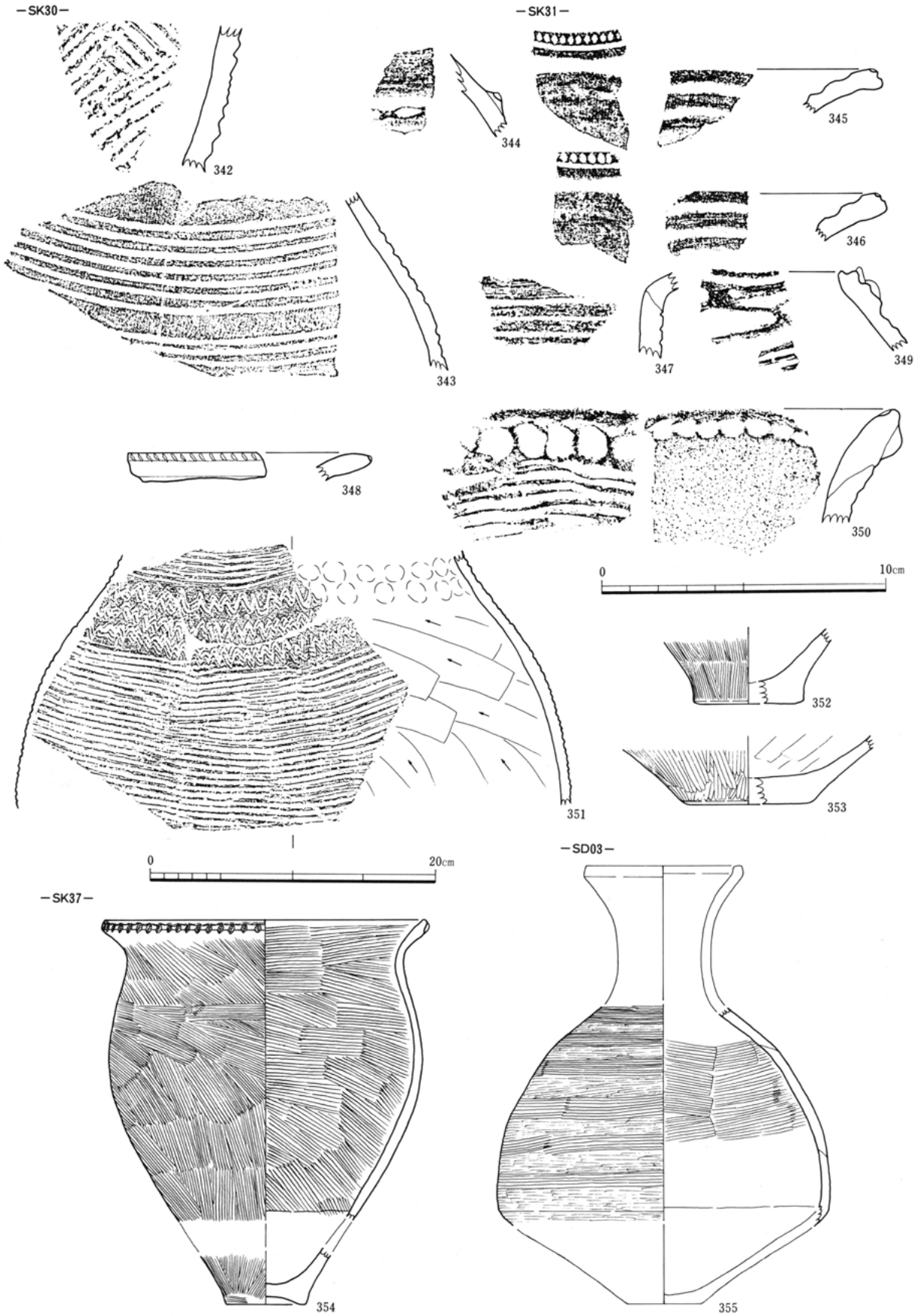


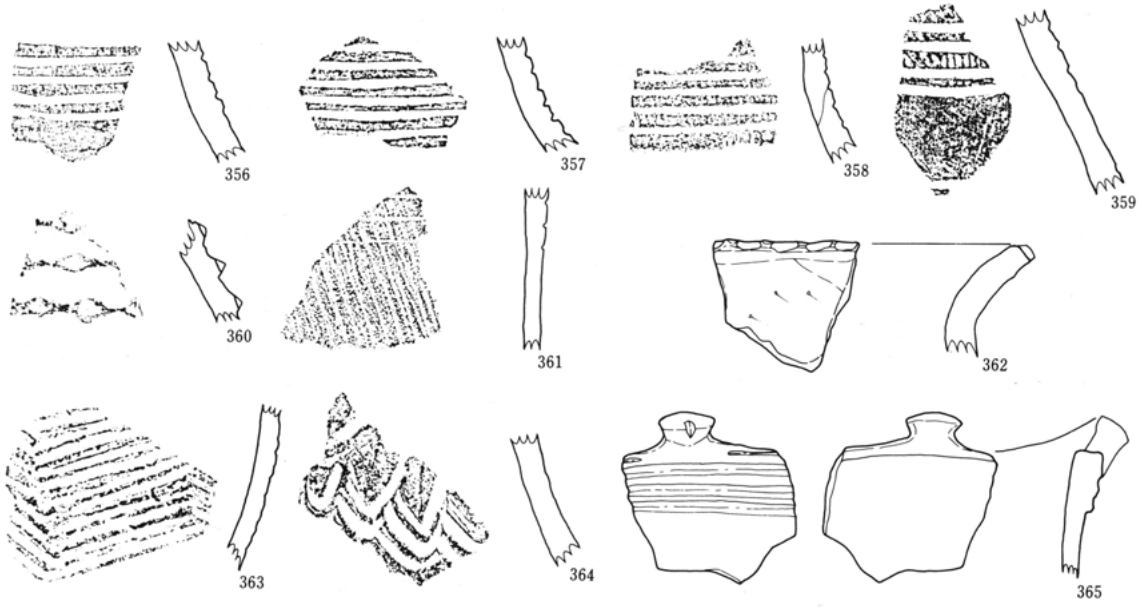


0 10cm

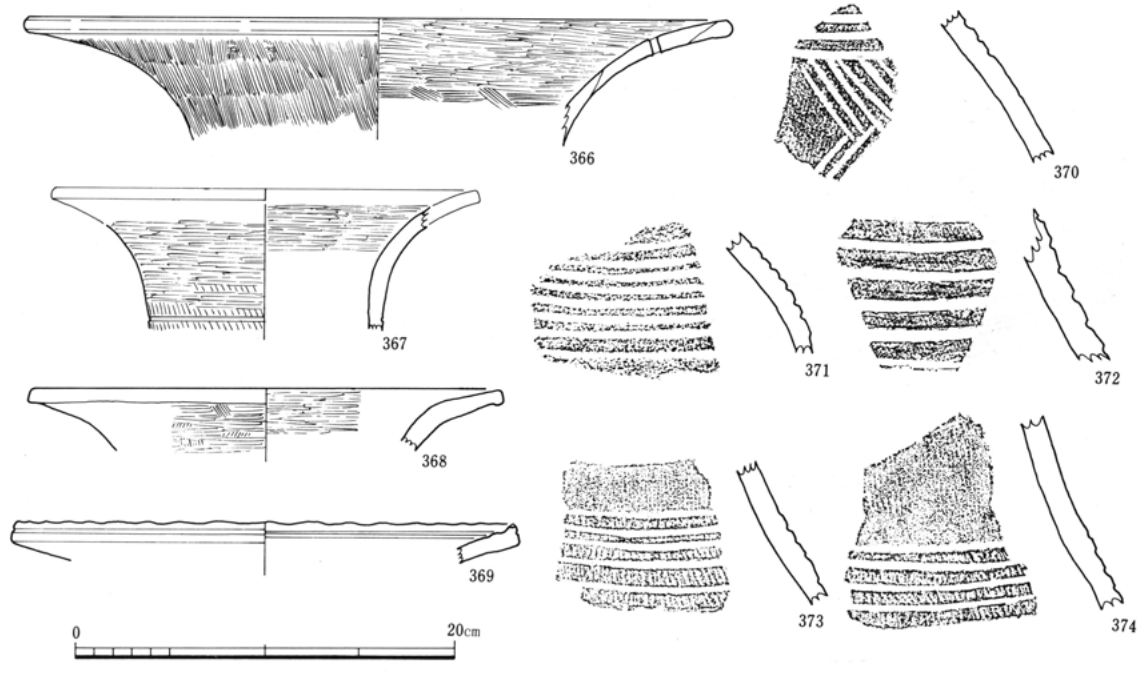


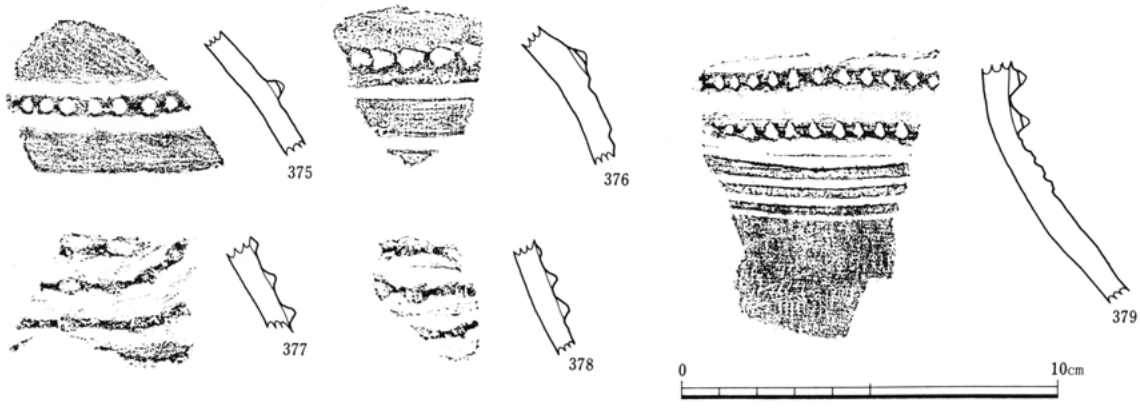
図版32


—SK30—
—SK31—
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
0
10cm
0
20cm
—SK37—
—SD03—
354
355


356
357
358
359
360
361
362
363
364
365

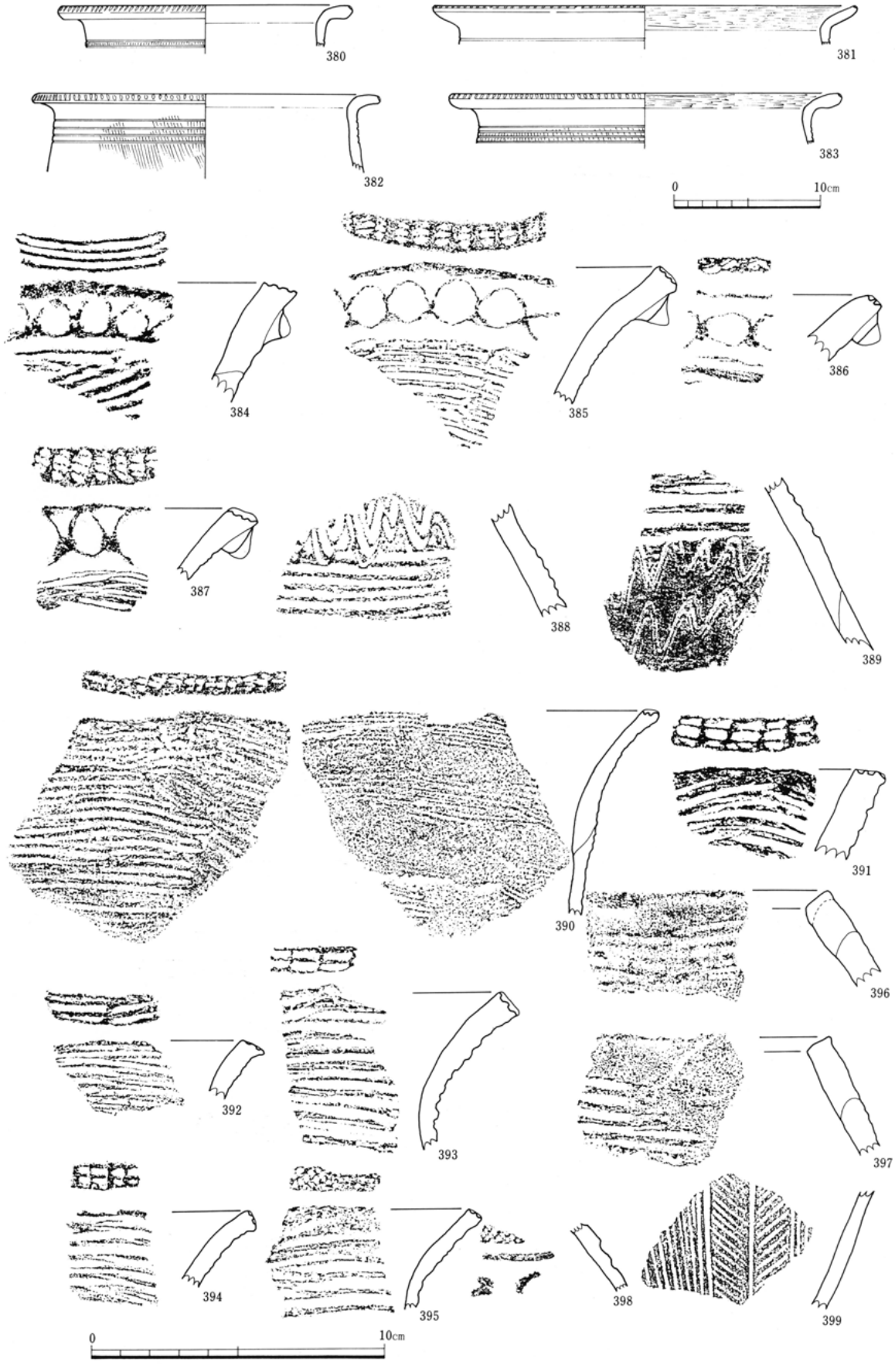
－包含層－

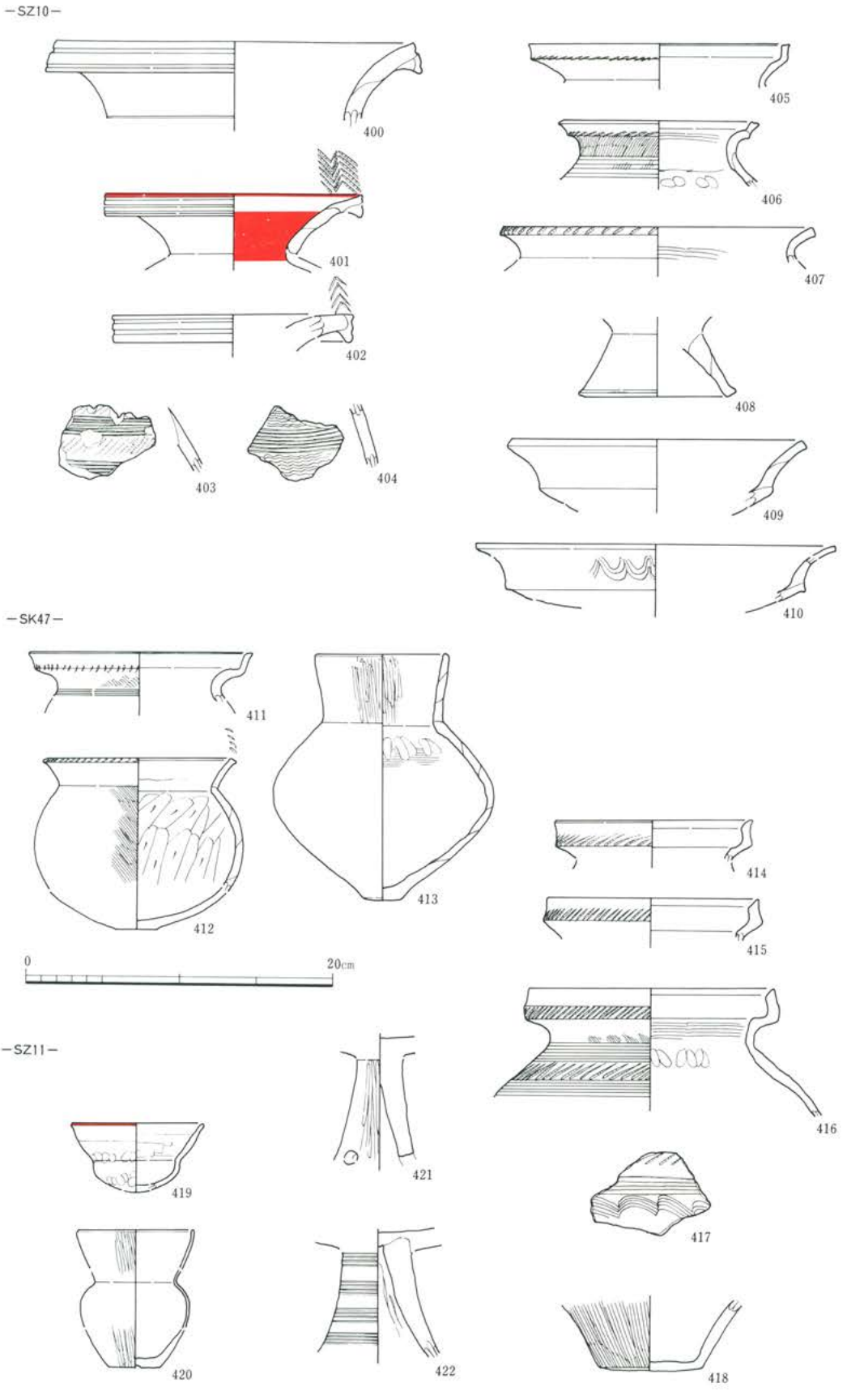

366
367
368
369
370
371
372
373
374
0
20cm


375
376
377
378
379
0
10cm

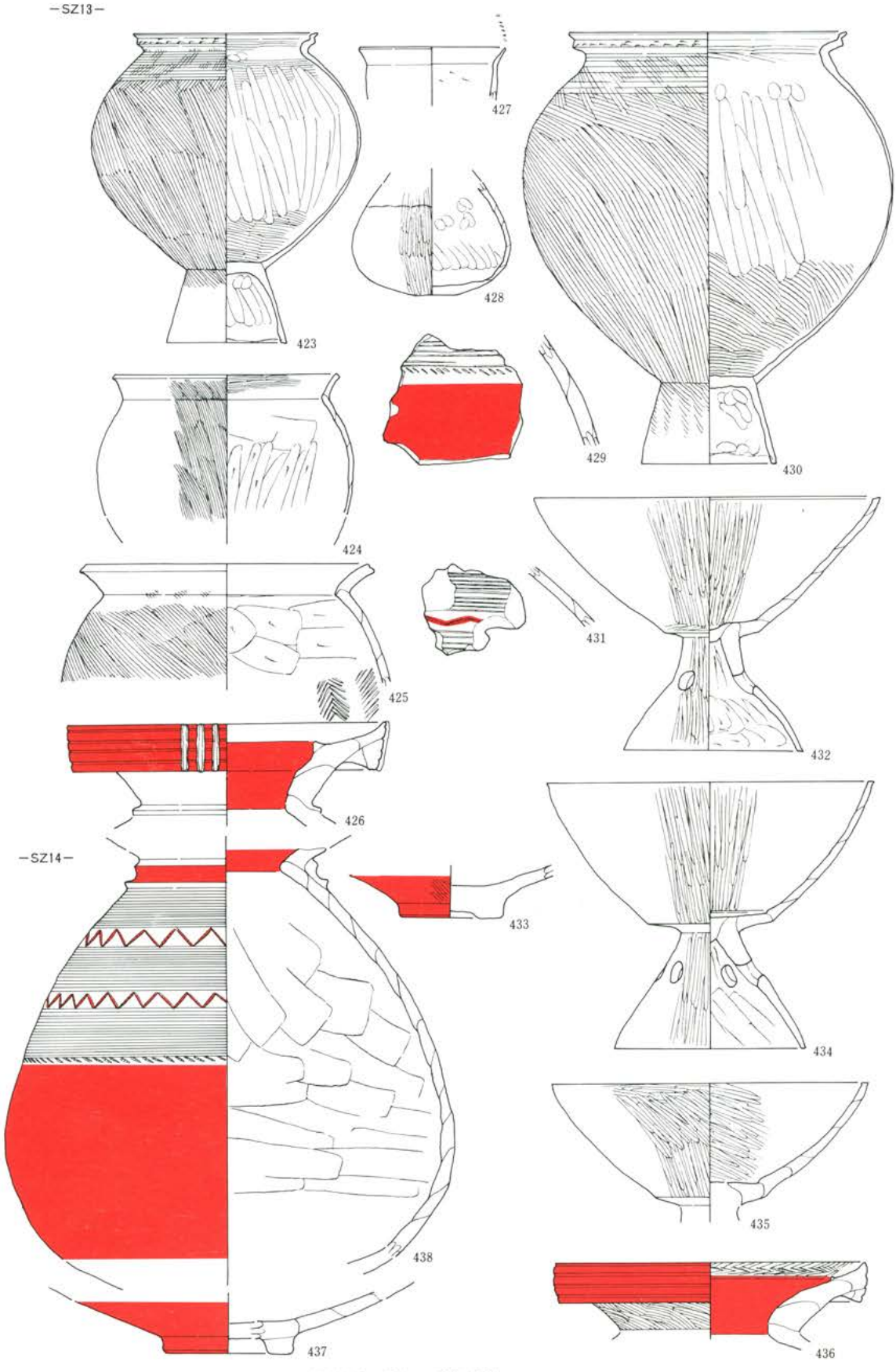
図版34

－包含層－

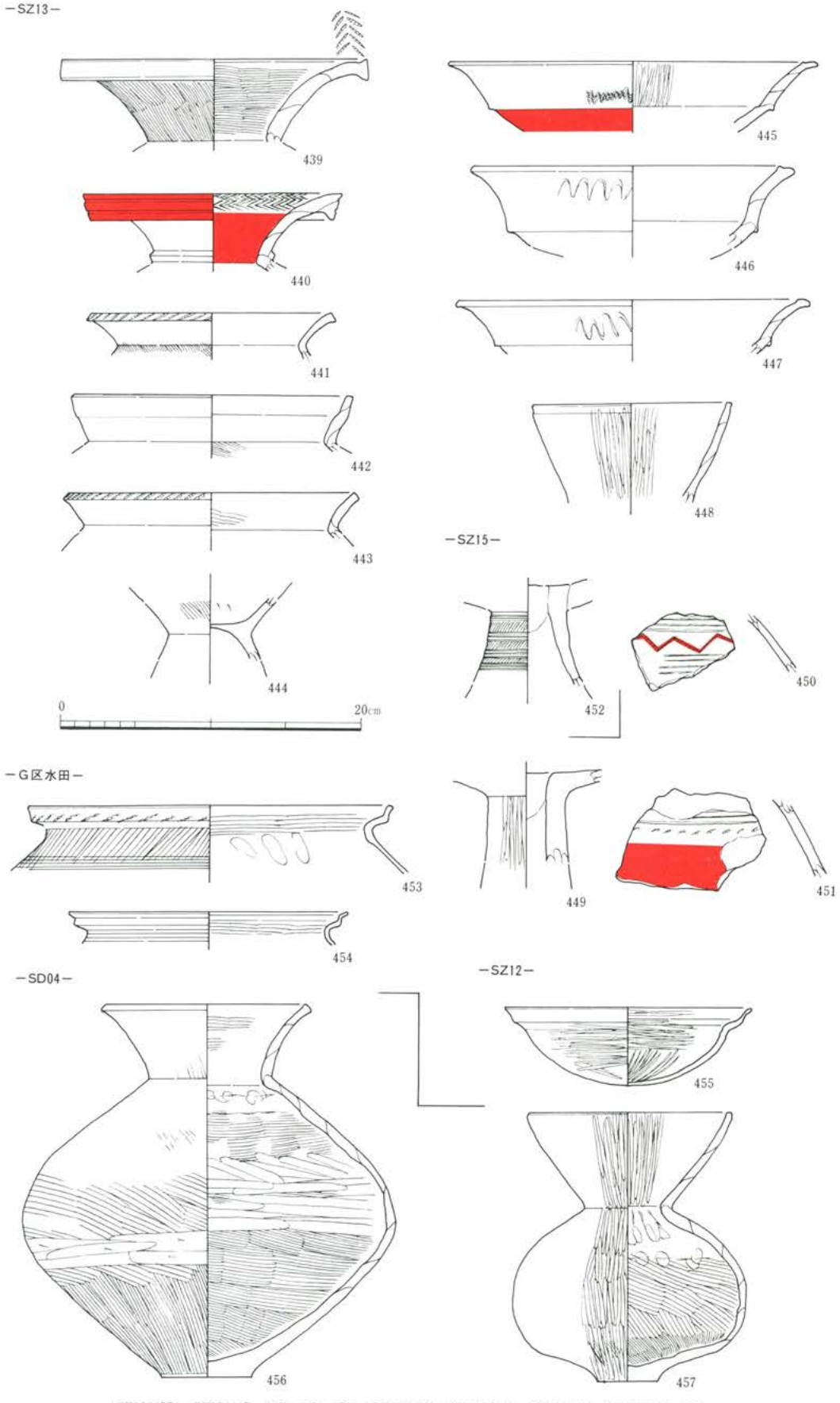

380
381
382
383
0
10cm
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
0
10cm



SZ10 —SK45(416)　SK47(411～413)　SK48(414)

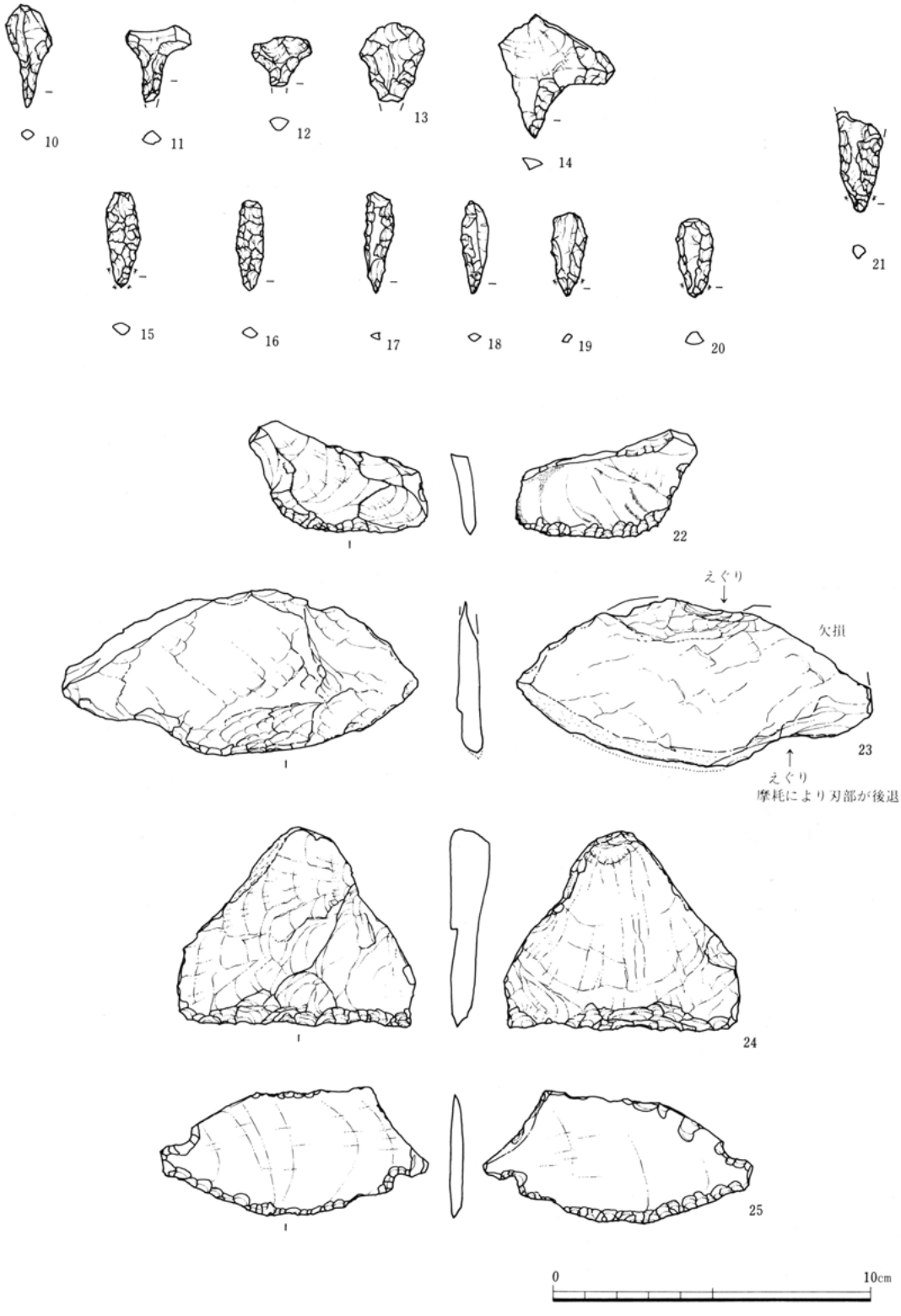


SZ13(423～437)　SZ14(438)

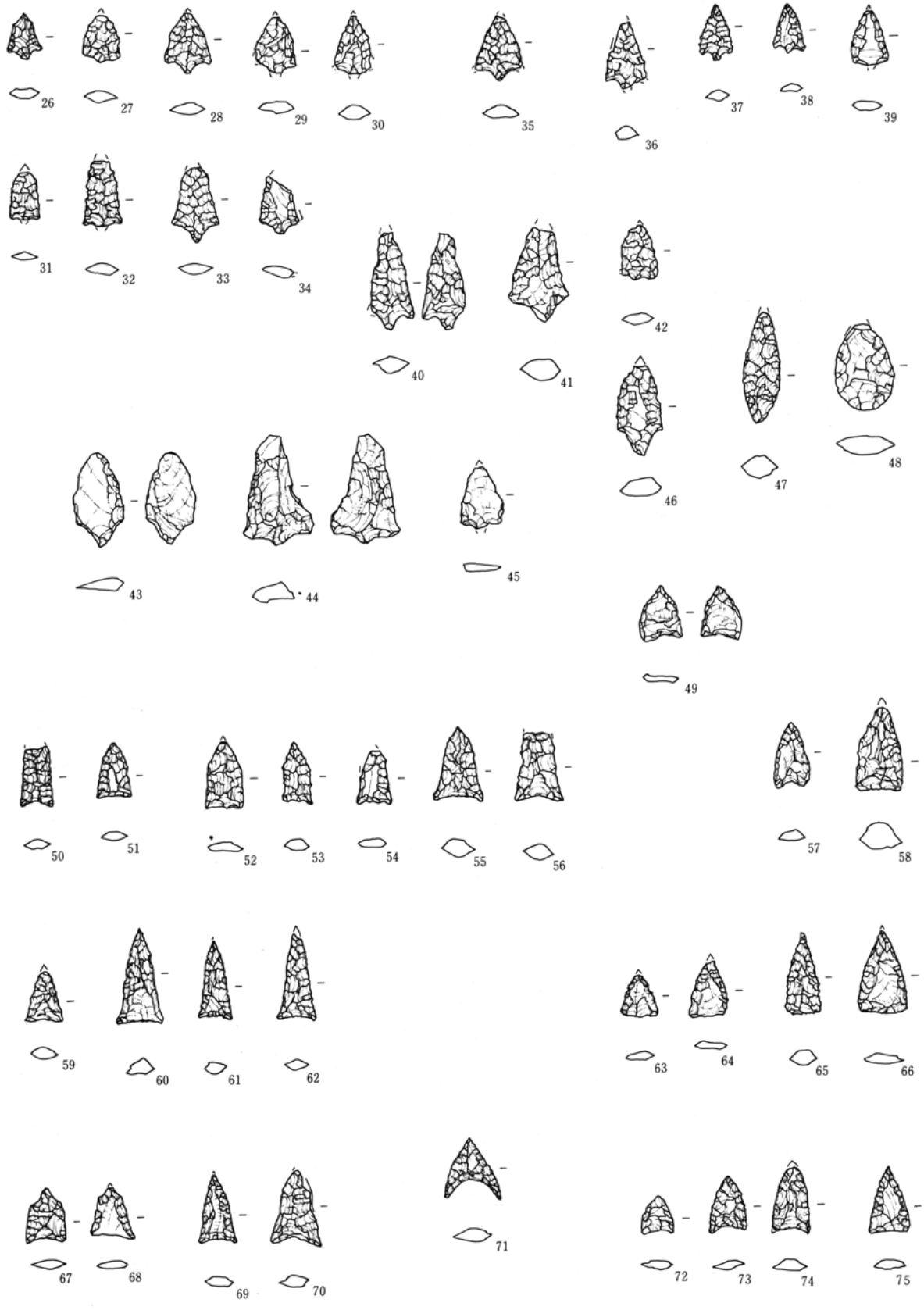


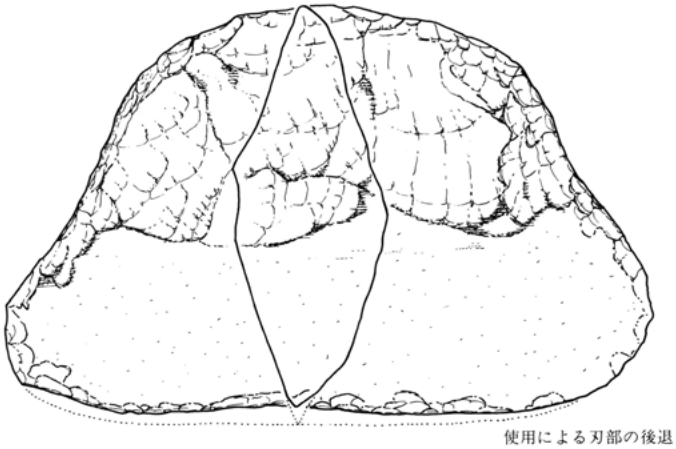
SZ12(455)、SZ13(445、446、449～450)、SZ15(452)、SK53(447)、SK54(442)、SK55(439～441)、SK56(443・444・448)、SD04(456・457)、G区水田(453・454)

図版38

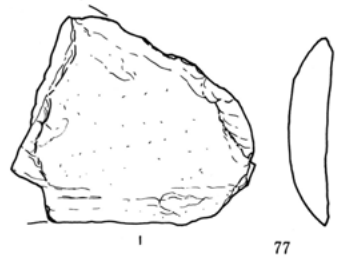

10
11
12
13
14
21
15
16
17
18
19
20
22
えぐり
欠損
23
えぐり
摩耗により刃部が後退
24
25
0
10cm

図版40

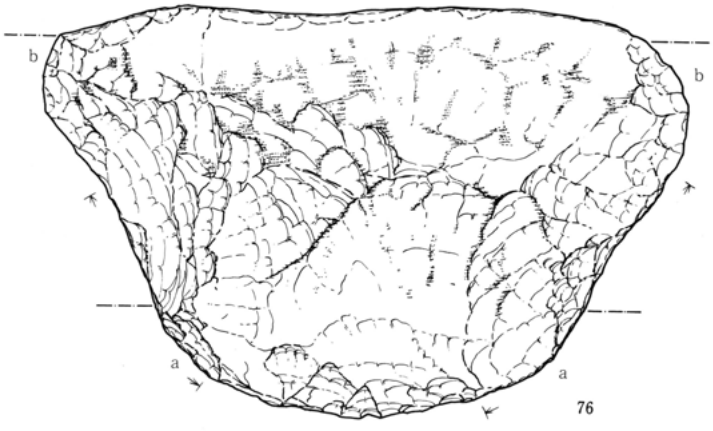

26
27
28
29
30
35
36
37
38
39
31
32
33
34
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75



使用による刃部の後退



77



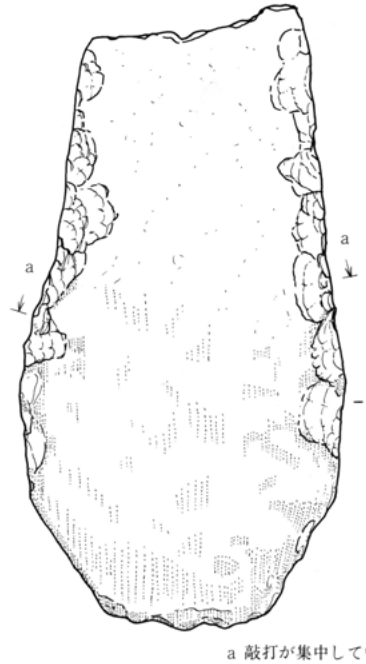
76

a　敲打が集中してツブれている
b　剝離稜線に摩耗と光沢が認められる
　　装着痕か？

78

79

80

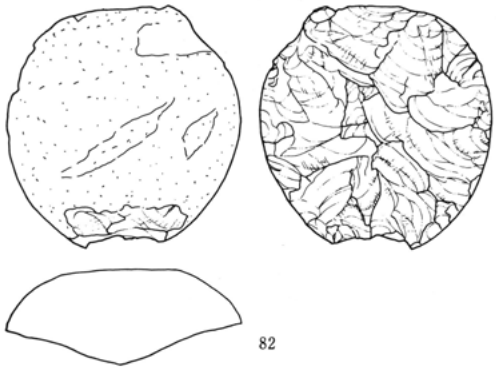


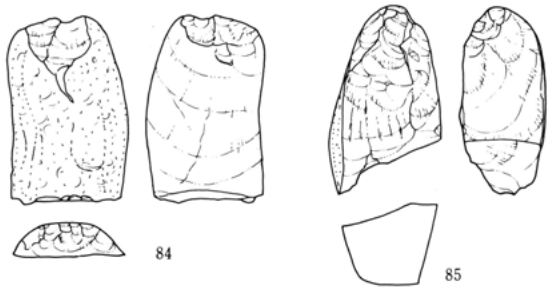
a 敲打が集中している

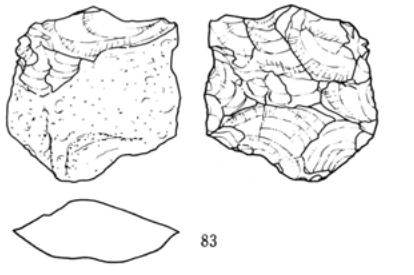
81

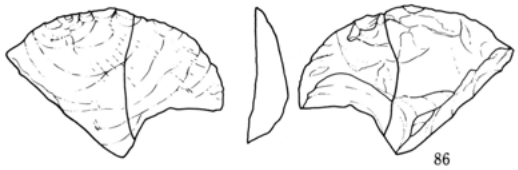
図版42

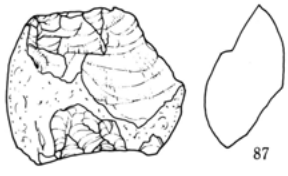
—SK26—

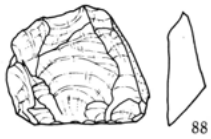




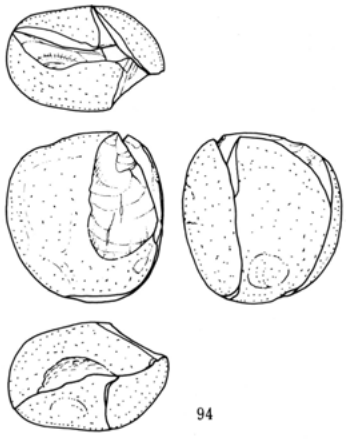


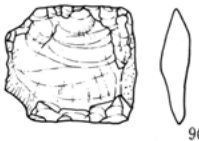


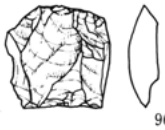


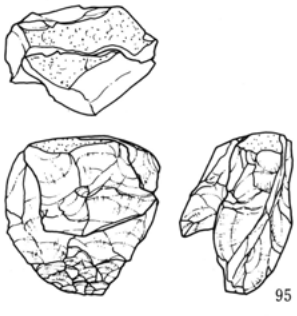


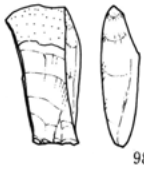
—SB17—



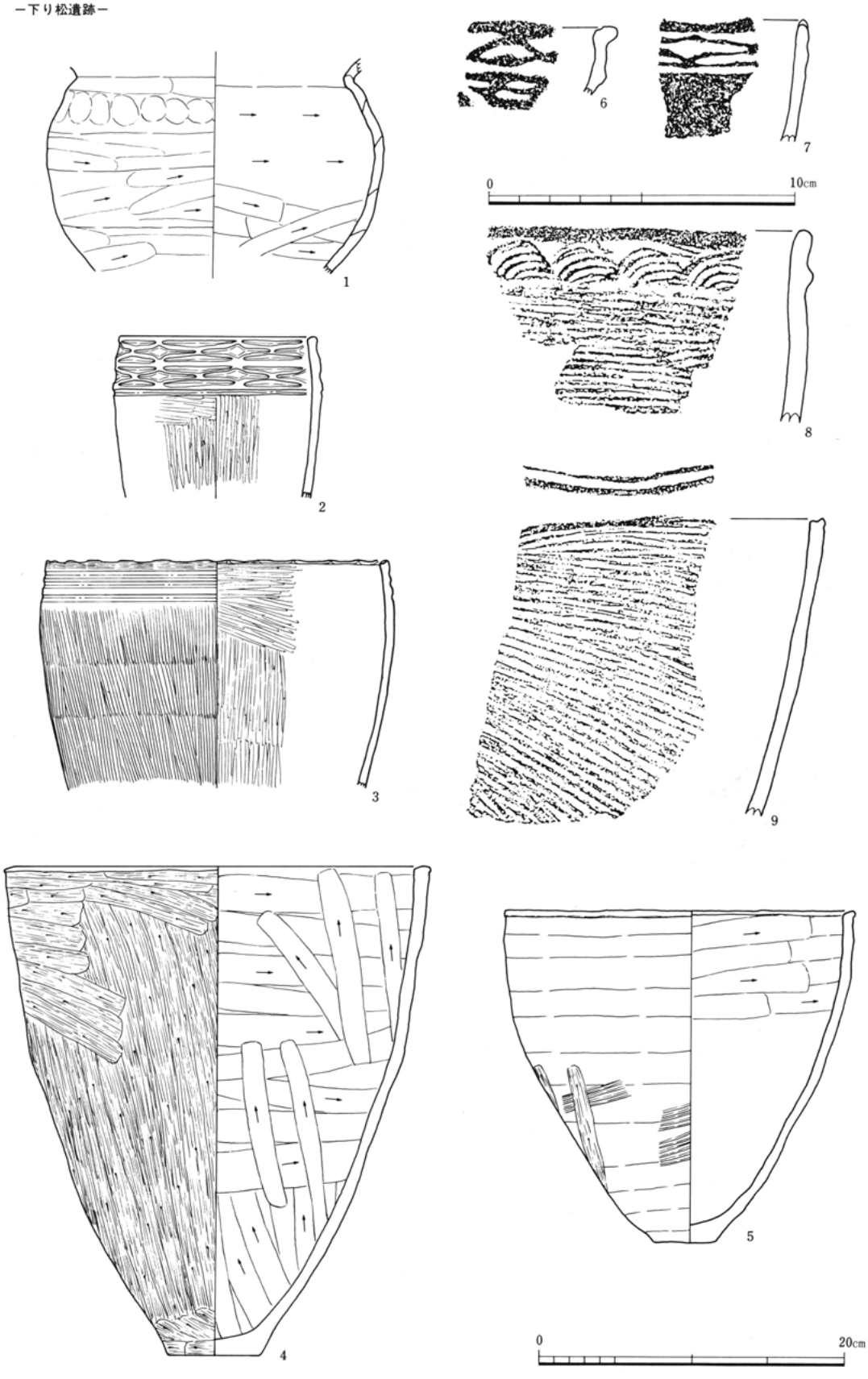






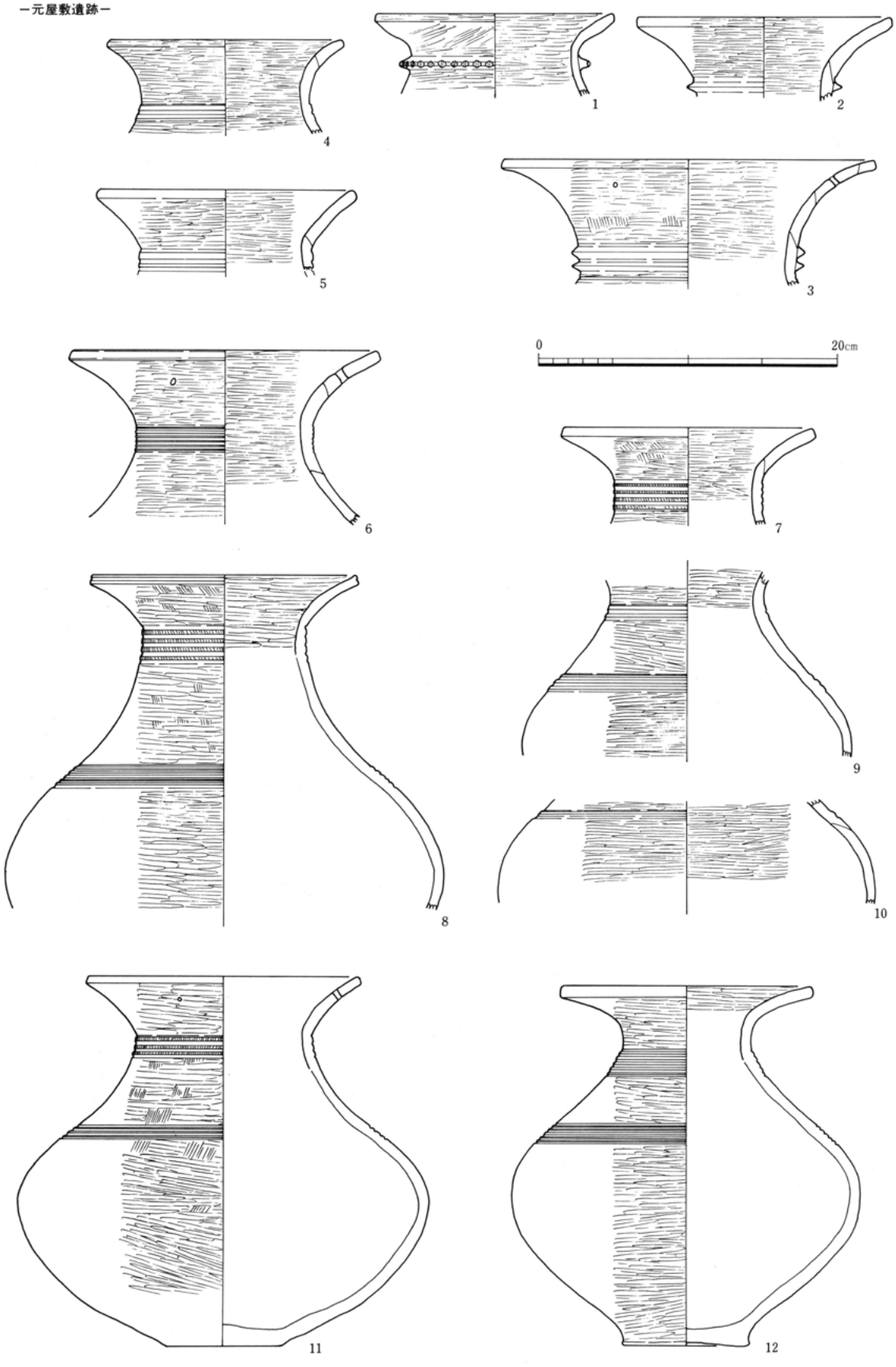


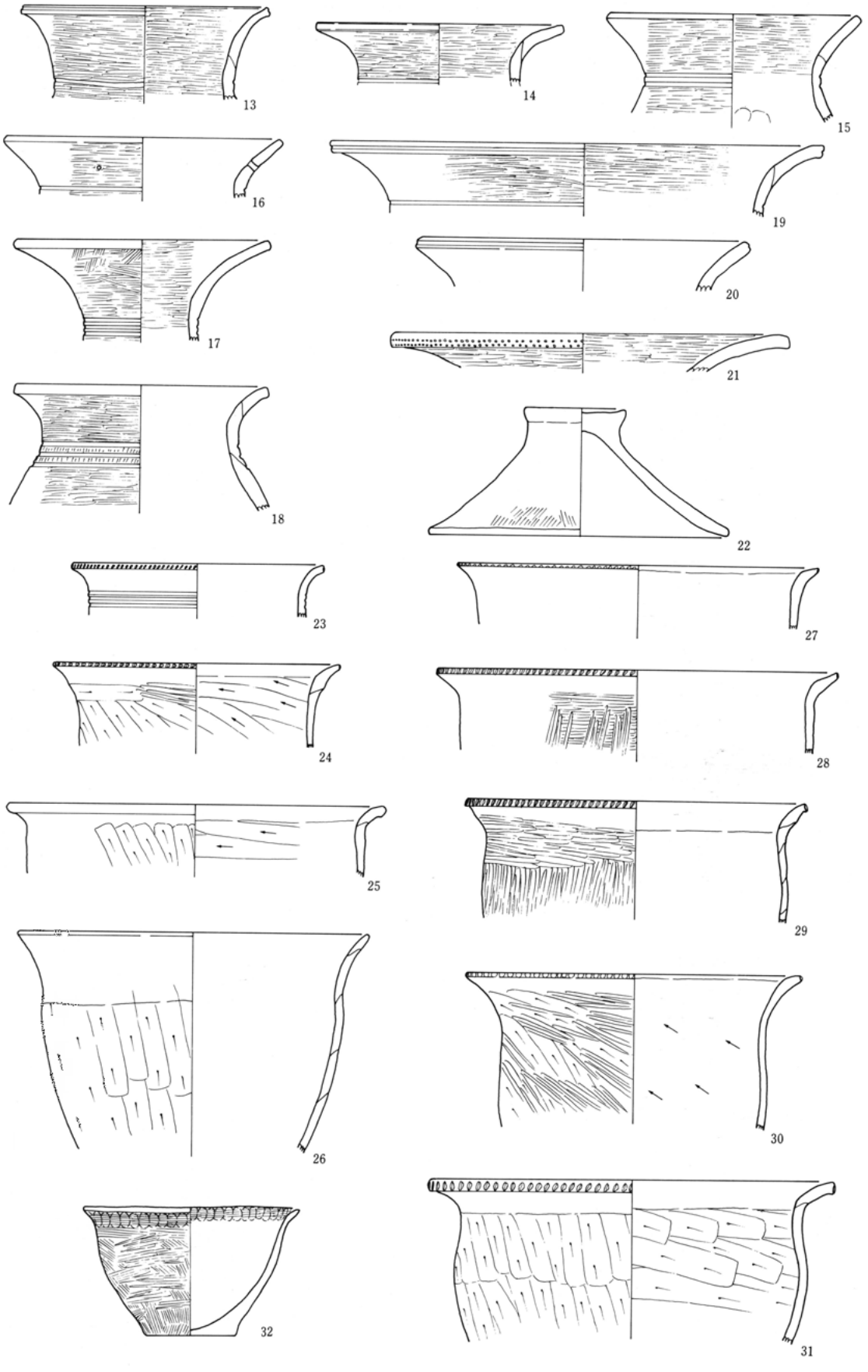
－下り松遺跡－



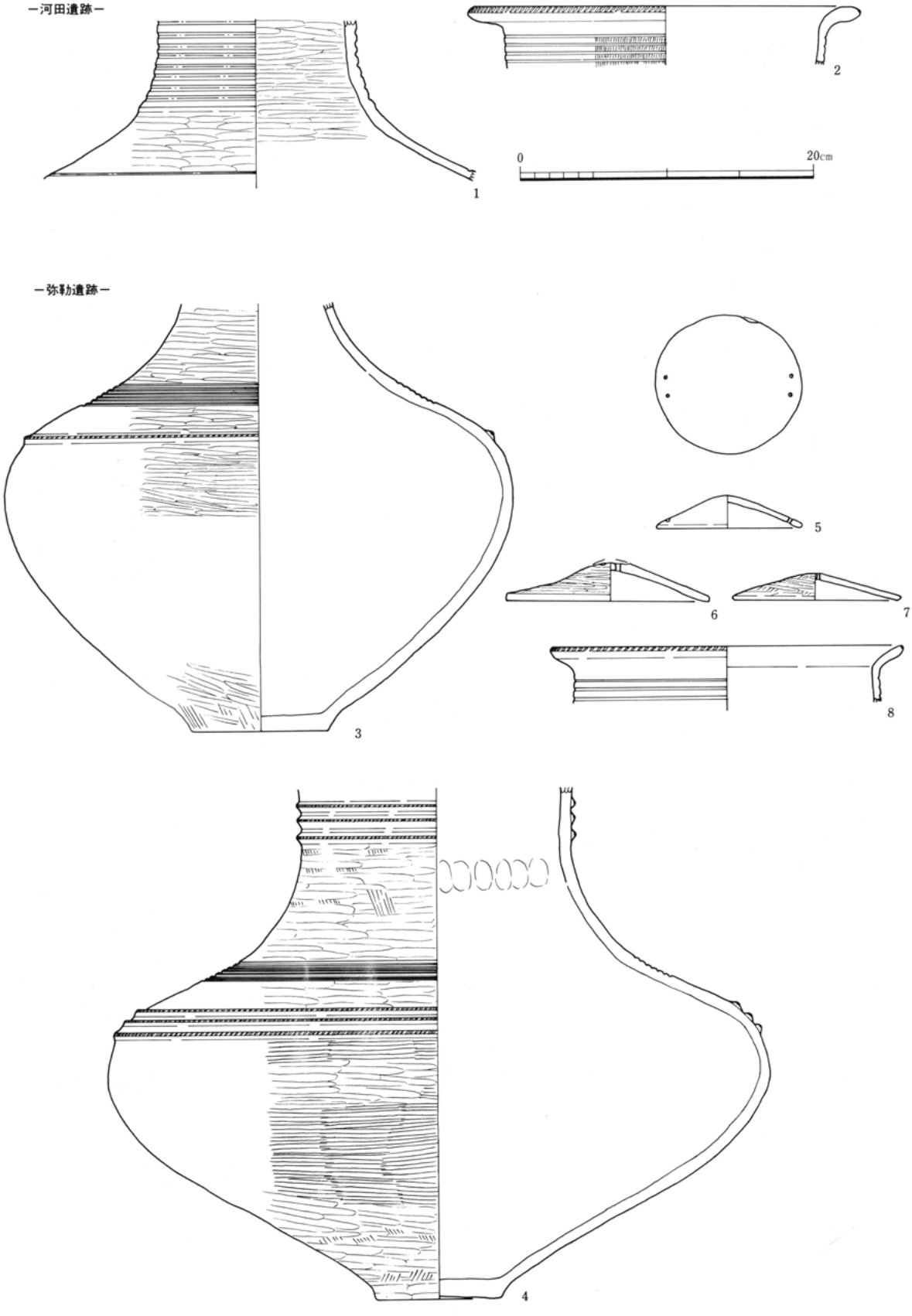
※６～９は『新編一宮市史資料編１』より一部改で掲載

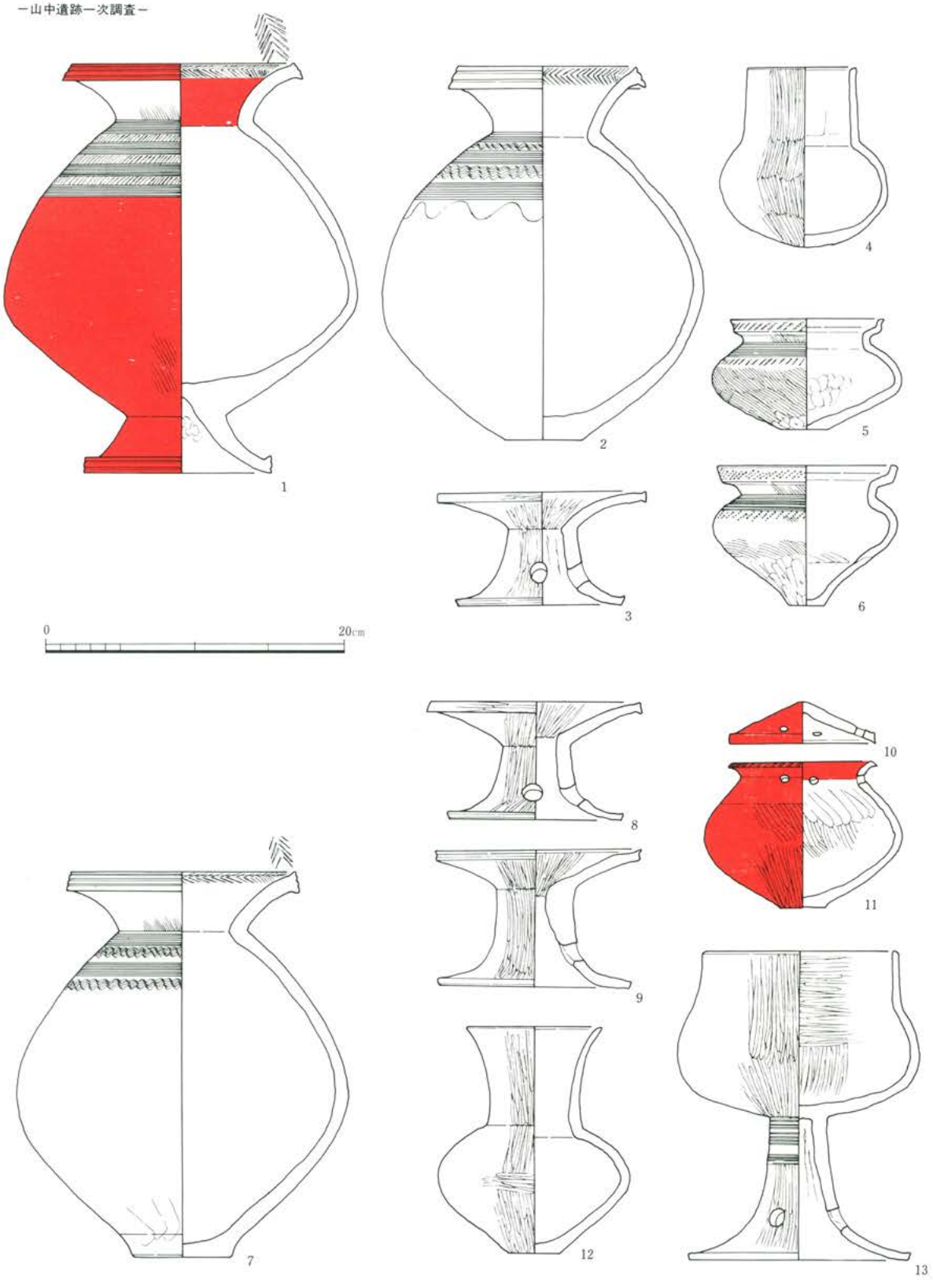
図版44




13
14
15
16
19
17
20
21
18
22
23
27
24
28
25
29
26
30
32
31

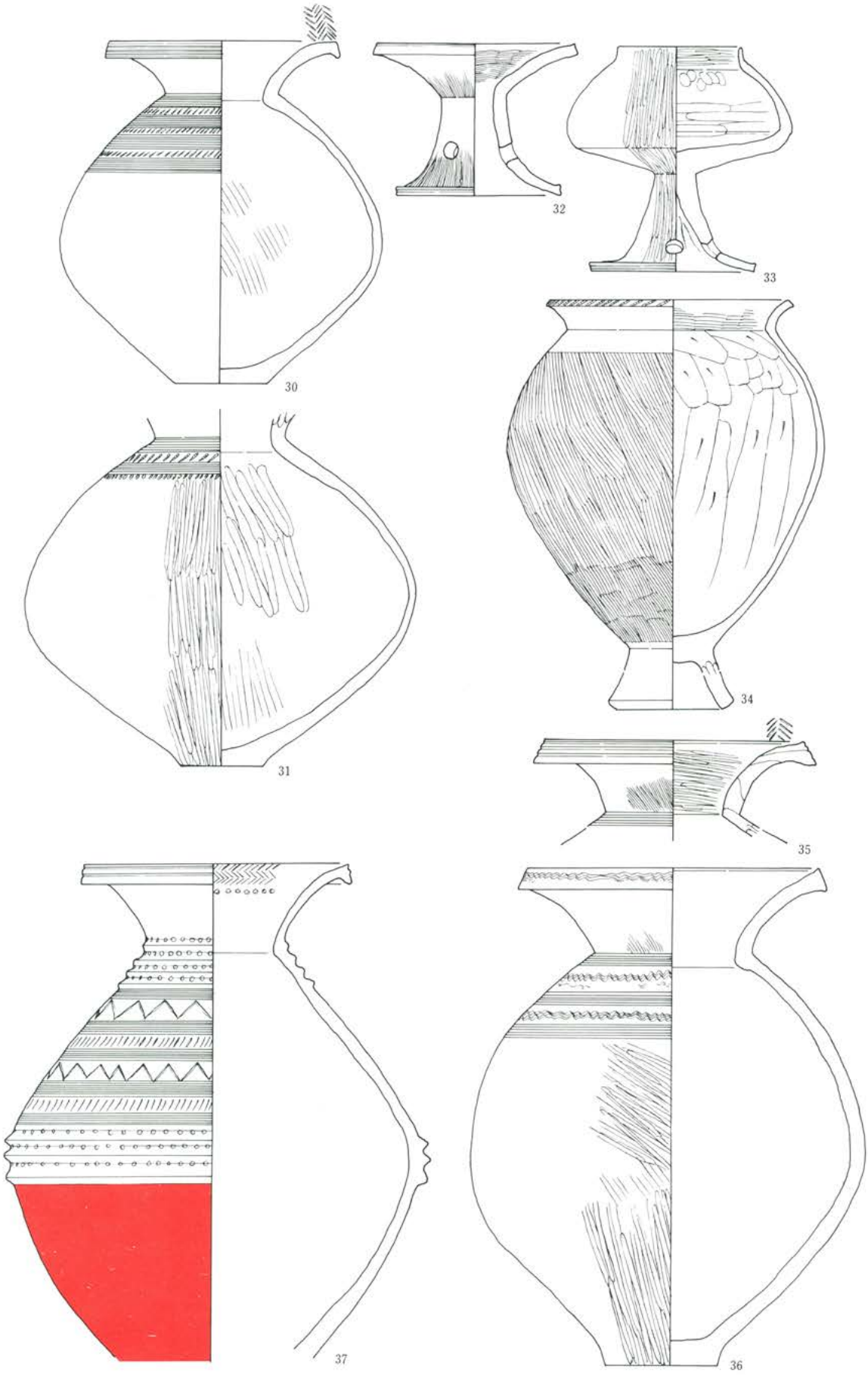
図版46



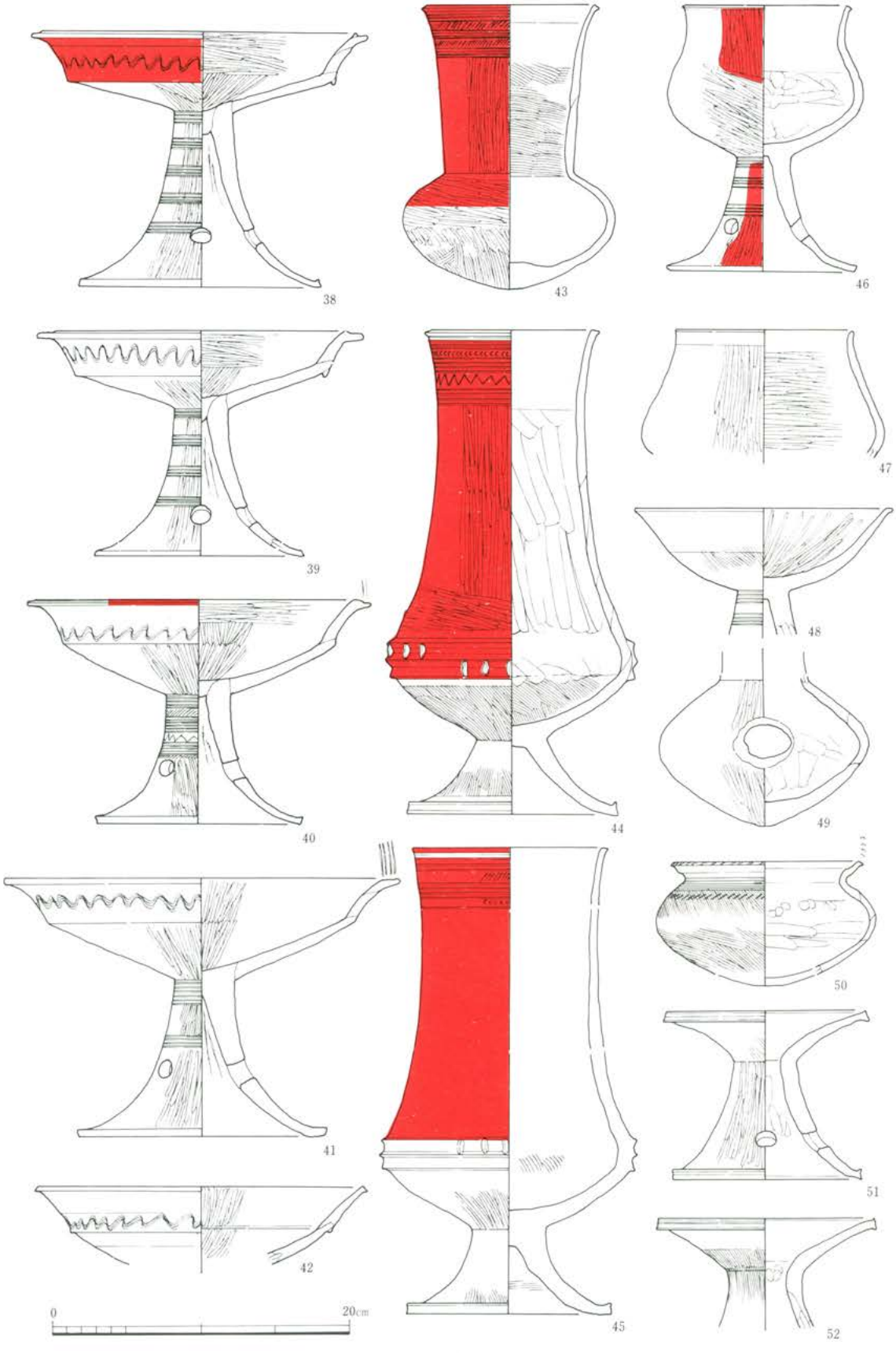


A地点（1～6）、その他

B地点（14～29）



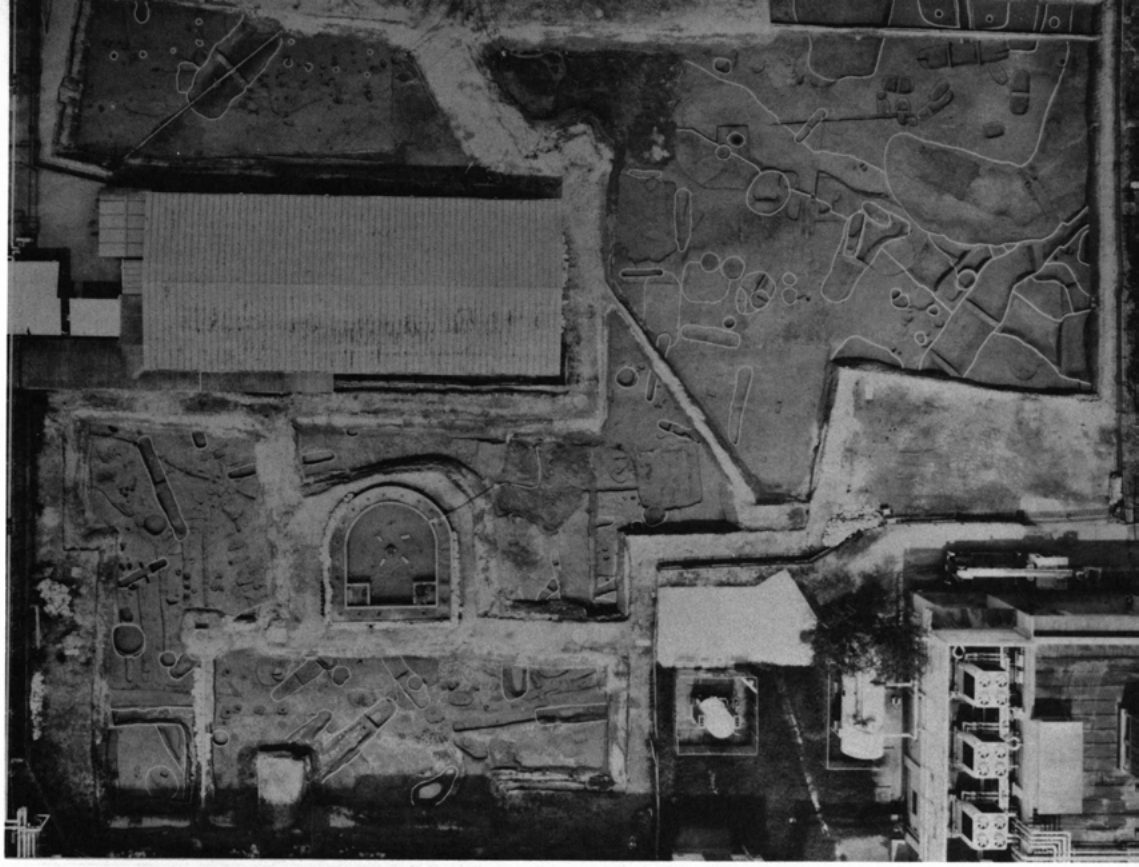
c地点（30－34） その他



D地点

写真図版

1　遺跡全景



2　Ａ区全景

3　ＳＫ01

西から　　西から

4　ＳＫ02

北から　　南西から

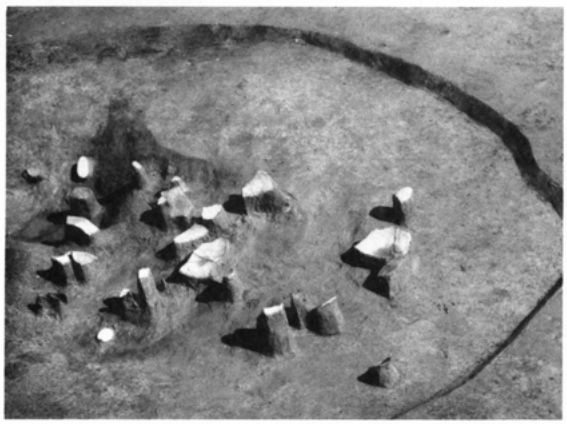
5　ＳＫ03

北東から　　西から

6　環濠と竪穴住居群
南から

7　ＳＢ11
土器出土状況
南から

8　ＳＢ19
土坑
南から



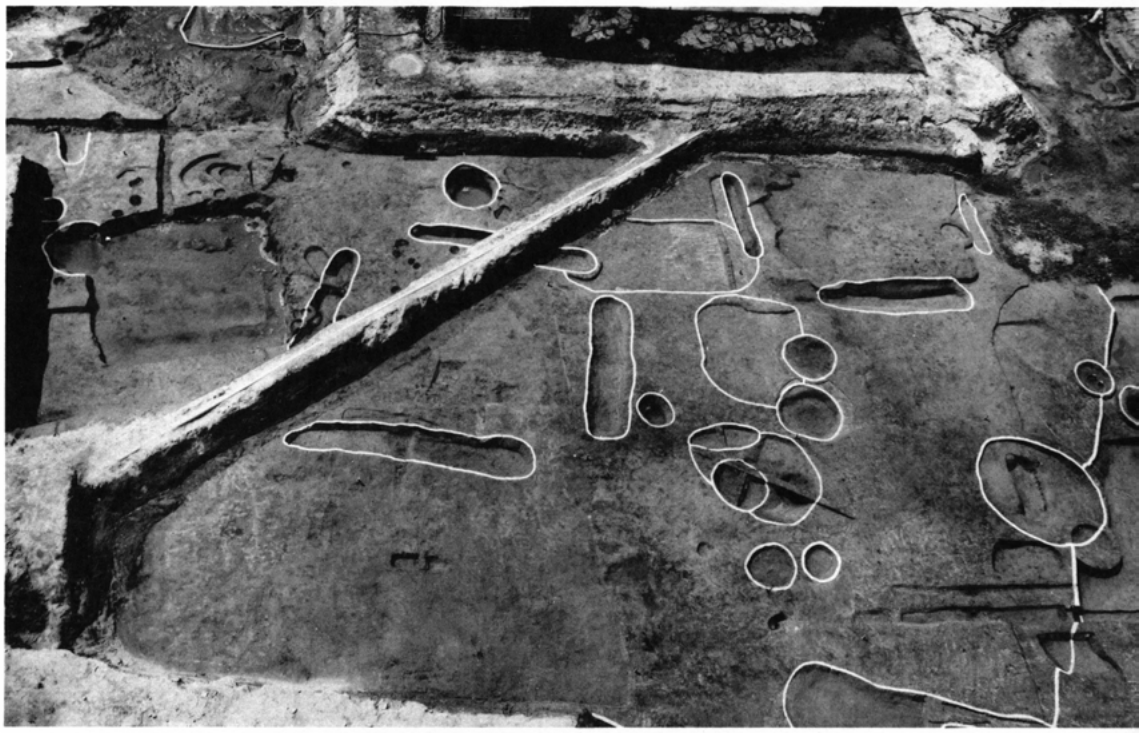
9　ＳＫ23
土器出土状況
南西から

10ａ　ＳＫ26
北から

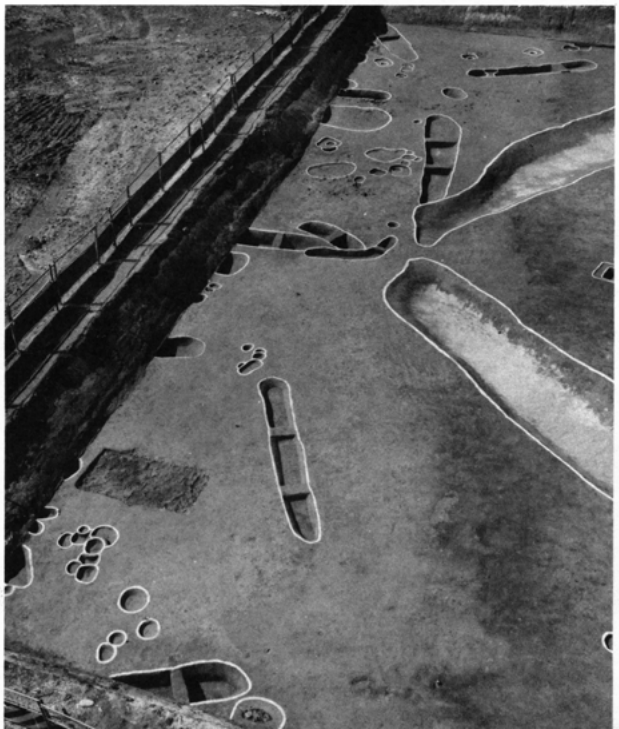
11　ＳＫ22
土器出土状況
北から

10ｂ　ＳＫ26
石器出土状況
西から

12 ＳＺ02・03
南東から



13 ＳＺ06・07
東から

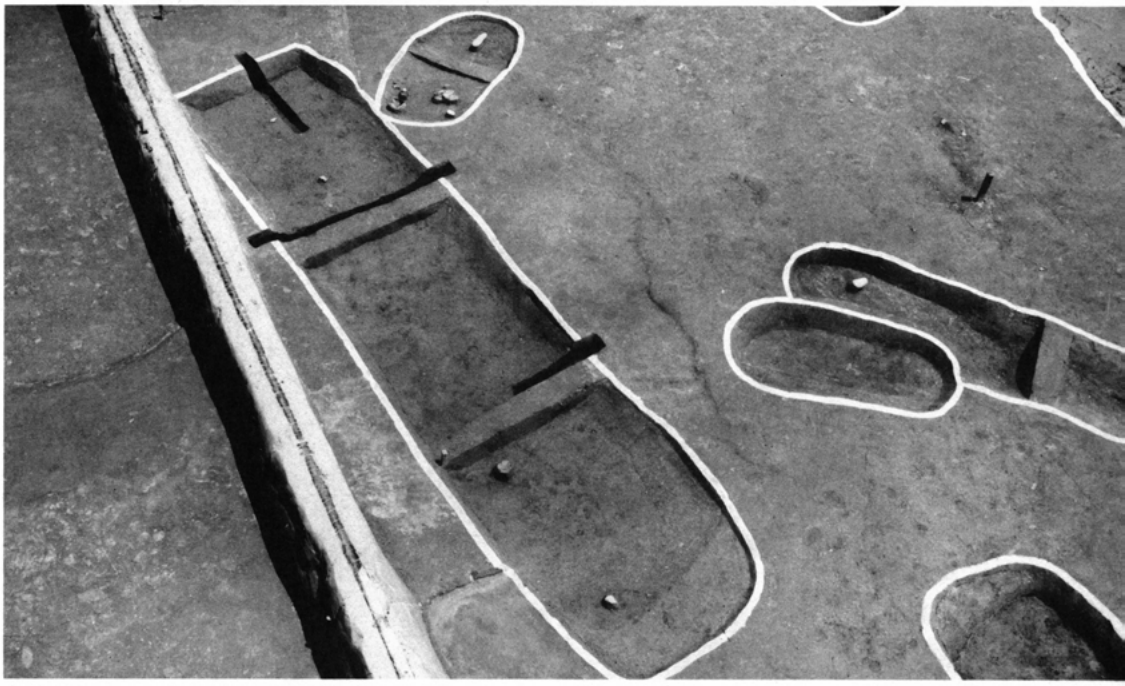


14 ＳＺ03
セクション
北東から

16 ＳＺ08・01・09
東から

15 ＳＺ07
土器出土状況
東から

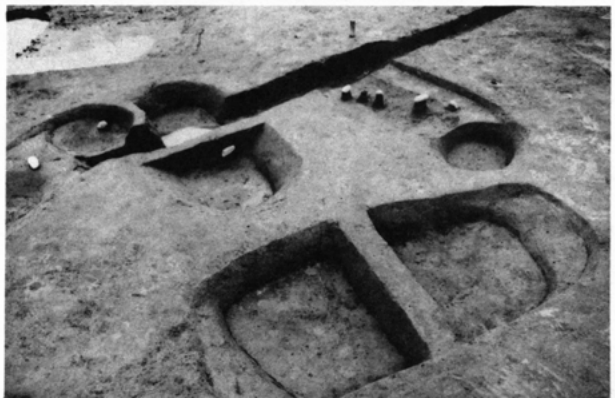
17 ＳＺ10
南から



18 ＳＺ10主体部
ＳＫ40
西から

19 ＳＫ43・48
東から

21ａ ＳＫ47
東南から

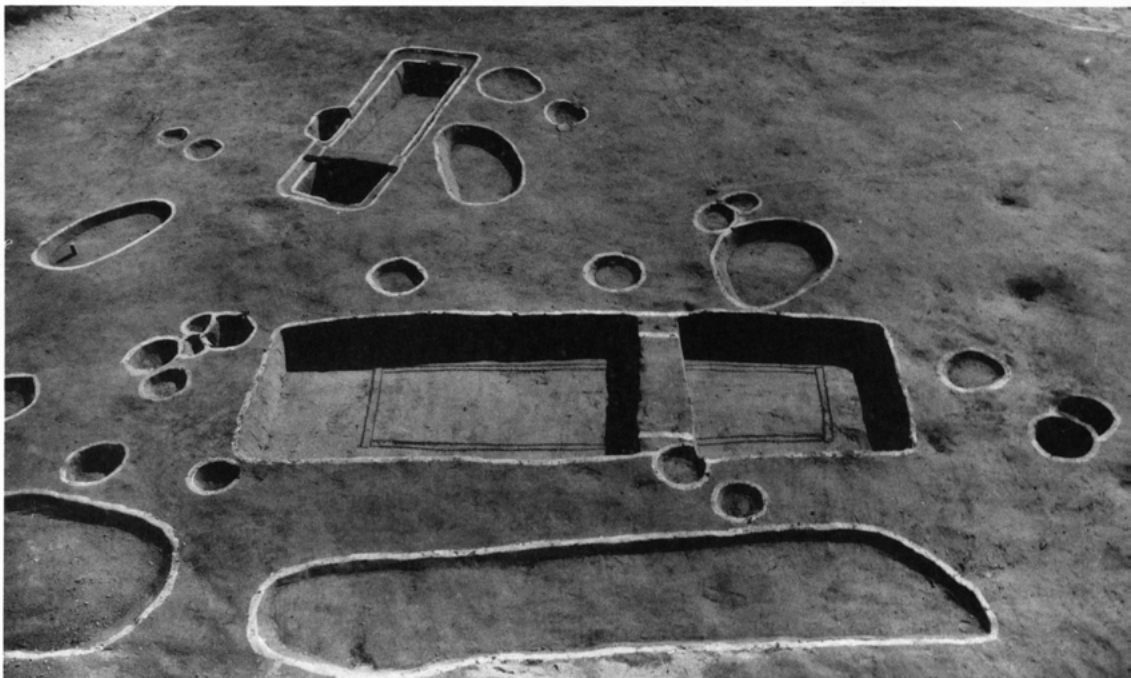


20 ＳＫ41・42・46
北から

21ｂ ＳＫ47
土器出土状況
南から

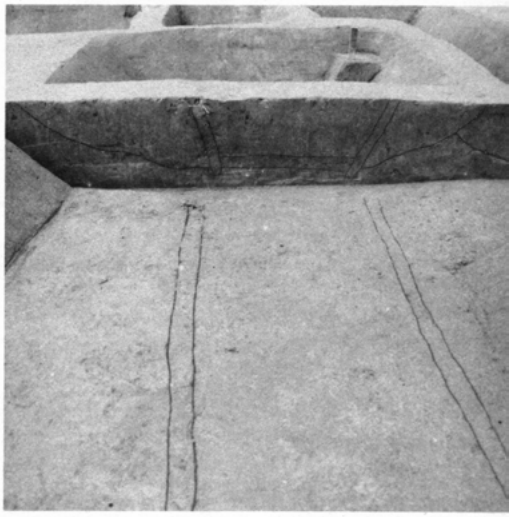
22 ＳＺ11
東から

23 ＳＺ11
西周溝部分
東から

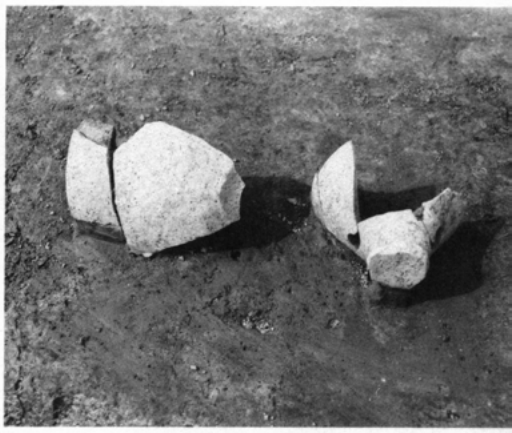


24 ＳＺ11主体部
ＳＫ07
北から

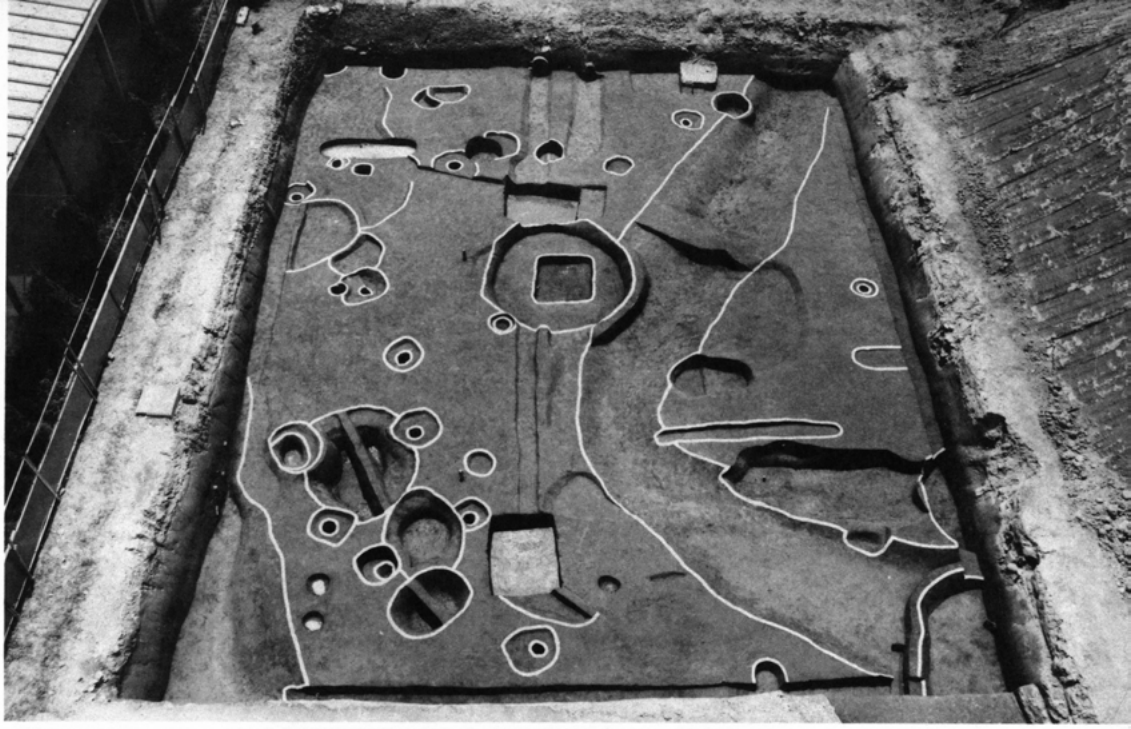
25 ＳＺ13
西から



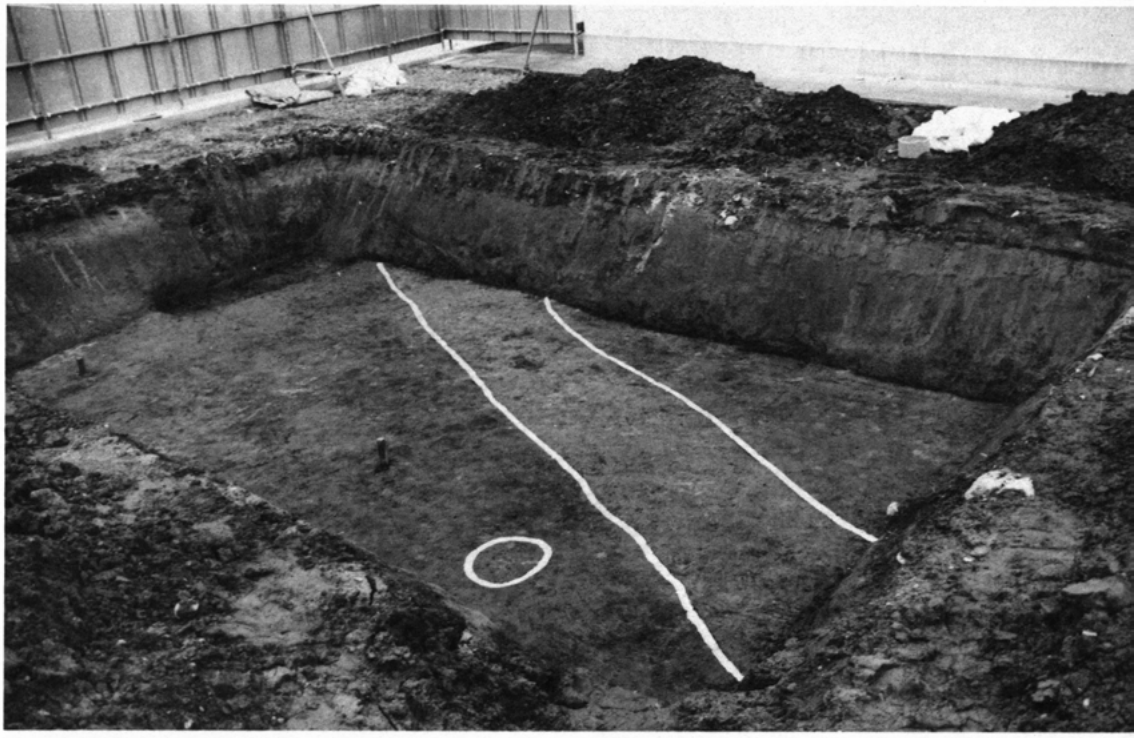
26 ＳＺ13主体部
ＳＫ54
南から　　東から



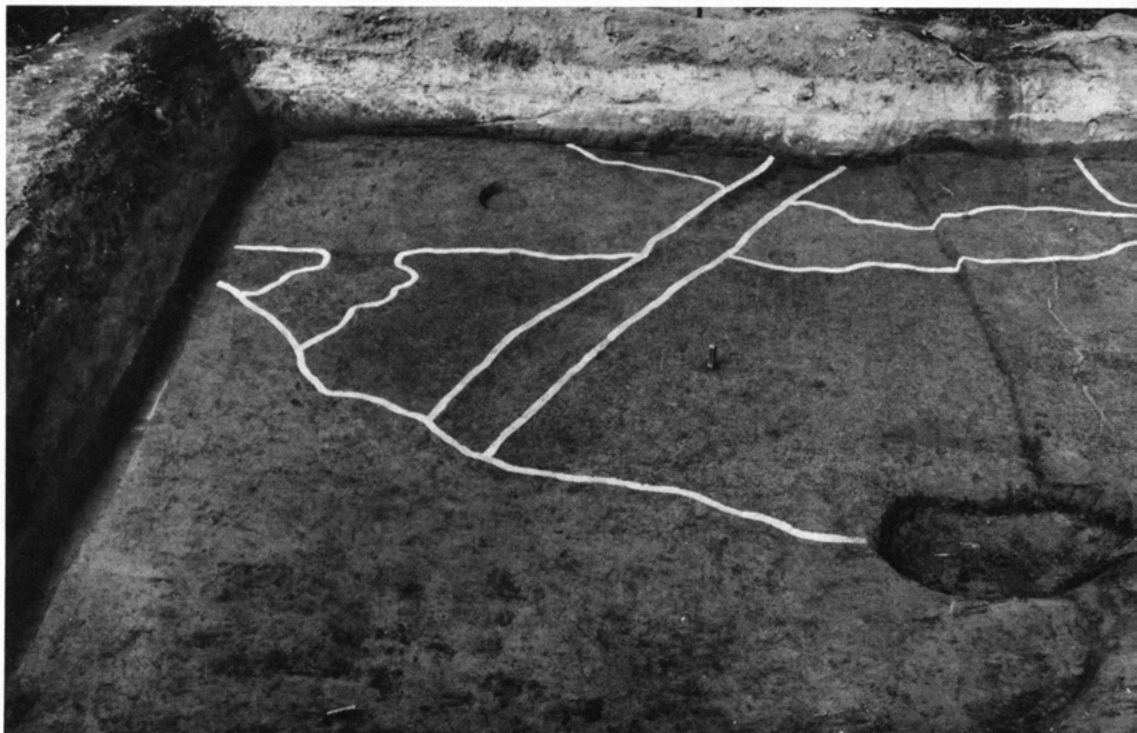
27 ＳＺ13
土器出土状況
北から　　南から
北東から　　南から



28 D区全景（ＳＺ12）
北から



29 H区全景（ＳＺ16・17）
南西から



30 G区全景
南から

31 断層
南から

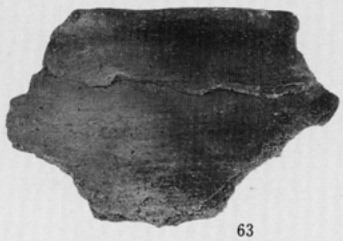
32 地割れ
西から

33 噴砂
西から

34 揺変性擾乱
西から

写真図版10

A期土器1

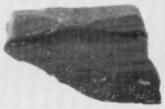


63

64

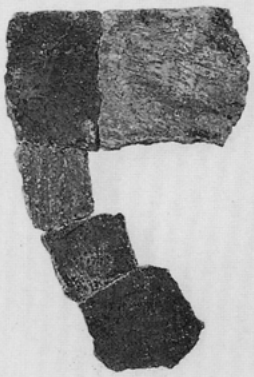
66

67

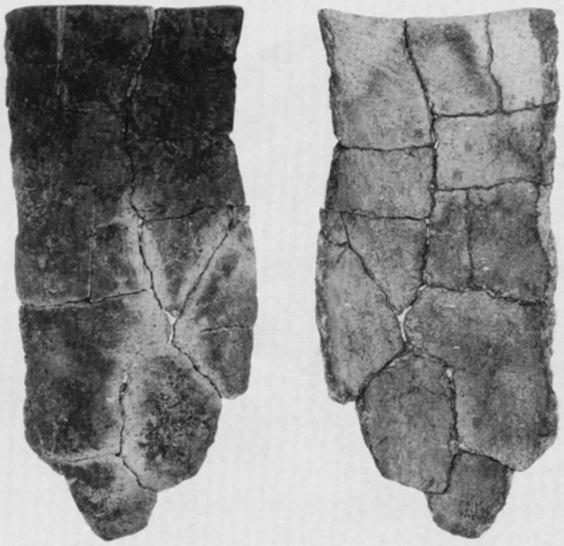


68

79



69



76

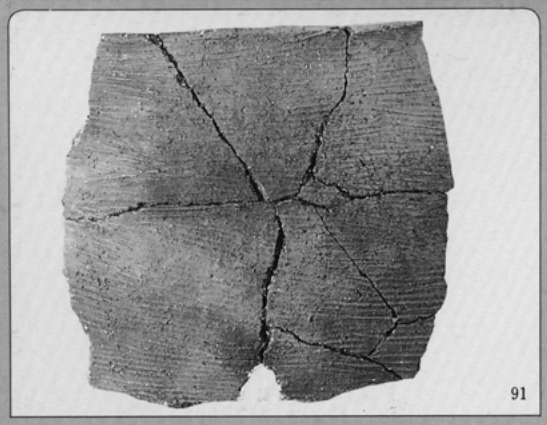
70

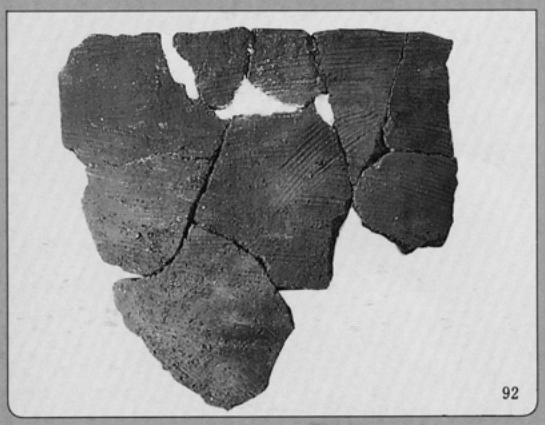
71

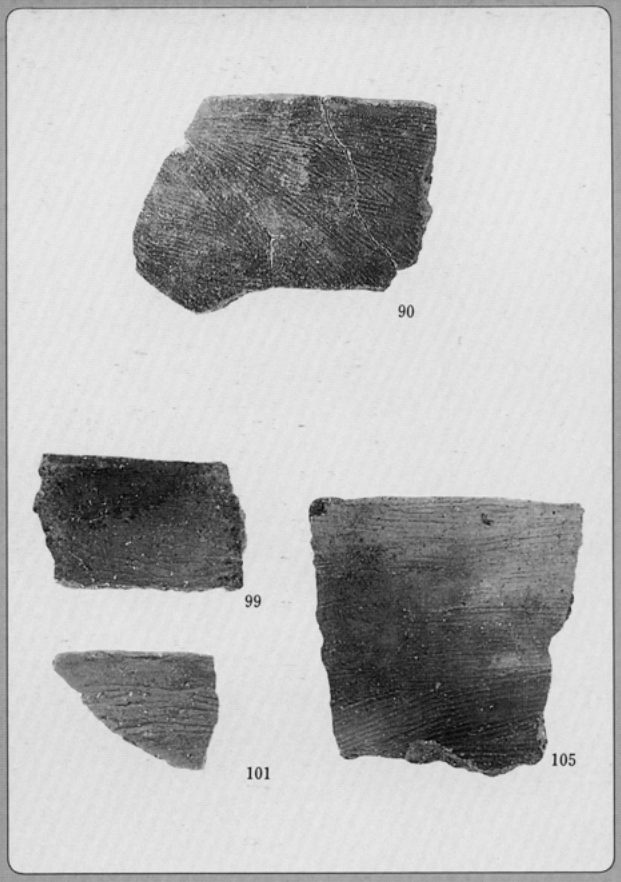
1:3	1:4
1:4	1:3
1:4	1:4

写真図版11

A期土器2


91

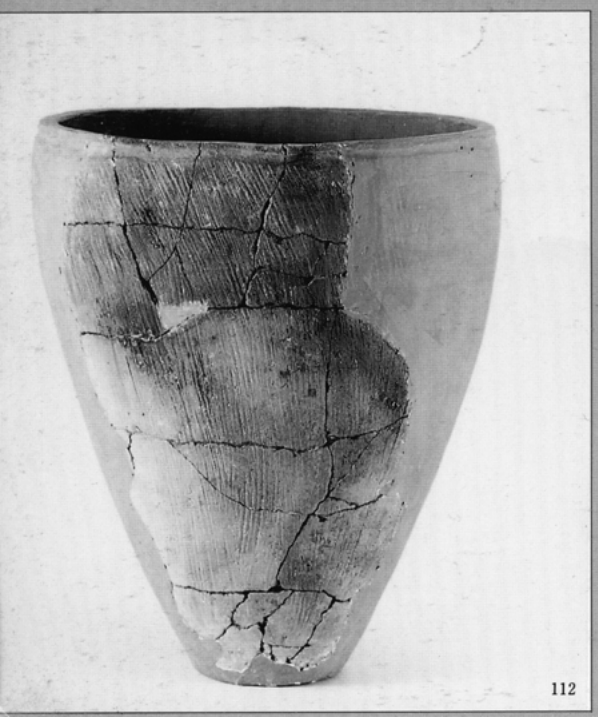

92


90
99
101
105

83

84

114

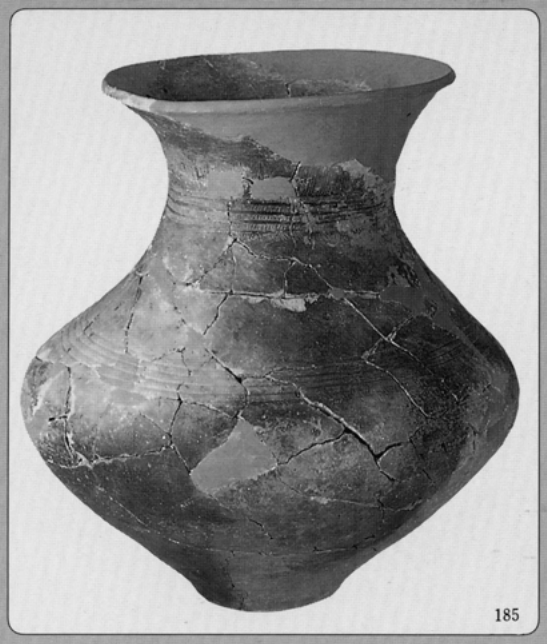

112

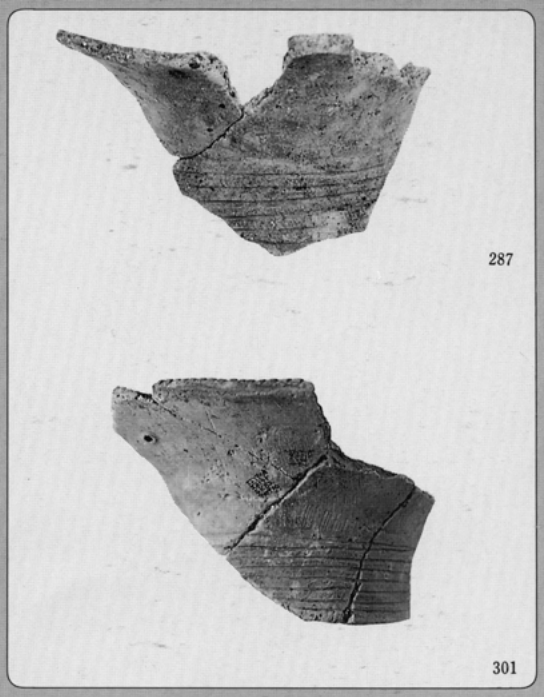
113

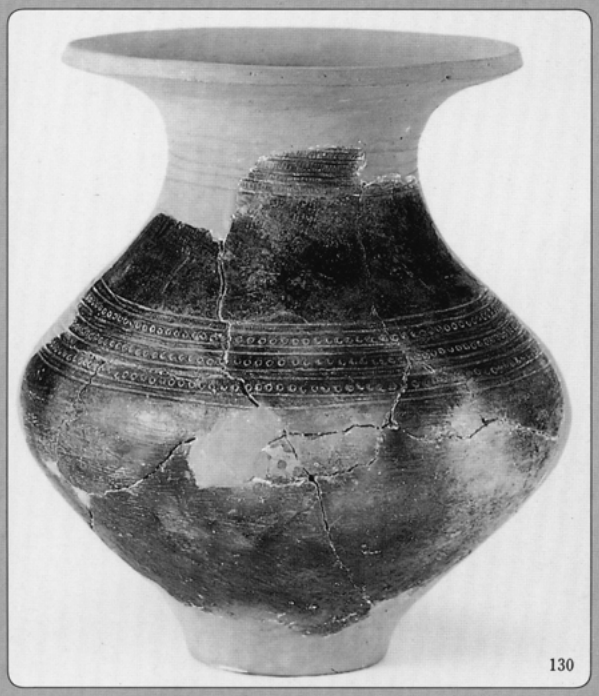
1:4	1:3
1:4	
1:4	1:3
1:4	
1:4	1:4

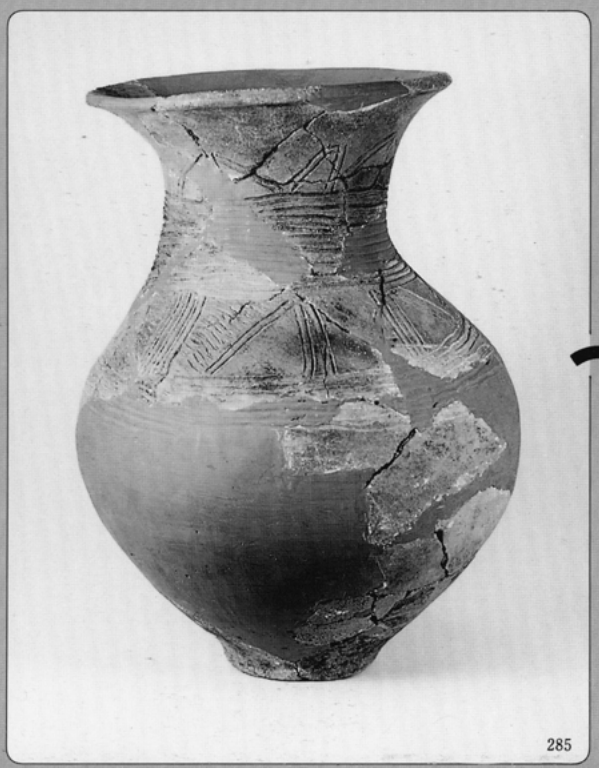
写真図版12

A期土器3





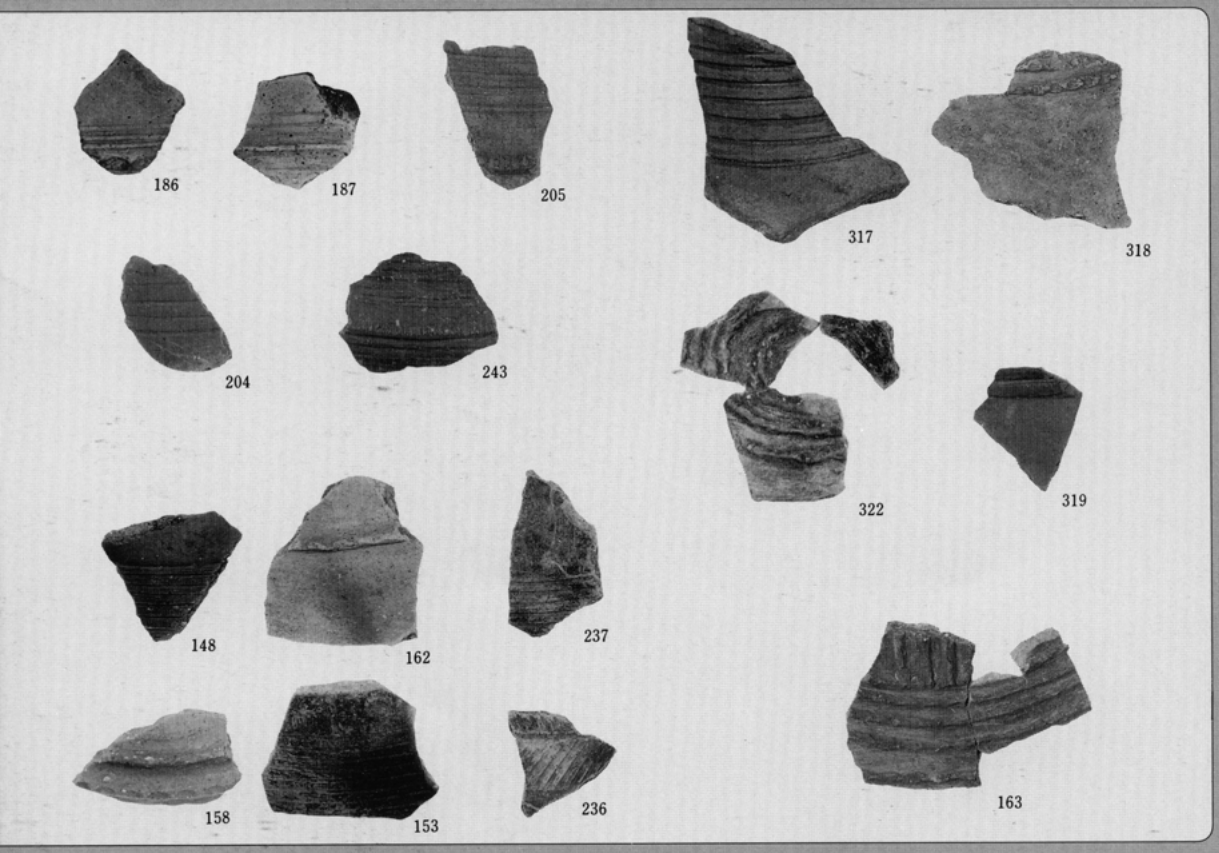


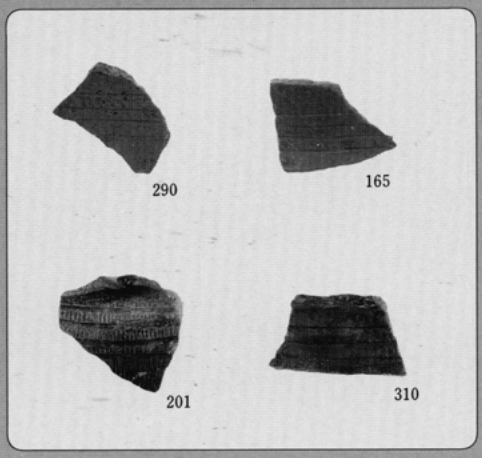


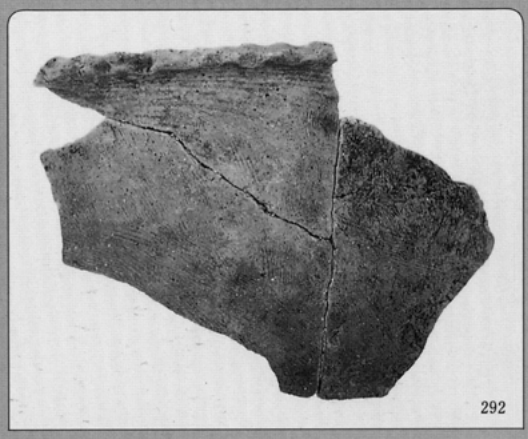
1:4

写真図版13

A期土器4







1:3

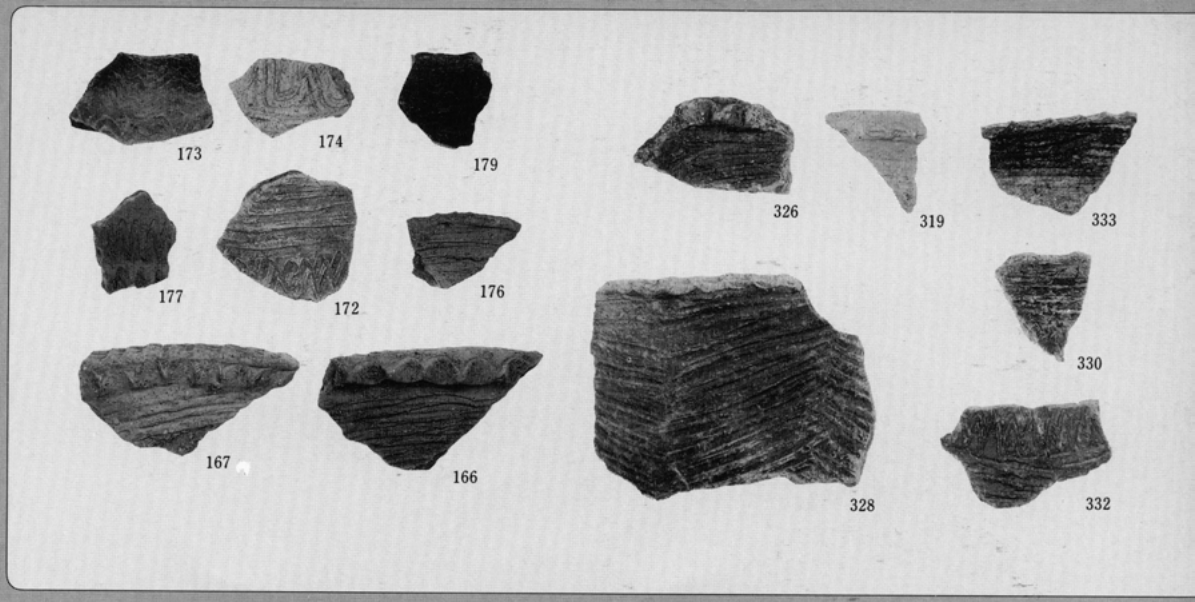
1:4 | 1:3

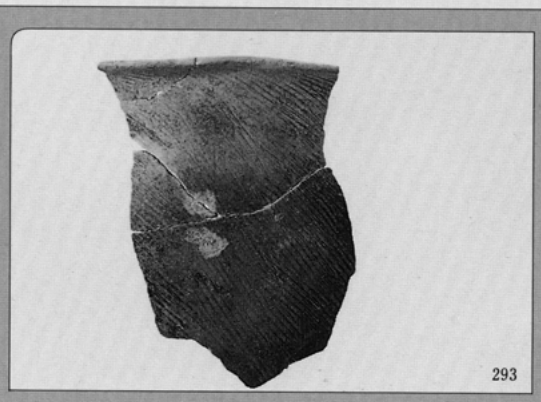
1:3

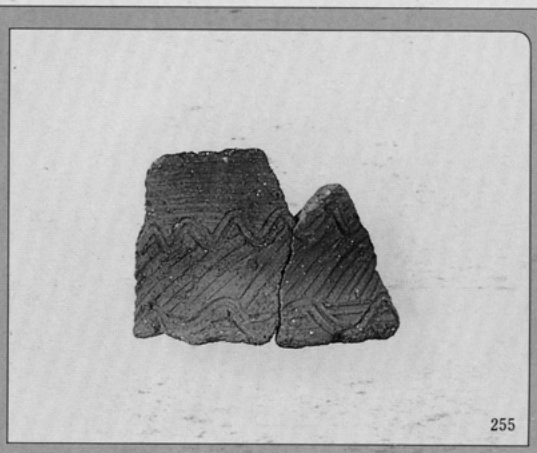
1:4 | 1:4

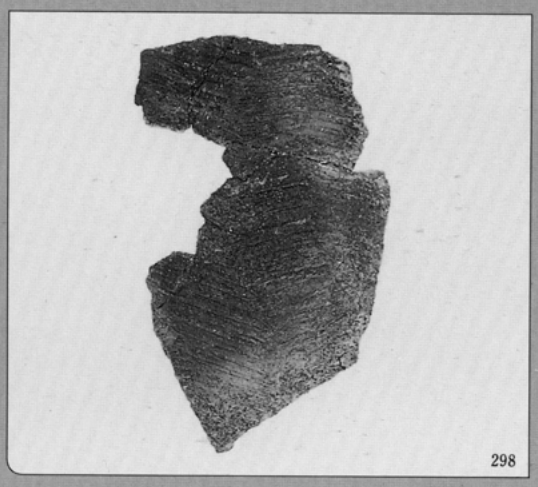
写真図版14

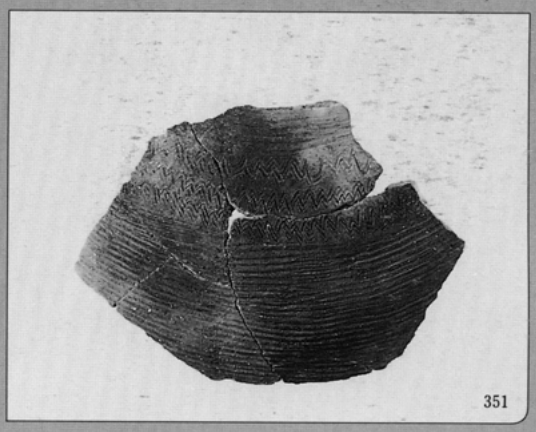
A期土器5

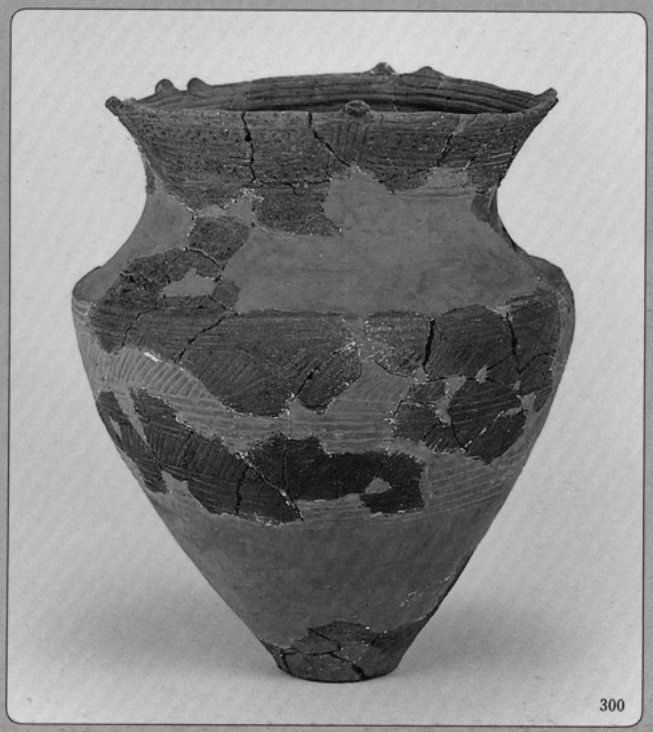


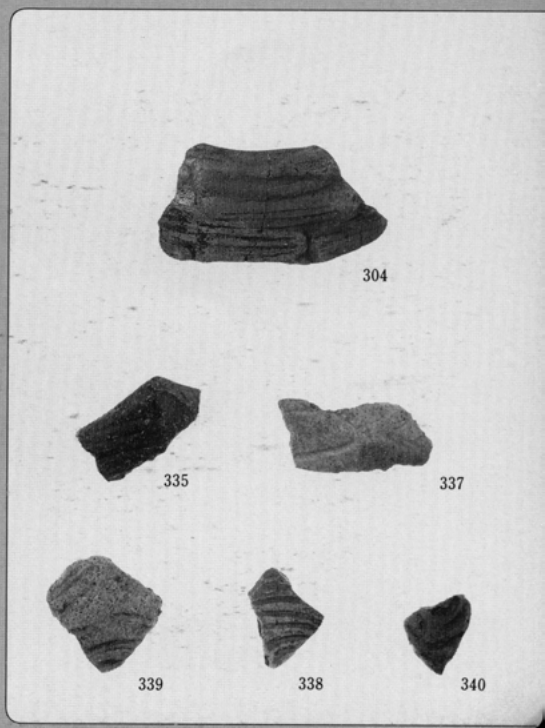










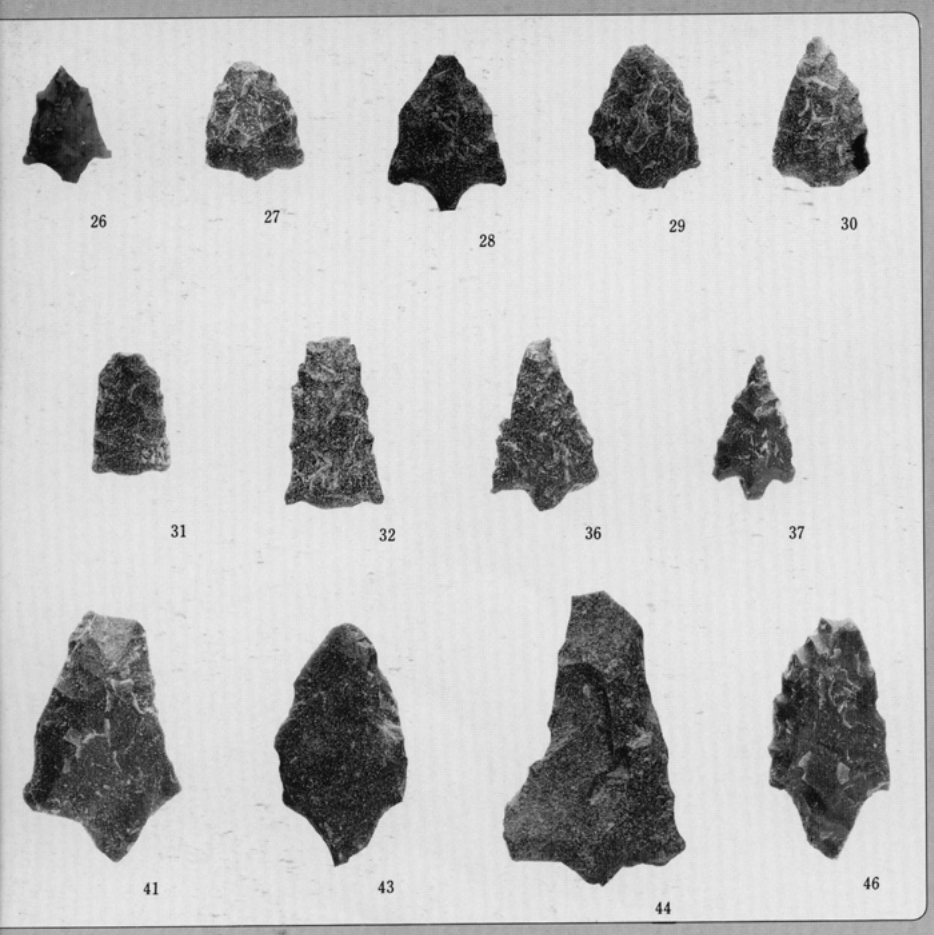


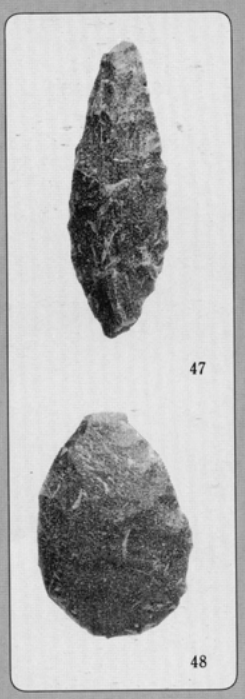
1:3

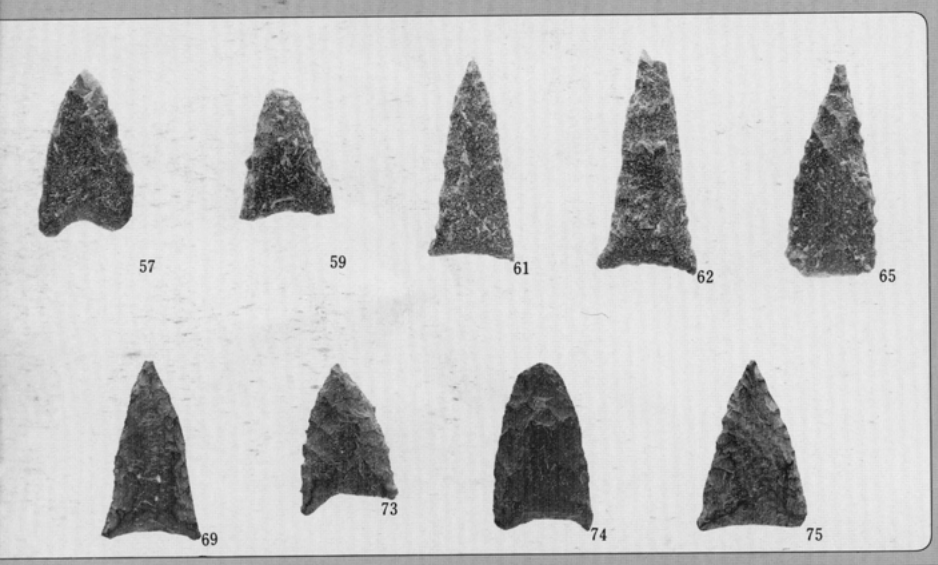
1:3	1:3
1:3	1:4
1:4	1:3

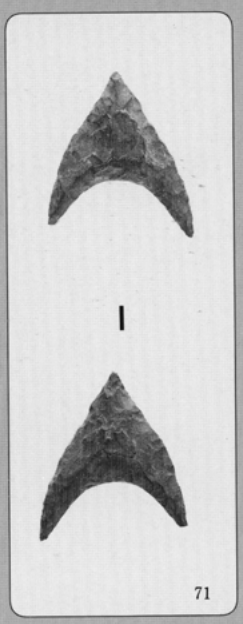
写真図版15

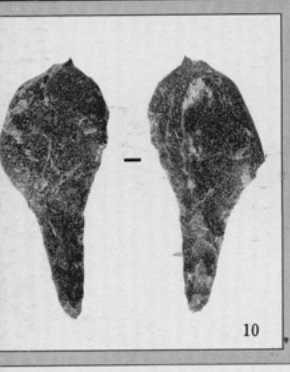
石 器 1

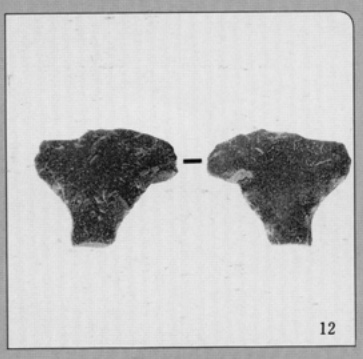


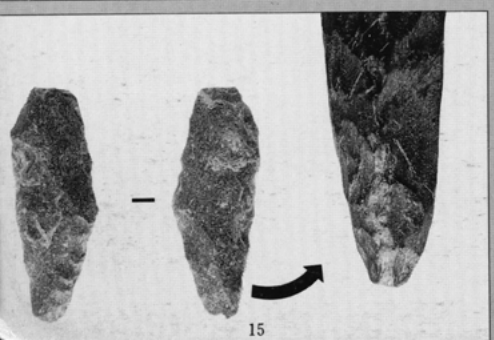


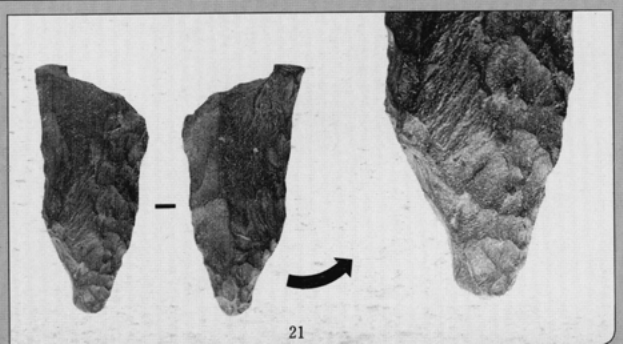








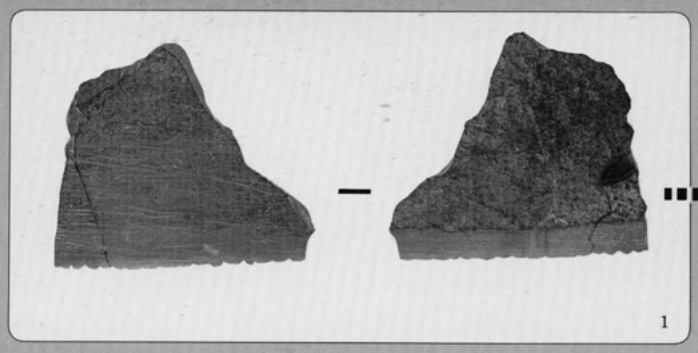




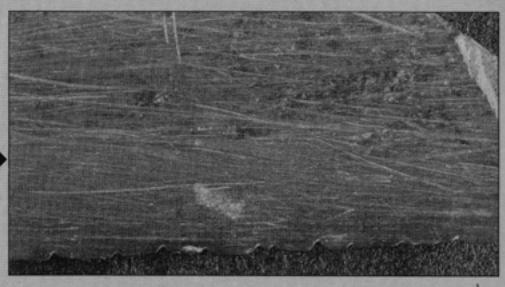
1 : 1

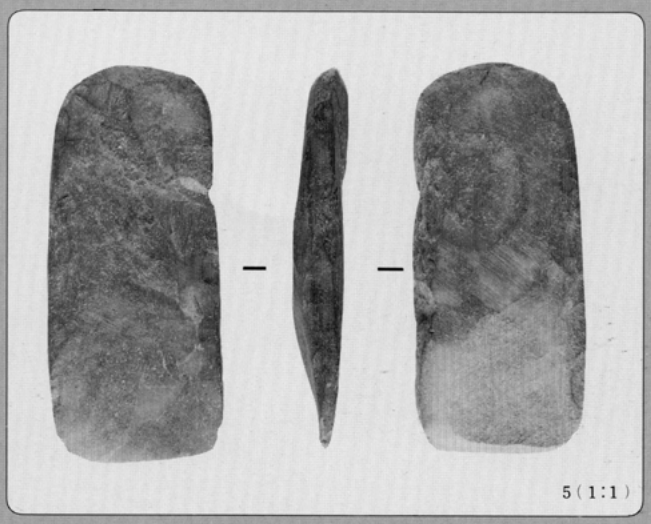
写真図版16

石 器 2

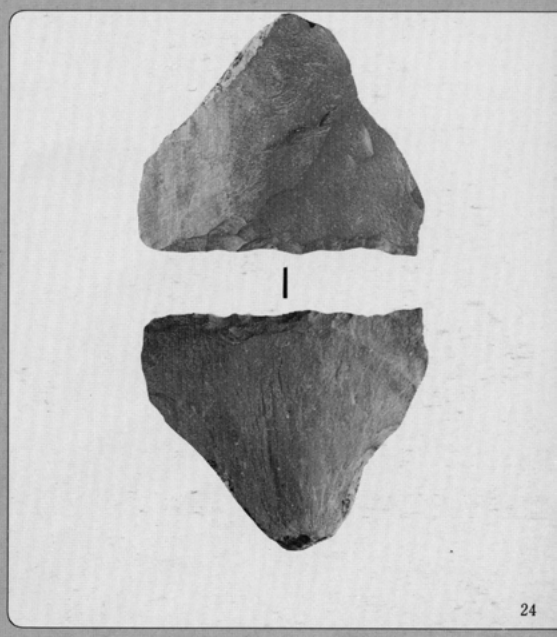


1

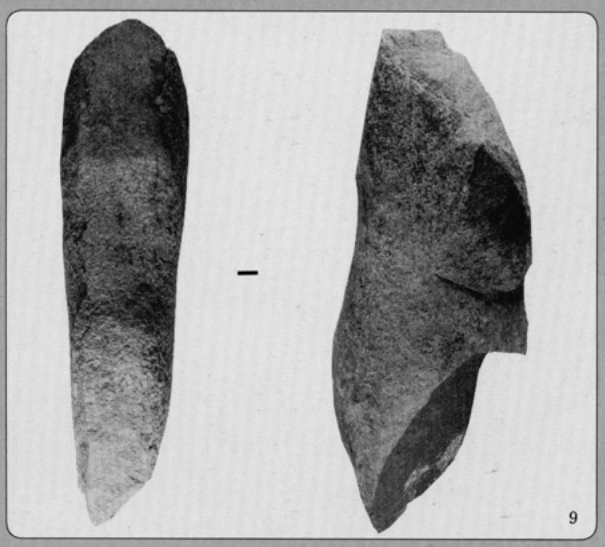




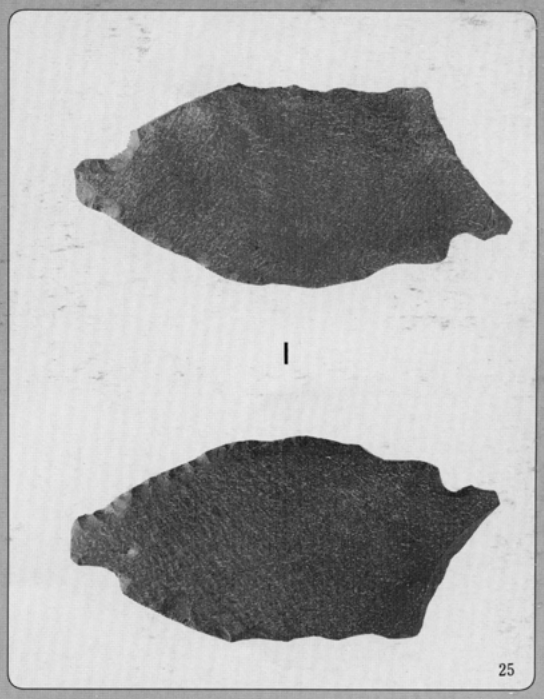
5(1:1)



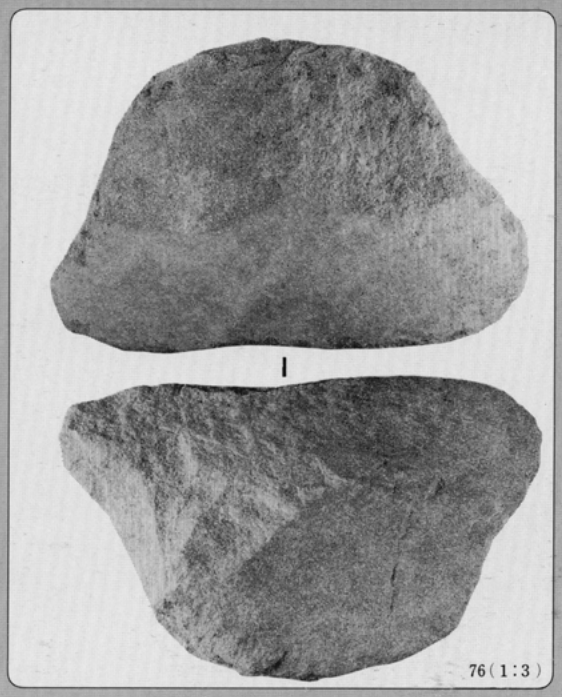
24



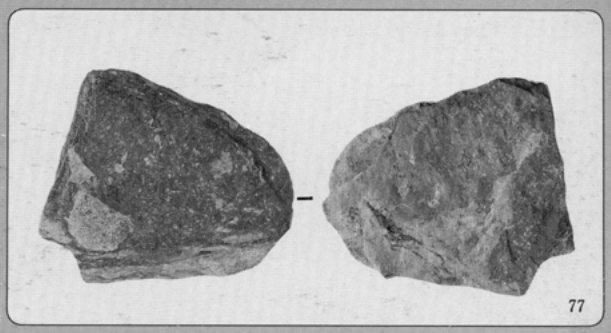
9



25

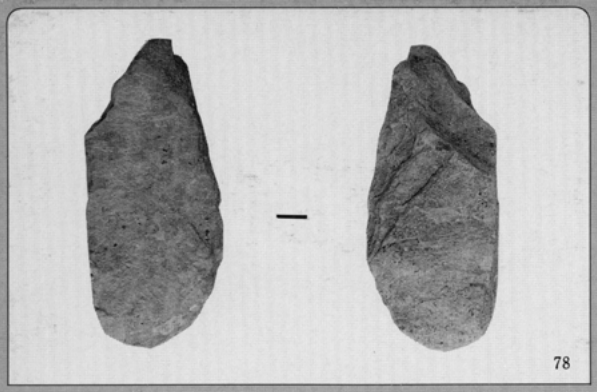


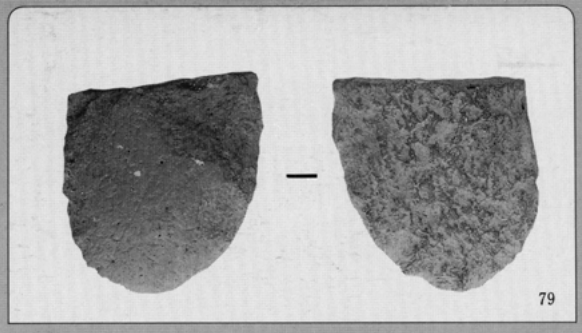
76(1:3)

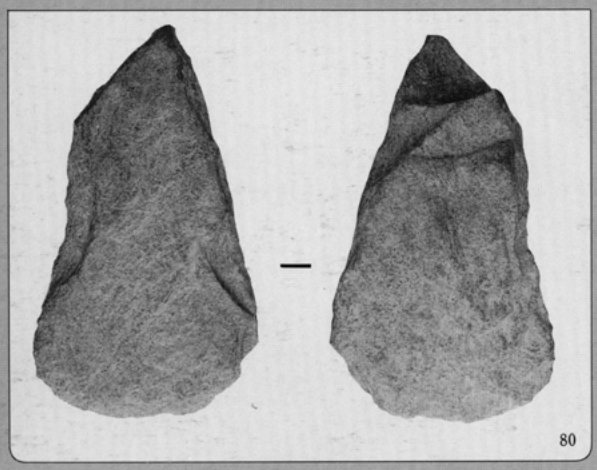


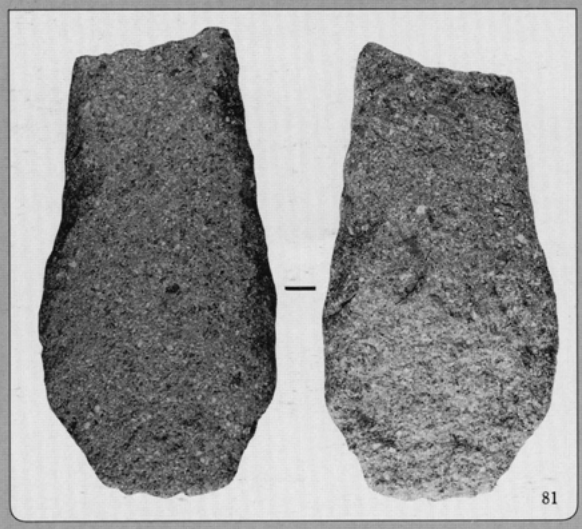
77

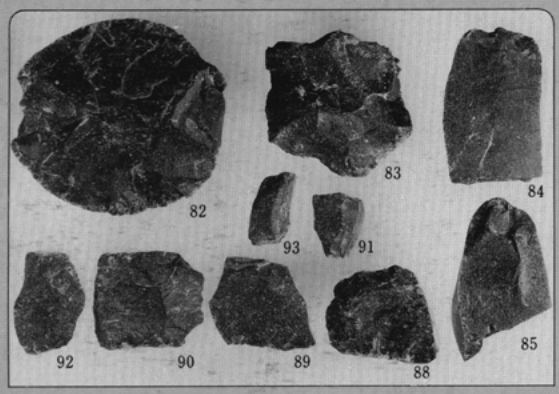
1:2

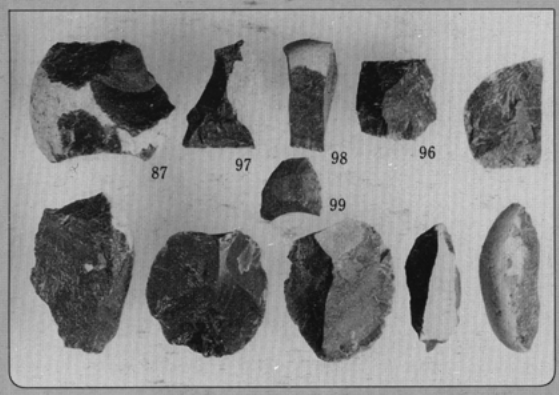


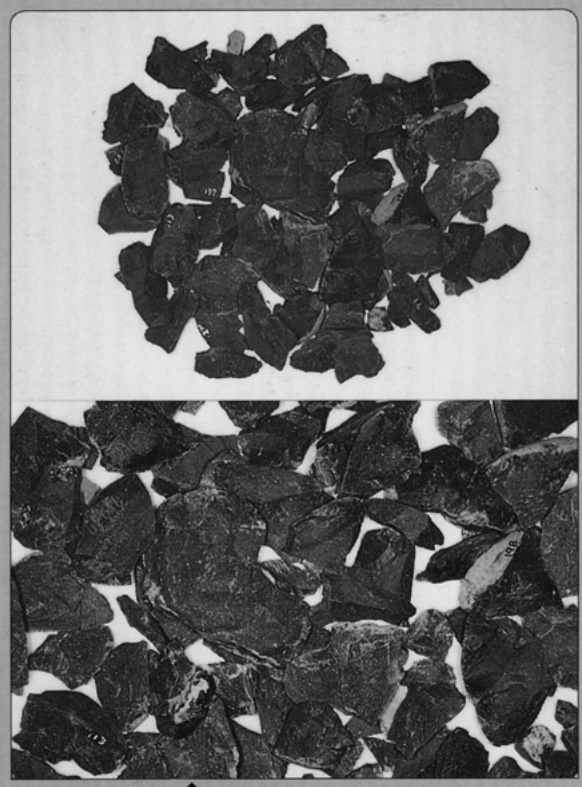




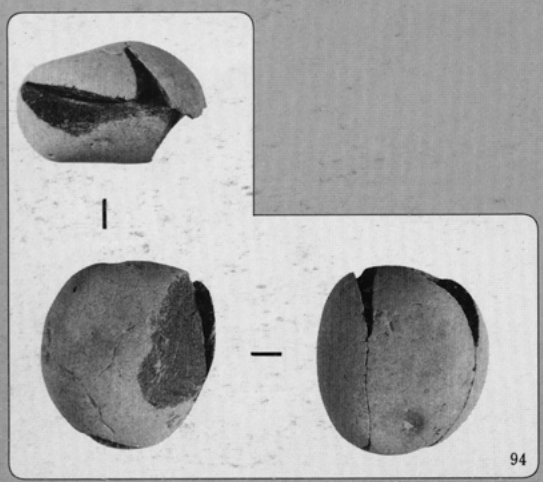


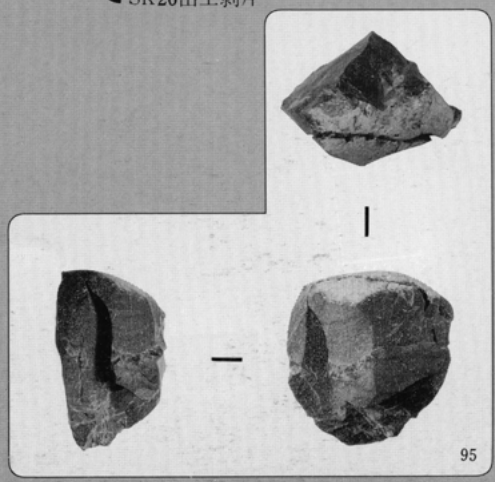






SK26出土剥片





1:2

写真図版18

B期土器

412

455

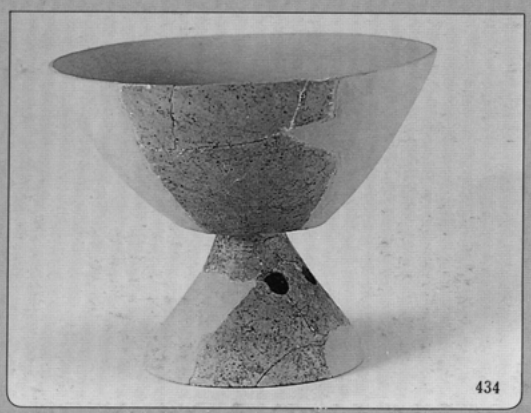
413

457

423

456

432


434

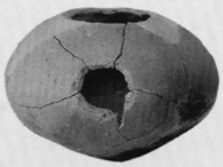
438

1:4

写真図版19

山中一次調査出土土器1

50



49(1:3)

12

43

30

34

1:4

写真図版20

山中一次調査出土土器

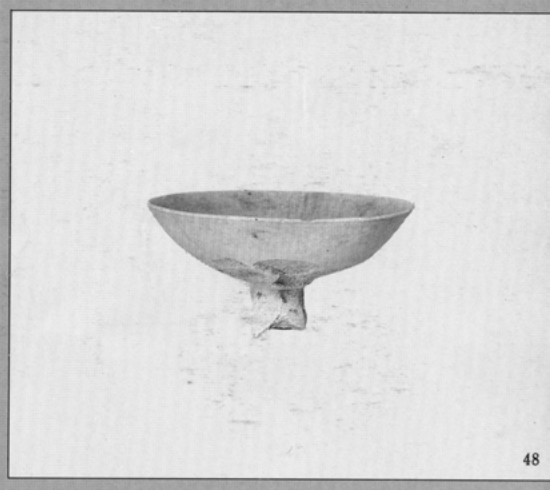
38

39

40

41

46


48

44

32

51

1:4

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集

山中遺跡

１９９２年3月３１日

編集・発行　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷　　株式会社　正　鵠　堂